
少年魔女セイと異界のカギ

幸村草純

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少年魔女セイと異界のカギ

【Nコード】

N0603L

【作者名】

幸村草純

【あらすじ】

自他とも認めるハッピーエンド主義者のセイは、ある日真つ黒な魔女から異界のカギを託されて！？ ひたすらに、そしてひたむきにハッピーエンドを目指すセイは、異世界で何を目指し、何を守るのか。力のない、どこか歪んだ幻想を持ち続けようとする魔女となった一人の少年の物語。

ため息一つ、原稿を机に投げる。

バン、という思ったよりも大きな音が文芸部室に木霊する。

その音に、一年の秋野が少しだけビクリと肩を震わした。

「ど、どうしたんですか部長。原稿を投げるなんて……」

らしくない、のだろう。

ああ、私もわかつている。原稿は作家の命。

決して軽々しく扱ってはいけない。

でも、それをわかつている私さえ……この腹立たしさは、本人がいない以上それにぶつけるしかなかった。

「秋野、これ」

私は、彼女の前に原稿を置く。秋野は原稿を不思議そうに手にとって、

「あ、これ！ セイ先輩の原稿ですか！」

そうよ、と一つ頷いて、

「読んでもいいわよ」

「本当ですか！」

秋野は本当に嬉しそうに原稿をめくりだす。

仕方ないか、彼女もまたセイの文章に魅せられて入ってきた部員なのだから。

秋野の表情は読み進めていくつれ、刻々と変化する。

最初は興奮したように、次に真剣になり、痛そうなほど辛くなり。

そして最後に

「あれ？」

「どう思う、セイの作品」

読み終えた秋野に、そう問う。秋野は、

「あ、はい！」

と意見を求められたことに驚いたように一オクターブ上の声を出

した。

「……前からわかっていたが、私は後輩からは好かれてはいないらしい。」

「まあ、日ごろあれだけ『鬼編集長』ぶりを発揮させていれば当然かもしれないが。」

「秋野はしばらく考えると、」

「すごいと思います。間の取り方とか、セリフのタイミングとか、伏線の張り方とか。」

「あと、そういう技術以前になんだか自分のことのように読んで読めちゃいます。やっぱりセイ先輩はすごいと思います。」

「……でも？」

「その一言に、秋野が凍った。」

「秋野、作品の前には先輩も後輩もないわ。おもしろければおもしろい、つまらなければつまらないと言っている。」

「むしろそれをごまかすのは、作家に対して失礼。」

「秋野、あなたはその作品、どう思ったの？」

「秋野は息を呑んでいた。」

「そしてしばらくして、視線を地面に向け、」

「その、もしかしたら自分の勘違いかも……」

「いいから、言いなさい」

「……………」

「ほら、早く」

「は、はい。その……オチが、ありません」

「そう、言った。」

「そして、それはそのとおりだった。」

「セイの書いた作品は一本の短編。」

「病気のひとりの少女と、それを支える一人の青年の物語。」

「死期を悟っている少女と、自分自身の生きようとすることをあきらめた青年の、『生きる』ための話。」

「しかしそのストーリーは少女が手術室に入ったところでぶっつり

と切れていた。

「え、じゃあやっぱりそうなんですか？ 何で」

「私にもわからないわ。急に部室に来たかと思ったら、原稿だけおいて帰るんだから。で、目を通してみたら」

「オチなし、ですか」

秋野はもう一度原稿を軽く読み返して、ため息をつく。

「もったいないですよね、これ。すっごくうまいと思いますよ、この小説」

「ええ、私もよ。正直、その才能に嫉妬さえ覚えるわね」

少女のあきらめ。

青年の願い。

少女の願い。

青年のあきらめ。

二人の、のぞみ。

狂おしいほどの感情が、この小説には渦巻いていた。
なのに、オチなし。

これはもう、冒読だ。

作品と、作品の登場人物と、

「何より自分への」

「え、なんですか？」

「いえ、なにもないわ」

秋野に笑ってごまかす。秋野は原稿を握りながら、

「部長。これ、セイ先輩に続きを書くように言ったらどうですか？

やっぱり、もったいないですよ」

「無駄よ」

即答だ。そんなの。考えるまでもない。

「セイは、絶対に書かないわ」

「何ですか？」

不思議そうに尋ねる秋野に、

「セイだけが、物語の終わりを知っているからよ」

窓から空を見上げる。

春真つ只中の、穏やかで遠い空。

蒼く青くひかる空。

きっと彼も、同じものを見上げているだろう。

そして

「さ、秋野。人の作品もいいけど、自分の作品も仕上げなさい。構
想さえ完成していないのは貴方だけよ」

再度、秋野が凍った。

「そ、それは部長が」

「全部ボツにしたから、とでも言うつもり？ 私は貴方の技術向上
のために言ってるの。」

×切り、やぶつたらどうなるかわかってるでしょうね？」

私の満面の笑顔に、秋野はさあ〜と血の気を引かせて、

「は、はいいいー！」

いそいで机の上の原稿に戻っていく。

今日も、いつもどおりの日常が流れている。

変わらない、平和な日常が。

そして、同時刻。

同中学校屋上。

『これで、貴方がセカイを救いなさい』

「……いや、カギじゃ無理でしょ」

セイは、世界を救うことを命令口調で託された。

とかく、バッドエンドというものが嫌いだった。

苦しい、悲しい想いをしているのに報われない。

努力して歯を食いしばっても救われない。

そんなのは、間違ってると思った。

努力は報われるべきだし、苦しかったり悲しかったぶん幸福になるべきだ。

そんな思いがいつもどこかにあった。

小学五年のころに、ロミオとジュリエットを、セイは書き直したことがある。

あんな誰も救われない、全部が不幸で終わるのがなんだかくやしすぎて。

必死で、家も生まれた運命さえにも抗った二人に、セイは子供心ながら最高のフィナーレを送りたかった。

そんな気まぐれと自己満足で書いた小説。でもそれは偶然先生の目に留まり、小学生の小説の賞に出すことをすすめられ……

なぜだか、小さな賞をとってしまった。

みんなに誉められて、みんながすごいと言ってくれて。

自分の認められた気がして……うれしくて、それからは、とにかく書いた。

書き続けた。

まるでバッドエンドの物語を否定するように、ハッピーエンドの小説ばかりを。

そしてそれから三年。

セイは、今もこうしてハッピーエンドを追い続けている。まるで、バカの一つ覚えみたいに。

「いや、実際そうなんだろうけどさ……」

右ポケットにはくしゃくしゃになってしまった小さなメモ用紙。

そこには達筆で『バッドエンド』と書いてあった。

うちの文芸部では、数ヶ月に一回お題が出されて、それを題材に小説を書く……と言った行事がある。

ちなみに発案者は現部長で、

「こうして自分が書きなれないものを書いてみると、新たな発見をするかもしれない」

という全うな意見と、あと実際におもしろそうだと理由でそれは取り入れられた。

「でも……これはありえない」

よりによって自分に『バッドエンド』なんて、部長が仕組んだとしか考えられない。もちろん抗議してみたが、証拠不十分で敗訴した。

で、その結果がオチなし。

「最悪だ……」

呟きは、気持ちのよいほどの春晴れに吸い込まれていく。

何度も、書こうとした。

本当は、自分でもわかっていたからだ。

もしこのまま小説を書き続けようと思ったら、バッドエンドだって書けるようにならなきゃならないって。

でも、書けなかった。

いざ終わりを書こうとすると、シャーペンの音が止まった。

そのかわり、無駄に心音が高鳴った。

少し書いては消し、一時間で書いた文は、一秒のBackspaceで無に還る。

気づいてみれば、いつのまにか物語がハッピーエンドに向かっていった。

そして今、セイは屋上に逃げてきた。

「最悪だ……」

二度目の言葉も、日を吸って燈色になった髪と、それをゆらす春風と一緒に空へと消えていく。

屋上は、ひそかにセイのお気に入りの場所だ。

風が気持ちよくて、日差しがあつたかくて。

ここにいと、不幸な出来事があるなんて嘘のように思えた。

「天気は良好。気温もバツグン。ならもう、いやなことを考えるのはやめて やることはひとつのみ、だな」

バッグを枕にして、屋上にねっころがる。

そして塀の上の猫みたいに、ゆったりと日差しを楽しむ。

空が、青い。

指の間から漏れる日差しは、あつたかい。

透ける赤が、生きていることを実感させてくれる。

でもそれ以上に、陽の光はセイにはまぶしすぎた。

眠ろう。

眠ってしまうのが、一番だ。

実際、頭はもう半分寝ている。

そのまどろみに任せ、セイはゆっくりと目を閉じ……

「それで、そうやってお前さんは世界から逃げるのかい？」

そんな言葉で、目を開くはめになった。

声の響いてきたのは寝ているセイの正面、つまり上からだった。

寝転んだまま見上げた、給水塔の上。

そこに、不審者がいた。

膝ぐらいまであるのでは、と思える長い黒髪に、凹凸にメリハリのついた体 たぶんだが、二十代前半といったところだろうか。

服装は、上から黒いぶつくりと膨らんだ帽子に黒のぴったりとしたタンクトップ。

さらに黒のジーンズに黒のハイヒール。

極めつけに、顔には黒くて丸いサングラス。

よつするに、全部真っ黒だった。

でも、問題はそこではない。それ以上に異常なのは……

「よお。世界を楽しんでるか、少年」

黒い女性は、その妖艶な印象とはうらはらに、無邪気にセイに笑いかける。

じゃらり

じゃらり

そんな少しの動作だけで、彼女の服のところせましとついた、やすっぱい金属の音が耳障りに響いた。

それは、まさに異常で奇妙だった。

ピン。

指輪。

安全ピン。

チェーン。

ピンバッジ。

ストラップ。

イヤリング。

ネックレス。

ブレスレット。

その他もろもろが重なり合いぶつかり合い擦り合い、奇妙な協奏曲を奏でている。

そんな彼女に半分起きぬけのセイは、

「……こんにちは、お姉さん」

普通に挨拶した。

正確には、それ以外の反応をとれなかった。起き抜けに声をかけられたので、明らかに変な女性に対して、他にどうするべきか思いつかなかつたのだ。

そんな明らかに場違いなセリフに、しかし彼女も普通に、

「おう、愉快に快適にいい天気だな。……っというか、最初の一言がそれか。おもしろいな、少年」

カカカ、とまるで少年のように笑う。その姿は歳や容姿にあまりにも合わない、セイは思った。
思っ、

「というか……誰ですか、アンタ」

そこでやっと、頭が現実を取り戻した。

……だれだ、この明らかな異常者というか異常人物というか反社会的な格好をした人は。

体を起こし、再度じっくり女性を観察する。

……見れば見るほど、異常だった。

アクセサリーが元の服がどんなのかわからない。そんなおかしな格好のくせに……いや、だからこそだろうか。

サングラスの奥の輪郭はすつと美しく、肌の白と黒とのコントラストは、それこそ魔法のようだ。

まだ夢を見てるんじゃないだろうか。そのほうが現実に彼女が目の前にいるというより、よほど現実味がある。

セイはもう一度、確かめるように聞いた。

「何者ですか、アンタは」

「何者、ときたか。そうだな……人に名前を尋ねるときは、まずは自分から名乗るもんじゃねえのか！」

カカカ、と獰猛な笑い声をあげて、

「まあ、今回は答えてやるから感謝しな。

アタシはな……『魔女』さ」

魔女は、答えた。

じゃらり、という金属音。

屋上には、二人の間にはただゆったりと風が流れている。

魔女はセイを見下げ、ただ楽しそうに、狂ったように、それしか知らないように笑い続けている。

セイは、その姿をびっくりしたように見上げ、

「さて、と」

カバンを肩にかけて、ひとつ大きく伸びをする。

空は澄みきっている。セイは見上げながら、今晚の献立に思いをめぐらす。

煮物は昨日で食べきってしまったし、かといって焼き魚は最近つくりすぎたのでそろそろ避けたい。

肉もいいが、明日は特売日だから、なるべくなら今日買うのは遠慮したいところだ。

まったく、毎日ご飯をつくる身としては、毎日の献立というのは
以外と重要な問だ

「まてまて！　なんで今までのことが無かったかのように帰ろうと
しているのかな！」

何か聞こえた気がしたけど、きつと気のせいだ。

最近は執筆が大変で、疲れがたまっていたから仕方がない。

それより問題は、今晚の献立。

それ一つだ。

「こっちはまだ質問にも答えてもらっていない上に、用事も終わっ
ちやいない。

帰られたら困るんだよ　セイ」

「……！」

新たな、厄介な問題が浮上した。

魔女は給水塔からフワリと跳んで、マンガや映画みたいに一回転
して屋上のタイルに降り立つ。

カツン、というヒールの高い音とじゃらじゃらじゃらじゃら！
と低い金属音が、清閑な屋上に木霊する。

魔女……そんな戯言を信じてしまいそうになるほど、その姿は不
気味だった。

「なんで、オレの名前を……」

「言っただろ、魔女だって」

さきほどと変わらない笑い。でも、今はそれがひどく恐ろしいも

のに感じる。

じゃらじゃら

じゃらじゃらじゃら。

「さあ、もう一度問うぜ。」

お前は世界を楽しんでいるか、少年」

魔女は、ゆつくりとこちらに歩み寄ってくる。

「どうなんだ、ああ？」

「……いや、まあ。それなりに」

なぜだか不良っぽい口調に気圧されるように、実際あどすさりながらセイは答えた。

それに魔女は「そうか」とやさしく微笑み、

「それなりい？ はっ！ ウソだね、大嘘、ゴマカシだ。」

お前は世界に不満ばかりで、全然楽しめちゃいねえよ。もったいない、もったいねえなあ、セイ」

ズバズバと、言葉という凶器を心臓めがけて投げつけた。

それが、痛かった。

わかっていたからだ。

今の答えが、自分自身さえ騙せていなくだらないウソだということ。

だからこそ、言葉が鋭利な刃物のようにささる。

でも、ちよつと頭にきた。

ニヤニヤとした魔女の顔を、にらみつけてやる。

確かに世界に不満はあるし、さっきの返事は「とりあえず」なウソっぱちだけど。

一方的に言われるのは趣味じゃないし、くやしい。

だから、言い返してみようとセイは考えて、

「アンタ、何様なんだ。そんなこと言われる筋合いはない。だいたいどっからこの学校に」

「この世界は、希望がない。」

そう思ったことはないか、セイ」

言葉が、呼吸が、心が一瞬凍った。

「この世界は、救いがない。

この世界は、傾いている。

この世界は、歪んでいる。

この世界は、荒唐無稽である。

この世界は、ずれている。

この世界は、終わっている。

この世界は、狂っている。

正の値はことごとく負になり、正義は負け悪は謳歌し、人の気持ちは現実を打破できない。

世界としては、明らかに破綻している。

そう思ったことはないか、セイ」

「……………」
反論など、セイには一切なかった。
でなかった。

そのとおりすぎて、言葉なんて付け足す必要もないぐらいだ。

心を見透かされた　そう考えなければありえないほど、魔女は

セイの心そのものを言葉にしていた。

しまった。

何ということだ。

セイは、愕然とした。

こいつは、少なくともセイという存在にとって、本当に本物の
魔女だ。

それも、言葉で破滅へと導く悪の魔女だ。

「答えられないか？　なら、答えてやろう。そ」

「答えられる、そのぐらい」

つい声を荒げてしまった。

今はもう、彼女をまっすぐ睨み返すことも、セイにはできていな

いクセに。

「あるよ。あるさ、そんなふうに思ったことは。」

世界は間違ってるんじゃないか、そう疑問に思ったことはある。でも、それはどんなやつでも一緒だろ。オレだけじゃない」

「いいわけじみてんな、そのセリフは」

魔女は欠伸まじりに一言で、セイの言葉を殺す。

「でも、確かにそうだな。人間つうのは、そこらへんにおりあいをつけて生きてる。」

世界に謎を疑問を不満を持って、それもジンセイだ、ってな具合でな」

それは真実だな、と魔女は一人頷いて、

「でもそういうやつらは、世界に対して疑問を思うことはあっても、反抗はめつたにしない。」

でさ、お前はそうなのか。折り合いつけて生きてんのか、

テメエは。ん？」

「……それは」

「違うよな、そうじゃないよな。」

そうじゃなきゃ、ハッピーエンドな物語しか書かないなんてことないだろ。いや、お前のはハッピーエンドでも何でもない。

全員が幸せになれる結末？ ンなもんあるわけねえだろ。」

お前のは、ひどく幸福で満たされたバッドエンドだよ」

その言葉が、無性にカチンときた。

なんだか、自分のすべてが否定された気がした。

「言いたいことはそれだけか。何なんだよ、アンタは」

もはや、感情でしかセイは魔女の言葉に抗えない。でも、だからこそそれだけは、負けるわけにはいかなかった。

だから、子どもくさい、かつこ悪いとわかっていながら、それでも怒りをぶつける。

「確かにオレはハッピーエンドしか書けないよ。」

それは認める。

そう、魔女が言った気がした。

セイはしばらく扉に手をかけたまま立ち止まって、

「……その用事って、何なんですか」

手を離して、振り返った。

魔女はニヤリとして、答える。

「なに、あずかりモンさ。いや、忘れモンかな」

「誰の？」

「お前のよく知るやつさ」

「じゃら、じゃらじゃら。」

「じゃらじゃらじゃらじゃら。」

魔女はセイの目の前まで歩いてくると、

「出せ」

「……はい？」

「右ポケットに入ってるモン、出せ」

左手を無造作に突き出した。

そして、あいている右手で煙草を取り出して、吸い始める。

はたから見ると、カツアゲそのものだった。

何だかもう考えるのがバカらしくなったセイは、大人しく制服の

右ポケットを探る。

ほどなくして、かすかな固い感触があった。

それをつまんで取り出す。

「……って、これ？」

手に取ったものに呆気にとられて、変な声を出してしまった。

取り出したのが、あまりにもちっぽけで日常的なものすぎたからだ。

こんなもの、魔女が望むだろうか？

疑問に思ってもう一度右ポケットを探ってみるものの、やはり手ごたえはない。

でも、コレが魔女の求めるものだとはい、どうがんばっても思えない。

セイが悩んで、もう一度ポケットを探ろうと手を伸ばす。

しかし魔女はその様子にイラついたように、

「それだよ、それ。はやくこっちに渡せ」

「ええ！？ これ？」

驚いたセイに、

「だからそうだって言ってるんだろ。いいからさっさと渡せ、ガキ」

魔女はセイの手からソレを無理やり奪いとると、なにやら両手でいじりだした。

それを見たセイに、不安が電撃のごとく一気に走った。

その比は、下手をしたらさつきまでの会話より大きいかもしれない。

セイにとって、『魔女』なんて非日常のわけのわからない不安より、『今日の献立』のように日常的な不安のほうが、身にしてみる。

ソレは、確かに日常的なものであるが、だからこそ大事なものだ。

「ちよつと待て！ 何してるか知らないけど、何もしないでくれ！
それがなくなったりしたら困るのくらいわかるだろ！」

必死になるセイ。しかし魔女はそんなこと完全に無視で、手の中に集中しながら気を紛らわすようにしゃべる。

「おまえさあ……世界に不満があるなら、なんで変えようとしなんだ？ まさか、自分にはそんな力はないとか、ガキくさいこと考えてんじゃないだろうな」

問いかけの形をしてはいるものの、こちらに視線は向けていない。返答は期待していないのかもしれない。

それはそれで何だかくやしいのと、無視されたことへの当て付けに、答える。

「違う。やるべきことがわからないだけだよ、オレは」

「はあ、くだらない くだらないな、そりゃ。やるべきことなんて無限にあるだろうに」

手の動きからして、魔女は何かをソレにくくりつけているようだ。その何かは、手に隠れてしまっただけでわからないが。

「人間一人の力つてのはな、思ってる以上に強大なんだよ。一人
でできないことなんて、たかがしれてる」

「でも、野球やサッカーは一人じゃできないだろ」

「ま、そりゃそうだ。でも、野球にしてもサッカーにしても、試合
をつくる『スター』ってのはいるもんだぜ　　っと。

よし、できた」

魔女はそう言っつて、セイを真っ直ぐに見つめた。

あいつも変わらず、ニコニコと笑顔を浮かべている。

「でも、やることがわからない　　つまりないってことは、今回は
プラスだな。

なあ、セイ。お前、ファンタジーとか好きか？」

「え、ああ、うん。けっこう好き。魔法とかって夢があるし」

目の前の魔女には、夢より現実をつきつけられているが。

突然の質問に、その意図を掴みかねているセイに、魔女は　運
命を、投げてよこした。

ポス、と手の中に納まるのは、銀色でちっぽけで安っぽくてそこ
らへんにあるものと全然変わらない

「セイ、貴方が貴方自身で。

これで、セカイを救いなさい」

「いや、カギじゃ無理だから」

我が家のカギを握り、セイは間髪いれずにツッコんでいた。

例えばそれは、指輪物語でいう覇者の指輪。

例えばそれは、アーサー王伝説におけるエクスカリバー。

昔からファンタジーの主人公には、そんな不思議で独特で特徴的
なモノがついてくる。

そのルールは、現代でも適応されているらしい。

「それで、セカイを救いなさい」

もう一度そう言って、にやりと魔女はあざ笑う。

平べったくて、安っぽい銀色の板。

手のひらにのるぐらいの大きさで、つまむところは丸い。

そこから伸びた、取っ手よりすこし細い板には、特徴的なギザギザ。カギ、だった。

しかも、セイ自身の家のカギだった。

唯一魔女に渡す前と違うのは、取っ手の穴に赤いヒモが結んであることぐらいだ。

「……いや、カギじゃ無理だから！」

二度目、今度は少し強くセイは答えた。

正直、少しだけ期待していた。

このおかしな魔女が、自分にウソのようなデタラメのような摩訶不思議な物語を届けてくれるのではないかと。

だからこそ、こんなものでセカイを救えなんて冗談は、最悪だった。

恨みっいたらしく睨むセイに、しかし魔女はそれでもケミカルに笑う。

「そうか？ デキると思ったら、案外そんなもんでもセカイなんて救えちまうかもしないぞ？」

そんな無茶苦茶な。

そう口にしようとしたときだった。

「ん？ 着信？」

胸ポケットで震える携帯を開く。

『風呂用洗剤が切れた。容器もだいぶ古くなってから、帰りに新

品を買って帰ってきてほしい』

(……父さんからか)

内容だけしつかりと覚えて、携帯を閉じた。

そして顔を上げると　そこにはもう誰もいなかった。

「……消えた？」

そうとしか思えなかった。

目を離していたのは三秒ほどしかない。それに目を離していたといつても、正面にいたのだから動けばわかる。

でも、わからなかった。

「何なんだよ、一体……」

青空に向けた言葉は、やっぱり吸い込まれていった。

セカイは結局、いつもどおり平和だった。

第一話『ハッピーエンド主義者』 (1・1) 部長と切と託されたカギ(後

以前はHPに掲載していたものですが、このたびそれを閉鎖したためこちらに移動しました。

拙い主人公と物語ですが、読んでいただければ幸いです。

(1-2) 追いかけること異世界と自分勝手

結局、夕ご飯はマーボー豆腐に決めた。

左手に豆腐とひき肉、それとお風呂洗剤に入ったビニール袋をぶら下げて、

セイは主婦に混じって商店街を歩く。

スピーカーから漏れるゆったりとした音楽に、自然とセイの歩調を緩めた。

「しかし、結局これはなんだろうな……」

右手につまんだカギを、セイは赤いヒモ部分をもってプラプラと揺らした。

魔女から投げ返された自宅のカギ。その唯一の変わったところは、その赤いヒモだった。

ちょうど取っ手部分の穴に通すように結ばれたヒモは、目のさえるような鮮やかな赤色の、しかしただのヒモだった。

いや、おかしな点はある。

まず一つ目は、どうがんばってもヒモがほどけないこと。魔女が消えた後なんとなく試してみたが、何をしてもほどけるどころか緩みもしなかった。

二つ目は、ヒモ自体が淡く光っていること。それに気付いたのはついさっきだ。カギをとり出そうとポケットを覗くと、本当に微妙ではあるがヒモが光を発していた。その時は驚きすぎて、「のわあ！」なんて声をあげてしまい、終点が街の注目を集めてしまったが、そつとカギを手で覆ってみると、やはり今も淡い赤い光が手の中で輝いていた。

しかし、それ以外は普通。

おかしなところだって、『特殊な結び方をした』とか『発光素材が混ざっている』といわれてしまうと、否定できないようなことだ。

「結局、誰かにかかわれたか、かつがされたのかな……」
もう忘れよう。どちらにしろ、もうあうことはないんだから。セイはそう自分の中で結論を下し、ポケットに力ギしまった。
さあ、家に帰って夕ご飯をつくらなければ。

そう思った矢先、突然襟を引つ張られた。

第一ボタンをあげておいてよかった、そんな他人事のようなことがセイの頭をよぎった。

「ぐえっ」

喉がいい感じに絞まって、呼吸が止まる。

「こんなところで奇遇ね、セイ」

そして鼓動も止まった、と思う。

それは、とてもとてもとっても聞き覚えのある声だった。

時間でいえば、約一時間ぶりの声。

ふりむくのが、怖かった。

でも、ふりむかないのはもっと怖い。ゆっくりと おそろおそ

るという表現がぴったりな感じで、セイは振り向いた。

「……や、部長」

「ええ、一時間ぶり。セイ」

肩でスツパリとカットした髪に、黒ブチのメガネ。その体は小柄で、セイの肩よりも低い。やせすぎ、とさえ感じられる平たい体型は、魔女と比べると別の生物のようにも思えた。にっこりとかわいらしい笑顔を浮かべる彼女こそ、泣く子にも容赦しない文芸部の鬼部長その人である。

「さて、じゃあ聴かせてもらおうかしら？ 中途半端な原稿を提出するだけでは飽き足らず、大切な部会を欠席してくださいやがったその理由を……！」

ギロリ、という効果音が聞こえてきこそうなほどの鋭い目がセイを捕らえる。口元が笑ったままなのが、なお怖い。

「……あゝ。それはだな、えっと……」

屋上のごとで、部会のほうはすっかり忘れていた。それを説明しようにも、屋上でのことはあまりにもウソくさいし、何より理由にはならない気がした。部会のことを忘れていたのはセイ自身だし、あのあと急げば部会には間に合ったはずだ。

どう考えても、セイが悪い。

なので結局、

「その……あの……」

という言葉をつなぐしかない。もちろん、そんなものに誤魔化される部長ではなかった。

その笑顔に凄みが増していく。

「まさか、理由はないとか言わないわよね？ あれかしら、サボリ？ ふゝん、大事な部会を理由もなくサボるわけだ。へえゝ、許せないなあソレは」

怒りのボルテージが、三段飛ばしで上がっていくのを感じた。長年のつきあいの結果である。

非常に無駄なアビリティだ。

つめよってくる部長。見上げられているというのに後ずさりしてしまう迫力は、真剣にここで殺されるんじゃないかと思った。

「は、ははは……」

カバンのベルトがしっぴかり締まっているか確認する。スーパーの袋は一度手首に通して、しっぴかり握った。

そして……

「ごめん、埋め合わせはまた今度」

一気に走った。

運動部に見せてあげたいほどの、理想的なスタートダッシュだ。部長が『逃げた』と表情に出したときには、すでに十メートルほどの差がついていた。

「こら、待てー！」

背中をのほうから、叫び声が聞こえた。女性が街中でそんなふうに

叫ぶのはどうなのだろう。自分のせいなのを棚にあげて、セイは待つどころかスピードを上げてゆく。歩きなれた商店街なので、人混みを避けるのは簡単だった。

一キロほど走り抜けて、商店街を出た。

(さすがにもうまいだろう)

そう思つて息を整えるついでに後ろを振り返つてみると、

「待ちなさい、セイ!!!」

そこに鬼がいた。

「鬼気迫る、というのはこのことか」

人混みを割つてくる部長を見て、セイは思わずそうこぼした。

「……つていうか、納得してる場合じゃない! 差も縮まつてるし!」

何で!? という疑問は口にするまでもなくわかった。あまりにも尋常ではない雰囲気をもとう少女に、まわりの通行人が道を空けているのだ。

まるで、モーゼだ。

「ありえねー!」

「待ちなさいつつつてんでしょ、セイ!」

待てと言われて待つヤツは、よほどいい人かただのバカだ。

セイは、再び全力で街を駆ける。どうやら、おいかけっこはまだまだ続きそうだった。追ってくる部長から必死に逃げるセイは、いつのまにかすっかり魔女のことなど頭から抜け落ちていた。

坂道の真ん中あたりにある、赤い屋根と風見鶏が特徴的な一戸建て。

それが、セイが父と二人で住む我が家である。

そしてその門前で、

「……部長……正直、オレは……アンタを、尊敬する」

「……あら……それ、は……どうも」

二人は力べに手をつき、肩で息をしながら悪態をつきあっていた。
「だいたい……なんで、そんな体力……あるんだよ」

文化部とはいえ、セイは運動神経が悪いほうではない。むしろ、
学校の授業だけでみればいいほうの部類に入るはずだ。

部長は、息絶え絶えなのに答える。

「わす……れた？ 私は……元、剣道部……よ」

「……そういや、インハイ……出てたっけ……」

「あんだなんか……負けない、わ」

でも、そんなののしりあいが続けられるはずもなく、結局ど
ちらからともなく二人とも息を整えることに専念した。はたから見
ていると、ひどく滑稽な光景だった。

「……さあ、じゃあ今度こそ聞かせてもらおうかしら。部会をさば
った理由を」

先に息を整えた部長が、商店街のときと同じようにセイを睨み見
上げる。つかれているのか、その迫力は半減していたが。それでも、
同じく疲れたセイを折らせるのには十分だった。

「……わかつたよ」

両手を上げて、降参のポーズをとる。これ以上の抵抗は、無駄に
体力と精神を削るだけだろう。

どちらにしても、避けられることではないのだし。

「理解してくれるかはわかんないけど、とりあえず全部話すよ。ま、
立ち話もなんだからあがつてけ」

セイは自分の家の玄関を指差した。すると、

「あ、うん」

息はもう整ったはずなのに、部長はなんだか歯切れの悪いぎこち
ない返事をした。

どうしたんだろう。

セイは首をひねりながら、手馴れた動きで鍵穴にカギを差し込む。

「あれ、家族は？」

「父さん？ 今日取材で帰ってくるのは夜だよ。っていうか、あの人は自宅勤務のくせにめったに家にはいない」

ガチャリ、とストッパーの上がる音。カギはそのまま右手に。

「じゃあ今、家には？」

「誰もいないけど？ 別にいいだろ、そっちのほうが面倒くさくないし。部長くると父さんうるさいんだよ。変に気に入ってるからさ、部長のこと」

そうね、とどこか細い返答を聞きながら、セイはドアノブを回す。

「ま、飲み物ぐらいは出すから、あがれよ」

そして、ドアを開いた。

そこには、森が広がっていた。

パタン。

セイはドアを閉めた。

「……………はい？」

何だろ。今、あるはずのないものが見えた気がする。

ありえないことが起こっていたような気がする。

「ちょっと、何で閉めるのよ。わけのわからない」

わけのわからない？ ああ、その通りだ。

何だっただ、今のは。

森？

「ありえない」

セイは呟いた。それこそ、どんなファンタジーだ。

ありえない。

ありえない。

ありえない？

そのフレーズをさつきまで自分が連呼していたことを、セイは思い出した。自然と、右手に握られたそれに視線が向かう。

そこにはカギと、真紅に輝く赤いヒモがあった。

「……まさか、このカギ」

「カギが何？ セイ、さつきから変よ？」

部長の声が頭に入ってこない。

ただ、心の中で感情がうずまいていた。

不安。

疑心。

とまどい。

希望。

欲望。

歓喜。

願望。

それが全部ごちゃまぜになって セイは導かれるように、ドアを開け放っていた。

そこには、森が広がっていた。

光につつまれた森だった。

見渡すかぎり視界はすべて緑で覆われている。木の根は、窮屈だと主張するように地面から盛りだし、それにコケが生えて、まるで地面が隆起しているようにも見えた。ファンタジー映画の撮影に使えそうなほど、その森は確かな神秘をまとっていた。

セイの家の玄関で。

「……………」

セイは絶句した。言葉なんて、出るはずがなかった。

「どうしたのよ、はやく入り」

後ろから覗きこんだ部長も、言葉を失った。

「……………」

沈黙が、二人を支配した。

さきに口を開いたのは、部長。

「えーと……………変わった玄関ね、セイの家って」

「……………。それが冗談にしても本気にしても、オレは部長を尊敬するよ」

しかし、どうということだ？

ドアを開けたら、そこは森だった？

「洒落にはなるけど、笑えない……………」

どこか聞き覚えのある有名小説のフレーズが頭をよぎったセイは、頭を抱えた。

冷静になるべきだと頭ではわかっているが、この状況では冷静になれるはずがなかった。そんな混乱というより、半分パニックになっているセイの横に、部長はひょっこりと顔を出した。

「すごいわね、どうなってるのコレ？」

ドアの向こうに一歩を踏み出して、部長は尋ねる。その姿は、危険に踏み込んでいるようにしか見えなかった。

「部長、危ないっていかちよつとは大人しくしてるよ！」

「うるさいわね。危険なことぐらいわかってるわよ」

でも、と部長は楽しそうにニヤリと笑って、

「興味あるじゃない。どうなってるか、とか。普通じゃないのは明らかだし。私もただ文芸部部長でいるわけじゃないのよ。好奇心は人並み以上」

（人並み以上？ アンタのはただの異常だ！）

口に出すのは怖いので、セイは心の中で叫んだ。その間にも、部長は奥へ奥へと進もうとする。そのらんらんときらめく瞳を見て、セイは止められないことを確信した。

「しゃあないな……………」

セイは、そう一言呟いてその背中を追う。しかし口調と裏腹にその足取りは軽かった。

現実（玄関）を一步、踏み越える。そう思うだけで、鼓動がいやになるほど早くなる。夢だと信じていた、あきらめていたセカイが目の前に、広がっている。

セイはその幻想に向かって、一步を踏み出した。

光が、降り注いでいた。

セイが見上げると、自分の周りだけ森が抜け落ちるように空がのぞいている。

日は高く、正午ごろといったところだろうか。

まるで絵画のように、光の筋は森を貫いていた。

「うわ……本当にファンタジーだよ」

肺いっぱい空気を吸う。

街にはない、緑の匂いがする気がした。

それだけで、心の中から不安と恐怖心が消えて、好奇心とよろこびが強くなっていくのがわかる。

セイは今、夢みた世界にいた。

「セイ、これどう思う？」

いつのまにか横にいた部長が、腕を組みながら尋ねてきた。

その顔は、きつと今の自分と同じだとセイはわかった。好奇心をおさえきることのできていない顔だ。

セイはあたりを見回して、ちよつと考えてから答えた。

「わからん」

セイの自信満々な正直すぎる答えに、部長が頭をおさえて軽くため息をつく。

「今考えてたんじゃなかったの？」

「考えてもわからんもんはわからん」

少なくとも、こんな予測できない状況に対して何がわかるほど、セイは自分に力があるとは思っていない。

ただ……。

「やっぱり、夢じゃなければ別の世界なんだろうね、ここは」

「そりゃそうでしょ。こんなところが貴方の家の玄関なわけないし、そもそもこんな場所は日本じゃありえないわ」

異世界。

文字にしてしまうとなんともうそ臭いが、しかし目の前の光景はそれ以外考えられなかった。

「これって、まるであれよね。ファンタジー小説の冒頭みたい」

「ってか、完全に今の状況がファンタジーなんだけどね」

振り向くと、そこにはドアのかたちに切り抜かれた元のセカイ。そこからのぞく民家の壁は、落ちかけた夕日で真っ赤に染まっていた。

それがセカイの継ぎ目であり途切れ目で、ここが別の世界であることを何よりも物語っていた。

まるで、物語のように。

「で、これからどうするつもりだ？ 部長」

「ん〜……そうね」

部長はしばらく空を眺めながら考えて、

「本音は冒険と洒落こみたいところなんだけど……帰りましょうか。物語のヒロインは私には身が重過ぎるわ。セイはどうするの？」

そう言って、部長は首をかしげる。

答えなんて、わかっているだろうに。

「オレも同意見」

手をあげて、セイはそう答えた。

確かにこのセカイは魅力的だ。普段は持ちえない、望んでも得られないセカイ。でも、やっぱりそれは非日常だ。何だかんだいって、セイも部長も今の日常を愛している。家族がいて、友達がいて、部活があつて、大切なものがたくさんあるセカイ。

だから、簡単には捨てられない。

捨てられるはずがなかった。

二人はお互いおかしそうに笑い、セカイの切れ目へと歩いていく。「まったく、おいしいわねこんな体験。私があと二歳ほど若かったら

なあ」

「無謀にまかせて冒険するのにな？」

「そう！ わかってるわね」

当たり前だ。残念そうに笑う部長と、セイはまったく同意見なのだから。

「でもまあ、日常つてのが大切と認識できただけ、貴重な体験だったんじゃないか？」

「……そうね、そう納得しときましょう」

今度は、部長も軽やかに頷いた。

「私たちつて、あれね。物語をつくっているっていうのにとことん物語向きの人間じゃないわね」

「まったくだな。本当なら喜び勇んで冒険に旅立たなきゃいけないシーンなのに。これじゃハッピーエンドしか書けないわけだ」

「あ！ 思い出したわ。そういうえげまだサボった理由を聞いてない。帰ったらちゃんと聞かせてもらうから、覚悟しなさい」

「……こんな大変なことがあったんだから、忘れてくれればいいのに」

「聞こえてるわよ、セイ」

頬を引つ張られながら、セイはセカイの継ぎ目をくぐる。

これで、もう本当に、非日常はオワリだ。

「さすがにアンコールはもうないよな」

そう、少し残念そうにセイが呟いた時、

重い、鐘の音が体に響いた。

「ッ！」

「何よ、これ！」

あまりの大音量に、二人とも思わず耳を両手でふさいでいた。

それは、低い低い腹に響く重い音。帰ることを拒絶されるようで、

足が止まってしまふ振動。

天高らかに響くその音色は、セイの腹だけではなく頭も心臓もふるわせる。

頭が割れそうだ。

ひどく、居心地の悪い音色。

それはまるで警告音のようだった。

(どこから響いてきてるんだ!?)

まるで鐘の音は、体の奥からひびいてくるようだった。そして、

三度目の鐘があたりを震わせた時 異変は起きた。

最初は、部長が後ろからふざけてひっぱったのかと思った。しかし次の瞬間、セイの全身は吸い込まれるようにトビラのあちら側に引き寄せられる。

(ヤバイ！)

セイが、とつさにドア枠を掴めたのは偶然だ。左手に持っていたスーパールの袋は、力にさからえずあっちのセカイに吸い込まれていく。何が起こったのか。セイがそう考えようとしたときだった。

「キヤア！」

短い悲鳴に、背筋がゾクリとした。

誰の声かなんて、考える必要もない。

「部長、大丈夫か！」

部長は、地に伏せるようにその力に耐えていた。どうやら、とつさに伏せることでなんとか踏ん張ったらしい。

しかし、それも限界のようだった。

「部長！ 手、掴め！」

右手を思い切り部長に伸ばす。カギが落ちたが、そんなことを気にしている時間はない。部長は何とか手を伸ばして、セイの手をとった。

そして、キッとこつちを睨む。

「なんなのよ、コレは……」

「オレにもわからん！ ただ……」

まるでオレたちが帰るのを邪魔しているみたいだ。
そのセリフをセイは口にできなかつた。

「部長、絶対に放すなよ！」

「わかってる！」

部長は左手でカギを拾ってポケットに入れ（こんなときでも、部長は変に冷静だった。いや、逆に混乱していたのか？）、その後、セイの手を両手で握る。

そうしている間にも、ひっぱりこもうとする力はどんどん増して、部長の足が浮いた。

「きゃっ！」

「……く！」

圧倒的な力は、セイごとすべてを森に引きずりこもうとする。
ズズズツ、と足が徐々に森のほうへと引きづられていくのに、セイは焦っていた。

「つくそ！ 絶対に、死んでも放すなよ！」

そう口にしながらも、もう限界だった。ドア枠を持つ左手が、部長を掴んでいる右手も、感覚が少しづつなくなってきた。

もたない そう、セイは現実を理解した。

セイひとりならどうにかなるかもしれない。でも、部長をひきあげるのは無理だ。

このままでは、二人とも飲み込まれる！

どうする？

自問する。

どうする。

思考する。

どうする

そもそも、これは誰の責任か？

どうする

魔女に会い、カギを受け取ったのは誰か？

どうする

それに、友達を……他人を巻き込むのか？

どうする

セイ、お前の望んでいたことはそんなことか？

どうする！

……決まっている！

セイは、手を放した。

左手を。

部長の驚く顔に、にこりと笑いかけてやる。

これが、セイの答えだというように。

今度は思い切り右手を引っ張った。

慣性の法則というやつだ。力は、逆方向にも同じだけ働く。

くるりとセイと部長の位置は入れ替わった。

「じゃ、あとよろしく」

「セ」

部長の背中を、思いつき突き飛ばした。

部長は『力』の範囲外　セカイのあちら側にドサリとしりもちをつく。

（これで、大丈夫だ）

安心して、小さくほつと息をもらすセイに、

「ばかーーーーー！！！」

部長は泣き出しそうな顔で叫んだ。

その姿に、最後に見る『元の世界』に、セイは笑いかけた。

（本当にバカだな、オレは）

そんな、自嘲の意味もこめて。

そして、セカイの裂け目は、消えた。

(1 - 2) 追いかけること異世界と自分勝手(後書き)

そして、これが二つ目。だいぶ昔に書いたため、若いなあ拙いなあと思いつつ投稿。

部長のキャラはすごく好きです。

次回予告1(前書き)

アニメ的なノリで。こういうの好きなんです、すいません。

次回予告1

次回予告1

部長「まったく、どこに消えたのよセイは！ まだサボった理由を聞いてないわよ！」

明るい少女「自分の命の恩人にそのセリフは、どうかどうかと思うけど？」

部長「いいのよ！ これぐらいじゃないとあのバカには効かないんだから！ 見つけたらとっちめてやる！」

気の強そうな少女「まったく、ヤツといいオマエといい、無茶苦茶なヤツだ。そっちのセカイはよほどタチが悪いんだな」

部長「ちょ、ちょっと！ あんなバカと一緒にしないでよ！ だいたいアンタら何なのよさつきから」

明るい少女「ん？ ボクたち？ ボクたちはね……」

気の強そうな少女「次回、少年魔女セイと異界の鍵 第二話『魔女と魔法と竹箒 〉 Boy meet Little Witch 』」

セイ「魔女はもうこんごりなんです……」

小説の主人公は、異世界に巻き込まれると、その現実を認められないか混乱するかがよくあるパターンだ。

そしてその結果また厄介ごとに巻き込まれたりして、物語は進んでいく。

「でも、実際なってみると案外冷静になるもんだな」

携帯の圏外表示を見ながら、セイはぼんやりと呟いた。

こちらに取り残されて いや、残ることを決めてから十分。セイの心は、自分が呆気にとられてしまっぐらい落ち着いていた。

(これも日ごろから変な妄想ばかりしてたからかなあ)

それとも、実はパニツクになりすぎてわけがわからなくなっているだけののだろうか。

「ま、どっちにしろやれることをやるしかないか」

そうあっさり決断したセイは、まず現状をなるべく理解することから始めた。

最初は持ち物検査。バッグをひっくり返して出てきたのは、ノートに下敷き、あとは筆箱だけだった。

「使えそうなのはこれぐらいか」

少し錆びついたカッターナイフは、武器としてはあまりにも頼りない。高望みしてもしかたのないことだ。むしろ、一般的な中学生が武器なんてもの持っているほうがおかしい。こういうとき、物語とかなら魔法の道具とかがあつて、それには強力な力があつたり何かしらの導きを示してくれるものだが、

「カギは部長が持ってちゃったしな」

こんな時だけは、部長の生真面目さが恨めしかった。まあ、あのカギにそこまでの力があるとはセイも思っていないが。

とりあえずカッターナイフは、右ポケットにいれておくことに決めた。ついで、飛ばされたスーパールの袋の中身も見てみる。

「うわあ、惨状だ……」

中身は、豆腐はぐちゃぐちゃになりひき肉はパックから飛び出していた。お風呂用洗剤もそれをモロにかぶってひどいことになっている。セイはしばらくそれを眺めて、

「はあ、不幸」

袋の口を縛った。片付けは、あとで考えることにした。次に、セイは周りを少し見て回る。スーパーの袋はとりあえず地面においてそこを拠点に草をかきわけて何か手がかりがないかを探してみた。しかし、これも大きな収穫はなかった。

「どこを見ても、森が続くばっかか……」

森は深く、どこを見ても出口を見つけないことはできない。

「何もないかな、これは」

セイはあきらめて帰ろうとして、

「……ん？」

少しだけ草の途切れている場所を見つけた。なんとなく覗き込んでみる。と、

「これって、道？」

天然のものか人がつくったものかはわからないが、地面の露出したそれは確かに道に見えた。奥に続いているかは雑草がひどすぎてよくわからない。しかたなくセイは進むのをあきらめ、スーパーの袋のところまで戻ってきた。

「さて……どうするか、今から」

また同じように木の根に座って、セイは考える。今わかる自分自身の現状を把握し、その結果から状況を整理する。

そうしてセイは、

「……………はあ」

どうしようもなかった。

手がかり、イベント何もしなかった。そもそも、ここにきた目的さえわかっていないのだから手がかりもへったくれもない。小説やゲームだったら失格だろうが、しかしそれが目の前にあるリアルだ

った。

「……いや、目的つてのには心当たりあるんだけど」

じゃらじゃらじゃらら、という音がセイの頭の中でよみがえる。

魔女はセイに言った。『セカイを救いなさい』と。もしそれがこのセカイのことを指しているなら、セイは『このセカイを救う』という目的があることになる。ただ、こうやって静かで平和な森を見ているとそれも信じるのができなかった。こんな綺麗な世界に、不幸なんてあるとはセイには思えなかったからだ。

「それに……どう考えてもオレは世界を救うようなキャラじゃないし」

ため息がでるのも当然だ。

自分が物語にでてくるヒーローようにかっこいい、正義感にあふれた人間ではないことぐらいわかっている。それどころか、女の子に睨まれてたじろいて逃げるヘタレだ。

そんな人間に、セカイなんて救えるはずがない。

(ああ……なんだか自分で言ってるすっごい悲しくなってきた)

とりあえず、ここにいてもしかたがない。セイは座っていた木の根から腰を上げて、さっき見つけた細い道のほうへと向かった。

考えても何もわからないなら　あとは動くしかない。寝て待つ結果がついてくるほど、この世が甘くないことはセイにもわかってきた。

後悔は何かをしてすること、だよな。　母さん」

何もせずに後悔するのは、一番バカなこと。その言葉を頭で反芻して、セイはすべての荷物をバッグにしまつと草むらをかきわける。そこには、細いけれど　確かに地面がわずかに露出した道がある。

「ま、ここを歩いていくのが一番だな」

闇雲に歩くよりはよっぽどマシだろう。終わりがわからない、という点で不安なのは変わらないが。

セイは奥へと続く　これから自分が進む道を、眺める。

これから、何が起るのかはわからない。

ただ、今まで自分の経験したことのない体験をするのは、いい意味でも悪い意味でも確かだ。

それは少しだけ楽しみであり、大きな不安だった。死ぬかもしれない、なんて言葉を本気で考えたのは今日が初めてで。

でも、不思議と足が震えるようなことはなかった。

「何を言ったところで、もう引き返せないんだしな」

セイはそう苦笑まじりに言って、一步を踏み出した。

未知の、でもだからこそ心躍る未来へ。

そして、踏み外した。

「……はい？」

体が、傾いた。

何が起きたかわからない。

ただ景色がゆっくり傾いでいって、体の重心がゆっくりと狂っていく。

何だか、時間がゆっくり流れていくように感じた。

足元を見ると、道だと思っていたところにそって、地面が崩れていた。なるほど、あれは道なんかじゃなく地盤がズレてできた亀裂だったわけだ。

そんなふうになんか冷静に事態を観測すると、この先何が起るかがセイにはなんとなく予測できた。できれば、あたってほしくない予想が。

「……マジか」

その展開は、あまりにもコメディがすぎないだろうか。

そんなセイの物語への非難も、セカイには届かず

ガラリ、と。

第二話 『魔女と魔法と竹箒』 Boy meets Little Witch

落ちたのは、当時は完全にキャラクターが勝手に動いた結果でした。
なんでこんな不幸な子になったのやら。

(2・2) 森と大木と精霊

がけを転がり落ちて、地面におもいきり背中を打ちつけた。

「……………いつつ！」

背中をさすりながらセイは上体を起こす。

全身がチクチクと痛むが、大怪我はないようだ。制服を着ていたのと、転がったときに頭をしっかりかばっていたのがよかつたらしい。

落ちてきたガケを見上げると、はるか上　建物でいうと三階ほどの場所に、崩れた後があった。

「あそこから落ちたのか。……………運がいいんだか悪いんだか」

もう戻るのは無理のようだ。道具もなしにこの高さは登れない。

「ま、元から行くアテなんてなかったんだし、戻れなくなったからつてどうってことはないんだけど」

何度か屈伸運動をして体に異変がないのを確認してから、セイを改めて回りを見渡す。

さきほどよりは、若干視界の空けた森だった。木の本数が少ないのか、それほど根も飛び出しておらず、歩きやすそうだ。

「よし……………改めて行きますか」

セイは一步目を

「……………」

何度か足先でチヨンチヨンと確かめてから、ゆっくりと踏み出した。

こうして歩いてみると、改めてセカイの違いを感じる。セイの今まで生きていた世界は、コンクリートの森だった。整備されて歩きやすい道、整えられた緑。安全と利便性であふれた標識。

便利ではあった。でも、おいがなかった。まるで全部からつばのようだと感じた。

在るのに、なかった。

でも、ここは違う。

何が、というのは難しい。空を飛ぶ鳥の鳴き声も、芝生の上を歩くザツザツという音と感触も元のセカイとは変わらない。

でも、違うということは断定できた。

このセカイは、満ちている。元のセカイとは違って、在るものがしつかり在ると感じた。

「気持ちいい……」

こんな変な状況じゃなければ、森林浴でもしたいくらいだ。木々の間からこぼれる日差しで手をかざす。

透ける赤。

生きている。

セカイが違っても、ちゃんと生きている。

「なら、できることをやる！」

心がくじけないように、セイはそう大声で宣言して足を速めた。

(まずは、なんでもいい。手がかりを見つげよう！)

そして三十分が経過した。

「……ここまで何もないと、さすがにへこむわ」

しびれてきた足をなんとか前に出しつつ、セイはため息交じりにつぶやく。

歩いてても歩いてても歩いてても歩いてても、森だった。

森ばかりだった。

最初はリスのようなかわいい小動物や見たことのない真つ青な鳥を見ては驚き、バカでかいトカゲのような生物に大騒ぎしていたが、一人であることと体力を消耗したことで反応も薄くなった。

「……っていうか、ここに来る前に部長のせいで全力疾走するハメになったからな」

大本の原因が自分であることは、あえて考えなかった。思い出したら、急に足が重く喉がカラカラに感じる。荷物も、いやに重く感じた。

不安もゆつくりと、でも確実に増大してゆく。このまま遭難するんじゃないか、なんて冗談になるのかならないのかわからない想像が思考を蝕んでいく。

正直に言おう、くじけそうだった。

「ああ……こんなところで死ぬなんてオチにならないだろうな」
不安を、そう口に出したときだった。

その音を、セイは確かに耳にした。

「歌声……？」

かすかに聞こえるメロディー。聞き覚えがない　　というか聞いたことのない言葉でつぐまれる独唱は、確かに誰かが歌う声だった。気がついたら、駆け出していた。ただ、歌のするほうへ我を忘れたように走る。

誰がいる。もしかしたら森から出られるかもしれない。

その希望は、セイを奮い立たせるには十分だった。

「つくそ、邪魔！」

大きな草を手で乱暴に払いのける。

そしてその先で　　彼女は唄っていた。

広場のような場所だった。

大きな湖があつて、そのまわりには馬に角の生えたような動物やさつき見た小動物、それに二足歩行する犬ぐらいの大きさのウサギみたいなものが喉を潤している。

その中央には、見上げるほどの大木があつた。遠目で見ても周りの木と比べ物にならないくらい大きくて、なんだか遠近感がくるつたみたいに感じる。

空を覆いつくすように広がる枝は、その木の力強さと包み込むような優しさを表現しているようだった。そんな大木の傍で、彼女は水を足につけて心地よさそうに唄を紡いでいた。

心の隙間を埋めていくような曲だった。

やわらかくて、まるで眠りにおちる寸前のような気持ちよさ。

ただ、静かでフワフワしていて。

「そうだ……木のざわめきに似てる」

なんだか、すごく安心できる　昔から知っているような気持ちになる。

ただ、聞きほれた。ずっと聞いていたいと、純粹に心から願った。唄には国境どころかセカイさえ関係ないんだ、とセイは変な気分になった。

しかし、やがて唄はゆっくりと終わった。余韻に震えていたセイは、気がついたら拍手をする。

してから、

「あ……」

後悔した。

「何者じゃ？」

彼女は、驚いたように顔を上げる。その顔は、人間のようで人間ではなかった。

顔立ちは人間に近いが少しだけ鼻先が前に出ている、その肌はうすい緑色。瞳はエメララルドのような輝きを発しているだけで、白いところはなかった。

あきらかに、人間外だった。

どうしよう？

焦る。もう、バツチリ目はあっている。逃げるのは、あまりにも失礼だ。それに、不思議とセイは彼女に恐怖とか敵意は感じていなかった。ただ、盗み聞き（盗み見）していたバツの悪さは変わらない。

セイが返答に迷っていると、

「我はお主に何者じゃ、と問いたのだが？」

上から楽しいげな声が降ってきた。

「うああー！」

思わずしりもちをついて声のほうを見上げる。そこには、さっき

までは湖の向こう側にいた彼女がいた。

「え、いつの間に!？」

この距離、無視するには遠すぎる。瞬間移動した、としか考えられないような距離だ。

言葉がでないセイをよそに、彼女は太い木の枝に足をひっかけ、ブラブラとぶら下がっていた。風でゆれる髪の毛は、近くで見ると細い木の蔓と葉でできているのがわかった。

そんな彼女のエメラルドグリーンの瞳が、セイを捉えて笑う。

「我はこの森を統べる者じゃからな。この程度のことでは驚かれても困る」

そう言いながらもどこか自慢げに、彼女は腕を組んだ。そのグラマーな体を包む服も、よく見ると葉っぱや花びら、蔓などでできている。

まるで、そう

「アンタ、まさか森の妖精……?」

「失礼な。そんな低級なものと一緒にするでない、若輩者。妖精なんて域は千年前に超えておる」

少しムツとした声を出して、彼女はふりこのように勢いをつけて木から飛び降りた。

セイはその行為にドキリとした。

木の枝の高さは三メートル。女性が飛び降りて、無事な高さとは思えなかった。

「あぶな!」

セイはとっさに受け止めようと手を伸ばす。

「は? お、おいどかぬか!」

彼女の焦ったような声が聞こえて、

メキヨ

顔面に、彼女の足がめりこんだ。

「くつぷ！」

ああ、靴まで蔓と葉でできてるんだなあ、なんて妙に納得しながら、セイは体が二回転半してうつむけに倒れた。

なんかさっきから痛い目みてばかりだ。

「まったく、何故邪魔をする。急に走ってくるから踏んづけたではないか！」

だというのに報われない。

彼女はさっきのセイと同じようにしりもちをつきながら、なぜかこっちにむかって怒鳴りつけてきた。

せつかく助けたのに、それはあんまりだ。

「ケガなかつたんだから、ありがとうの一言くらい言ってくれてもいいと思うんだけど」

「お主が飛び込んでこなければ余裕で安全に着地できておったわ。

余計なことしおつて。我を誰と思っておる、この森を統べているのは伊達ではないぞ」

……そうか。彼女は人間じゃなかったんだった。飛び降りる姿をみたら、そんなことすっかり忘れていた。

あの距離を一瞬で移動するぐらいだ。この程度の高さ、余裕だったんだらう。

自分の無駄に終わった行為に、セイはうなだれた。

まったく、これじゃ部長じゃないが本当にバカだ。

セイが顔を上げると、彼女は立ち上がり膝をはたき、憮然とした表情をこっちに向けていた。

「まったく……この私の服を汚すとは。いい度胸だな、お主」

一瞬で寒気が走った。

セイはとっさに身構える。まさか、何かされるんじゃないだろうな！

「だいたい、さっきはアンタ呼びわりもしおったな。どこのウィッチかは知らんが、いい度胸だ」

彼女はセイに近づいてくる。その姿をなぜか大きく感じて、セイ

「いつまでそんな顔をしておる。さっきのは冗談だ。お主をどうにかするつもりはないから、いい加減どうにかしてくれ。また笑いがこみ上げてきおる」

そう言った瞬間、また彼女は高らかに笑う。なんだかその姿は少女のようで、セイの緊張がほどけていった。同時にバカにされていたことにも気付कि、少しだけ力チンときた。

「まったく、冗談というのは時と場合を選んで使ってくれ。今は心臓に悪すぎる」

「ん、そうか？ 以後気をつけよう」

全然反省した様子もなく、言葉だけ彼女は頷いた。……なんていうか、えらく態度が尊大だ。

「しかし、この我に意見するとは本当におもしろい小僧よな。」

うむ、気に入った。我はお主が気に入ったぞ。お主、名はなんと申す」

「知り合いが、『名前を尋ねるときはまず自分から名乗れ』って言うってたけど？」

不機嫌をこめたセリフに、彼女はまたおかしそうに笑った。

「なるほど、それはそのとおりじゃな。一本とられたわ。」

おお、本当に気に入ったぞお主。

よし、我の名を教えてやる。

我の名は『グランスエイス』。この森の全てを統括し、恵みをほどこすものだ」

「……ごめん、さっきから言ってる『この森を統括する』っていう意味がわからない」

セイは正直にそう答えた。

「なんと、お主本当に無知のようだな」

「ほっとけ」

「まあ、簡潔に申すとこの森は我のものだということだ。ほれ、あそこに大木があるっ？」

彼女 グランスエイスはそう言って、湖の中心にそびえたつ大

木を指差した。

「あれが、我じゃ」

「……ますます混乱してきたんだけど」

「あゝ、めんどくさいのお。……お主の言葉で言うと、我はあの木に宿る妖精じゃ。最も、力は妖精とは比べ物にならないほど強いがな。そしてあの木は、この森を形作っている木でもある。つまりその妖精である我は、この森を統治する者であるということだ。

わかったか？」

「……え〜と。まあ、なんとなく」

つまり、グランスイスはあの大木の妖精で、この森を管理する管理人だということか。どんどん話がファンタジーになってきた。

「む、なんだその目は。お主、信じておらぬな」

「いや、そんなことはないんだけど」

いきなり目の前に出てきて妖精とか言われても、まだ納得できていないといったほうが正しい。

しかし、グランスイスはその目が気に入らなかったようだ。

「ふむ……なら、力を見せてやる。今、お主には体中に葉っぱがついておるっ」

セイはそう言われて自分の体を見回した。確かに、さっき転げた時についたのだからっばとガケを転げ落ちたときの土ぼこりで、セイの全身はボロボロだった。

「よく見ておれよ、まばたきすると見逃すからの。」

お主ら、 『散れ』」

グランスイスがそう命令した瞬間、ブアアと風みたいなのが吹いて、

ばら

セイの体についた葉っぱだけが地面に落ちていった。

さすがのセイも、それにはびっくりした。

「今のは、お主の体にくっついておった草に命令を下して離れさせたのじゃ。こんなことができるのは土地を統べる我ぐらいじゃぞ。」

「どうだ、信じる気になったか？」

「あ、ああ……」

夢のような現実にはセイはそんな生返事しか返せなかったが、グランスイスはそれで満足したようだった。

うむうむと満足げに頷いて、

「さて、今度はお主の番じゃ。名は何という？」

呆気にとられている場合ではない。グランスイスは自分の皮肉にも、誠意を持って答えた。なら、自分もその誠意に答える必要がある。

セイはグランスイスをまっすぐに見て答えた。

「オレの名前はセイ、人間だ。ついさっき、異世界からこのセカイに飛ばされてきた。できれば、この森の出口を知りたいんだけど」

「ほお、異世界とな」

グランスイスはまるで値踏みするようにセイの姿を上から下まで観察した。正直、あまりいい気分はしない。

「……なんだよ」

「なるほど、変だ変だと思っではおったが、異世界人か。通りでの」

「！……アンタ、こんな話信じるのか？」

まさか、そんな簡単に頷かれると思っっていなかったセイは、自分で聞き返していた。それにグランスイスは逆に不思議そうに首をかしげて、

「信じるも何も、事実なのだろう？ 守護者なんてものを長くやっていると、たいていのことは経験してある。驚くも何も無いわ」

歌うように、湖のほうへ歩いていく。

トン

トン。

跳ねるように、彼女は湖を渡る。

「なるほどな。どおりで魂の色がヤツに似ておるわ。いいのお、私も異世界に行ってみたいものじゃ」

独り言のように話すグランスイスの背中がなんだかさっきまで

とは雰囲気が違いすぎて、セイには言葉をかけることができなかつた。

「さて、出口であったか」

しかしくるりと振り向いたグランスイスの表情は、また『くははは』と笑っていた。

でも、セイにはそれが少しだけさびしそうに見えて……

「って、出口を知ってるのか!」

あやうく聞き逃すところだった。

「当然のことを聞くでない。この森は我だ。わからぬことなどない」
グランスイスはそう自慢げに胸を張ると、ゆっくりと手をひらりとゆらす。

そして同じ手で草むらを指を差した。

すると、どうしたことだろう!

まるで指の動きに合わせるように、邪魔をしていた草が左右にわかれて道をつくった。セイはもう驚きすぎて、なんだか感覚が麻痺してきていた。

「あそこをまっすぐ歩けば、一時間もしないうちに出口でたどり着くはずじゃ」

「本当か!?!」

「守護者はウソはつかん。冗談は言うがな」

「ありがと、グランスイス!」

セイは頭を軽く下げて、出口へと続く道に走った。
やっと、希望が見えた。

これで、前に進める!

「待て、セイ。そう急ぐでない」

そのセイの足首を、木の蔓がひっかけた。

「はぶしっ!」

また顔面だった。

これで何度目になるのだろうか……?

ジンジンと痛む鼻をおさえながら、セイはもう一度グランスイ

又に振り向いた。

「ふぁにふんだよ！ いふぁいらろ！（何すんだよ！ 痛いだろ！）

「怒鳴るではない。ほれ、選別だ。持っていくがいい」

またいつのまにか目の前にいたグランスイスは、セイに葉っぱと蔓でできた筒のようなものを渡した。

何だろ？

セイが葉っぱのフタを開いてみると、そこには水が揺らいでいた。「喉が渴いたままでは、つらかるう。我がすくった特別な水だ。飲めば体も楽になるう」

すべてを見透かしたようににこりと微笑むグランスイスは、神秘的で美しかった。セイは少しだけその表情にドギマギとしてから、同じように微笑んだ。

「わかった。ありがとう、グランスイス！」

「我はお主が気に入ったからな。近くに寄ったときはまた来るがよい。暇つぶしに話ぐらいしてやるう」

最後までえらそうな口調にセイは苦笑いを浮かべて、手を振ってグランスイスに別れを告げた。

グランスイスもその背中に手を振りながら、

「さて……またおもしろくなってきたのお」

セイに聞こえないような小さく呟いて、一人楽しそうに小さく笑った。

そしてまた唄を歌う。

それはさつきと違って、荒々しく猛々しい歓喜の曲だった。

(2-2) 森と大木と精霊(後書き)

フランスエイスは、そういえば当時アドリブで登場したかたでした。主人公、なんだかんだでノリノリです。

(2-3) ホウキと少女と少女

グランスイスが指差した道をしばらく歩くと、歩道があった。今度はあきらかに人が整備した跡で、地面の露出した道はさつきまどと比べるとだいぶ楽に歩けるようになった。

「……グランスイスに感謝だな。本当に希望が見えてきた！」
グランスイスが渡してくれた水には、本当に不思議な力があつたようだ。口当たりはほんの少しだけ甘くて、一口飲むだけで喉のかわきは潤って痛かった体の節々も楽になった。

「こりゃ、妖精って呼んだのは本当に失礼だったのかもしれないな」
そう呼んだ時のグランスイスのプリプリ怒る姿が脳裏に浮かんで、セイは思わず笑顔を浮かべていた。

しかし、改めて納得した。本当にここはファンタジーの世界なんだということ。

セカイとセカイをつなぐ世界のつなぎ目。

どこまでいっても続く、深く瑞々しい森。

人間とは違う、でもしゃべって高い知能をもつグランスイス。今まではフィクションだったものが急にノンフィクションになって混乱していたが、ようやくそれも自然に飲み込めるようになってきた。

その極意はズバリ、

「事はなるようにしかならない」

その一言につきる。あるものはある、できることはできる。諦めの意味でなく、受け止める意味でそう納得することが大切だ。

というか、そうしないととてもじゃないがこのセカイでは生きていけないと、セイははやくも悟った。

グランスイスの水を口に運びながら、セイは歩道を歩く。しかし、さつきと違って気になることがいくつもあった。まずは、標識が一切ないこと。道は一応整備されているのに、何がどこにあるか

といったことを指し示すものが分かれ道にさえなかった。

あまり山登りとかはしたことはないが、小学校の遠足ではたしかけっこう等間隔であった覚えがある。それから考えると、これは変だった。

そしてもう一つ。

「さっきまであれほどいたのにな……」

まったく動物の姿を見ないことだ。さっきは木の上やら足元やら頭の上やらにチヨコチヨコ乗ってきていたりスミミみたいな小動物も、この歩道に入ってから影すら見せなくなっていた。

「まるでこの道を避けているみたいだな……」

まあ、気にしていてもしかたがない。今は進むしかないんだから。「さあ、次に何か来るのかは知らないがどんとこい！」

半ばヤケ気味にセイは腕をふりあげて、森をズンズンと進んでいく。

それから、どれくらい歩いただろうか。

森が、急に終わりを告げた。

「……なんどここ、広場？」

歩道の行き着いた先は、今までに見たことのない広い芝生の広場だった。そこだけは木が一本も生えておらず、日の光が直接入ってくる。

セイは急激な光に手で目をおおいながら、その中央あたりまで歩いてきた。

「こりゃ……あきらかに天然でできたものじゃないな」

そうでなければ、ここまで見事に円形な空間はできないだろう。

つまり、この近くには出口があるということだ。

セイは意気揚々と出口を探してあたりの草むらをかきわけた。しかし、どれだけ探しても、出口どころか歩道の続きさえ見つからない。

おかしい。

ここは多分、人が休憩をするためにつくられた場所だ。それを証

拠に、この広場には見たこともないキノコや、刈り取られた草なんかが残っていた。人がいたという、何よりの証拠だ。

(なのに誰もいないどころか道さえないなんて……)

「ん？」

その時、視界に変なものを捉えた。

竹箒、だった。

二本の竹箒が、一本の木に重なるように立てかけてあった。使い込まれているのだろう、ところどころ少し汚れたり欠けたりしている。セイも外の掃除によく使うやつだ。触れてみても、やっぱり特に変化はない。立派な、普通の竹箒だ。

ただ、こんなところにあるのが異常すぎた。

「なんでこんなものにこんなものが……」

セイは竹箒の一本を手にとつて四方八方から観察してみる。

改めてよく見てみると、少しだけ普通の竹箒と比べて構造が変なことがわかった。棒の真ん中より少し毛に近いところ。そこに何故か、木の棒が垂直に刺さっていた。まるで十字架みたいに。

「なんだこれ。いや、別には掃きにくいわけじゃないけど」

はつきり言つて無駄なパーツだ。つける意味がわからない。不審に思いながら、セイは今度は柄のほうも調べてみた。するとそこには、何か署名のようなものが彫られてあった。

「これは……サインか？」

解説しようとして……セイは諦めた。図形が重なりあったようなものや、点が三つついたりしている文字を読めるわけがない。だいたいセイがそれを文字だとわかったのは、それが何個か綺麗に横一列で彫つてあったからだ。

「どうやら文字は全然違うみたいだな……」

セイは残念そうにそう呟いた。フランスエイスが日本語を話していたから、このセカイでも日本語とまではいかずとも英語かなにかの文字を使っているのでは、という期待を抱いていたのに。

「小説のようにはいかないか」

さすがにそこまでは簡単ではないらしい。最近のファンタジー小説じゃ文字を見るとなんとなくその文字を読めたりするらしいが、そこまでのご都合主義はないらしかった。

「まあ、言葉がわかるだけマシか……」

セイは自分自身に言い聞かせるようにそう呟いて……気付いた。

「ちよつと待て。小説……ファンタジー………そんで、竹箒？」

それから連想できるものを、セイは一つだけ知っていた。

それは、それこそが、ファンタジーの代名詞。

火・水・雷・あらゆるものを操り、圧倒的な力を持つ存在。

物語によつては国を……世界さえも支配する絶対的な存在。

不可侵で、不可思議で、自分勝手に、妖艶で、不気味で、だからこそ、愛され魅力的な存在。

その名を。

「まさか……」

セイが解答を導き出そうとしていた時だった。

「誰だ！」

急に響いたその声に、セイは真剣に口から心臓が飛び出たのではないかと心配した。しかし幸いにも口からは何も出ていない。

よかつた、こんなことで死んでは洒落にならない。

「動くな！」

その張りのある高い声が、頭を少し動かした自分に言ったものだと理解するのに、セイは少しばかり時間を要した。

そして気付くと同時、セイはつい声のほうへと振り向いてしまった。

「う、動くなと言っているだろう！」

怒鳴ったのは、自分に何かの棒を向けている少女だった。セイはビックリしながらも、その少女の格好を観察していた。

歳は同じくらい。身長も同じくらいか、くやしいが少し上かもしれない。引き込まれるような真っ黒な長い髪と、少しきつめの青眼を持つ少女だった。その顔立ちが冷たいながらもどこか神秘的な雰

困気を醸し出している。

しかし、本来なら引き込まれるであろうその容姿より目立つものを、少女は身に着けていた。

一つは、真っ黒なローブ。髪の色より濃い、まるで闇を編んで作ったかのような漆黒のローブを、少女は服の上から羽織るように着こなしていた。

もう一つは、帽子。その帽子もローブと同じように真っ黒で、帽子の頂点はまるで天でも目指すようにとんがっていた。しかもツバがとても広い。

深く被ると影になって、こつちからじゃ目が見えなくなりそうだな、とセイはその帽子を見て思った。

間違いなかった。『まるで』や『もしかしたら』なんて言葉は必要ない。

「お前、まさか」

「クレイ、どうしたの？ 何か怒鳴り声が聞こえたんだけど」

セイの言葉をかき消すように、場に合わない明るい声が黒髪の少女　クレイの後ろから聞こえた。クレイはセイから視線を外すことなく、その声に返事をする。

「フィン、こつちに来い。侵入者だ」

「ん、わかった」

あっさりした返事があって、クレイの後ろからフィンと呼ばれた少女が状況のわかっていない無邪気な顔で現れた。

彼女はクレイと同じように漆黒の帽子とローブを着ているものの、彼女とは正反対の印象だった。燃え上がるような真っ赤な赤い瞳に同色の髪。それを短くボブヘアで切りそろえていたが、帽子の両端から細いツインテールが腰の辺りまで飛び出している。

クレイを月とするのは、フィンは太陽のような明るさをもっていた。

フィンはクレイの横に立つと、興味深げな目でセイを観察する。

「侵入者って……この子？」

「ああ、どこの種族かはわからないが」

クレイは青い瞳でセイをキツと睨みながら、まるで叱るように畳み掛ける。

「お前、何者だ！　ここが魔女区だとわかっているのか！」

「え？」

「どこの種族のものだ！」

「しゅぞ……？　何言ってるんだ、お前」

セイにはクレイの怒鳴っていることが少しも理解できなかった。

「とぼける気か！」

「とぼけるも何も、オレはアンタの言ってることが全然わからないんだよ！　言葉は通じるんだから、教えてほしいことがあるならちゃんと説明しろよ！」

あまりにも一方的な物言いに、セイもついにブチ切れた。

これまでに溜まっていた色んなものに、一気に火がついた。

「アンタはバカじゃないんだろう？　だったら少しは相手にわかるようにしようとか思わないのか！？」

「き、貴様！　不法侵入者のくせして、その物言いは何だ！　死にたいのか！」

「はあ！？　自分の主張が通らないと思ったらすぐ暴力にうつたえるのか、アンタは！　そんなんじゃ、何も解決できないこともわからないほどバカなのか！？」

「……っこの！」

「はいはい、ストップ！　ストップだよクレイ、あとそっちの人も。こんなところで騒いでもどうにもならないでしょ」

フィンが小さな体でセイとクレイの間に入って、両手を広げた。それが『お互いに落ち着け』と示していることはセイにもわかって、黙った。

クレイもバツが悪そうに黙る。

「クレイ。これはボクの間違った感覚なんだけど、この子は亜人には見えな
いよ？」

「しかし『魔女』じゃない」

『魔女』。さつきから彼女たちの姿を見て感じていた単語が彼女たち自身から出てきたことに、セイは驚いた。しかもそれは、さも当然のように使われている。

セイは驚きよりも、納得のほうが大きかった。どうやら、この無茶苦茶な世界観にも本当慣れ始めてしまったらしい。

まあむしろ、こんな格好をしておいて「私は騎士です」と言われたらほうが困るが。

慣れって怖いなあとセイは思ったが、しかしそれと心のドキドキは別だった。

目の前にいるのは本物の魔女。物語の中でしか存在しなかった『奇跡を起こすことのできる』人間。

なら、もしかしたら元のセカイに帰る方法もわかるかもしれない。そう思うと、黙っているわけにはいかなかった。

「二人とも、よかつたらはなしを」

思わず身を乗り出したセイに、

「黙れ、動くなと言っている!」

冷たい一言で一蹴された。

声と同時に、クレイは何かの棒をセイの目の前に突きつける。

(何だそんなもの)

セイは構わず話そうとして……思いとどまった。

待て、考える。

彼女たちは魔女だ。それは本人も言っていたことだし、服装や言動からも多分間違っていない。

なら、そんな彼女たちがこちらを威嚇するように突きつけている木の棒は 何だ?

威嚇に使うほどだ。彼女たちにとってそれは力であり、武器であり、他者に対しての圧倒的な戦力。

それが魔女という単語とセットになれば導かれる解答はひとつ……

…魔法の杖!

(そ、それはマズくないか色々！)

嫌な汗が体じゅうから噴出すのを、セイは感じた。つまり、今の体勢は完全にあちら側の王手だった。こちらに抵抗の手段なんて微塵もない。

少しでも下手に動いてみる、次の瞬間力エルにだってされかねない。

……考えうる、最悪のケースだった。

攻撃手段が読めない。これならまだ刃物を突きつけられているほうが何倍もマシだ。

「……………」

クレイに気付かれないように腰を、重心を下に落とす。

もう、セイには二人にセカイに帰る方法を聞こうとは思っていなかった。ここでおかしな魔法をかけられれば、元のセカイに帰るどころの話ではない。

(まずは……逃げてチャンスを持たないと)

いや、その前にまず逃げるチャンスを見つけないといけない。

クレイは変わらずこっちを向いたままフィンと話をしている。

(一瞬のスキをついて、ここから逃げることは可能か?)

無理だ。

クレイだけならともかく、フィンもいる。それに、ここは視界が広すぎる。魔法の射程がどれほどかはわからないが、ここから森に姿を隠すまでに魔法をかけるぐらいは簡単にできるだろう。

まさに、八方塞がりだった。

セイにできることは、クレイを睨みつけることだけだった。

「ふん……ようやく大人しくなったか。最初からそうしていればいいんだ」

鼻をならすクレイの態度は気に食わないが、動けなかった。

いや、動かなかった。

(確かに王手をかけられてるけど……まだ詰んだわけじゃない) ただ、待つ。

逃げられるとすれば、クレイがセイから目を離し、フィンもすぐには攻撃できず、さらに二人が気を抜いた瞬間しかない。その間にクレイの杖を奪い取って、そのまま森に逃げるのが理想だ。

(……自分で言っときながら無茶だなあ)

ただ、戦うといった選択肢はセイの中になかった。

いくら女の子でも、相手が魔女なら敵わないという冷静な判断と、こんなときになっても『誰か』を傷つけることを、セイの心が許せなかった。

とんだ甘さだ。こっちは「殺す」とまで言われていて、それが実際冗談にならない状況だっというのに。

動かなくなつたセイを見て安心したのが、クレイは一つ小さく息を吐きながらフィンに話しかけた。

「とりあえず捕まえるぞ。フィン、なんでもいい。縄の代わりになるものはあるか？ ひも状の丈夫なものがいい」

「あるよ、縄なら」

フィンはローブの中を探って、一本のローブを取り出した。

(まだだ)

それを予期していなかったのか、クレイは驚いた呆れたような表情を浮かべた後、首でセイを指した。

「なら、こいつを縛っておけ。暴れられると面倒だ」

当然の権利、とでもいうようにクレイはそう言い放った。

(まだだ)

「え、そこまでしなくてもいいんじゃないかな？ ほら、大人しくしてるじゃん」

「駄目だ、さっきのを見ただろう。むしろさるぐつわもかませてやりたいくらいだ」

「でも」

「はやくやれ」

「……はい」

フィンは親に叱られた子どものような返事をする、縄をもって

こっちに近づいてくる。

(まだまだ)

「ごめんね。ほら、聞いてた通りクレイはうるっさいからさ。本当に本当にうるさいからさ。あとで助けてあげるから、今だけは言うとおりにしといて」

ゴメン、とフィンが耳元でそう小さく謝って、体に縄を巻き始める。

そしてその姿を見たクレイは、ゆっくりと杖を下に降ろした。

(今！)

「ごめん！」「うわあー！」

セイとフィンの声が重なった。急に駆け出したセイにフィンはぶつかるとハメになり、後ろで倒れる音がした。セイはもう一度心の中で謝りながら、クレイの元へ走る。

クレイは、とっさに杖を構えなおそうとしていた。

が、遅い。

「ごめん！」

同じように呟いて、セイはクレイの右手ごと思い切りはたいた。

クレイの手から、魔法の杖が落ちる。クレイのしまったという感情が顔に浮かんだ。

ここまでは計画通り。

あとは、森の中まで疾走するだけだ。

ただ、駆ける。

大丈夫、隙を完璧につけた。

これなら、間に合う！

そう確信したセイの後ろで、

「クレイ！」

そんな声をして、セイは少しだけ振り返る。

そこには、自分の杖をクレイに投げたフィンの姿があった。宙を舞う魔法の杖。

クレイは、それを

「……逃がすものか！」
見事に掴んだ。

「……しまっ！」
あまりにも見事な連携だった。
さすがにそれは、予想外だ。
予想外には、対応できない。
クレイが杖を構える。

セイが逃げるのにためらわなかったように、彼女もまたためらわなかった。

「彼の者を この地に縛る鎖となれ！」
『ファイティープル拘束』！」

体が何かに縛り付けられた……そんな気がした。

セイが驚いて見ると、光の帯みたいなのが地面から生えて、セイの足を腿を胸を腕を全身を縛っていた。

痛みはまったくない。ただ、体がほとんど動かなかった。
まるで、光の拘束具だ。

(間違いない……魔法をかけられた！)

「フィン、今のうちだ。詠唱と集中が半端だったから長くは持たない、はやくしろ」

「りょーかい」

フィンは軽く敬礼して、縄を片手にまたセイへと近づく。その顔には、敵愾心や緊張がまったくなくて、セイはその姿について観念した。

負けた、完全に。

惨敗で、完敗の、チェックメイトだった。

「いやー、ごめんね。なるべく痛くしないようにするから、今度は動かないでね」

「いや、動けないから」

「うん、わかってて言ってる」

……ああ、突き飛ばしたのはさすがにマズかったか。

フィン（なぜか）慣れた手つきでセイを縛り始める。その手際は実に無駄がなく、光の帯がなくなるころにはセイは立派な簀巻きになっていた。

「はい、おわり〜」

バシンと簀巻きのセイを叩いて、フィンは自分のデキに満足そうに頷いた。

「おつかれさん」

「うん、今日もいい仕事をしましたよ」

セイの軽口にも、フィンは自信満々に答えた。

（フィンって子のほうは、あっちのクレイって子に比べてまだ話せそうだ）

ちよつと底の読めない感じもするけど、ずっと眉間にしわを寄せているクレイよりはましそうだと、セイは思った。

そのクレイは、立てかけてあった箒を日本ともって、一本をフィンに投げてよこした。

「フィン、無駄話はいい。とつと帰るぞ。そいつの報告もしないといけないしな……まったく、また面倒事が増えた」

クレイが、疲れたように額をおさえる。

「そうだね、まさかこんなことになるなんてね〜」

「！　そもそもお前が、調子にのって森の奥まで行くから予定が遅れてこんなことになったんだろ！　誰のせいだと思ってる誰のせいだと！」

「しかたないじゃん、欲しい薬草が奥にしかなかったんだから」

「あの薬草は制限薬の材料だろう！　手に入れてどうするつもりだったんだ！」

「どうするって、薬をつくるつもりだったんだけど？」

「平然と言っな！　それは違反行為だろうが！」

「まったく、クレイは頭固いなあ。ルールはさ、破るためにあるんだよ？」

「守るためにあるんだ！」

口論を始める魔女二人。

完全に置いてけぼりをくらったセイは、

「あゝ、いい天気だなあ」

雲ひとつない青空を見上げて、現実逃避気味にそう呟いた。

(これからどうなるんだろう?)

そんなことが一瞬頭をよぎったが、今だ言い合っている二人の声を聞いているとそんなことも馬鹿らしくなっていく。

とりあえず今日一日で確かなことは、セイの魔女に対する印象がいろんな意味で大きく裏切られたことだった。

「だいたいお前はいつもいつも」

「それ言うならクレイだって」

どんどん本題から外れていく魔女の喧嘩を、セイはゆっくり待つことにした。

空が、いやっていうほどにまぶしかった。

(2・3) ホウキと少女と少女(後書き)

これでメインキャラは登場したかな。まだまだ続きます。

(2・4) 魔女と簀巻きとバンジージャンプ

結局、口げんかはその後も十分ほど続いた。

枚拳にいとまがない上に、この上なく不毛だったのでその内容は避け、結果だけを言うと、

「はあ、はあ……とりあえず」

「……帰ろっか」

息をきらしてお互いうなだれあっていた。はつきりいつて、滑稽な光景だった。そしてその姿に、セイはなんとなく自分と部長の姿を重ねていた。

考えなくないが、きつと周りから見た自分たちはこんな風だったんだろう。今後はもう少し気をつけようとセイは心に誓った。

(そういえば部長……どうなったんだろう)

無事なのは確かだろう。ただ、あの泣きそうな表情が頭から離れなかった。

今でも泣いて はないだろう、絶対。部長はそんな弱い女ではない。むしろ一番ありそうだと考えたのは、勝手なことをしたセイに怒り心頭している部長の姿だった。

「うわあ……」

セイはこのとき初めて元のセカイに帰りたくないと思った。

「さあ、そろそろ行くぞフィン。あまり遅くなると面倒だ」

気を取り直したクレイは箒を何かいじりながら、フィンをせかす。フィンも特に言い返さず、箒にまたがった。

(ああ、なるほど。横棒は座るためにあるのか)

フィンが十字になったところに腰を落とすのを見て、セイは感心した。確かに、ああしたほうが箒に乗っけていても楽だろう。

つまりあれは、完全に飛行用の箒というわけだ。

「なんだか……ファンタジーのリアルを垣間見た気分だ」

「黙っている、舌をかみたいか」

セイの声に、すかさずクレイはそれを制して、

「何だ、心配してくれてるのか？」

「……いや、訂正する。ずっとしゃべってる。そのまま舌をかみ切ってくれたほうがこちらとしては楽かもしれないからな」

極寒零度で言い直した。

「……冗談でも怖いこと言うなよ」

「本気だ。私に話しかけるな、今度は口を封じられたいか？」

杖を構えるクレイに、セイはため息をついて黙った。

さつきからずっとこれだ。クレイは過剰と言っていいほど、セイに対して警戒し続けている。

理由はなんとなくわかった。きっと、恐怖なんだと思う。

(まあ、クレイたちから見ると謎の存在だろうからな)

正体のわからないものは、不気味だ。

知らないことは、不安だ。

それだけで、嫌悪や警戒を向けられる理由は十分なんだろう。

それは、さつきセイが魔法に恐怖したのと同じ。クレイも、セイ

イという存在に恐怖しただけの話。

でもそれは、やっぱり気持ちのいいものではなかった。

少しだけ落ち込むセイに、

「行くぞ、フィン」

「アイアイサー」

二人の魔女はそう言って 当たり前のように飛んだ。

まるで物語の魔法使いのように幕にまたがり、黒いローブをはためかせて。

陰鬱な気持ちで、一気に吹っ飛んだ。

セイはその姿を、口をポカンと開いたまま見上げていた。

二人にとってはそれが『日常』なのだろう。でも、セイにとっては『奇跡』そのものだった。

すごい！

セイは、食い入るように空を見上げる。

まだどこか飛び方が不安定なフィンに比べて、クレイの飛び方は見事だった。またがるように乗った箒と一緒に、あつという間に太陽に吸い込まれて黒い影になる。その姿は速いうえに安定していた。「確かに、クレイは優等生タイプっぽかったしな」

フィンを叱る姿はまさにそんな感じだった。

そんなことを呟いている間に、クレイは完全に日の光に消えた。もしこの垂れてきている縄がなければ、クレイがどのあたりにいるかさえセイにはわからないだろう。

「……縄？」

いやな予感がして、セイは自分の記憶を急速に巻き戻す。思い出したのは数分前のクレイの様子。クレイは、箒を何かいじっていた。

「……あゝ」

オチが見えた。

縄……言いにくければロープでもいい。

この上から垂れるロープがどこから伸びて、そこにつながっているのか。

セイは考えたくもなかった。考えることを放棄したかった。

しかし現実には、

スルスル、と

セイを、空へと誘った。

「うわあああああああ！」

今日何度目の叫び声になっただろう。

足が、地面から離れた。焦りという恐怖が、全身を暴れまわる。地面に足がついている たったそれだけのことが、どれだけ大きなことか。セイはこんなことで知らされるハメになった。

「ちよ、ちよつと待て！ 落ちる、落ちる！ これは洒落になっ
てないってー！」

「うるさい！ 落とされたいか！」

「だから落ちたくないんだって！」

セイの声に、クレイもわざわざ叫び返してきた。

いや、正確には縄が長すぎて、そうでもしないと風で声が消されてしまうので叫ばざるをえなかった。

「だまれと何度も言っているのかわからなかったのか、下種が！」

下種……なんてけなし言葉だ。

「ウソだ！ お前さつきは『ずっとしゃべってる』って言ってたじゃないか！」

確かにその後『私に話しかけるな』とは言われたが、最初は独り言でその後返事をしたのはクレイだから、セイの責任ではない。

「っていうか、危なすぎるだろ、これ！ 軽く死ねる！」

「じゃあ死ね！」

「なにその容赦ない一言は！ 最低でも縄をもっと短くしてくれ！ ゆれて気持ち悪いし、怖いんだぞ……そっちが考えてるよりずっと！」

「知るか、黙れ！」

キノコを投げつけられた。さすがに当たりはしなかったが、落ちていくキノコを目で追ってしまったセイはその落下時間の長さに絶句した。

ヤバイ。

これは本当に、死ねる。

「お前、鬼か！」

「私は誇りある魔女だ！ いいかげん黙らないと縄を切るぞ、馬鹿者！」

「お前……それバッドエンド確定じゃないか！ 親に命は大切だって教わらなかったのか!？」

セイが返す刃で口から出た、深い意味のない買言葉。それで、ピタリと空気が止まった。クレイは、何も言い返してこなかった。ただ本当に恨めしそうに、くやしそうに、憎むように、そして苦しそうに、あらん限りの眼力でセイを見下ろすだけだった。

それでセイも何も言えなくなる。地雷を踏んだことを、自分でも何となくわかっていたからだ。

(あ、死んだかも)

セイはそう覚悟した。しかしクレイは、ただ腹立たしそうに目をそらしたただけだった。

「あれ……た、助かった？」

しばらくしてそれを理解したセイは、止まっていた息を盛大に吐いた。

しかし、また死の危険だ。まったく、こっちのセカイに来てからトラブルばかりに出会う。これじゃ、本当にどこかのファンタジー小説の主人公だ。

ただ違いがあるとすれば、

「オレにはこの状況をどうにかする力なんてないってことだよな……」

揺れる自分の体を見下ろす。そこには縄でグルグル巻きのがあがある。それは、どう控えめに見てもかっこよくなかった。

自分の命を支えている一本の縄を見て、セイは心の内を漏らす。

「これ、ほどけたり切れたりしないだろうな」

「だいじょぶだいじょぶ。その縄は重さなら百キロだって切れないし、このボクが結んだからほどけるなんてことは万に一つもないよ」

予想外に、答えが返ってきた。セイが驚いて声の振り向いたほうを向くと、そこには赤。

「たしか……フィンだったけ？」

「あれ？ 名前覚えてくれたんだ。うん、魔女見習いの『小さな爆弾庫』ことフィンとはボクのことさ！ よろしく！」

「えらく物騒だな。あと手を伸ばされても、握手はできないから……
ついツッコんでしまった。

握手の手を笑って引っ込めるフィンはちょうどセイと面と向かうように、まるで小学生が鉄棒に腰掛けるようにして箒に乗っていた。改めて見てみると、幼い印象をもつ少女だった。はっきり言って、

魔女服装もハロウィンの仮装にしか見えない。背丈が小さいだけじゃなく、その顔に浮かべている笑顔は無邪気で、小学生のようだからだろうか。

しかし、本当にこんな笑顔は反則だ。すっかり毒気を抜かれてしまっ。

「ところで、キミの名前はなんていうの？ よかったら聞かせてほしいな」

「ああ、言っただけじゃなかったっけ？ セイでいい、みんなそう呼んでるし。よろしく」

セイは唯一動く頭を少し下げた後、

「あと、その乗り方は見てて怖いんだけど」

正直な感想を吐いた。実際、その乗り方はすこしでもバランスを崩せば落っこちてしまいそうだった。しかしフィンは、

「こつちのほう安定するんだもん。それにこうしないと顔を見て話せないし。」

そっか、セイって言うんだ。変わった響きだね」

にいつて笑って、セイをもの珍しそうに眺めた。そして、へえとかが、ふくんとか一人頷いている。そんな目で見られるのを慣れないセイは、我慢できなくなって口を開いた。

「いったい何さ？」

「あ、ううん。何でもない」

フィンはそれを笑ってごまかした。

「それより、縄はきつくない？」

「あ……ああ、特には。むしろきついぐらいでちょうどいいよ。縛られてるって安心感がある」

フィンの様子に、あやしみながら答えるセイに、

「……へんな趣味してるんだね」

フィンはとんでもないことを言ってくれた。

「そっいうことじゃないって」

「うん、わかってるって」

いつのまにか、おちよくられていた。

これは、由々しき事態だ。すぐに改正しないとイケない。

フィンにはやにやと笑ったまま、セイに問う。

「他になにか不満はあるかな？ できることならやってあげるけど」

「何でも？」

「何でも」

「じゃあ逃がしてくれ」

「それは縄をほどけばいいのかな？」

「ごめんなさい」

まったく勝ち目がなかった。

「……」

セイはフィンを睨んで、

「……」

フィンはセイを見て笑っていた。

そして、

「……く、くく」

「……にはははは！」

こらえられなくなって、二人同時にふき出した。

「いいね、おもしろいよセイ！」

「フィンこそ、返しがうまいな。けっこうこういうのには自信あったのに」

しかし、また『おもしろい』だ。屋上の魔女しかりグランスイスしかりフィンしかり。異なるセカイの人間からすると、こっちのセカイの人間は根本的な考えかたが違うのかもしれない。

笑いながらそんなことを考えていたセイは、

「……あ」

フィンの明るく楽しそうに話す様子に、自分がいつのまにか心を開いていたことに驚いた。

いつのまにか、フィンと普通に話せている。ロープで簀巻きにされるなんて目にあわされているというのに。

フィン は 聡 くて 話 も う ま い この タイ プ は 確 か に、 セ イ の 好 き な 部 類 に は い る 人 間 だ。 ち な み に 余 談 だ が、 こ こ に は 一 応 部 長 も 入 っ て い る。

でも それ 以上 に 何 か …… セ イ に も よ く は わ か ら な い が フ ィ ン に は 心 を 許 せ て し ま う 雰 囲 気 が あ っ た。

「こりゃ、魔法以上に最強の力だ」

「ん？ 何かな？」

「何でも」

「そっか。さて、じゃあ冗談はこれぐらいにして……セイ、今の状態は話すのつらかったりしないよね？」

フィンは目頭の涙を拭きながら、少し身を乗り出してセイに尋ねた。それで、箸がグラリと傾く。

「ああ、だから危ないって。 問題ないよ、オレのほうは。とりあえず、落とされないようにクレイって子には黙って従ったほうがいいことも理解したし」

「にやはは。うん、それは大正解。クレイは真面目ってというか、細かいってというか、几帳面ってというか、融通がきかないってというか、頭固いつてというか、石頭ってというか……」 どんどん悪評になっていく。仲間だろうに。「ともかく、小意地になったクレイには何言っても無駄だから、しばらくは我慢してて。

まあ、クレイのグチはこのあたりでいいとして。ねえねえ、セイ！ よかつたらセイの話聞かせてくれない？」

目を興味でらんらんと輝かせ、フィンはまた身を乗り出した。

「オレの話？ なんの？」

「何でもいいよ。どこにすんだのか、どんな生活してたのかとか、なんであんなところにいたのかとか」

「……ああ、そういうこと」

ようするに、事情聴取といったところだろう。セイはそれに対して、だまされたとは思わなかった。ただ、少しだけ失望した。

しょうせんフィンにとっても、セイは他種族の侵入者にすぎなか

ったということだ。

「まあ、しかたないか……そのとおりなんだし」

「何が？」

「だから、クレイに頼まれたんだらう？ オレから情報を引き出せ
って」

フィンが、わざわざ近づいてきて頭を叩いた。あまりのとつぴな
行動に目を白黒させるセイに、フィンは心外だというふうに頬を膨
らませる。

「そんなふうに考えてたんだ、セイは。失礼っていうか、頭にくるよ
「違うのか？」

もう一発叩かれた。

「いたって！」

「いまのは天罰で必罰だよ。だいたい、もしそうするなら何気ない
会話からうまく情報を引き出すよ、ボクなら。」

ボクは『調べなければいけないから』っていう義務じゃなくて、『知
りたいから』という意志でセイのことを知りたいの。ボクはまだ他
種族と話したことないからさ、興味があるんだ。だ・か・ら！ 事
情聴取とかじゃなくて、セイのことを聞かせて。OK？」

……今度こそ、セイはフィンに驚かされた。

そして、自分を恥じた。あまりにも理不尽なことがありすぎて卑
屈になっていたのは自分だったんだ。それはクレイだって怒るはず
だ。こんなふうに口をきかれれば、誰だって気分を悪くする。

(これなら、叩かれて当然だ)

「……ごめん、悪かった」

セイは、まっすぐに頭を下げた。

「うん、許してあげよう」

フィンは大仰に頷いて、えらそうにそう言った。

そして、また笑う。そんなフィンは、この世界に頼るものがない
セイには救いに見えた。

さあ、じゃあ変に意地を張るのはそろそろ終わらう。

「ここからは自分らしく、だ。」

「……じゃあさ。ゲーム形式にしようか？」

「ゲーム形式？」

セイの提案に、フィンを可愛く首をかしげた。それにセイは頷く。「そ。ただ質問に答えてるだけじゃつまらないしな。公平じゃないし。」

だから、ゲーム。ルールは簡単、交互に質問をしていくだけ。ただし、聞かれたことには一切ウソはつかないこと」

「……それだけ？」

「簡単に言ってくれるな。けど、けっこう奥が深いんだぞ。」

うまくやれば、相手の情報の裏も読めるだろ。質問のしかたによつては得られる情報に差もでるし。」

ようするに、知略戦だな。受けるか、魔女？」

セイの挑発的な言葉に、フィンはしばらく考えるように目を伏せた後、

「なんだか急に生き生きしだしたね、セイ」

「フィンのおかげだよ。で、どうする？ 逃げる？」

「まさか！ いいね、おもしろい。やろう！」

フィンはニヤリと自信ありげな笑みを浮かべた。セイも、同じ表情を浮かべる。

かくして、セイとフィンの戦いは幕を上げた。

「じゃあ、まずはボクからでいいね？」

「どうぞ。レディーファーストの言葉を知らないほど下種じゃないし」

「れでい？ まあ、いいや。じゃあ、最初の質問。」

セイ、キミはいったい何者？」

一つ目の質問は、セイの予想通りだった。でも、このゲームにおいてその言い方は少し甘い。

「異世界人」

セイはそう答えた。それで、終わりだった。

「……なにそれ？」

「ストップ。次はオレのターンだ」

その言葉にフィンが籌から身を乗り出して、「うわぁ！」落ちそうになって慌てて籌につかまった。

「……大丈夫？」

「大丈夫だよ、っていうかそれはどうでもよくて！ 何でセイのターンになるの？ 今のは説明になってないじゃん！」

それにセイはちつつち、と指を振った。

「こらこら、ルールは二つだけって言っただろ。質問を交互にすることと、ウソをつかないこと。オレはどっちかに違反した？」

「う……」

どうやらフィンも完全に理解したようだ。このゲームの意味を。それは、いかにお互いの手札を温存しつつ相手の手札をいかにオープンにしていくかの情報戦だ。

だからこそ質問も解答も慎重をはかる必要がある、思った以上に頭を使うゲームなのだ。

「……セイ、慣れてるでしょ？」

「ああ。どこぞの部長殿が、この類の遊びが好きだね。

さ、次はオレの番。まずは、オレが今むかっている場所がどんな場所なのか、フィンのわかる限りで説明してくれ」

「……卑怯だ」

「ほら、はやく」

「はいはい！ 今向かってるのは、『魔女の都』って呼ばれるところで、時計塔を中心にして広がる魔女の街。

セイはその街の外れにある『塔』に連れて行かれる予定」

「ふん、『塔』ねえ。で、その『塔』の説明がないけど」

フィンはちつつち、と指を振った。

「到着地点は『塔』でも、ボクらが今とりあえず向かってるのは魔女の都だもん。『塔』なんて行ったことないから、一回戻らないと場所わかんないし。」

だから『塔』について答える義務はないはずだよな?」

「ああ、ないね　と、今の質問に答えたから次はオレのターンだ」
「しまったあ!　とフィンが頭を抱えた。」

「ほら、続き」

「うう……。『塔』は魔女区に進入した多種族や悪いコトした魔女が連れて行かれる監獄……牢屋だよ」

そんな場所に連れて行かれるのか。話をきくと今更ながら、セイは自分のおかれてる立場が最悪だと考えざるをえなかった。

「じゃ、次はこんどこそボクだね」

フィンはそう言つてうーん、としばらくうつなつた後、

「……セイ、なんで森にいたのか、それまでの経緯を教えて」

(へえ……)

セイは感心した。

やっぱりフィンは頭の回転がはやい。もうこのゲームではどうするのか効率がいいのか理解している。

(部長といい勝負できるかもな)

「……そうだね。じゃあ少しばかり長くなるけど」

そう前置きして、セイは今までの大筋を話して聞かせた。もちろん関係のない部長のことやグランスイスのことは省いた。

すべてを説明し終えたセイに、フィンは告げた。

「うそくさい」

「ああ、話しててオレも思った」

丁寧には話せば話すほど絵空事のようにだ。玄関を開けたら異世界につながっていたところなんて、二流ファンタジーもいいところである。

そして何より一番こわいのは、

「セイ、ルール」

「はやぶつてないよ。一応、全部本当」

それがすべて事実であるということだ。

「なんなら、この縄が解けたときに証明になるようなものを見せて

もいいよ。ポケットとかカバンに、きつとこの世界にないようなものたくさんあるし」

フィンはいばらく疑うような眼差しでセイを見ていたが、やがて納得したのか、

「ん〜、まあとりあえずそうしとく。じゃ、次はセイの番だね」
そう促した。

セイはそのテンポのよさを心地よく感じながら、訊ねる。

「じゃあ、質問。魔女区ってさっきから言ってるけど、それはオレが今こんなことになってるのと関係あるのか？」

「あるよ、当たり前じゃん」

フィンは、何を言ってるんだろうというような声をあげた。

「魔女区に入ればつかまるなんて、外でも常識だと思うけど」

「だから、オレはこの世界にきたばかりで常識を知らないんだって」

「あ、そだっけ。」

魔女区には特殊な障壁がツネに張られてるの。それは、簡単に破れるものでもすり抜けるものでもない。

それをどうにかしてまで中に入るってことは、それだけで魔女の国になんらかの害意があるものとして考えられるってわけ」

ゆえに不法侵入者。

元の世界で言うと、パスポートを持たずに入国しようとするのと同じか。でも、そんな正論はセイの神経を刺激した。

（ただそこにいた たった、たったそれだけの理由で？）

何も知らず、何もわからないままつかまって。セイの世界にはセイの法があるように、この世界にはこの世界のルールがある。それはわかる。

でも、納得なんてできなかった。

「……」

何で自分がこんな目にあわなくちゃいけないんだ。

喉まででかかった言葉を、でも結局セイは言わなかった。

言うのは、簡単だろう。

それだけで自己満足にひたれて、気持ちいい。他人のせいにできて
楽だ。

でも、それじゃ意味がない。

何も無い。

何も残らない。

ハッピーエンドには、きっと届かない。

そして何より、きっとその言葉で一番傷つくのは、わざわざその
不法侵入者を気遣って話しかけてきてくれたフィンだ。

それは間違いだと、セイには断言できた。

そう考えると、怒鳴りだしてしまいそうな自分をセイは何とかお
さめることができた。

（クレイもフィンも悪くない。ここで怒鳴って、何が変わるってい
うんだ）

「セイ？ どうしたの？」

「いや、次は何を聞こうかになって考えてただけ。フィン、なかなか
頭いいからね」

覗きこんでくるフィンに、セイはそう笑ってごまかした。

フィンはそれに、怒ったようにまゆをよせた。

「次はボクの番だよ。そんなに余裕かましてると、足元すくってや
るんだから」

「悪い悪い」

「まったく」

でもその表情も、すぐに笑顔に戻る。それは、本当に楽しそうで

（あれ？）

いや、違う。セイはフィンの笑顔を見てそう思った。さっきまで
の、本当に楽しそうな、不幸とは程遠い笑顔とは違う。

影が差す、その表現がぴったりだ。

まるで、粘土細工でつくったような無機質な笑顔。

そんな顔で、フィンは訊く。

「ねえ、セイ。最後にひとつだけ、聞きたいことがあるんだけどいいかな？」

「別にいいけど」

いつものセイならそれをカウントして自分の質問をしていたらう。でも、それが今はできなかった。

フィンは「ありがとう」と小さく頷くと、遠くを　どこを見ているかわからない瞳で、問いた。

「セイ、この世界は美しいって思う？」

その質問には答えられなかった。

ヒュンという音がしたかと思うと、セイの目の前でロープがバラバラに切れたからだ。

「はいっ！」

もちろん、思考なんて追いつかない。

何が起きたかなんてわからない。

遙か下に流れる緑が、どんどん迫ってくる。

風が痛いほどに体を叩く。

ようするに、落ちていた。

「……フィン！」

「わかってる！」

クレイが気付いて、フィンはすでの行動していた。

直滑降でフィンは翔る。

そんなフィンの表情には、困惑と驚きと苦しみが混在していた。

セイは手をのばす。

フィンはぐんぐんとセイに近づく。

死にたくない、ただそれだけだ。

あと少し。

フィンのほづが自由落下より少しはやい。これなら、ギリギリで間に合う。

そう信じる。

こんなところでは死ねない、死ぬわけにはいかない。

(だって)

フィンも同じように手をのばし、それは触れて。

でも、届かなかった。

(2・4) 魔女と簀巻きとバンジージャンプ(後書き)

落ち主人公、と当時だれかに言われました。的をいてると思います。

お気に入り登録してくださったかた、ありがとうございます！
他にも、感想批判などどんどん募集しております！

次回予告2(前書き)

次回予告2

次回予告2

フィン

「……まだやるんだね、この企画」

クレイ

「同感だな。てつきり一発ネタだと思っ

ていたんだが」

グランスイス

「作者が変人だからのお」

フィン

「まあ、気を取り直して！ さて、簀巻

き状態から一変、またまた落ちるハメになったセイ！

はたしてその命運は！ セイはこの世界で生き残ることができるのか！ そして、セイにかせられた運命とは！

次回第三話『最高魔女議会』 who

are you?』ごうご期待！」

グランスイス

「ほお、うまいものじゃな」

クレイ

「まったく……こんなことだけは、人並

み以上にこなすんだからな、お前は」

フィン

「へへへ。もっとほめて」

グランスイス

「ただ、ひとつ問題があるとすると」

フィン

「うん？ 問題？」

クレイ&グランスイス「セイは二話で死んだんじゃないのか？」

フィン

「うわあ、笑えない……」

次回予告2（後書き）

次回予告。

主人公、しょせんそんな扱いです。

地面が迫ってくる。

内臓が浮いているみたいで落ち着かない。あまりの風の強さに、目を開けたままではいるのがつらい。

でも、目を閉じようとは考えない。きっと、一度閉じてしまえば恐怖で二度と開けなくなってしまう。

落ちていく。

空から、まっさかさまだ。この高さで落ちて、助かるなんてことは絶対ないだろう。木があるうがなかるうが、関係ない。このスピードで叩きつけられれば、死ぬ。

墜ちていく。

フィンはまだ間に合わないだろう。

落ちていく。

クレイだって、それは同じ。

落ちていく。

視界が緑で埋め尽くされていく。セイは、不思議と恐怖は感じなかった。

ただ、体中の感覚が鋭敏になっていく。

死ぬ

はためく前髪も、指の間を吹き抜ける風も、体中を襲う風の壁も、バタバタと派手な音を立てる制服も、眼下に迫る光景も、そのすべてを明確に感じ取れる。
自分の未来さえも。

しぬ

「……………」

ただ、感じていた。このままでは助からないことと、どうすれば助かるのかを。

「……………はあ……………」

体は動く。心も動いている。

シヌ

どうするべきか、どうあるべきか。

その答えも、わかる。

シヌ？

あと数秒。それで地面に激突してすべてが終わる。

(それで、いいのか?)

いいわけがない。

だから、望む。自分の願望を、口に出す。

それが、きつと鍵だから。

「オレは……………」

だから、告げた。

「オレは、死にたくない!」

その瞬間、体は

「！」

目を覚まして最初に瞳に映ったのは、暗く薄汚れた石の壁だった。周りを見回すと、同じような壁が三面を覆っていて、一面だけが鉄の格子になっている。部屋はほぼ正方形で、狭くジメジメしていた。ようするに、牢屋だった。

そこでやっとセイは、自分がベッドで寝ていたことに気がついた。いそいで体中を探るも、怪我どころか痛みさえない。

「さっきのは 夢？」

（いや、ちがう）

呟いた言葉を、即座に否定する。

あれは、現実だ。

自分は確かに箒から落ちた。覚えている、フィンが手を伸ばしてそして届かなかったときの表情を。

「でも……ならオレはどうしてこんなところで」

こんなふう生きていられる？

もちろん問いかけに答えるものなどなく、ただ狭い部屋に反響して消えた。

その時、顔にかすかな光がさした。見上げてみると、そこには小さな窓がひとつ。月光をもらす窓は、もちろん格子をされているものの外の様子ぐらいはうかがえそうだ。

セイはベッドから起き上がり窓の近くに行こうとして、

「……………はい？」

ようやく小さな一室に自分以外の生き物がいることに気がついた。ベッドのちょうど横の床の上。セイが足を下ろしたすぐそばで、それは寝息を立てていた。

一見犬のようだった。

でも、絶対に犬ではなかった。

顔はほとんど犬そのもので、真っ白な毛に少しだけ突き出した顎。そしてパタパタと耳を開閉する様子はどこか愛らしい。

楽しい夢でもみているのだろうか、なんだか楽しそうに笑っているのがわかる。

そう、表情がわかるのだ。犬の顔だというのに。

それだけではない。民族衣装っぽい服は半そでとハーフパンツで、そこからのぞく足はもちろん毛だらけで、尻尾もある。でも、それは確実に二足歩行をする生き物だった。

手袋をしている指は五本に分かれているし、足にはしっかりと靴も履いている。それ以前にその骨格はあきらかに四足歩行動物とはかけ離れていた。

「これって……何ですか？」

さすがに今までのこともあって、驚きはしなかった。ただ興味深げに犬の人(?)を見下ろす。

呼吸のたびに上下する体。その寝顔は無邪気で、思わずセイは微笑んでしまった。

「この子が何者にせよ……どうせ寝るならベッドに寝たほうがいいよな。オレが寝てたからこの子は床で寝てるんだろっし」

セイは犬の人の傍らにしゃがみこんで、人差し指で頬をチヨンチヨンとつついた。

「おーい、起きろ」

犬の人は少しだけみじろいたが、起きることはなく少しだけ耳をパタパタさせた。

セイはそれを見て、

「……………」
それを見て、今度は耳をつついた。

ピクピクと、耳が揺れた。

「……………」
もう一度、今度は少し強めにはじいた。

刻みに揺れていて、尻尾はまるまっている。

何というか、わかりやすかった。

でも、なんで怯えられているのかはまったくわからなかった。

「ちよつとまって。話を」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい！ あの、床じゃ冷たいし気を失つてるようだったので、勝手だとは思ってたんですけど、そのあのごめんなさい！」

思い切り振り下ろした頭が、石畳にぶつかってまたニブい音を立てた。「ツーーー！」と頭をおさえる犬の少年に、セイはつい、

「くっ、くくく……」

「へ？」

笑ってしまった。

「あはははははははははは！ すごい、一昔の外国ドラマみたいだ。あゝ、腹痛い」

狭い部屋で大声で笑うセイに、犬の少年はキョトンとした表情を浮かべたまま見上げる。

セイは浮かんだ涙を拭きながら何とか息を整えていった。

「ごめん、笑うのは悪いな」

「い……いえ、そんなことありません。恐縮です！」

そのセリフに、セイはまた吹き出してしまった。

「だゝかゝらゝ、そういうふうにかしこまらなくていいって」

「で、でも！」

「頼むからやめてくれ、このままじゃ笑い死にするから。オレはそこまでかしこまられる様な偉い人間でも、怖い人間でもないよ」

セイはそう言うてから、

「あ、そうだ」

気付いて、すつと頭を下げた。

「ありがとう」

「え、ええ！」

驚く犬の少年に、セイは頭を上げると笑顔でゆっくりと犬の少年

に近づいた。

「さっきのセリフじゃ、ベッドに運んでくれたのは君なんだから？ お礼をまだ言ってるんじゃない？」

「そんな、お礼なんて」

「オレの信条なんだよ。『言葉にしないと、言いたいことは伝わらない』。お礼だって、言葉にしたほうが伝わるしうれしいだろ？ だから、ありがとう」

セイは白い毛並みでフサフサの頭をゆっくりと撫でる。最初はビクリとした犬の少年も、やがて気持ちよさそうに目を細めた。その本当に犬みたいな表情に、セイもなんだかうれしくなってそのまま撫で回す。

やがて犬の少年は尻尾を振り回しながら、犬の少年は不思議そうに呟く。

「不思議な人ですね……えっと」

「セイだよ。みんなそう呼ぶから、それでいい」

「あ、はい。僕はヴァスタです。よろしく願います」

一度深々と頭を下げてから、もう一度同じことを呟いた。

「セイさんは不思議な人です。僕にあんなにちゃんと頭を下げた人なんて見たことありません」

「不思議……ねえ。オレは当然のことだと思うけど。にしても『おもしろい』なら何回か言われたけど『不思議』って言われると、ちよつと照れるな」

「おもしろい……確かに、そっちのほうが正しいかもしれません。

あ、ごめんなさい」

「気にするな、もう慣れた」

その言葉にやつとヴァスタは笑顔を見せた。

(これでやつと普通に話が聞けそうだ……)

セイは自分の打算的な考え方に少しだけ嫌悪を抱きながら、もう一度頭を撫でた後ベッドに座った。

「ほら、ヴァスタも座ったら？」

ベッドの左のほうをポンポンとたたく。

「え、でも」

「聞きたいこともあるし、話したいこともあるんだ。座ってくれるところらしい」

ヴァスタは笑顔を向けられて、しばらく悩んだ後に大人しく腰を落とした。

「で、その……聞きたいことって何ですか？」

「ああ、オレがここに来たときのことなんだけど。わかるか？」

「あ、はい。ちょうどあの窓から夕明かりが差し込んでいた頃だと思えます。」

突然番人の人が気絶したセイさんをここに投げ込んだんです。番人の魔女はそのまま何も言わず出て言っちゃったんで事情はわからなかったんですけど、とりあえず意識がなかったので慌ててベッドに運んだんです」

そしてそのまま起きなくて、ヴァスタは床で寝たのだろう。改めてお礼を言おうとして、セイはやめた。きっとヴァスタはまた困るだけだろうし、それに今は一刻も早く現状を把握したい。

「ヴァスタ、オレが来たとき何か持ってなかったか？ 肩にかけるカバンなんだけど」

ヴァスタは横に首を振った。

「いいえ、持ってませんでした。多分……ここにはいる前に」

「とりあげられた、か」

なら、おそらく中身も魔女たちの手に渡っているだろう。

「それは、賭けだな」

この世界のものとは違う いや、少なくともおかしいと思えてもらえればまだどうにかできるチャンスがあるかもしれない。でも、ただのゴミと見られたら一生このままの可能性もある。

「せめて携帯があればと思ったけど、ご丁寧にしつかり抜き取ってるし」

とりあえず、わかったことはひとつ。

今は何もできないという悲しい事実だけだった。

「あゝ、なんかどんどん物語に流されていつてるぞ……」

セイがベッドに倒れこむと、ギシツときしむ音が響いた。

正直、セイはもう何も考えずに眠ってしまったかった。事態が急で、無茶苦茶すぎる。整理しろなんていうのはもちろん無茶で、理解ももう追いついてきていなかった。

「セイさん、ひとつだけ聞いていいですか？」

混乱の海におぼれそうなセイに、ヴァスタがそう遠慮しながら言った。セイはマイナスに向かっていた思考を止め、起き上がる。

「いいよ、オレで答えられることでいいなら」

「あの、じゃあ。……セイさんは、なんで捕まっちゃったんですか？」

セイはその答えを、すぐに返すことはできなかった。言ってしまうえば、巻き込んでしまう可能性がある。

知らない自分をわざわざベッドに寝かせてくれて、自分は床で寝るような優しすぎるヴァスタを巻き込みたくはなかった。

でも、ウソもまたつきたくなかった。だから、

「魔女区に不法侵入して見つかった」

ウソにならない程度にごまかしてみた。

「ええ！？ 何でまたそんな無茶苦茶なことを！」

「まあ、色々ね。あはは」

すっかり信じたヴァスタに笑ってごまかしたセイは、逆に訊ねる。「そういうヴァスタは何でこんなところにいるんだ？ 悪さをするようには見えないけど」

何気なくした問いに、しかしヴァスタの顔と尻尾が固まった。心なしかうつむきふせたその瞳を見れば、話しにくいことなのは明らかだった。

セイは思わず額をたたいていた。

(また地雷を踏んだのかオレは)

いくら精神的余裕がないからといっても、あまりにらしくない。

誰も傷つかないように、傷つけないように生きるのがセイという人間の生き様だつていうのに。

「あゝ、ヴァスタ。答えたくないなら答えなくても」

「僕は元々色々な民族の集まる小さな村に住んでたんです」

ヴァスタはそう言つて、小さく笑つた。それは、見ているこつちがつらくなる微笑みだつた。

「僕は男のクセに狩りが苦手で。血を見るのがキライで、何かが傷つくのがキライで、いつも女仕事ばかり手伝つてました。それでも楽しかったです。親は死んでしまつたけど、仲間がいましたから」
でも、とヴァスタは続ける。

「ある日、薪拾いをしていたら魔女が襲つてきて。気がついたときには、いつのまにか無理やり使い魔つていうのになつてて」

その内容を、ヴァスタは話そうとはしなかつた。そしてセイも問い詰めようとはしない。

「でも、しばらくすると何だか結局用済みになつてしまつて。もういらぬからつて言われてここに」

「つれてこられたつて言うのか！ 勝手すぎるだろ、そんなの！」
おさえることができなかった。ヴァスタに怒鳴つてもどうにもならないのを理解していながら、止めることができなかった。

ようするに、ヴァスタは一方的に自由を奪われて生活を奪われていき方を奪われて、それだけじゃなく勝手に用済みにしてこんなところに閉じ込めているということだ。

「そんなの間違つてるなんて次元じゃない……！ なんてそんなことがまかり通つてるんだ！ どうなつてる、この世界は！」

「落ち着いてくださいセイさん。……ごめんなさい」

「なんでお前が謝るんだよ。……いや、悪い。オレのせいだない口調だけは落ち着かせたが、セイの中では誰に対してかもわからない怒りが泡を立てて沸騰していた。

どこかで、幻想を抱いていた。異世界には、幸せな物語があふれていると。

何もない現実とは違う何かがあふれていると。

(それが、どうだ?)

目の前の少年は、ただ策略され略奪され強奪され。それが当然のようにあることが、許せなかった。

「やっぱり変な人です、セイさんは」

ヴァスタはそう言って、今度は本当に楽しそうに笑った。

「そこまで怒るなんて思いませんでした。ありがとうございます」

お礼を言われて、もう本当にセイは何もいえなくなった。だから、

「ヴァスタ、こっちこい」

無理やりヴァスタを引っ張って、抱き寄せた。ヴァスタの小さな体は、セイの腕の中にすっぽりとおさまった。

「え、え? セイさん何を」

「おまえはさ、やさしすぎるよ」

ヴァスタの頭をゆっくりとなでる。

ヴァスタは、不器用なくらいやさしい。生きることさえ、難しくしてしまうくらい。

他人の傷に敏感で、自分以外の痛みが他人事には思えない。

はつきり言って、生きていくうえでこれほどまでに面倒なことはないはずだ。他人の痛みを自分の痛みに変換してしまう。

少し話ただけで、ここまで話したのに捕まえた魔女に対する恨み言の一つも出てこないことで、それがいやというほど感じ取れた。

その生き方は、あまりにもおろかだと思う。でも、

「かっこいいなあ、ヴァスタは」

セイは思ったままを口にした。ヴァスタはそれに驚いたように一瞬だけピクリとして、

「そんなこと言われたのは初めてです」

照れたように、小さくそう言った。

「そりゃ、周りを見る目がなかったな。お前はかっこいいよ、少しうらやましい」

セイはヴァスタの頭をなでながら、笑ってそう言った。

これで、ヴァスタが救われるとは思わない。ただ、少しだけでも
気持ちが悪くなれば、いやなことを忘れてくれればいいと思った。
しかしそれは

「才前は、『鍵』ノ持ち主力？」

その一言で、打ち破られた。

「！」「ヒッ！」

振り向いたその先。そこには

くたびれた人形が、ロウソクの明かりで揺らめきながら立っ
ていた。

第三話 『最高魔女議会』

Who are you? 『

3-1

第三話です。

うん、話がすすまないねえw

(3-2) セイとヴァストと不気味な人形

それは、心底不気味な人形だった。見た目は小さな女の子の人形だが、毛系の髪の毛はところどころほつれ、右目のボタンはほとんど取れかけている。着ている赤いワンピースも泥まみれのツギハギだらけで、顔や足からは綿がはみ出していた。

そして、しっかりと立っていた。

まるで紐のないマリオネットのように、人形はその弱そうな布の足でまっすぐに二つの足で立っている。

それだけでも不気味だというのに、ロウソクのぼんやりとした光に映し出されれば、恐怖以外の感情などわきようがない。

「才前は、カギの持ち主力？」

人形は耳障りな甲高い声でそう言った。糸でつくられた口は当り前に動かなかつたが、それでも声はあきらかに人形から響いてくる。セイは動くこともできずに、人形を見つめるしかなかった。

(何なんだ、これ?)

耳を閉じて尻尾を丸め震えるヴァスタを背中の中へ回しながら、セイは思考する。

まず、これが魔法の仕業であることは間違いない。こんな怪奇現象、魔法以外に起こしようがない。

そして『カギ』 それにも、確かに覚えはある。魔法からもらったアレのことだとすると、おもしろいほど合点がいく。

でも、同時に合点がいかないこともあった。

(なんで、こんな回りくどいことをしなくちゃならない?)

セイは牢屋の中だ。自由なんてもちろんないし、攻撃なんてできるはずがない。それにここが他種族や悪い魔法を閉じ込める場所なら、そういう類を制するための仕掛けがあるはずだ。

つまり、主導権は完全にこちらにある。

なら、直接尋問でも拷問でもすればいいだけ話だ。わざわざ人形

を介す必要も、意味もない。

「なあ、ヴァスタ」

人形には聞こえないように、小さな声でセイは背中のヴァスタに話しかけた。

「は、はい。何ですか？」

「あの人形に見覚えは？」

「い……いえ。あんなおっかないの、見たことありません」

つまり、あれがこの世界独特の尋問方法ではないということ。

なら、あれは……

「才前は、カギの持ち主力？」

「質問をするんなら、正体ぐらい明かしたらどうだ？ お前は、何者だ。顔ぐらい見せろよ」

虚勢を張りながらなんとか紡いだセイの言葉に、

「……………」

人形を沈黙した。

それが、セイの予想を確信に変えた。

「できないよな？ できるはずがない。だって、アンタは アンタたちかもしれないけど、オレの持っているカギを悪用したいんだから。正体を知られて、面倒なことになったら困るからな」

「どういうことですか？」

ヴァスタがおっかなびっくり尋ねてくる。セイは人形に聞こえるようにわざと声を大きくして答えた。

「簡単なことだ、ヴァスタ。つまりさつきからこうして人形を操ってるのは、悪い魔女ってことさ」

ヴァスタのようなことが魔女の世界では普通のようなだから、一概に『悪い』とは言えないかもしれないが、少なくともこの国の考え方に逆らっている魔女であることは確かだ。それに加え、セイはさつきからずっと人形がまとう言葉にできない嫌な雰囲気吐き気をこらえていた。

まるで、敵意や害意を凝縮したような威圧感と圧迫感。そんなも

のぶつけてくる何かに心を許すほど、セイは平和ボケしていない。
「カギっていったな、アンタ。」

仮に、オレがそのカギを持っているとしよう。それで、アンタはどうしたいんだ。カギを使って、何をするつもりだ」

「答えると思うか」

「答えてくれたら、カギのことを考えてもいい」

「…… 我々八、この世界に生キル権利ヲ得る。ソノためには、カギが必要」

答えた。なかなか現金な人形だ。

けど、意味がわからない。

わかるはずはない。そもそもこの世界については無知もいいるだし。ただ、

(ヤバイことにまきこまれてるっばいな、これ)

世界だとか、生きる権利とか、正直言葉が重過ぎる。

どこの世界系小説だ。

だいたい

「わからないな、そんなものわざわざ手に入れる必要もなく当然にあるものだろうに。」

なんでわざわざこんな回りくどい、危険なことをしてまでそれを求め」

「貴様に何がわかる！ 黙レ、下等なニンゲンが !」

耳に刺さる甲高い声で、人形は突然うなった。

セイの背中にゾクリと寒気を走る。

ああ、わかる。これは恐怖だ。恐れだ。

オレは、こわいと感じた。

こんなちっぽけな、人形がたまらなく怖いと。こんな人形と、一秒だって対峙したくない。

逃げたほうが、絶対にいい。

しかし、そんな考えとは裏腹に足はすくんで、体が金縛りを受けたようにピクリとも動けない。

蛇に睨まれた蛙とはこういうことをいうのだろうか。

(くそ、そのくせ思考だけは逆にムダに冴え渡ってる)

なら考える。恐怖を理性と知性と思考で押さえ込め。そもそも恐怖を感じている余裕なんて、今はない。

動かないからだのかわりに、頭をフルスロットまで使い込め。

そもそも、なぜ人形は鍵を持っていると知っているのか。牢屋に閉じ込められている者に会いに来るのは、危険がありすぎる。ある程度の確信がなければ、ここまで大胆には動けないはずだ。

「モウいい！ カギを渡せ！」

「待てよ、まだ質問は終わってない。

……アンタら、どうしてオレがカギを持っていると考えた」

「……………何の力もない貴様八、異界ヨリこの地ニ来た。ソレにはカギが必要なコトぐらい、我らが知らナイト思っタか」

(いや、オレは知らなかつたんだけどね)

つまり、異界からこちらに来たということは、必然的にカギを持っていることになる。

「って、ちよつと待て。なら、オレが元の世界に戻るには、カギが必要ってことにならないか？」

異界から来るのにカギが必要だというのなら、異界へ行くのにもまた同等と考えるのが筋だ。

「どうなんだ」

「……………カギを、ワタセ」

沈黙した、わずかだが。

つまりそういうことだ。

その言葉で、セイの中ですつと何かがカチリとはまった。

そんな感覚がした。

ふつきれた 言葉にするとそんな感じだ。

「OK。最後の質問だ。アンタら、何者だ」
その問いに、人形は答える。

「ワレらは『闇の魔女』。スベテを、取り戻すモノ」

「そうか」

セイはそう言って頷いた。

そして、決めた。

「ありがとう、今のとこアンタらに聞きたかったことは全部聞いた
だから、オレも正直にすべて話そう」

セイさん？ と不思議そうに見上げるヴァスタ。そして、ボタンの目でじつと見上げている人形。

セイはゆっくりと一つ深呼吸する。恐怖で動かなかった体は、もうちゃんと意思どおりに動いてくれる。

（あくまで、『闇』とかいう連中は自分たちの欲望のために、自分勝手のためにオレからカギを奪おうとしている。そうしたら、オレが帰れないことを承知して）

まわりの視線が一身に受けながら、セイは

「実はオレ、カギ持ってない。ごめん、嘘ついた」

けるりと言った。

「……ナ？」

「はいいいいいいい？」

ああ、なんてお決まりのリアクションだろう。ボケ冥利につきる。

「いや、ウソはついてないか。オレは一度も自分がカギを持つてる
なんて言っていないし。」

こっちに来るときに実はもう一人いたんだけどな、そいつが元の世界に戻るときにカギと一緒に持っていったんだ。

なので残念だけど、オレの手元にカギはありません。ご愁傷さま
ヴァスタも人形も言葉にならないようだった。

そのまま続ける。

「……まあ、仮に持っていたとしても、お前らには絶対に渡さないけど。オレが帰るための唯一の手がかりってこともあるし」

セイは、人形を睨み返した。

そこにもう、恐怖の色はない。ただ、すっきりとした表情で、

「オレは、アンタみたいな力でものを言わすやり方が、だいつキライだから」

セイもまた、自分勝手を押し通すことを決断した。

「正直、頭にきてるんだ。どいつもこいつもどいつもこいつも、人をなんだと思ってるんだ？ 人権無視しすぎなんだよ。オレは聖者じゃないんでな。自分とか、自分の大切なものが大事で、その他は二の次なんだよ。アンタらが我が侬でオレを侵害しようとするように、オレはオレの我が侬でアンタたちと敵対する。」

下等なニンゲン？ なめるなよ、クソ魔女。事の解決法を暴力以外に知らないアンタは、下等どころかランク外だ。うざい、視界に入るな」

言いたいことを言い切った。少し言いすぎなくらいに。

ヴァスタは、ひたすら不思議そうのこちらを見上げている。そして人形は、

「言いたいコトは、ソレで終わりだな？」

先ほどとは比べ物にならない ああ、これを殺気というのかもしれない。向けられたのは初めてだ 雰囲気纏う。

もう聞くことはない。

もう必要がない。

もう生きている意味はない。

そう言いたげだった。

(殺される……)

ここが檻の中だろうがなんだろうが関係ない。

殺される、その明確な自分の未来をセイは本能的に理解した。

対抗手段は あるはずない。

セイは、それでも人形をにらみつけたまま、

避けようと考えたが、体がついていかない。
動けない。

さつきとは比にすらならない。今度はしゃべるところか、思考さえ回らない。

セイはただ、自分に向かってくる『闇』の鞭を視界に捉え、死を
実感するしかなかった。

それが、人形ごと炎に包まれるまでは。

それは、まさに一瞬のことだった。

セイの目の前で、ヴァスタの目の前で、火の気なんてまったくな
い薄ら寒い牢屋で　人形を、『闇』色の炎が包んでいた。

燃える。

燃える。

燃え尽くす。

布と毛糸できた人形は、景気よく燃えている。

目の前で起こっていることが、まったく頭で整理できなかった。

セイはただ呆然と焼け踊る人形を見つめ、

「ギャアア！　なぜ、なぜだ！　誰が、こんな！　ワタシは、わたしハ！」

それは、まるで人間が焼かれているようで目をそらした。

それから十秒とかからないうちに、人形の断末魔は支離滅裂にな
っていき、ついに闇色の炎は人形を燃やし尽くした。

布どころか木製だったボタンまでもこの世界から完全に消滅させ
て、そして炎も一緒に消えた。

後に残ったのは、わずかに黒ずんだ地面だけ。

まるで、人形など最初からいなかったかのようだった。

「助かった……………のか？」

実感はまるでないが、そういうことだろう。

心臓がすごいいきおいで脈打っているのを除けば、怪我もしてい

ないし体にも特に異常はない。

「た……たすかったあゝ。マジで、今回は死ぬかと思っ、いや死んだ」

精神的に。

まあ、そのかわり得るものもそれなりにあつたわけだが。

「あ、そうだ。ヴァスタ、だいじよ」

背中の方へと振り向くと、そこで犬顔の少年は気絶していた。セイに全体重を預けるかたちで、きつちり完璧に気を失っている。多分、人形やら闇の鞭でマックスになった緊張が、それが燃え上がったことで許容量を超えたのだろう。

セイはゆっくりとヴァスタをベッドに寝かせると、唯一光の漏れる小さな小窓から空を見上げた。

そこには満月には少し足りない、ふつくらとした青白い月がある。それを眺めながら、

「めんどくさくなってきたなあ、これは」
今日一日の感想を、一言で締めくくった。

(3・2) セイとヴァストと不気味な人形(後書き)

セイ、きれるといろいろ行き過ぎちゃった子です。

この前気がつきましたが、二人ほどお気に入り登録してくれたよ
うで。

この場をかりてありがとうございます。

(3-3) セイと牢屋とお客人

「めんどくさくなってきたなあ、これは」

今日一日の感想を、一言で締めくくった。

いや、締めくくれると思っていた。

そう思うのも当然だ。

へんな魔女を名乗る女性から『鍵』を渡されて。

家の扉から異世界に飛ばされて。

森の妖精(?)のグランスイスに出会ってその力をまざまざと見せ付けられ。

見習い魔女のクレイとフィンに出会って魔法をかけられ。

それでいつの間にかやら牢屋の中で寝ていて、そこで犬のような少年ヴァスタに出会って。

そして、『闇』と名乗る殺気を帯びた人形に出会って殺されかけて。

いろんな意味で、初めて……それも何度も死ぬ思いをして。

この数時間で、人生観がガラリと変わる出来事が起こりすぎた。

だから、どこかで勝手に信じていたのかもめない。

今日はもうこれで終わりだ、なんて甘すぎる目算を。

ヴァスタをベッドに寝かしつけた後、セイはくたびれた毛布を一枚とって、ベッドに寄りかかるようにして目を閉じた。

正直、疲れきっていた。

こうするだけで、体は精神も休息を求めているのがわかる。

(もう何か考えるのも全部明日にしよう……疲れてたら、思考もマインスになるばかりだし)

幸いこの世界の気候は春に近いようで、制服と毛布があれば十分寒さをしのぐことはできそうだ。

セイは赴くままに、ゆつくりと意識が落ちてゆく心地よさを感じて、そのまま

「……」

閉じていた目を、バチリと目を開いた。

ゆつくりと檻の外　ちょうど人形が立っていたあたりに目線だけ動かす。

（何か、いるな）

かすかな気配を、確かに感じた。

人形の胸焼けがするほどの圧迫感を感じていたからだろうか、五感が怖いぐらいに鋭くなっているようだ。

そうでなければ、微かな気配には気付かなかっただろう。

（今度は何なんだ、いったい。っていうか、もう勘弁してほしいんですけど……）

毛布をゆつくりと床に置いて、身構える。人形のこともある、油断はできない。

気配は、どんどんこちらに近づいてくる。その動きに、迷いはなかった。

まっすぐにこちらを目指している。

「……！」

息が荒くなりそうなのを、何とか制す。

慌てるな。クールになれ。

（最悪でも、後ろで気持ちよさそうに寝ているヴァスタは守りきらないと）

拳を、ぎゅつと握る。

それで、どうなるということもない。檻の中にいる以上、こちらからの攻撃はできないだろうし、そもそも勝てるとも思えない。

でも、対峙する決意をするには十分だった。

気配はもうすぐそこにある。

そして、ロウソクの光が揺らめき、地面が焦げたその場所で。

セイが刺すような目で待ち構える中、それは悠然と現れた。

暗闇に、真つ赤な目が輝いた。

小さな体躯は真つ白な毛並みに覆われていて、見た目は美しい。手足はマツチ棒ほどの細さしかなく、しっぽがひよろりと長いのが特徴的だ。

それは、真紅の瞳でこちらをじっと観察しているようだった。

「……………」

セイは、息を呑む。

その、漫画なんかでは猫に追いかけられるのをよく見るソレは、「ネズミなのでした、まる」

言った途端、脱力した。ロウソクに照らされたのは、真つ白なつややかな毛並みをもったネズミだった。

それ以上でも、それ以下でもなかった。

「ナイーブになりすぎてるのかな。……ヴァスタが寝ててよかった」
見られていたら、恥ずかしくていたたまれなかっただろう。

「まあ……かつこ悪いことには微塵も変わりがないわけですが」
あれだけ身構えた自分が馬鹿みただった。いや、ここは何もなかったことを喜ぶべきなのだろうか。

石畳の上には、白いネズミが小首をかしげてこつちを落ち着きな
く見上げていた。その姿は、さっきの人形と対比するとひどく愛らしくて、思わず微笑みをこぼしてしまうほどだ。

白ネズミは恐れることを知らないのか、はたまた人間に慣れているのか舐めているのか、こちらにチヨロチヨロ駆け寄ってくる。

セイは何となく手を出して、チチチチとネズミを誘ってみた。

するとネズミはセイの手に導かれるように寄ってきて、セイの手に自分の前足を置いた。

「ははは、食べるものは何も持ってないんだ、悪いけど」

セイは白ネズミの頭を指でグリグリなでながらネズミに話しかけた。

「しかしお前ものん気なやつだな。それとも、わざわざこんなところに来るなんてただの変わり者か？」

(……何やってんだ、オレは)

自分の行為にあきれながら、セイは白ネズミの背中をゆっくりとなでる。白ネズミは気持ちよさそうに背を伸ばして、

「む、それはひどくないかな？　せっかく心配して見に来てあげたのに」

ちよつと不服そうに返事をした。

セイの思考が、静止した。

しばらくして、

「おおーい、聞こえてる？　っていうか聞いている？」

「……………」

やっぱり停止したままだった。

それからもうしばらくして、セイはまだうまく働いてくれない頭で、まじまじと目の前の白いネズミを凝視する。

「やあ、体のほうは大丈夫だった、セイ？」

今度はネズミに名前を呼ばれた。

(名前？)

それで、気付いた。

この世界でセイの名前を知っているのはごく一部で、その中でこんな陽気で無邪気な、敵愾心を起こすことすら馬鹿らしくなってしまう声の持ち主は一人しかいない。

「まさか、フィン？」

「せいかい。五時間ぶりくらいかな、セイ」

「あ……ああ、それくらいかな。でも、どうしたんだ。なんでこんなところに……いや、その前にその姿は？」

「質問が多いにや」。ちなみに答えるとセイに会いたくて、セイに言わなきゃいけないことがあって、そのために来たの。で、この姿はっていうと……そうだね、ちよつど効き目の切れる時間だし見てて」

そう言つと、白ネズミ(フィン)はセイの手から少し距離をとって伏せた。

セイが訝しそうに見ていると、急にネズミの体が一回り大きくなつたように見えた。

「はい？」

目の錯覚だろうか。

セイが目をこすつてもう一度ネズミを見てみると、変化は顕著になつていた。

ネズミが、どんどん黒くなっていく。

それだけではない。形はもうネズミとは呼べなくなつていた。

「え、うわ。ちょ、はい？」

セイは言葉になつていない言葉を発していた。

まるで最新のCG技術の映画の世界に入ってしまったみたいだつた。

白ネズミだつたそれは、質量も色も体積も完全無視して少女の姿へと転じた。

時間にして数十秒ほど。

それが、目の前で起こつた奇跡 いや、魔法だつた。

「これで答えは揃い踏みかな？」

「……ああ。模範的な解答ありがとう。で、それ何？ やっぱりと
いうか、当たり前前だと思っけど魔法？」

「正しくは魔法薬。正式名称は……忘れちゃつたけど、ボクは変身薬と呼んでる。効能は自分の思い浮かべたものに三十分間姿だけを変えられる、っていう便利品なのさ！」

「ふうん、服や持ち物ごと変身できるのか」

確かに便利だ。確かに、小説や漫画みたいに変身するたびに服や持ち物を置いていかなければいけないのは非効率この上ない。

（箒もそうだつたけど、この世界の魔法はちゃんと考えられてるなあ）

ネズミから人間の姿になつたフィンは、出会つたときと同じ黒い帽子とローブを身に着けていた。唯一違うのは、肩に大きい麻色のカバンをかけていることぐらいだ。

フィンはいしゃがんだ体勢でセイの顔を上たまま、ニツコリと笑いかけた。

「改めてこんばんは、セイ。」

「この世界はどんな感じかな？」

「快適すぎて涙が出るね。惜しむらくは、ベッドがふたつないことと、月見のためのツマミがないことかな」

「それは結構。それだけ口が回るってことは、意外に混乱してない？」

「いや、逆。混乱しすぎて突き抜けた。もう、何が起きても驚かない」

「その割に、さっきボクがネズミから変身したのには驚いてたよね？」

「訂正。驚かない……と思っていた」

お互い、声が外に漏れないように小さく笑いあった。

ひとしきり笑った後、フィンは安心したように小さく一つ息を吐いた。

「でも、本当に安心したよ。あの後クレイったら、気絶してるの面白いことに有無を言わずここに連行するんだもん。あ、これ。

パンと水。お腹すかしてるんじゃないかと思って」

「ありがとう。まあ、元からそれが目的だったんだから仕方ないだろ。クレイはオレが嫌いみたいだし」

クロワッサン二つと瓶に入った水を受け取りながら、セイは自分を荷物のように運ぶクレイの姿を想像して、少し 本当に少しだけ、胸がムカムカした。その光景があまりにも簡単に頭に浮かんだからことと、さらにさっき聞いたヴァスタの扱いもあって、クレイが自分を軽視した目つきも一緒に思い浮かべてしまったからだ。

どうやら、それが表情に出ていたらしい。フィンが、セイを覗き込むように 少しでも不安そうに見上げてきた。

「セイ？」

「いや、何でもない。」

それより、さつきオレに用と話したいことがあるって言ったよな」
本当はもう少し小粋な会話を楽しみたかったが、そこまでの余裕はないだろう。牢である以上、見回りぐらいはあるはずだ。

フィンはうんと頷いて、一度立ち上がったかと思うと、

「セイ、ごめん」

腰を九十度おって、頭を下げた。

セイには、その行動が何を指すかわからなかった。ただ、自分が女の子に頭を下げられているという見た目にあまりよくない構図が展開されていることは理解できた。

「ちょ、ちよつとフィン？ 頭を下げられる理由が全然思いつかないんだけど」

それでもフィンは頭を上げない。そして、居心地は悪化してゆく。「フィンさ〜ん。その、すぐく居心地が悪いんで頭を上げてほしいんですけど」

「ごめん」

「いや、だから……ごめんなさい、顔を上げてもらえませんか、姫」

変な口調で何故か謝るセイに、フィンは少しだけ頭を上げて、「途中から、こうやってたらセイがどんな対応するか興味もつちやった」

「うん、そのまま一晩中謝り続ける」

「ボクはそれでもかまわないよ？」

「ごめん、やつぱりやめてください」

フィンは「しょうがないなあ」と言つてニヤハハと笑った。

セイは思った。フィンには、口げんかでは二度と敵わないだろうと。

(まあ、それをちゃっかり楽しんでるオレもいるんだけどね)

「じゃ、オレで楽しんだところで本題に入ってくれ。オレで遊ぶためにここにきたわけじゃないだろ」

「当たり前だよ。ボクもそんなに暇じゃないもん。悩みがベッドとつ

まみのことしかない人とは違うんだから

「さすが乙女。多感なお年頃だな」

「ダランとした誰かさんとはちがうってことさ」

ふふん、と勝ち誇るフィン。

楽しいことこの上ないが、話が微塵も進まない。

「っていつか、わざと話をそらしてるな。……けっこつやばいのか？ オレ」

「うん、実は」

そう言うと、フィンはベッドに腰掛けようとする。その様子から、長い話になりそうなのがセイにもわかった。

「あ、ちよつと待て。話すならこっちにきてくれ、ヴァスタが起きる」

「ヴァスタ？ ああ、このロアリタの子？」

「ああ、オレの命の恩人だ。優しいやつだから、巻き込んだりしたくないんだよ」

「……優しいね、セイは。わかった」

フィンは頷いて、セイが地面に敷いた毛布の上にちよこんと座った。

セイも、その正面に座る。

フィンは何度か意を決したように頷くと、

「結論から言わせてもらおうとね」

「ああ」

「セイ、一生ここから出られないかも」

とんでもないことを口にした。

「……はい？」

イマ、ナンテイイマシタ？

「一生、この牢屋から出られないかもしれない」

「……誰が？」

「セイが」

「どこから？」

「この牢から」

「どうなるって?」

「一生出られない」

「……誰が?」

「セイが」

「どこから?」

「この牢から」

「どうなるって?」

「一生出られない」

「……誰が?」

「セイが」

「どこから?」

「このろ……って会話がループしてるよ!」

フィンが止めなければ、その無駄なループはもっと回っていただろう。

それほどに、セイはその事実が理解できなかった。
したくなかった。

(そんな絶望……つきつけられて、オレにどうしろっていうんだ?)
「どうしてだ?」

セイには、そう訊ねることしかできなかった。

「一生出られ……え、あ。どうして、か」フィンが聞き間違えをし
たらしく、一度

咳払いをして「セイ、結界の話は覚えてる?」

そう問いかけた。

「? けっかい、結界? ……ああ、あれか」

フィンと空で話したことを思い出して、セイは頷いた。

それは、魔女の壁。魔女の境界。

外界を隔て、悪意あるもの、力在るもの、害のあるものを受け付
けない絶対領域の壁。

やぶることも、すり抜けることも容易ではない、と言っていたは

ずだ。

「あの結界にはね、探知の魔法も使われてるんだ。結界に誰かが干渉しようとするれば、魔女の中心の人たちにすぐにわかるようになってるの」

「ふうん、隔離と察知、それに警報の役割も兼ねてるのか。とことんよくできてるな」

「で、そこが問題なの。セイのことを報告した後、魔女のえらい人たちの間では大騒動だったみたい。最初はみんな、セイはただの侵入者だと思ってたから」

「……どういうことだ？」

どうしてそれが魔女が上へ下へと大騒動になるのだろうか。

フィン是指を立てると、セイの目の前に示す。

「よく考えてみて。ただ侵入しただけなら、どうがんばっても結界に触らなきゃいけない。そして結界に触るってことは、魔女に知られるってことなんだ」

「……そうか」それだけヒントを出されれば、わかる。「オレは別の世界から直接結界の内側に落ちたんだから、本来あるはずの結界を破った痕跡も、探知の魔法ってやつもかからない」

大正解、とセイはパチパチと手を打った。

「最初は結界に異常が起きたんじゃないかって調査隊が調査したんだけど」

「異常はないだろうな。オレは結界に触れてさえいないどころか、その存在さえ知らなかったんだからな」

「うん。そうすると、セイ自体になにか問題があることになる。」

上は焦ってるよ。セイが結界に感づかれないように通り抜ける術を知ってるんじゃないのかとか、魔法を完全に無効化するんじゃないかとかって」

魔女にとつて、それは笑い事ではすまないのだろう。

魔女の結界は、言うなれば魔女最大の盾だ。

自分たちを守ってきた、そしてこれからも守り続けてくれると信

じていた最強の楯。

それに欠陥があったと知れば、平常ではいられないだろう。過剰表現でもなんでもなく、国を左右する問題になりかねないのだから「大変なことになってるんだな」

「他人事みたいに言ってるけど、セイのことなんだよ？」

「……そう言われてもなあ」

そんな大きな問題の渦中に自分がいることを、セイはまだ全然実感できていなかった。

「で、そのせいでオレがこの牢屋に一生いることになる……と？」

「まだ可能性だけだね。」

こんな言い方いやだけど、危険人物を放っておくほど魔女は馬鹿じゃない」

危険……そんな単純な言葉が、胸に刺さる。フィンも、そう思っているのだろうか。

「でも、さ。クレイがオレのことを報告したなら、オレが別の世界から来たことも知ってるんじゃないのか？ 持ち物見れば、信憑性があると思うんだけど」

「『異界から来た』っていうこと自体が限りなく嘘くさいんだよ。そんな魔法があるなんて、ボクも見たことはおろか成功したって聞いたこともないもん。」

信じてるのは、今のところ一部の偉い人とボクぐらいじゃないかな」

「……なら、今のオレはその一部の偉い人に期待するしかないのか」
あまりにも、すぐるには小さすぎる期待と重く胃に押し掛かる不安に、セイはひとつため息をつく。

目の前には、闇しか見えないような気がした。

そしてその闇は、どこまでもしつこくまとわりついているようだった。

そんなセイを見て、フィンはポツリと

「ごめん」

少しうつむいて、呟いた。

セイは驚いてフィンをうかがう。

泣いているだろうかと不安になったが、顔を上げたフィンは真剣にこっちを見返していた。

その表情に、息が詰まった。

「さつきは変な風にごまかしちゃったけど、謝りたかったのは本当なんだ。

……ごめん。大変なことに巻き込んだみたい。あの時、ボクらが逃がしてあげてればよかった。そうすれば、セイはこんな不安を味わわずにすんだんだよね。

本当に、ごめん」

彼女はもう一度深く、本当に深く頭を下げた。

「……」

ああ、もう。

どうして、この世界の人は、こんなやつらばかりなんだろう。

セイは、嘆息とともに思った。

ヴアスタも、フィンも優しすぎる。

巻き込んだのも、迷惑をかけたのもセイだ。

セイが異界に来たことで、クレイとフィンは少なくともなんらかの被害をこうむったはずだ。

フィンにいたっては、危険を顧みずにここまで来て、教えてもらっていないかったらどうすることを調べて教えてくれた。

それを感謝こそすれ、どうして謝らなければならないのだろう。謝るべきは、こっちははずなのに。

「まったく、恨ませてくれないなんて……とんだ反則だ」

「うん？ 何だって？」

「いや、フィンがそうやって謝るのは何だか似合わないなあと思っ
て」

セイは笑った。フィンが不安や責任なんて感じないように。自分

自身が希望を信じられるように。

何より、心配してくれるフィンの気持ちがあれしくて。

フィンはその笑顔に少しだけビクリしたような顔をして、そしてその後口をとがらせる。

「失礼だなあ、セイは。まだ会って数時間も経ってないのに、ボクの何がわかるっていうのかな」

「少なくとも他人で遊ぶのが大好きで、人が驚いたり唾然としたりするのを楽しむ人種であることは確かだ」

簡単にいえば、部長と同じタイプだ。フィンはそれに「うん」とうなづた。反論が思い浮かばないらしい。

セイはその様子にまた笑った。

「それに、謝ってもらわなければならないさ。フィンもクレイもオレの命の恩人だから。むしろオレがお礼を言わなくちゃいけないぐらいだ」

それは、セイの照れ隠しを少し含んだお礼の言葉だった。

何てことのない、感謝の気持ちだった。

しかし言葉に、フィンはここに来て初めて不思議そうに首をかしげた。

「？ 命の恩人？ 何の話？」

「？ いや、ほら。オレが気絶する直前、ロープが切れて落ちただろ。あの時助けてくれたのは二人だろ？」

セイは当然のように言った。あの場面には二人しかいなかったし、自分は無力だ。都合のよい第三者の介入でもない限りクレイとフィンが助けてくれたことになる。

そして都合のいい第三者なんてもの、それこそ都合よく現れたりしない。

世界とは、そういうものだ。

しかしフィンは、そのセリフに驚いたような疑っているような、呆気にとられているような顔をした。

そして一言、

「覚えてないの？」

そう、逆に尋ねてきた。

「う、うん。悪い、怖くて気絶したみたいで」

「いや、そうじゃなくて。そういえば、話題に全然出なかったからボクも忘れてたよ。でも、まさか無自覚だったなんて。逆に、それはそれで問題だなあ」

フィンが一人で物騒なことを呟き出したのを見て、セイはまた焦燥感を感じ始めた。

この上、まだどんな問題があるというのだろうか。

「フィン、一人で納得してないで、オレにも教えてくれ。すわり心地の悪い椅子に座ってるみたいない気分だ」

「ああ、うん。えくとね、単刀直入に言うと、ボクたちはセイを助けてない。助けられなかったんだ、ボクもクレイも」

「はい？」

その答えは、今までの中で一番予想外の答えだった。

それが。

それがもし本当だというのなら。

「オレは、どうやって助かったんだ？」

フィンはそれに、複雑そうに解答した。

「セイはね、自分で自分を助けたんだよ。」

魔法を使って、ね」

前言撤回。

どうやらまだまだこの世界には、驚くことあふれているようだった。

フィンが放った一言は、それほどにセイの取り戻しかけていた平常心を木っ端微塵に跡形もなく壊しつくした。

（魔法？ オレが？ オレが魔法を使った？ 魔女でもなければこ

の世界の住人でもないこのオレが？)

都合がよすぎる。

物語すぎる。

そんなの……それこそ小説やゲームの世界だ。

何者でもない、完全にひねりなく宿命なく運命なく必然のない存在。

あえてあげるとすればバッドエンドが描けない　それぐらいしか特徴のないどこにでもありふれている男子中学生。

それが、セイ自身のポジションだったはずだ。

(これは……何の冗談だ?)

驚きが過ぎ去った後にセイに訪れたのは、何ともいえない　だからこそどかしい懐疑心だった。

セイは別に、フィンが嘘をついているとは思っていない。こんな状況で嘘をついたところで何の得がないのは明らかで、何よりフィンの様子は嘘をついているようには見えない。

でも、どうしても自分が魔法を使った、なんて戯言をセイは信じる気にはなれなかった。

「なあ、フィン。それってどういう」

セイがそう聞き返そうとしたときだった。

薄暗い牢屋に、高い石を打つ音が木霊した。セイとフィンが驚いて耳を済ませる。楽器のように響くその音は、

「やばい、見回りだ！」

ヒールの石畳を打つ音が、少しずつ少しずつ近づいてくる。

「これは、ちよ〜っとピンチかも！」

フィンはあわてたようにカバンから一本の試験管を取り出した。その中には、ほとんど黒に近い緑色のドロドロした液体が入っていた。

その薬品(?)はなぜか泡だっていて、ブクブクと不気味この上ない音を立てている。

セイは思わず体を引いた。まるでドブの底からすくったような色

とあわ立つ様子はまさに魔女の毒薬のようで、それだけで嫌悪するには十分すぎる。

フィンはそのなせいに気にすることなく試験管のフタを空けると、
「……うん」

セイが吐き気をもよおす横で、一気に飲み干した。

その瞬間、フィンはまるで来たときの巻き戻し再生をしたように、少女の姿から白ネズミへと姿を転じた。

「今日はもう帰るね！ 見つかったら色々厄介だから」

セイは目の前の変化に目を奪われて、コクコクと頷くのがやっとだった。

「じゃ、また会いにくるよ！」

そう言っただけで牢屋の格子をすり抜けるフィン。セイはその本当に小さな背中を見送って、

「フィン！」

自分でも何故だかわからないまま、呼び止めた。

フィンはしゃべらず、ただ少しだけ振り向いて言葉を待っている。しかし、セイ自身なぜ呼び止めたのかわからなかった。

フィンのことを考えたら、ここで見回りの魔女と鉢合わせになるのがまずいことぐらい理解している。

ただ、セイは感じていた。

何か伝えなきゃいけないことがある、と。

それが自分自身でも何だかわからなかったが。

(え〜と、何を言いたいんですかオレは!?)

混乱してこんがらがった思考とは裏腹に、

「フィン、オレはこの世界が美しいかはまだわからない。

でも少なくとも、妖精がいて魔女がいて魔法が実在して、フィンやヴァスタみたいにいちゃつがいて……うん、オレはこの世界が好きだ」

口は自然と、あの時に答えられなかった言葉を紡いでいた。フィンは、その言葉にしばらくこっちを見たまま固まった。まるで人形みたいに、置物のように。ネズミの姿なので表情は読み取れない。怒っているのか、呆れているのか、驚いているのか。どれもありそうで、どれでもないような気がした。お互いどれほど見詰め合っただろうか。

カッン、カッン

もはやすぐそこにまで迫ったヒールの音に、我を先に取り戻したのはセイだった。焦るように手を横に振る。

（はやく行け！）

小声が届いたのか、フィンは最後に小さく頷くと見回りの魔法の足元を縫うようにして逃げていった。

そのちっばけな姿が見えなくなって、セイは安心してひとつ息をついて、

「……………そうか、しまった」

自分が、フィンにちゃんとお礼を言っていないことにやっと気がついた。

自分のあまりにもな失態に呆れかえるセイの様子を、見回りの魔法は気味悪そうに首をかしげていた。

(3 - 3) セイと牢屋とお客人 (後書き)

更新です。

フィンばかりでクレイの出番をつくるのが難しいのです

(3 - 4) 魔女と別れと強制連行

その夜、セイは結局なかなか寝付けなかった。

体は休息を求めているが、頭はその逆。考えることが多すぎてとても休んでくれなかった。

この世界のこと。

魔女のこと。

これからのこと。

フィンのこと。

クレイのこと。

ヴァスタのこと。

そして、自分自身のこと。

考えてもどうしようもないことだと、セイはしっかりと理解していた。

でも、理解することと納得することは別物だ。

とりとめのないことだとわかっていても、セイはそれらのことを考えずにはいられなかった。

しかしそれも限界がきて、セイは毛布に包まって壁にもたれたまま、いつのまに寝てしまった。

そして朝。

セイがゆっくりと穏やかに寝息を立てている中、

「……………起きろ」

文字通り叩き起こされた。いや、正確には蹴り起こされた。

「ぐっ……………はぁ！」

起き抜けに、しかも無防備なときに放たれた蹴りは、恨みでもあのかと疑いたくなるほど完璧に鳩尾に入っていた。

呼吸が止まる。

「セ、セイさん！」

ヴァスタはベッドで震えながら心配そうに声で叫ぶ。しかし、セ

イはそれに答える余裕などなかった。

(な、何なんだいきなり！)

鈍痛に苦しみながら見上げたそこには、魔女がいた。

黒い帽子に口を覆うほど大きいマント、それに色のついたゴーグルのようなものをはめていて年齢は読み取れない。

マントから伸びる腕は硬い筋肉で守られていて、セイの二倍はありそうだ。

正直、魔女の格好をしていなければ男と間違えただろう。

魔女はセイを見下ろし、もう一度「起きろ」とうなった。しゃがれた声が、部屋に響く。

しかし、セイは立ち上がらない。いや、立ち上がれなかった。

みぞおちに一発蹴りを入れておいて「立て」といわれても無理だ。しかし、魔女はもちろんそんなセイなど顧みない。

「ついて来るんだ」

歩み寄ってくる魔女。セイはまた一撃食らうのを覚悟した。その時だった。

「や……やめ、やめてくだ、さい！！」

ぶるぶると震えながら、尻尾を丸めて耳を閉じて涙目になりながらヴァスタはセイの前で両手を広げていた。

セイは、びっくりした。

昨日少し言葉を交わしただけで、ヴァスタが怖がりで臆病なことはだいたいわかっていた。

まして相手は魔女。

ヴァスタを見知らぬ土地へ連れ去り、今の状況に追い込んだ恐怖の根源だ。

なのに彼は、セイの盾になるように立っていた。

「どけ」

短い、命令の意味しか含まない声が響く。ヴァスタはそれにビク

りと震えたが、それでも首を左右に振った。

「セ、セイさんは……ここに来たばかりで、何が何だかわか、わからないんです。」

「や、やめてあげて、ください」

「しどろもどろだった。」

「足さえ震えていた。」

でも、その姿がセイにはたまらなくかつこよく見えた。痛さもだ
いぶひいてきて、セイは何とかヴァスタに声をかける。

「ヴァスタの行動はうれしかったが、逆に怖くもあった。」

自分のせいで、ヴァスタが傷つけられる　そんな可能性が、頭
をよぎったからだ。

「ヴァスタ」

「大丈夫、です。大丈夫ですかた」

「かんだ。」

（やっぱりギリギリなんじゃないか）

「いい、もう大丈夫だ。あとはオレに」

「だめです！」

ヴァスタが叫ぶのを聞いて、セイはびっくりした。

「このままついていったら、きつとひどい目にあうんです！ やり
たいこともできない、帰りたいと願っても、自由になりたいと願っ
ても、死にたいと願ってもできないところに行っちゃうんです！」

「それはまるで自分が経験してきたような言い方だった。」

「セイさんは優しい人だから。」

「こんな僕に『強い』って言うてくれたから。だから、そんな目に
あつてほしくないんです！」

後半は、涙で震えた声だった。

「セイは呆気にとられて何も返せなかった。」

「しかし、魔女は違った。」

苛立ちそうに小さく舌打ちすると、ためらいなくヴァスタに杖を
向けた。

ヴァスタもセイも、その当然のような動きに固まった。

(まさか……)

セイの頭の中で最悪の予想が浮かんで

それは、実行された。

魔女は、唱える。

「内なる力よ 我が声に応え一本の矢をつくり 杖によりて撃ち出せ」
シャーフィリング

唱え終わると同時、杖の先から何かが射出された。

それは野球ボールより一回り大きいぐらい。淡く白く発光していて、ヴァスタに向かって強烈なスピードで飛んでいく。

魔女の言葉を借りるなら、それは魔法の矢だった。

ヴァスタは恐怖で動けなかった。

ただ、目の前に迫ってくる白い何かに目を奪われていた。自分が撃ち抜かれる事を理解しても、体がいうことをきいてくれなかったのだ。

しかし、セイは違った。

セイには見えていたのだ。魔女が言葉を紡ぐたび、杖の先に正三角形や細かい文字、楕円や円形などが複雑に絡み合った。そう、魔方阵のようなものが形成されるのを。

だから、動けた。

だから、動いた。

魔女が呪文のようなものを唱え終わると同時、セイは思い切りヴァスタに飛び掛った。

セイの髪をかすめた魔法の矢は、地面に当たるとかん高い音とともに消え去った。

セイはそれに寒気を感じた。まるで、テレビで聞いた拳銃の跳弾音のようだった。当たっていたら、どうなっていたのだろう。

「セイさん……僕は」

ヴァスタは顔面を蒼白にしている。うまく言葉を話せないようだ。
「大丈夫か、ケガは」

「あ……ありません。ああああ、ありがとございます」

「それはこっちのセリフなんだけどな」

ヴァスタを庇うようにして倒れたセイは少しだけ微笑んでその体を起こすと、魔女をあらん限りの怒りで睨みつけた。

「アンタ……なんでこんなことする」

「私は、お前を連れて来いと言われた。それを邪魔したんだ、当然だろう」

(当然 今、そう言ったか?)

セイは、自分の中でまた怒りがふつつと音を立てているのを自覚していた。邪魔なものは暴力で片付けるなんて最悪の選択を、当然だと。

その考えが、あまりにも気に食わない。

それは ハッピーエンドとは程遠い考え方だ。認められない、認めるわけにはいかない思想だ。

しかし魔女は、それを行動で示した。再び、今度はセイとヴァスタ二人に杖を向けたのだ。

「二度目はない。ついて来い」

セイはしばらく魔女を睨み続けて、

「……はあ、わかった。いうとおりにするよ。それでいいんだろ」

ため息一つ、立ち上がった。その袖をヴァスタが引っ張る。

「だめですよ、セイさん！ 何されるか」

「ここにいても何も変わらないさ。動けなくてやきもきするよりは、動いて後悔したほうがいい」

「でも！」

「『後悔は何かをしてすること』」

食い下がるヴァスタに、セイは笑顔を向けて言葉を繰り返した。
教えてもらった、そして今は自らの礎のとなっている約束を。

「……え？」

「母さんが、オレに残してくれた言葉にひとつだよ。

大丈夫、魔女なんかには負けたりしないさ。それにオレは……自分がどんなことに巻き込まれてるのか、知りたいんだ」

少なくとも、権利はあるはずだ。

でも、本当はそんなことはどうでもよくて。これ以上、ヴァスタが傷つけられるようなことがセイには耐えられなかった。理由はそれだけで、でも十分すぎるほどだ。

セイは優しくヴァスタの手をほどく。今度はヴァスタもつかみ返すようなことはしなかった。

魔女はその様子に、杖を下ろす。

「ついてこい。無駄な抵抗は」

「しないよ。すぐに行くから、少し黙っててくれ」

セイは牢屋の出口へと歩いてく。魔女は手錠で 手錠より何倍もいかついが 後ろでセイの手を拘束する。

（これじゃ、本当に囚人か何かだな。とりあえず……スキを見て逃げ出すのは無理そうだなあ）

物騒なことを考えながら、セイは出口をくぐる。

そこで、思い出したように振り返った。

「ありがとう、ヴァスタ。」

昨日のこともさっきのことも、けっこううれしかった。

やっぱりヴァスタはかっこいいよ。オレが保証してやる」

そう言っただけで本当にうれしそうに笑うセイを見て、ヴァスタは呆気にとられたような顔をした後、

「セイさん……がんばってください！」

よくわからない声援を送った。セイはそれに笑顔で手を振って、牢屋から足を踏み出した。

しばらく牢屋とそう変わらない薄暗い廊下を歩く。魔女は後ろからセイを誘導しているのだが、突きつけられている杖のせいで生きた心地がしない。

歩いて歩いて、螺旋階段をいくつか昇りまた歩いて……完全にヴ

アスタの牢が見えなくなつたことを確認すると、

「はあ……」

セイは後ろにいる魔女に感づかれないうちに、大きく一度深呼吸した。それまで張り詰めていたものを一度解く。

ヴァスタに向けた表情や魔女に対する態度とは裏腹に、セイの心の中は不安の渦でいっぱいだった。

これからどうなるのだろうか？

そう考えただけで、目の前が真っ暗になった気がする。いや、実際この監獄の中は薄い光しか灯っていないのだが。

（考えたところで、今は魔女の言うとおりにするしかないんだけどね）

どこか諦め半分に、セイは何度目かわからない螺旋階段を上がった。

それからまた、どれだけ歩いただろう。

セイが行き着いたのは、重そうで厚そうな鉄の扉の前だった。

（何だここ……拷問部屋とか？ ははは……）

自分で考えておきながら、そのあまりにも笑えない冗談に、背筋にぞつと怖気が走るのをセイは確かに感じた。

（現実にその可能性があるっていうのは、本気で笑えない）

セイが扉の向こうに恐怖を抱きつつある中、魔女は風情も心情も展開も考慮せず、軽く扉触れるといとも簡単に扉を開いた。

「……ッ！」

思わず身構えるセイ。

何があるのか、何が起きるのか、何をされるのか。セイは恐る恐る、構えた腕の間から部屋を覗いた。

そこは、ホールのような場所だった。

四方は相変わらず石でできた部屋で、天井から小さな棘のようなものが突き出していることを除けば、普通としか形容のできないほどがらんとしている。

「え〜と……何だ、ここは」

壁に等間隔で並ぶぼおつと光る鉱石を見ながら、セイはそう呟いていた。

事情聴取でもされると予想していたセイにとって、この何も無い部屋は意外以外の何ものでもなかった。

(こんなところで何しようっていうんだ?)

もう一度、部屋に何かおかしなものがないか見回そうとしたセイに、

「『ワステイク操作』 目隠しよ かの者の視界を奪え」

油断していた。

完全に、気を緩めいていた。

もちろん、回避どころか最初はその言葉さえ耳に入っていなかった。

それが『魔法』だとわかったのは、布のようなもので視界を真っ暗にされたあとだった。

「うわっああ！ な、何するんだ、アンタ」

「うるさい。動くなよ」

そう言つと、魔女はセイの背中を思い切り蹴飛ばした。

取るうにも手は後ろで拘束中。セイは受身も取れずにゴロゴロ惨めに転がって、床に腹ばいになった。

手も足も出なかった。体中が痛い。

(この魔女、加減なんてものを知らないのか)

耳をすますと、魔女は何やら遠くでボソボソと会話している。

「しかし……こんなやつくらい私が……しかし、ナーガル様……いいえ、そういうわけでは はい、はい」

その声は、まるで電話でもしているようだった。それに、えらく恐縮している。

(何だろう？ 魔法を使った伝達手段でもあるのか？ それに、話しているのはお偉いさんっぽいし。ああ、また知らないところで何

かが色々進行している……)

やがて、話し合いは済んだのか、魔女の声は聞こえなくなった。そのかわりに、今度はバスン！ とまるで巨大なスイッチを入れたような音が、鼓膜を振るわせた。目を奪われているセイは、もちろん驚いて身を縮こませる。

(な、何？ 今度は何が始まるんだよ、もう！)

今度はモーターのようなうなる駆動音。それは、どンドンどンドン大きく、速さを増していく。何かされているのは、確定的だった。「おい、これは何なんだ！ 何でこう何も説明しないんだアンタらは！ ちょっと、おい 聞いてんのかコラー！」

セイが悪態をついている間も、音はやかましく、高くなっていく。そして突然、セイの体をおかしな浮遊感が襲った。

浮いているのだけれど、落ちている。

そんな、なんともいえない感覚。

しかし正体を突き止める前に、その感覚は終わった。

ほとんど、一瞬だった。

そしてその一瞬で、セイは自分が全然違う場所に飛ばされたことだけは理解した。目隠しされたままだということはわかる。さつきまであれほど煩かった駆動音らしきものは消えて、まるで入れ替わったかのように今度はざわめきがあたりを埋め尽くしていた。

それは、人のざわめきだった。

十人 いや、もつとだ。たくさん、人がいる。

(これは……ワープ？ これも魔法か？ いや、それは 違う感じがするな。それなら、牢屋から直接やればいい。

あの天井の変な飾り まさか、あれ転送装置だったのか？

いや、待て待て。その前に考えることがあるだろう。そう)
「今度は、どこだ？」

疑問に答える親切な心の持ち主は、もちろんいなかった。

いや、むしろ逆のヤツがいた。もう、何度目になるかわからないそれは『突然』だった。

セイは立ち上がった。

仰向けになり、上半身を起こし、膝を立て、勢いをつけて 当然のように立ち上がる。

セイの意思を完全に無視するかたちで。

それにはさすがに慌てた。

動いているのは確かに自分の足で、体だ。なのに、持ち主の命令を聞こうともしないそれはまるで別の生物のようだった。そして、別の生物が自分を占領している感覚は、最悪としかいいようがなかった。

セイの足は迷うことなくどこかに向かっている。

最初のほうは、

「ちよっ……おい、こら待て！ どこいくつもりだオレの足！」

と何度か抵抗を試みたものの、終いにはどうにもならないと諦めて、なるがまま自分の足に行き先を任せた。

それから十分ほど歩いただろうか。

両足は始まった時と同じように何の前触れもなくピタリと止まった。

(うわっ！)

セイはこけそうになるのを何とかこらえる。手が使えない以上、このままこけたら顔面からダイブすることになる。

そんなコメディ的展開は、今はいらぬ。

体の感覚は、セイの意思下へと戻っていた。足も腕も、自分の意思で動かせる。

セイはそれに少しだけ安堵してから、真っ暗な世界の中で思考する。

(さって……どこに行き着いたのかな?)

踵で地面を打ち鳴らしてみると、返ってきたのはカツンカツンという硬い音。とりあえず、崩れる危険性はなさそうだ。

鼻をひくつかせてみる。特にこれといった異臭はしない。肌も、寒くもなければ暑くもないちょうどいい温度を感知している。

何も異常はなかった。

(おかしいな……)

セイは疑問に思いながら、最後に残った聴覚に意識を集中しようとして、

「セイ！」

そうするまでもなく、見知った声が入ってきた。それを合図にしたかのように、目隠しがハラリと解ける。

目の前には、赤い少女が笑顔でもこちらを見上げていた

「やあ、フィン。はやい再会、喜ばしいよ」

「まったくだね、あまりにも急で何も用意できてないよ。」

時間があればケーキでも焼いて、盛大に再会を祝ったりできたのにやー。まったく、上の人は何を考えてるんだか」

「まあ、それはまたの機会に、だな」

「だね」

ニコリと、フィンは笑う。

何も準備ができない。つまりそれは、事があまりにも急展開だったということ。

確かに、セイもそれを感じていた。

あまりにもいきなりすぎる。

決断が出されるには、性急すぎる。

どうやらフィンも、同じ考えを抱いていたようだった。まあ、それは今は置いておこう。それ以上に、聞きたいことがある。

「しかしフィン、これは何だ？ えらく尊大というか威厳みたいなものを感じるんだけど」

セイはフィンの後ろにそびえる、現実とは思えないほど無駄に大きな扉を見上げながら尋ねた。

その高さは、ゆうに十メートルを超えていえる。艶のある木製の扉は、ただそこにあるだけで圧迫感と威圧感を与える代物だった。

ただセイには、

「この扉さあ」

「ああ、これ。すごいでしょ？ この奥でね」

「すごい無駄だよな」

「……にやんだって？」

「だってさ、ここまで大きいと開けるのに苦勞するは、掃除もめんどくさいは、何より邪魔だろう。」

「耐久性とか大丈夫なのか？ 地震でもきたら倒れてきそうだぞ。」

「そう思わないか？」

「いや、セイ。気にするところがものすごい勢いでずれてるよ……。まさか、混乱してる？」

「かなり」

「だろうね」

「何たって、突然牢屋から出されたと思えば、そのままワープ体の自由を奪われてここまで強制歩行のコンボだ。」

「冷静でいる、なんてのが無理な話だ。」

「じゃあオレとは違って冷静なフィンさん。オレは、本来フィンに何を尋ねるのが正しいんだと思う？」

「そうだねえ。ここはどこで、今から自分はどうなるか……ってのが妥当なところじゃないかな？」

「じゃあそれ、よろしく」

「フィン」は呆れ顔を隠すことなくこちらに向けた。

そんな顔をされても困る。こっちだって、頭の中がいろいろ大変なのだ。処理能力が昨日からぜんぜん追いついてくれない。

「追いつけるはずがない。」

「しょうがないなあ、まったたく。ここはね」

「ここは魔女の都の中心、時計塔の中だ。お前はこの中で、裁判を受けることになる」

「フィン」を遮って、思わぬところから答えが返ってきた。そのどこまでも通りそうな凜とした、でもどこか冷たさの混じった声。

「クレイ……」

「私の名を気安く呼ぶな。フィン、お前も親しげに話すんじゃない、

馬鹿者」

黒髪の少女は柱の影から出てくると、からゆそう言っただ鋭い青眼をセイに刺す。どうやら、一日経ってもクレイの態度は改善していないようだった。

(嫌われるようなことした覚えは……ないわけじゃないけど)

というかある。昨日、セイにしては珍しく感情のままに暴言を吐いてしまった。

(そりゃ、まだ怒っても仕方ないかな)

「って、待て。今、裁判って言ったか？」

「ああ。貴様には魔女区侵入の罪と、結界への不当な干渉の疑いがかけられている。貴様はこれからこの扉の向こうで裁判を受け、罪を言い渡されることになる」

なるほど、だいたいは理解できた。

セイは、ほぼ確信していることを確かめるために訊く。

「一つ質問がある。いいか、クレイ？」

「気安く名前を呼ぶな。……何だ」

「裁判、お前はそう言ったな。それならオレには弁解の余地があるって考えていいのかな？」

「……………」

クレイが、言葉を詰まらせた。それだけで、十分だった。

「……大丈夫だって、セイ！ 魔女議会の人たちもきつとわかってくれるよ！ 証拠はあるんだからさ！」

「証拠は全部その魔女議会の人たちつてのに握られてる。シラをきられたらどうしようもないさ」

フィンは何も返せず黙るしかなかった。

わかっているのだろう。

これから始まるのは決着の　セイの負けが初めから決まっていた裁判だということを。八百長なんて言葉さえ生ぬるい。

(オレを　勝負の土俵にさえ立たせないつもりだ)

それは最悪の結末だ。

でも。

だからこそ、

「はあああ

」

セイはゆっくりと深呼吸し、思考をクリアにする。

まだ、終わりではない。

いや、始まってすら、いないのだ。

状況はかなり不利　OK、それは認めよう。

しょうがない。

でも　まだ確定したわけじゃない。

負けだと、決定したわけじゃない。

(そうだ　まだチャンスはある)

助かる、その可能性は残っている。

(なら　オレは助かるために何をすればいい?)

それは、簡単だ。

熟考する必要さえない。

(まだオレに利用価値が……つかみきれない知りたい部分があると魔女に認めさせればいい)

おそらく、割れているはずだ。

セイから押収したものの利用価値と、『異界』という未知の力存在に、恐怖するものと興味を持つもので。

(そこを、突く)

口八丁と虚勢は得意分野だ。必要なら、嘘もつこう。

今は、これからのことも魔法のこともフィンのこともクレイのことも部長のこともこの世界のこととも元に世界のことともあの人形のこととも正義感も義理も人情も情けもプライドも責任も　今だけは、すべて放棄しよう。

生き残る、ただその目的のためだけに。

重い音と共に、扉が開く。

フィンとクレイに先導されて、扉の中へと進む。

さあ

「ハッピーエンドへの布石を、始めよう」

(3・4) 魔女と別れと強制連行(後書き)

セイ、いよいよちょっと本気になります。彼、基本的にはぐーたらです

(3・5) 魔女と裁きと言律師

扉の中は、息が詰まるほどの静寂で満ちていた。

セイの予想を裏切って、中は会議場のようだった。被告席も裁判官席もない。いや、むしろ正面には階段とその上に豪華な椅子が一脚あり、どちらかという王の謁見の間という感じもする。

ただ、それにしる常軌を逸しているのは確かだった。

本来なら　セイの世界でなら、会議室というのは扇形に机や椅子が並んでいるものだ。

しかしこの部屋にはそれが一つもない。

いや、正確には地面に座席はない。座席はすべて　どれも残らず宙を浮いているからだ。イメージとしては相撲の四人席が浮いていて、そこに椅子が備え付けてある……そんな感じの浮遊座席が、周りをグルリと囲むように軽く五十個存在していた。

(まったく　なんて作家冥利に尽きる光景だ、泣きたくなってきたよ)

部長あたりは大喜びしそうだが。

「何を立ち止まっている。早くこい」

「わかってるよ。……魔女ってのはみんな横暴なのかな」

最後のほうはクレイには聞こえないように呟きながら、セイは赤い絨毯の上をまっすぐ進んでいく。そして浮遊座席すべてから見える位置　階段の少し手前あたりで「止まれ」とクレイに言われ、それに従った。

自分の立っている場所から、改めて周りを見回す。

(いやな位置だな、ここ)

それが、セイの素直な感想だった。

胃が重くなるような威圧感を感じる。今は浮遊座席に誰も座っていないからいいものの、もし席が全部埋まっていたその視線がこちらに集中していたら　真つ当な精神状態ではいられないだろう。

(つてだめだだめだ！ 周りに呑まれるな、自分を見失うな！ これから命運かけた勝負が始まるっていうのに！)

深呼吸。

冷静に、クールに、頭脳は明晰に。

いつもの調子で、だ。

セイは、隣で暇そうにしている(こんな時でも余裕そうなのはど
うかと思うが)フィンに小声で話しかける。

(フィン)

(ん、何かな?)

小声に小声が返ってきた。

(こんな話を思い出した。

隣の家に、塀ができたんだっ)

(へえー)

(……その上、それだけじゃ飽き足らず隣の家はか)

(カッコイー)

……完全にオチを読まれていた。どうやらこのハイセンスなギャグは、こっちの世界でも共通しているらしい。すばらしき文明は、国境どころか世界さえ超えるようだった。

まあ、ともあれ調子は戻った。

改めて腹をくくったセイは、次の展開にただ息を潜める。

響いたのは、木靴が床を叩く音だった。

階段の上の玉座のすぐ前。そこには、いつのまにか二人の魔女が立っていた。

一人はまさに「美女」という単語を体現し、顕現させたような褐色の肌をした女性だった。年齢はおそらく二十後半で、大人な、そしてどこかヒヤリとする雰囲気的印象的だ。太ももあたりまである金髪は毛先だけ少しウェーブがかかっていて、その出るところは出ていて引き締まるところは引き締まっている体とあいまって、何とも

いけない感じで

「大変けっこうです、はい」

(セイ、何言ってるの?)

(あ、いや。ただの戯言)

慌てて閉口し、もう一人の女性に目を移す。

そこには 本当に、惑うことなき、セイのイメージにほぼ完璧に合致する、いたく魔女らしい魔女が立っていた。真っ白な髪に、しわのよった顔。しかしローブのフードを深くかぶっているというのに、目に活気が満ちているのがわかる。ピンとのびた背筋を見ると、年齢魔女からは年齢の割に老いている印象は受けなかった。あゝ、この人きつと偉い人だな、などとセイが雰囲気決め付けたときだった。

「パ パラルザイド様!? な、なぜこのようなところに!」

クレイが驚いて声を荒げた。ついで、肩膝をついて頭を下げる。

それこそ、まるで王に謁見でもしているかのように。

フィンのほうに振り向いてみると、彼女も同じように跪いていた。

セイはというと 完全においていかれていた。

さて、どうしたものか。

そんな風に考えていると、クレイが少しをだけ顔をあげて、鬼気迫る形相でセイを睨んだ。

(何をしている! お前も早く頭を下げる!)

「いや、わけもわからないのに何に対して頭を下げると」

(馬鹿か貴様は! あそこに座っておられるのは魔女を束ねる魔女議会の長、パラルザイド様だ!)

「おさ? おさ……オサ……長?」

セイは首をひねりながら何度も「長……」と呟いて、

「えええ! じゃあ、あのおばあさんが魔女のトップってことか!」
「?」

「だからさっきからそう言っているだろうが、馬鹿者!」

「あ……」とクレイが口を押さえた。でももう遅い。張り上げて

しまった声は、時間は、もう戻らない。

クレイが申し訳なさそうに再び頭を深く下げるなか　セイは、混乱していた。

いや、困惑していた。

あまりにも、それは埒外だ。予想なんて、予測なんてできようもない。なんでこんなところに　こんな場面で、魔女のトップなんて重要キャラクターが出てくるんだ！

「よいよ、クレイにフィン。頭を下げていては満足に話もできん」
ラルザイドの声に、フィンとクレイはおそろおそろ顔を上げる。二人とも、顔が微妙に引きつっていた。

「さて、名はセイと聞いたか。まず名を名乗っておくと、私の名はラルザイド。魔女議会の議長　お前さんの言葉をかりるなら魔女の『トップ』をやらせてもらっているばあさんだよ。

そしてこっちに立っているのはナーガル。私の片腕だ。

さて、セイよ。お前さんは何故今ここにいるか聞いているな？」

椅子に肩肘をつく姿は親しげで、頬には楽しげな笑みを貼り付けているラルザイド。セイは、あんまり「トップ」という言葉が似合わないなあと思いつつ、彼女の質問にコクリと一つ頷いた。

「そうかい。じゃ、時間を無駄にするのもなんだし、とっとと始めるとうか」

フランスエイスがそう言うと、今まで椅子の横で控えていた女性ナーガルが、一步前へと進み出た。

その手には、厚いファイルが握られている。ナーガルは、その容貌にそぐう儼かな声で告げた。

「これより、魔女議会裁判を行います。

被告はセイ、所属および種族不明。罪状は魔女区不法侵入及び、結界への不当かつその魔法自体を脅かす可能性のある干渉を行った罪です。

担当官は私、ナーガルが行わせていただきます。

以上、何か質問はありますか？」

「はい」

セイは手を上げた。

「もしなければこのまま被告への質問へと移りたいと思います」
完全に無視された。

(ふうん、なるほど……そういう手を使うわけね)
なら、こつちも同じことをするまでだ。

「ではまず」

「はい」

「今回の」

「はい！」

「問題」

「はいはい、はいはいはいはいはいはいはいはい！」

「被告、貴方に発言権はありません。貴方に許されているのは、
質問に答えることのみです」

あまりのしつこさに耐えかねたナーガルの警告を、
「いやです」

セイはぱつさり切り、自分の意思を示した。

「なっ……」「ちよつと、セイ？」

驚くクレイとフィンの声を意図的に無視して、セイは続ける。

「これが裁判である以上、オレには弁解の余地がある。そのこと
を、明言してください。そうしないうちは、始めてもらっては困り
ます」

「貴方は魔女ではありません。この国の法では、特殊なケースを除
いて魔女以外に弁解や発言の権利はありません」

「じゃあその特殊なケース 例外ってやつを認めてください」

「何を」

バカナ ナーガルがそう心の中で呟いたのがわかった。セイは
それに、ふうんと頷く。

(えらく、なめられてるみたいだな)

それは……好都合。

ギャップがあればあるほど、作戦は成功しやすくなるのだから。

「認める気はない、と?」

「当り前です」

頷くナーガルに、セイは澄ました顔で言っただけだ。

「じゃあ、オレは何もしゃべりません」

「は?」

「聞こえませんでしたか、黙秘権を行使すると言っただけです。」

そっちがそのつもりなら、こっちだってこのつもりです。

それは困るんじゃないですか? オレには訊きたいことがあるん

でしょう?」

セイの物言いはどこか、挑発的だった。まるで、相手を馬鹿にするような。

「こちらに、それを打ち破る手段がないとでも?」

大して、ナーガルも強気だった。でも……その強気は、命取りだ。失策であり

思っ壺だ。

「こちらには、貴方の意思とは関係なく真実を吐かせる手段などい
くらでも」

「はたして、それに効果があるんですかね?」

セイはポツリと、その言葉が効果的に響くように言葉を繰り出す。
落ち着け。

間違えるな。

「ここが最初で、最大の難関だ。」

「オレに通用するんですかね、そんなものが。」

魔法の魔法の中でも最高を誇る結界とやらがまったく効果のなか
った、このオレに」

ナーガルははっとしたような、そして苦そうな顔をした。そして
それをすぐに冷静の仮面で覆ったが、セイにはしっかり見えていた。
フィンも見えていたのだろう、納得したような顔で小さく頷く。

そう　魔女にとって結界は命と同等だ。

それを打ち破る方法をもつセイは『未知』の力をもつ存在あり、何より今後のためにその方法を聞きだす必要がある。

だから　そこに、つけこむ。

実際、ナーガルのいう無理やり聞きだす方法をとられれば、セイに対抗できる術はないだろう。セイは、どこまでいっても普通の人間だ。その前提は、まだ覆っていない。でも、それをわざわざ敵に教えてあげる必要は、ない。

ナーガルがセイを未知の力をもつ生き物だと思っているなら、思わせておけ。

それを、利用してやれ。

ナーガルはセイを睨みつけている。セイは逆に、笑顔でナーガルを見返していた。

そんな中、

「はっはっは！　なかなかおもしろいじゃないか、小僧」

玉座に座ったパラルザイドが、楽しそうに笑った。

「パラルザイド様？」

「ナーガル、かまわないから認めておやり」

「しかし！」

「小僧はよくわかってるよ。こっちの弱みも、こっちの都合もね。ここで押し合いへし合いしてもラチがあかんよ。」

セイ。私が、この魔女議会議長である私がお前さんの弁解の権利を認めよう。

……そのかわり、質問には答えてもらおうよ」

「ええ、もちろんですとも」

セイは微笑みながら頷く。心の中でガッツポーズを繰り返しながら。

ら。
(第一段階、クリアだ)

これで、戦場上がることはできた。

下準備はできた。　勝負は、ここからだ。

ナーガルは一つ咳払いをすると、仕切りなおす。

「……では、あらためて今回の罪状に対する質問を行います。虚偽の発言は罪になるので、真実だけを口にするように。」

まず、貴方が魔女区の中にいたこと、これに間違いはありませんね」

「イエス、ありません」

「そのさい、後ろの二人の見習い魔女に捕まったこと、これも間違いありませんね？」

「イエス、です」

「ならば、魔女区への侵入に関してはすべてを認めるということでかまいませんか？」

「それはノーです」

セイを見るナーガルの目が、すっと細くなるのがわかった。不機嫌そうな、不可解そうな目つきだ。

それでいい。

「何が違うというのですか？ 証言も事実も貴方が魔女区へ侵入したことを表しているではありませんか」

「証拠は？」

セイの声が、広い部屋に反響した。

「貴女たちのいう『魔女区への侵入』ってというのは、結界を越えたってことが前提条件にあるはずですよね？」

「……」

「沈黙は肯定と受け取りますよ。」

なら、オレは侵入なんてしていない。証拠が、そう告げているはずだ。

オレから押収した数々の物品 あれは、この世界の技術で作られたものでしたか？」

ナーガルは、反論してこない。いや、反論できない。セイは、チャンスを見逃さない。自分を有利と確信している今、畳み掛ける。

「それに、結界だって反応していない。」

おかしいでしょう？　今までずっと正常に作動していた結果がいや、今だつてちゃんと作動している結果にオレだけが反応しないなんて」

「その事実を、どこで」

「そんなこと今はどうでもいいでしょう？　今大事なのは、オレが何者かということだ」

周りの人間は、もはやセイが弱者には見えていなかった。ナーガールを睨み上げ、たくみに言葉をつぐむ姿に、魔女たちは畏怖すら感じていた。

にやにやと微笑む、パラルザイド一人を除いては。

（くえない人だな）

セイはパラルザイドを見ながら、それでも言葉を吐き出す。

「この世界にあるはずのないものを持ち、できるはずのないことをやってのけた。どうです？　ここまでの証拠がありながら、貴女たちはまだオレをこの世界の人間だと思っんですか？」

「……そんなものでまかせでしょう。だいたい、それならなぜこの世界の者でないものが、この世界の結界を破れるのです」

ナーガルは、セイに聞いた。聞いてしまった。いかに無意識だろうと、それは法の下での質問ではなく彼女自身の疑問。立場が、逆転した。

セイは、にいつと笑う。

まるで詐欺師だな、なんて自分のことを罵倒しながら。

「簡単なことですよ。オレは異界から直接魔女区の中に落とされたんだ。これなら、結界に反応することなくオレが魔女区の内側にいたことに説明がつく。どうです？　わかってもらえましたか？」

「そんな夢物語、だれが」

「あんたたちにとって、結界が反応しない　その事実自体、夢物語じゃなかったのか？」

これも、反論なし。

セイは、勝利を半ば確信しつつあった。完全に、こちらのペース

に巻き込んでいる。

このまま、突き進め！

「フィンとクレイから報告があつたはずだ。知っているはずだ。それでもまだ認めない、信じられないというなら何度でも言おう。

オレはセイ。異世界からこの魔女の世界に来た者 異世界人だ」

息を呑む音が、聞こえた気がした。それは恐怖や畏怖や興味や好奇心 そういったものがまぜこぜになったものだ。セイはその雰囲気の中、フィンを真似するように無邪気そうな笑顔をつくった。

「そんなに緊張しないでください。オレは魔女に対して何かをするつもりなんてこれっぽっちもないんですから。

オレは、元の世界に還りたいだけなんだ。そのために貴方たちの協力がほしい。そのためなら、オレは貴方たちに押収されたものの利用方法も、オレの世界にあつてこの世界にはない技術も、オレの世界のことだつて 教えられるものは、何だつて教える。

どう？ 悪くない取引だと思うけど」

「そんなこと、許されるわけが」

「なら、表立つてはオレを処分すればいい。オレは方法がどうあれ、自分の世界に還ることができれば満足なんだ。

オレが処分されたことがわかれば大衆には言い訳もたつし、あんたらは研究ができる。

どうだ？ オレはお互いの利益が合致する、最高の一手だと確信しているけどね。

決定権はそつちにある。さあ、決めてくれ」

それは、甘言だつた。

ナーガルは、考えていた。

セイのいうとおりならば、魔女にまつたくのデメリットはない。むしろ、メリットだけが目立つ。セイが異世界人であれなんであれ、結果については知る必要がある以上、確かに多くの不安要素はあるもののこれほどにおいしい話はない。

何より未知の技術という点で、ナーガルはセイの意見に惹かれて

いた。

それがセイの狙いだと気付かずに。

セイは待っている。ただ、肯定の言葉が出るのを。言いたいことはとりあえず言い尽くした。

（さあ、どうだ？）

ナーガルは、賢く大人な女性のようだ。汚いことも、有利なことも、魔女のトップの片腕をしているなら知っているはず。

そういうものが選ぶのは、いかに相手が利用できるか、価値があるかだ。

だからセイは、魔女の食指をそそるような言葉と条件は提示した。悪条件などまったくない、意見を呑むことが一番いいと思える論理をくみ上げた。

これが、セイにできる現状の全力だ。

（さあ、どうでる？）

ナーガルは沈黙を保ち、悩んでいる。全員が、固唾を呑んでナーガルを見つめていた。

そんな中、緊迫した沈黙を破ったのは、

「なかなか口が回るねえ、小僧」

笑いを崩さない、パラルザイドだった。

「その歳でそれだけの虚言甘言が吐ければたいしたもんだ。論点をうまくずらして、自ら情報をばら撒くことで大事な情報を守り、こちらの一番の問題に注視させることでその他の雑多な　でもお前さんにとっては聞かれたくないことをうまくかわす。」

なかなか小手先がきくじゃないか、褒めてやるよ」

「……それはどうも」

やばい、セイはそう直感した。

パラルザイドのその一言で、空気が全部持っていかれた。状況が、一変した。

「でも、貴女の言っている意味がわかりませんね。

今の話、どこか嘘はありましたか？」

「嘘がないから褒めてるのさ。よくやるよ、ってね。

ただ、嘘をついていないということが、本当のことを言っているのとは別だろう？ 言律師」

言葉を律する師 魔女は、セイをそう呼んだ。その呼称が、セイの心を不安で揺れ動かす。

まるで、見透かされているようで。

「だいたい言っていることが矛盾しているしね。

そもそもお前さんを異世界人と考えるなら、結界の話なんてものはもうどうでもいいのさ」

年老いた魔女は、そう言って微笑む。無邪気に、邪悪に。

「もしあんたが異世界から来たっていうなら、結界には何の問題もないし考えることもない。そうすると、お前さんの利用価値は無くなったも同然だよ。

私たちは、結界を無反応で抜けたお前さんが怖くてこんなかたちをとっているんだからね」

(……この人、心得てる)

甘かった。その言葉だけが、セイの心を埋め尽くしていく。

「そうとわかれば、技術協力なんてのも必要ない。お前さんの世界の技術が魔法に干渉しないなら、いくら研究したところで私たちに何のプラスにもならんからね。私たちが求めているのは魔法に役立つ技術 それだけだ。

ほら、これでお前さんには利用価値はなくなった」

パラルザイドは、おどけたようにそう結論付けた。

そして、それは王手だった。セイの論理は、思考は、作戦はすべて看破された。

(でも……まだ詰まされてはいないはずだ)

セイは足掻く。

みつともなくても。

「……そんなに簡単に結論付けていいんですか？ もしかしたら、オレは嘘をついているかもしれないのに。実は何か道具を使って結

界を越えたのかも。そうじゃなくても、オレの世界の技術は、この世界にすさまじい影響を与えますよ？」

「……何だい、ここまで来て論理をひっくり返す手法が有効だと思ってるのかい。」

お前さんはたいした嘘つきだ。だからこそ、そんな馬鹿みたいなブラフは立てないよ。それに、行き過ぎた技術は破滅を招く。そんな危険因子、この国には必要ないさ」

「憶測の域を出ない、貴女のあてずっぽうですね。それだけで、利益を捨てますか」

「それだけ場数と経験を踏んでるって事だよ、若造」

最後の抵抗さえ、完全に無駄に終わった。

セイは言い返せない。

言い返せる材料も、才能も持っていない。セイには、この世界で確かなものなどもう何もなかった。

（何が言律師だ あんたのほうがよく口がまわるじゃないか！）

セイの恨みがましい視線を受けて、パラルザイドは心のそこから楽しげに笑った。

「なかなかだったが、まだまだ甘いね。この年寄りを納得させるにや足りないよ、小僧」

「……ええ、完敗ですよ。オレの負けだ。で、貴女はオレをどうするつもりですか？ 煮て焼いて食いますか？」

まさか、とパラルザイドは鼻で笑った。どうでもいいけど、よく笑う人だ。

「そんな健康にも精神にも悪そうなこと、私はしないさ。お前さんは肉がなくておいしくなさそうだしね。」

さつきも言ったとおり、結界や技術云々に関して私は興味などないんだよ。

ただ……異世界人のセイという生物に関しちゃ、ちょっと興味がわいてきていてね」

「？ どういうことですか？」

「魔法に干渉できるものがない世界から来た異世界人が何故魔法を使えたか　もし私がお前さんだったら、さつきはここをセールスポイントとして押したね」

それを聞いて、セイは思い出した。昨日の夜、フィンから聞いた自分でもまだ信じきれない事実を。

(でも……それが何だっというんだ?)

その事実にとれほどの価値があるのか、セイにはわからなかった。パラルザイドはセイの思考ダダ漏れの表情を見て、また小さく笑った。

「わかっていないならヒントをやるう。今、我々魔女がこうして平和に暮らせているのは、ひとえに魔法という力を私たちがもっていたからだ。

他のものにはない、魔法という万能の力をね。

他の種族にも、治癒術や幻覚を見せたりする力を持つものもいるが、それはどうがんばったって一つが限度さ。でも、私たち魔女は違う。

その技術によっては様々な力を行使できるのさ」

「パラルザイド様」

ナーガルの諷めるような声もパラルザイドは気にしない。はた目から見てもわかる。パラルザイドは楽しんでた。

「さて、これでどういうことかわかっただろう？」

まるで、デキのいい生徒に質問を出す先生のような言い方だった。とことんくえない人だ、セイはそう感じながら頷いた。

「ええ、わかりましたよ。つまり魔女どころか、女でもましてこの世界でもないこのオレが、魔法を使ったこと　それが問題なんだ。

もしこれが外に伝われば、大混乱になる。魔法は魔女だけのものじゃなくなつて……この国自体が危うくなる、でいいのかな？」

「頭の回転もなかなかだね。そのとおり、例えばあんたが唯一の例外でも、それを知った多種族は私らに対する考えを改めるだろうね。」

魔女の力は絶対ではない、とかなんとか。

魔女は嫌われ者だから、いい餌食さ」

それは……自嘲、だったのだろうか。

やれやれ、とオーバリアクションをとるパラルザイドが、セイには何故かそう思えた。

「さて、そう考えると私らはお前さんをどうするべきなのかねえ」

「処刑するのが一番的確で適当であると私は考えます。この者が存在していることが我々に不利益なのは、先の会話でも明らかでしょう」

パラルザイドに応えたのはナーガルだった。その物騒な結論にセイはブルリと体に寒気が走るのを感じた。ナーガルの目は、完全に本気の目。

本気で、殺す気だ。

言葉をつげないセイ。

恐怖で、先の見えない未来で、口なんてもう動かなかった。

一歩も動けなかった。

「そんなのおかしいです！」

その、否定の言葉を聴くまでは。

「そんな、犯した罪はすべて冤罪だったじゃないですか！　そこまでする必要がどこにあるんですか！」

声を頼りに振り返った先。そこにいたのは、小さな、ちっぼけな、力を持たない赤い魔女だった。

「フィン！　黙っている！」

「いやだ！　ボクは間違ったこと言っていないもん！　だいたいそれっていくら何でもオーボーじゃなモグモガム」

クレイはフィンの口を押さえて、無理やり黙らせる。それでも手足をじたばたさせて、言葉を吐き出そうとするフィンを見たセイは、

（ああ、もう）

それに叫びだしたいほどの喜びを感じながら　パラルザイドから目を離さなかった。

今ので もう、絶対に負けられなくなった。あんな言葉で後押しされて、負けてなんていられない。

フィンのためにも。そう思うと、不思議と気持ちは軽くなる。そうだ、諦めてどうする。どうなる。

もう一度、昨日の夜と同じことをフィンに繰り返させるのか。

それがお前のいう、ハッピーエンドなのか。

「ちがう」

それは、ちがう。

あそこまでしてくれたフィンに一番応えるには、ここで諦めることでもお礼の言葉を言うことでもなくて、

(オレが、この勝負を乗り切ることだ)

なら、考える。どうせ失うものがこの世界にはないんだっていうなら、玉砕覚悟で相手をだませ、惑わせ、自分のテリトリーに引っ張り出

(……玉砕、覚悟？)

その思い浮かべた言葉に セイは自分のことを褒めちぎりたくな

った。

そうだ。

まだ手は、残されているじゃないか。
「はは、なかなか面白い反応をする娘だね。……今のがいい喝にでもな

ったかい。死にかけてた目に、生気が満ちているよ。
……ああ、そんなやる気満々な目で見ないでおくれ。私は別にお前

さんをどうこうしようと考えちゃいないよ」

「いや、どうこうしてくれなくちゃ困るんだ」

セイはそう、パラルザイドを見つめながら答えた。

その言葉に、気負いはない。むしろ、どこか余裕さえうかがえた。パラルザイドが、初めて不可解そうな表情をした。

「どういうことだい？ 自由になりたくないのかい」

「何もできない自由ほど不自由なものはないですよ。

それに、言ったはずだ。

オレは還りたいんだ、元の世界に。

この世界は楽しくて、不思議で、魅力的ですけど」

魔法があり、魔女があり、確かな存在感があり自分がある。こんな理想的な世界、めぐり合えることなどもう人生においてないだろう。

セイの世界は、決してこの世界ほど綺麗じゃない。

それでも……

「でも、ここはオレの居場所じゃない。オレの還るべき場所は、この世界じゃない。

なら、帰らないと。

そのために、オレはあんたたち魔女に利用されたいんだ」

セイは笑顔で、はつきりとそう口にした。

『利用されたい』と。

魔女たちは、ついにおかしくなったのかというようにセイをまじまじと見つめている。

おかしくなったのか？

当たり前だ。こんな楽しい世界、今までにない自分自身の命運をかけた口論で、おかしくならないわけがない。

(だって、オレは普通の人間だから)

「異界についての情報。これは、あんたたちにも魅力はずだ。

魔法に関係のない技術に興味はない？ 笑わせないでくれ、『異界に渡り歩く』なんてものが魔法以外のなんだって言うんだよ。それがわかってるからあんたは言ったんだ、異界人のオレに興味があるって。

魔法を使う、魔法と少しでも関わりのある異界という存在に。

そこに、異界と魔法を繋げるものを見つけたから。

なら、その興味をとことん満たしてやる。観察して、見聞きして、あんたらを飽きさせない世界を、物語を見せてやる。

異界と魔法つてもものが繋がってるってことを、これでもかってぐらい証明してやる。

だからあんたらは 異界っていう魔法に少しでも興味があるなら、オレを利用しろ。オレを使って、異界を探れ」
できることだってたかが知れている。

魔法だって使えない。

剣だって使えない。

権力もない。

確たる自分もない。

将来のヴィジョンもない。

でも、

(それが、どうした)

ここに自分がいて、五体が満足して動くなら。

「魔女、あんたたちは大人しくオレを利用しろ。そして、そのついでにオレを異界に還してくれ」

やれることすべてを、やろう。

セイの自信満々、暴論ともいえる説得といえないセリフの後におちたのは、沈黙だった。パラルザイドはセイを真剣な、威圧して押しつぶそうとしているように見下している。

セイはその視線を正面から見返して、笑い返していた。

くしくも、さっきとは逆の構図。

そして、

「……くく、く」

沈黙が、破れた。

「はっ、っはははははははははは！ いいねえ、気に入った。そんな啖呵をきられてとは思わなかったよ。おもしろいじゃないか、小僧」

(あれ?)

セイはこのとき違和感を感じた。

(そのセリフ、前にどこかで)

しかしそれを確かめる間もなく、パラルザイドは続ける。

「ナーガル、ここまで言っているんだ。もう反対はしないでくれ」

「……はっ、全ては御心のままに」

「あ、あの　　パラルザイド様？　これはいつたい」

パラルザイドの笑い声に呆気にとられながら、クレイは読めない展開に説明を求めた。パラルザイドは悪戯に成功したような小憎らしい顔で、

「なあに、実を言つとね、今までの会話は全部セイを試していたのさ」

そんなことを言った。クレイはそれでも首をかしげる。

「試していた、というのは」

「異界から来たって事が本当か、っていうのも含めて、果たしてセイという存在がどれほど魔女にとって害を及ぼすか、ということをさ。」

利用価値があるのは、最初からわかつてたのさ」

「じゃあ、まさかさっきのオレに対する言葉は全部」

「ああ、カマをかけたのさ。まだまだだね、異世界人も」

セイの問いに意地悪そうにパラルザイドは微笑んだ。

「でも、危険性があるのならいくら価値があっても無意味だからね。お前さんの真意が知りたくて、こんな嘘裁判を仕掛けたのさ」

「そうだったんですか……。で、合否判定はどうだったんですか？　パラルザイド返事とばかりに「はっ」と鼻で笑った。

「自分で言ったことを忘れたのかい？　お前さんは今自分で答えを出したじゃないか。」

多少くえないところもあるが　　おおむね合格だ。

それに、なかなか見所もある。

……　　ナーガル、例のものを」

ナーガルは頷くと杖を取り出し、「操作『ワスティーク』」と唱えた。

すると、玉座の後ろから大きな布のようなものがセイめがけて飛んでいった。

セイが驚いて身構えると、布はセイに近づくとつれ速度を落とし、

最後にはセイの腕の中に落ちた。

(何だこれ？ ぼろきれ？)

「広げてみな」

パラルザイドの指示通り、布を広げると　そこには、藍色の美しいローブが姿を現していた。

黒とは違う、深く深い藍の色。少しグラデーションが係っており、下にいくほど色が濃くなっている。まるで、朝焼けの色だ。ところどころ痛んでボロボロになっているが、刺繍の細かさを見る限りなかなかの品に見えた。

ただ、セイにはそれが自分に渡された意味がとんと理解できなかった。

「あのく、これは？」

「ローブだ。私の友人のお古なんだが、十分使える一品のはずだよ」

「そうじゃなくて」

「簡単なことさ。ローブは魔女の象徴であり、代名詞のひとつだ。それを渡すって事はつまりだ」

セイ、お前さんには魔女になってもらおう。

「そういうことさ」

「はい？」

これまで以上の、完璧とっていいほどの静寂が、小さな会議室の世界を満たした。

時間が確かに止まった。

(あれ、今何か聞き間違えたかな？)

セイは、今言われたことを頭で反芻する。

セイ

魔女

なる

確かに聞き取ったこれらの単語に、一番適当なつなぎ言葉をつけ

てみた。

セイは魔女になる。

セイが魔女になる。

セイは魔女となる。

セイが魔女となる。

……どうがんばっても、同じ意味にしかならなかった。

もう一度最初からやり直してみても、結果は変わらなかった。

その間ゆうに十秒。そしてセイは、

「……何でさ」

やっぱり理解も納得もできなかった。

その気まずい空気を、いち早く破ったのはクレイだった。彼女は半ば身を乗り出すような感じで、場にそぐわないことすら考えず大声を張り上げる。

「な、ななな、何を言っているのですかパラルザイド様！！ こいつは魔女どころかこの世界の住人でも まして、女でもないんですよ!？」

「口が過ぎますよ、見習い魔女クレイ」

「しかし！」

「魔女とはそもそも『魔法を行使できる者』の総称です。成績優秀な貴女が知らないわけではないでしょう」

「それは……そうですが」

ナーガルの落ち着いた声に、クレイの言葉は次第に尻すぼみになり、最後は相手の言葉に頷いてしまった。どうやらクレイ、あまり舌戦は得意じゃないらしい。

(でも、あれぐらいで黙らないでほしいんだけどなあ)

ここはどう考えても疑う余地すらなく、ここはツッコむところだ。でも、おかげで時間は稼げた。無理やりでも頭を落ち着かせるぐらいの時間は。

「え〜と……ちょっと整理しましょう。つまり……」

「そんな必要はないだろう？ 簡単のことじゃないか。お前さんが

魔女になれば、結界を無反応で抜けた理由は『魔女だから』で十分。外側にいた理由は……まあ、亡命した魔女が弟子として育てていて、たまたま迷い込んだってことにすれば対した問題にもなるまい。そうなれば、見習い魔女の権利を得ることに理由ができる。

ほら、完璧じゃないか」

「いや、ムリ」

いくら流暢に理由を並べ立てたところで、今回ばかりはのまれな
い。

「もつと根本的な問題があるでしょうが。さっきのクレイとかぶるけど、オレは男なんですよ　オ・ト・コ！　いくら魔女の定義が魔法を行使できる者だったって、今存在する魔女が全部女である以上混乱はさけられないじゃないですか」

セイの言うことは正論だった。クレイとフィンどころか、ナーガルでさえ頷いている。しかしパラルザイドはここでもまた、にやにやとした表情を浮かべたまま、

「果たしてそうかねえ」

と、いつのまにか握っていた魔法の杖をおもむろに振った。

しかしセイも、もう慣れのような感覚で即座に警戒態勢をとっていた。何回も同じ目にあつたからか、その反応は迅速だった。

ただし、誤算があるとすれば

「『アフレビクト
加速』」

パラルザイドの詠唱が速すぎたことだけだった。

一節　時間にすれば一秒もない。

パラルザイドには、それだけで十分だった。

（うそっ！）

完全に虚をつかれるかたちをとられたセイは、警戒態勢のまま動けなかった。

それでも容赦なく魔法はセイを直撃し、

「あれ？」

体を強張らせていたセイは、そんな馬鹿みたいな声をあげていた。おかしい。

どこも痛くない。体が動かなかつたり、逆に勝手に動き出すこともない。

いたって正常だった。何の異常もセイは感じなかった。

それが、おかしすぎた。

(確かに……、魔法が当たった感覚はあった。なら、なんで何もないんだ？)

何をした　　セイがパラルザイドを問い詰めようとしたときだった。

「ちよつと、セイ　それ」

フィンが目をまん丸にして(さらになぜか輝かせながら)、こちらの頭を指さしていた。

それだけではない。すべての視線がセイの頭　　いや、顔全体を刺して驚きの表情を浮かべていた。

セイは頭を撫でてみる。しかし、そこにこれといって変わった感触はなかった。角も生えていなければ、ヴァスタのような耳も生えていない。ただ、すべすべとした感触の髪があるだけ

(まて。すべすべの、髪？)

それはおかしい。たしかにセイは男にしては髪を伸ばしているほうだが、だからといって髪の毛の感触がすべすべになるほどではない。

いつもなら毛先が手に引っかかるはずだ。

そこでセイは初めて、肩にかかる妙にこそばゆい感覚に気がついた。

おそろおそろ手を伸ばしてみると、サラサラとした感触が手のひらを滑った。

髪の毛独特の、感触が。

「はっはっは、髪の毛を伸ばしただけでこれほどに化けるとはねえ。

どうだい、クレイ。これでもまだ、ばれると思つのかい？」

「そ、それは……」

(いや、なぜそこで言いよどむ)

心でツツコミをいれるセイの目の前に、突然鏡が飛んできた。

ナーガルが『ロステイク操作』の魔法を使い、セイの目の前に鏡を固定させる。

そこに映っていたのは、色素の薄い髪を肩に触れるぐらいまで伸ばした少女だった。

少女は間の抜けた、ぼんやりとした顔をしてこちらを見ている。

セイには、最初それが何だかわからなかった。

なんとなく右手を振ってみる。少女は左手を振った。

笑いかけてみた。少女は可愛い笑顔で笑った。

にらみつけてみた。少女は不可解そうににらみ返してきた。

それでやっと、何をされたか気がついた。

そして、セイは言葉を失った。

「これで無駄にしゃべらなけりゃ、ばれることもないだろうさ。さ、これで問題は解決だね」

セイはそう言うパラザイドを、しばらくぼんやりと見つめていた。

見つめて、

「……いや いやいやいや!」

やっと自我を取り戻し、思い切り否定の言葉を繰り返した。

「根本的に何にも解決してないでしょうが! オレは男! それに、

魔法なんてもの使った覚えはないし、そもそもこんな無茶苦茶な隠蔽工作で隠しきれぬ自信なんてない!」

「何でだい? 外見が女なら魔女に混乱も与えんし、『侵入者などいなかった』なんて説明よりはよっぽど信憑性があるよ。」

それにお前さんが魔法を使ったことは確かなんだ、無自覚とはいえまた魔法を使ったときもこれなら安心だろう?

何より、お前さんにはこれから見習い魔女と行動を共にしてもら

わなきゃならないのに、そうじゃなきゃ怪しまれてしまうじゃないか」

「外見女って言うな。」

いや、そうじゃなくて。だから何でそう……いや、ちょっと待て。今、ナンテイイマシタ？」

見習い魔女と行動を共に。

セイの聞き間違いでなければ、空耳でなければ、微笑む魔女はそう言った。

「どういうことなんだ、見習い魔女と共に行ど」

「見習い魔女クレイ・フィン。両名、前に出なさい」

セイの疑問は、ナーガルのはりつめた声にかき消された。

会話の流れから自分たちの名前を呼ばれるとは思っていなかったのだろう、二人とも

「は はいっ！」 「え？ あ、ボク？ は、はいはい！」

そう慌てて返事をする、一歩前に出た。

その姿を確認したナーガルは、告げた。

「貴女たち二人に最終魔女試験の課題を言いたします。

クレイ・フィンの両名の最終課題は、セイを元の世界に帰還させること。

期間は一年。手段・方法などは問いません。

セイの帰還の完了確認をもって、試験の合格とします」

「……はあ」

セイにはもう何が何だかわからなかった。新出単語が多すぎて、まるで高校英語のリスニング問題でも聞いているみたいだ。

しかし、前にいる二人の変化はすさまじいものだった。

まずフィン。彼女は普段はまた目をまん丸にして、パチクリさせていた。

「にやんだって？」

その口ぶりからも、どうやらまだ告げられたことが飲み込めていないようだ。

対してクレイは、信じられないとでも言いたげに苛立たしそうに眉間にしわを寄せていた。見ているだけで怖い。よほど言われたことが気に入らないらしいかった。

「なんの冗談なのですか、ナーガル様！

そんな無茶苦茶な試験、できるわけがありません！　そもそも許されるわけ」

「杯が出した結論だ、これほど絶対的なものはないだろう。それに、許可なら私がすでに出しているよ、クレイ」

パラルザイドの答えに、クレイが息を呑んだのがわかった。

それでも、食い下がる。

「……そもそも、このようなこと、見習い魔法の力の領分を超えています！　異世界に還すなど、方法どころか情報さえないではありません」

「口を慎めというのが聞こえなかったのですか！　見習い魔法クレイ！」

ナーガルの怒号だった。

耳にビリビリと響いてくる音に、クレイは顔を真っ青にしてうつぶいた。セイすら耳を塞ぐほどの気迫だ、それを直に向けられたクレイは、少し震えているのがわかった。

恐怖ではなく、畏怖していた。

クレイは、自分とナーガルの政治的においても魔法においても圧倒的な力の差がわかっていたからだ。それこそ、赤子の手をひねるより簡単に、ナーガルはクレイを抹殺できる立場にある。

クレイに頬を、冷や汗が伝った。

そんなクレイを庇うかのように、魔法の長は優しい声色で言う。

「ナーガル、怒鳴ることはないさ。クレイの言っていることは間違いない。ただ、どうしようもないということもまた事実だ。クレイ、お前もそれはわかっているのだろう」

「……はい」

クレイは短くそう返事することしかできなかった。
パラルザイドはその様子を見て、何やら考えるように手を顎に乗せると、

「そうだ、いい事を思いついた」

唐突にポンと手を打った。

「なら、こういふのはどうだい。もしこの試練をやり遂げたなら、お前たちには好きな位をくれてやるう」

「ええ！」

「それは本当ですか!？」

さきほどは裏腹に驚く二人の見習い魔女に対して、ナーガルは困ったようにパラルザイドへと振り向く。

「パラルザイド様、それはいささか」

「かまわないよ、それだけのことだと私は認識しているんだよ」

パラルザイドはそう言って、

「ああ、魔女議会議長に二言はない。

もしこの試練を完遂した暁には、お前たちには好きな位を与えることを約束する。

で、どうするんだい。受けるのか、受けないのか」

二人に、再度問うた。

「……」「……」

クレイとフィンは無言のまま。それは即答するには重大な問題だった。

試練の難易度は、二人が予想していたものとは比べ物にならないほどに高度なものだ。正直、達成できるかどうか情報を集めることにすら苦労しそうだ。

しかし、メリットが大きいのも確かだ。好きな位を選ぶ……それはクレイにとってもフィンにとってもこれ以上ないほど大きなチャンスだ。

全てを見返す、そのための。

そしてセイの命運も、クレイとフィンの返事にかかっていた。
「ボクは……受けます」

最初に返事をしたのはフィンだった。
赤い瞳でまっすぐにパラルザイドを見返す。

「セイをこの世界で最初に見つけたのはボクたちだから。なら、最後まで責任をとらなければいけないだと思えます。」

ボクはこの試験、謹んで受けさせていただきます」

フィンが深々と頭を下げる姿を見て、クレイも一つ大きく息を吸
うと、

「好きな位を与える……それは約束してくださるんですね？」

「くだいねえ。ああ、誓うよ」

「……ならば」

クレイは、運命を、下した。

「私も、その試練ありがたく頂戴させていただきます。」

そして……」

持ち上げた瞳に、揺るぎない決意をこめて。

「必ずや、この試練を成し遂げてみせるところに宣誓いたします」

二人の言葉を聞いて、パラルザイドは満足そうな微笑を浮かべな
がら、大きく一つ頷いた。

「そうかい。じゃあ、これで話は決まったね。」

それじゃ、あとはお前さんがそのローブを羽織るだけだ、セイ」

真剣な眼差しで、パラルザイドはセイに問うた。

「お前さんがそのローブを羽織った瞬間、セイという存在はこの国
に対しての忠義を持ち己の存在に誇りを持つ魔女となる。」

さあ、選ぶといい。

ここが最終ラインだ。そのローブを羽織った瞬間、お前さんは二
度と後戻りのできない道に踏み込むこととなる。後悔したところで
やり直せないところに、自ら進み出ることになる。

しかしそれでも成し遂げたいと願うことがあるならば　セイよ、
ローブを羽織れ。そして魔女となれ」

決意と、
決断を。

「……………」
セイは、沈黙した。

さつきまでの会話は、セイにとって意味のわからないことばかりだ。だからといって質問できる空気でもなかった。今の今まで黙って傍観していた。

でも、だいたいのことは理解している。

魔女には何か大事な試験があり、クレイとフィンの試験内容がセイを異界に還すことだということ。

それがかなり無茶苦茶なことで、パラルザイドはその見返りに好きな位（おそらく階位のことだろう）をくれてやるということ。

そして二人がこの試験を受けたことで、今後二人とともに行動すること。

後は、自分の意思を完全に無視して話が進んでいることも。

いや、それに文句はない。

利用してくれと言ったのはセイ自身だ。それがどんなかたちをとろうが、かまわない。

元々、道なんてなかったのだから。

「……………」
セイはゆっくりとロープを背中に回す。フードのついたロープは少しだけ丈が長くて、地面にこすれるギリギリの長さだ。

あとは、肩に乗せるだけですべては完了する。

迷うことはない。

条件は、セイが覚悟していたものよりも数段よかったのだから。安堵と喜びをかみ締めながらセイはゆっくりとロープを肩に乗せ、

一人の情けない、でも優しい犬の顔をした少年のことが、頭をかすめた。

「あ……」

その手を、ピタリと止めた。

「どうしたんだい、セイ。まさか拒否するつもりかい」

「いえ、そうじゃありません。ただ」

大事なことを忘れていた。

ここに来た、もう一つの目的。それを忘れるところだった。セイは羽織りかけたローブを、すつと下ろした。

「貴様、何をしている！」

クレイが驚き半分怒り半分の声を出す。フィンも、不可解な様子でセイを見ていた。

セイはそれを受けながら、

「ひとつ、条件を追加してもいいですか？」

とんでもないことを、口走った。

場に居た全員が絶句した。無論、パラルザイドを除いて。

「ほお、なんだい。言ってみな」

「はい」セイは頷いて、「オレの牢屋にロアリタ族つてのの少年が一人います。その子を解放してもらいたいです。

事情を聞く限り、その子は別に悪さをしたんでもなんでもない。

むしろ、魔女に否がある。

だから、あの子を助けてあげてください」

「それに私たちのメリットはあるのかい？」

魔女の長は、どこか冷たい目でセイに投げかける。それは、先ほどまでとは違う。完全な、上に立つものとしての表情だった。

「今回の契約は、お互いのメリットと主張を考えた結果の結論だ。バランスのとれた、等価の取引といえるだろう。

そこにこれ以上の『何か』を望むというなら、それ相応の対価が必要なことぐらい、わかってるだろう」

パラルザイドの重圧とも取れる言い方に、

「違う、これは前提条件だ」

セイはそう言って、背中のように視線を向ける。

そこにあるのは、藍色のロープ。

「貴女は言いましたよね、『ロープを羽織った瞬間、セイという存在はこの国に対しての忠義を持ち己の存在に誇りを持つ魔女となる』と。」

でも……このままじゃ、オレは魔女に対して誇りを持つことなんてできない」

優しい少年だった。

他人のことを気遣って、泣きそうな顔で守ろうとしてくれた。

「あんなことを 罪もない者を断罪し、幽閉している魔女に、オレは誇りなんてもつことができない。」

オレを魔女にしたいというなら……それがそっちの挙げた条件のひとつなら

ヴァスタを解放することで、オレに魔女の誇りを持たせてくれ。

そうすれば、オレは喜び勇んでこのロープを羽織ろう」

年離れた魔女は、何も言わない。ただ、セイの瞳を覗き続ける。

まるで、心まで覗き見るかのようじ。

その瞳は、怖い。

でもセイはパラルザイドから目を背けるようなことはしなかった。それは単純に ヴァスタを助けたいという気持ちだが、恐怖に打ち勝ったからだった。

やがてパラルザイドは疲れたように、ひとつため息をついた。

そして、

「まったく、無茶苦茶言うねえ、この坊主は。自分がどれほど自分勝手なことを言っているか理解しているかい」

「まあ、それなりに」

セイの返事にパラルザイドはもうひとつ、さっきよりも深いため息をついて、

「わかった。まあ、それぐらいのことなら認めてやるよ。それでお

前さんが自分から魔女になることを選ぶってんならね」

諦めたように呟いた。それが、終了のベルだった。

(これで……やっと終わった)

自分自身を生かすための戦いが。勝利できたかは正直セイには判断しがたかったが、ただ『負けていない』という事実だけで今は十分だ。

「じゃあ、セイ。こんどこそローブを羽織な。そして、魔女となることを自分の意思で決めるんだ」

「はい！」

セイはローブをさきほどと同じように方にまわす。

もう、迷いはない。

むしろ、喜びや興奮、純粹な憧れが心を占めていた。

ゆっくりと、その両肩にローブを下ろす。

たった、それだけ。

パラルザイドは声高々に宣言した。

「ここに、セイが見習い魔女であることを認める。

見習い魔女セイよ、汝はこれより魔女としての誇りと国への忠義を胸に、魔法を役する者としてその生を全うしろ」

こうしてセイは、男ながらに見習い魔女となったのだった。

(高級感っていうのは、匂いにも表れるものなんだな……)

セイは呼吸するたびに鼻にかすかにつく匂いにそんなことを思い、ふかふかのソファ―に埋まっていた。

この包み込まれるようなやわらかさ 相当に値の張るものだろう。

それだけではない。この部屋にあるすべてのもの……机から小物のひとつひとつまですべてが質素ないでたちながらも高級なのが素人目でもわかった。

今用意されているカップとポットだって、軽く叩けばトランプの塔ごとく簡単にバラバラになりそうなほど、薄くそして緻密な華をとどこどころに咲かせている。見ているだけで、いろいろ満たされそう。そんなものに囲まれた中で、セイは思案する。

なぜこんなところに、

「セイ、紅茶は飲めるかい？」

「あ、ごめんなさい。飲めないんでコーヒーか水があればそれでいいです、パラルザイド様」

「様はやめてくれないかい、堅つくるしくて仕方ない」

「では、パラルザイドさん」

「まあ、及第点だね」

パラルザイドの部屋 つまり魔女議会議長の執務室にいるのだらうか、と。

時間は十分ほど遡る。

裁判の後、この世界に来た時の詳しい事情を再び繰り返し説明し終えた(この時も、部長とグランスイスの話は省いた)セイは、退室を命じられたクレイとフィンに当然のようについていった。

いや、それはセイどころかクレイもフィンも、ナーガルでさえも

当然なこととして考えていた。

「ああ、ちよつと待ちな、セイ」

パラルザイドが、そう呼び止めるまでは。

セイはいきなり名前を呼ばれて、なにかしらんと首をかしげながら振り返った。

「はい？ どうかしましたか？」

「クレイとフィンが試験の手続きでしばらく時間がかかる。その間お前さんに少しばかり聞きたいことがあるんだ。

悪いが、しばらく私に付き合ってもらおうよ」

有無を言わせない言い方だった。実際、それは命令だった。

(まあ……いまさら取って食うってことはないだろ)

そう判断したセイは、心配そうな表情を浮かべているフィンに「大丈夫だよ」と一言軽く言うと、「わかりました」とパラルザイドの言葉に頷いた。

「そして現在に至る　　と」

「ん？ 何か言ったかい」

「いえ、何でも。ただの妄言です」

パラルザイドはカップとポットを持ってセイの正面に座ると、カップの一つをセイの前に置く。

セイがなんとなくカップに目を落とすと、そこには若草色の液体で満たされていた。

「これは？」

セイは思わず尋ねると、

「グリーンティーっていうちょっと珍しいお茶さ。独特の風味が私は気に入っていてね。紅茶がだめだというからこれにしてみたんだよ」

パラルザイドは毒ではないことを示すように片手で、あまり行儀いいとはいえない様子で口に運んだ。

セイもそれに倣ってカップを傾ける。口の中に広がったのは抹茶

に似た渋みで、なかなか深みのある味だ。

(これは……湯飲みと和菓子がほしい)

目の前に広げられたクッキーその他の洋菓子をしながら、セイは自分の元の世界にあるお茶菓子を恋しく思った。

「どうだい？ 若者には少しクセがありすぎるかね？」

「いえ、オレの世界にも似たようなものがあるんで、むしろ口に合います」

「そうかい、これの良さをわかるなんて、なかなか通だね」

パラルザイドの楽しそうな声に、セイもつい声を出して笑ってしまった。

そして、気付いた。

(いったい、オレはここに何をしにきてるんだ)

少なくとも、パラルザイドと楽しくお茶会を開くためではない。

セイは割らないように細心の注意を払ってカップを皿の上に戻す。

カチャン、と響く音は始まりのゴングだ。

油断するな、気を引き締める。相手を安心させて情報を引き出すのは、尋問の常套手段だ。よく使え、使われ、セイ自身も使ってきた手だ。

隙を見せてはいけない。

「さて……じゃあ、そろそろお話を始めましょう。

貴女も、オレと午後のもうすぐお話を始めましょう。楽しいティーパーティーをしようって思ってたわけじゃないでしょう？」

セイは会話の主導権を握るため、自分から切り込んだ。パラルザイドはその一言で、目だけをこちらに向けて、カップを置く。

カチャン、という派手な音。

それだけで、セイは何とも言えない居心地の悪さに襲われた。それは、歳を重ねた人生の差か、魔女として生きてきた絶対的な存在感か。

ゆっくりと、無意識にツバを飲み込む。パラルザイドは、ゆっくりと立ち上がった。

「そうだね、時間もそうあるものじゃない。お茶会は、少し後にまわすでしょう」

パララウザイドはデスクまで歩くと、引き出しの一つから何やら大きな箱を取り出した。

それを見たセイは、

「あれ？ その色って……」

自分の羽織っているローブと見比べた。

そこには、まったく同じ色をした鮮やかな藍の色。パララウザイドは箱を大事そうに抱えて戻ってくると、机の上にそっと置いた。まるで、宝物でも扱うようなしぐさは、カップを乱暴においた姿とは似ても似つかない。

彼女は、ゆっくりと箱を開きながら話す。

「そのローブは、この中のものとセットだね。私の古い友人がもういらいないから、と置いていったものなのさ。」

私がつけていてもどうしようもないものだが、お前さんには必要だろう」

パララウザイドがまず取り出したのは、メガネだった。

楕円の細いフレームは黒く、少し野暮ったい感じがする。

しかし、それだけの……ぱっと見、普通のメガネにしか見えない。

「とりあえずかけてみな」

「はあ」

セイは生返事よろしく、手渡されたメガネをかける。今までの人生においてメガネなんてかけたこともなかったので、鼻の頭あたりがムズムズして、落ち着かない。セイは何度かかけたり外したりして、位置を調節した。

やっとじっくりくる位置を見つけられたセイは、改めてそのメガネごしに世界を見た。

しかし、世界は何も変わっていなかった。

見える光景も、風景も、特段の変化は見受けられない。

(……何なんだ、いったい)

期待を裏切られたような表情をするセイに、パラルザイドは楽しそうに口元を歪ませていた。

「それは、ある魔法がかかった魔道具だよ。どんな力があるか、考えてみな。当てたら、もう一つプレゼントをやるよ」

魔道具……そのままの意味で考えていいなら、魔法の力のある道具だろう。

(こんな何の変哲もないメガネにそんな力があるねえ……)

セイは疑問に思いながらも、思考する。

(メガネってことは、何かを見るためのもの……だよな。なら、もしこれが魔法とかそういうのに関係あるものなら、変化は絶対に視覚に来るはずだ。それで今のオレに必要なもの……なんていったら考えるまでもない。セイは自分の中で生まれたひとつの解答に確信する。

おそらく、間違いないだろう。

「ちよつと失礼します」

セイはそう言って立ち上がると、部屋の一角を占める本棚へと向かった。

そこには厚く古そうな本がぎつちりつまっていて、背表紙には『魔法』や『魔女』といった文字が乱舞している。

しかし、セイがくいつとメガネを押し上げると、背表紙は解読不能な模様になっていた。

「やっぱり」

あまりにも予想通りの結果にセイはそう呟いた。

「わかったかい？」

「はい」セイは頷いて、「これは、解読できない文字を利用者が理解できる文字に変換してくれる魔道具ですね」

セイの模範的な解答に、パラルザイドは手を打った。

「大正解だ。」

それには、『解析』という魔法が内包されている。まあ、大抵の文字なら読めるようになるだろう」

パラルザイドは満足げにそう言つと、

「じゃあ、約束のプレゼントだ」

今度は、箱の中から何かを乱暴に投げた。空中で弧を描くその何かに、セイは慌てて手を伸ばす。

「うわ……つと、つと　と！」

手の中で何度か跳ねるそれをセイは何とか落とさずキャッチした。手にしたそれは、一見鉄のような材料で作られている。銀色に光っていて、鉄パイプを溶接して作つてあるように見えた。

形は、カタカタの『ユ』に近い。

「ん、これは……何？」

セイが、なんとも言いがたい声をあげる。

いや、何かはわかる。

時代劇や映画村のおみやげで見たこともある。ただ、今この状況でそれが渡されることには全然理解が及ばなかった。

その特徴的な、武器としてはソードブレイカーとしての役割を果たすそれは

「それは、お前さんの魔法の杖さ」

どっからどう見ても、十手だった。

「はい？」

また聞き間違えでもしたのであろうか。どうやらこの世界にきてから少し耳が遠くなったようだ。これは大変だなあ、なんてセイが考える中、

「聞こえなかったのかい？　それが、お前さん　見習い魔女セイの魔法の杖だと言つたんだが」

パラルザイドは丁寧にわざわざ言い直してくれた。聞き間違いではなかった。

「……」

セイは沈黙したまま、手に握られた魔法の杖と呼ばれたものを観察する。

にぶく光る鉄色、『ユ』を模った形状、手に響くズシリとした確かな重さ。

握るところは、色あせた赤い布が乱暴に巻かれている。

「……すいません、オレには何をどうしても十手にしか見えません」
セイは自分の正直な気持ちを告白した。しかし、それはパラルザイドには届かない。

「これで……この杖をもったことで、今お前さんは完璧に魔女となった。

用事って言うのは、それだけさ。さあ、じゃあさっきのお茶会の続きでもしようかい」

表情を気のいいおばあさんに直したパラルザイドは、そう言ってクツキーを一枚つまんだ。セイはというと……いまだに固まっていた。

(ええと……さて、落ち着こう)

まず、右手に握ったこの十手が魔法の杖だということ。

つつこみどころは多々あるが、いい。確かに、長さといい見た目といい魔法の杖といえなくもない。ただ疑問だったのは、用件がそれだけという点だ。

それは、あまりにも腑に落ちない。

「パラルザイドさん？ 貴女オレに聞きたいことがあるとか言ってますでしたっけ？」

「ああ、そのことなら」

パラルザイドはクツキーを飲み込むために一拍置いてから、

「お前さんをここに連れてくるための方便さ。聞きたいことなんて特にありやしないよ。今のところ、さっきの話でことは足りている」
ケロリと白状した。

でもセイはそれに納得しない。

「それなら何でこの部屋につれてきたんですか？ このメガネも杖

？ にしたってさつきあの場所で渡せばよかっただけの話だ。

この部屋につれてきたからには、他に理由があるはずだ」

セイのまっすぐな瞳に、パラルザイドはひとつ嘆息する。

「お前さんに興味があったから、って言って信じるかい？」

「ウソとは思いませんけど、真実でもないと思います。」

ウソをつくことと真実を話すことは違うものなんですよ、貴女の考え方で言うと」

「いやな言い方だね」

「お互い様です」

セイの歴然とした答えに、パラルザイドは呆れたように、でもどこか楽しそうに肩をすくめた。

「ま、確かにそれだけじゃない。」

一つだけ たった一つだけ、お前さんに聞きたいことがある」

パラルザイドは内緒話でもするように身を乗り出して、言った。

「セイ お前さん、昨日何とやりあった」

脳裏に浮かんだのは、あの人形のこと。

わざと魔女たちには隠蔽していた、『闇』と名乗った存在だった。

セイは、わずかに息を呑む。

(裁判のときに聞いてこなかったから、バレてないかも……なんて思っていたけど)

甘い考えだったらしい。

セイはパラルザイドの目を見て、そう判断する。下手なウソはつかないほうがいいだろう。この人とは、駆け引きするには分が悪すぎる。

「気付いたのは、いつですか？」

「お前と会ってすぐさ。いろんな力の残滓の中に、見知った嫌な感覚が混じってるのを感じてね。」

それが聞きたくてお前さんをここに連れてきたのさ。ここは、結界で囲まれているからね。さつきまで付きまっていた邪魔な覗き魔も、ここには入って来れない。知られると、面倒なことになりか

ねないからね」

(そんなものがついていたのか……)

セイが知らない事実に驚いているのかまわず、魔女は問うた。

「まあ、そのローブを羽織ったのなら、もう問題はないさ。それは、そういうものを受け付けないからね」

「はあー、魔法のローブってのは便利なんですね」

セイが朝焼け色のローブに感心すると、パラルザイドは一瞬優しそうな、誇らしそうな顔をした。しかしそれもすぐに消えて、真剣な面持ちになる。

「話を戻すが、お前さんがやりあったものに、私は覚えがある。忘れもしないよ。あれは『闇』の魔女の力だ。そうだね？」

「……そこまでバれているなら、隠す必要はないですね」

セイはそう前置きして、昨晚のことを語った。おかしな人形の話と、人形の背を割って現れた怖気のある闇色の何か。

そして人形が『闇』と名乗ったこと。

すべてを聞いたパラルザイドは、ふうむとうなった。

「面倒くさいことになったね。セイ、お前さんはどうやら『闇』のやつらに目をつけられたようだよ」

「……マジですか」

ある程度予測はしていたものの、改めて言葉にされるとショックを隠せない。

「そもそも『闇』ってのは何なんですか？ 穏やかじゃないのはわかりますけど」

「悪いが、それは私たちが聞きたいくらいさ。

とりあえずわかるのは、私たち魔女にもない力を使うことと、この世界そのものを憎んでいるってことさ」

世界を憎んでいる。

深いな、とセイは思った。

それがどんな感情の発露によってできた憎悪かはわからないが、とてつもないエネルギーだ。世界を憎むことなんて、世界を愛すこ

との何十倍も難しい。

そしてそんな連中に自分がからんでいることに、また深くため息をついた。

「あゝ、頭痛くなってきた」

「おやおや、若いのにだらしないね」

「若さは大きな悩みを伴うものなんですよ、古来から」

「異世界人でもかい？」

「魔女がそうであるのと、一緒です」

そうかい、とパラルザイドは豪快に笑った。

その時、ドアを叩く音が響く。扉の奥からは、くぐもった声。

「パラルザイド様、クレイとフィン両名の手続きが完了いたしました」

「わかったよ。意外にはやかったね」

パラルザイドが扉からセイに視線を戻す頃には、セイは十手をべルトにひっかけて立ち上がっていた。

「行くのかい？」

「他の行く場所もないですからね。立ち止まるわけにもいきませんし」

そう言つと、セイはメガネと十手を指差した。

「これとこれ、あと他にもいろいろありますがとうございました」

「何、気にすることはない。どうせ私が持っけていてもしょうがないものさ。お前さんが使ってくれるなら、元の持ち主もよろこんでくれるぞ」

最後に、と経験を積み重ねてきた魔女は少し低い声で言った。

「気をつけることだ。こちらでも調べてはおくが、『闇』の連中は私らから見ても底が知れない。ぼんやりしていると、厄介ごとに巻き込まれるよ」

ドスの聞いた警告に、しかしセイは振り返ると、

「この世界に来た時点で、一番大きな厄介ごとに巻き込まれていますよ。いまさら一つや二つ増えたところで、どうってことないです。」

安心してください　とびっきりのハッピーエンド、ご覧に入れますから」

笑ってそう言った。

その姿を見たパラルザイドは何か納得したように薄く、でもどこか優しげに微笑んだ。

「……受け継がれるもの、か」

「はい？」

「行くといい」パラルザイドは追い払うように手を振って、「お前さんに歴代の魔女と精霊の加護があることを、せいぜい祈っておいてやるよ」

そのセリフを背中に受けながら、セイは重い扉を開く。いよいよ、あるのかどうかもわからない運命に、踏み出す。

大きな扉は、まるでこれからの出来事のつらさや苦しさを物語っているようにも見えた。

セイは、それをゆっくりとくぐる。

そんな、どこか物語の始まりのような場面　そんな中でセイの心あったのは、

（ああ……いよいよ変な運命に巻き込まれ始めたぞ）

さつきまでの毅然とした受け答えとは裏腹な、ただの一中学生でしかないセイだった。

（ああ、締まらないなあオレ）

こうして、十手を片手に世界を救う少年魔女の物語は幕を明けたと、せめてそんなかつこいいフレーズが似合う人間になりたい

と、切に願うセイだった。

最近、少しずつですがPV数やユニーク数、それにお気に入りが増えてきてうれしい限りです。牛歩のごとくな更新速度ですが、今後もどうか見捨てずお楽しみください。

(4-2) 街とフィンと女の姿

街並みは、一見するとファンタジーでありがちな中世のヨーロッパのようだった。

レンガで築かれた家々に、石できつちりと舗装された道路。

ここは市場の主道路なのか、道の両側には簡易式のテントやらまんま露店のような店が出ていて、食べ物や装飾品などが無計画に並べてある。

パツと見ると、テレビなんかで見た地中海あたりの市場にいるんじゃないかと錯覚する。実際は自分の国から出たことがないので想像にすぎないが。

しかしそんな想像も、前を向いてみるとすべて微塵に打ち砕かれる。

視界を埋めるそれらは、この世界が自分のいた場所ではないことを証明していた。

黒、黒　　ひたすらに、真っ黒だった。

道を歩くのは、すべて黒かそれに近い暗い色の服を着た女性や少女だけ。

すなわち、見渡す限り魔女だった。

後ろを振り向いても、右を向いても左を向いてもその光景が変化することはなかった。

そんな中、

「……………はあ」

挙動不審で、どこか疲れたような息を吐き出すのは、この世界でおそらく一人だけの男の魔女だった。

そのため息が聞こえたのだろう。前を機嫌よさそうに歩いていた赤毛の魔女　　フィンは、くると踊るかのように振り向いた。

「セイ、どうしたのさ。ため息なんかついてると、不幸が寄ってくるよ?」

「いや……ばれないもんだなあ、って思ってた」

道を歩く魔女たちに当然のように見向きもされないセイは、そう呟いてのっそりと歩みを進める。

セイはパルザイドの部屋を出た後、半ば追い出されるようなかたちで時計塔の外に放り出された。そして待っていたフィンと合流し、今こんなふうには街の案内をもらっている。

ちなみにクレイはいない。フィンが言うには「あいつは好かん。

お前が面倒見てやれ」と目を吊り上げながら国立の図書館へ調べ物にいったらしい。

(それに関しては、正直助かったかな)

そんな顔で横を歩かれたら、ただでさえ落ち込んでいるテンションがさらに落ち込んで絶望になりかねない。

「はあ、でもやっぱり……不幸だ」

そう言ったセイは露店に飾ってあった鏡をちらりと覗く。そこにセイのテンションをひたすらに下げている原因が映っていた。

メガネをかけた真面目そうな少女の姿が、そこにはいた。

自己主張の強い、光の加減でオレンジにきらめく頭髪とは裏腹に、ほっそりとした体躯の少女は体調が悪そうにうなだれていて、影が落ちていたようだった。

「ビツクリだよ。髪を伸ばす魔法だけで、ここまでかわいい女の子になっちゃうなんてさ！ これじゃ外見でバレることは絶対にないね、女の子にしか見えないもん！」

「それはわざと言ってているのか、それとも天然なのか。どちらにしても性悪だぞフィン」

「なんだよ褒めてるのに」

「けなしてるから、それは」

フィンの膨らんだ頬を指で押さえて、セイは即答した。

「ぶー、という気の抜けた音がした。

「ま……気にしてもしょうがないか。うまく魔女に紛れ込めたのは、プラスといえどプラスなことなんだし」

「そうだよ、顔の形を変えずに済んだだけでもかなりお得だと思うね、ボクは」

なんでもないことのように、フィンは物騒すぎる言葉を口にした。

……冗談じゃない。

「……もしオレがこの顔じゃなかったら、そこまでやられてたの？」
「たぶん」

平然と頷くフィンに、セイはこの時初めて自分の女顔に感謝した。そのコロコロと変わる表情に耐え切れなくて何かがあったのか。フィンは、抑えた口元から笑いを漏らした。

そしてそれは、どんどん大きくなっていく。

「何さ？」

ジト目で見つめるセイに、フィンは何とか呼吸を整えて応えた。

「いや、ねえ。魔女議会議長のパラルザイド様に　いくなれば魔女そのものにケンカしかけて平然どころか笑顔さえ浮かべてた人が、目の前にいる人間だとは思えないなあ〜って。

あの時のセイはボクから見てもすごかったもん！　怖くなかったの？」

セイはその質問に、

「怖かったさ」

それこそ即答した。

「恐かった。思い出すだけで、足が震える」

その言葉がスイツチだったかのように、セイは自分の足にきゆうに力が入らなくなるのを感じた。

もちろん、それを悟らせるようなバカはしない。セイはよろけなように足取りを少しだけ緩めた。そうしないと、倒れてしまいそうなのがした。

胸に手を置いて、深く深く　まるで今まで今までの重荷を下ろすように、戦うために捨てたものを拾い集めるように呼吸する。

二度三度繰り返し返して、やっと足の感覚は元に戻ってきた。

よし、もう大丈夫。

いつもの、自分だ。

セイは歩くスピードを元に戻して、背中を支えてくれていたフィンに笑顔を向けた。

「……余裕なんて、全然なかったさ。ただ、それをがんばって考えないようにはしてただけ」

「そうなの？　ボクはセイが楽しんでるように見えたけど」

「虚勢だよ、そんなのは。ああいうのは、場に吞まれた時点で負けるってのは知ってたし。」

無理でも、余裕のあるフリをする必要があったの」

「でも、結局パラルザイド様には勝てなかったじゃん」

痛いところをピンポイントで突いてきた。

「……いいの、負けもしなかったんだから。おかげで、オレは今ここにいるんだし」

「それ、自慢げに言えることかな？」

「言えるさ。こっちの世界ではどうだか知らないけど、オレの世界じゃ自分の命運をかけた勝負なんて、する機会も必要もなかったんだから。」

自分自身の未来を賭けた初めてのゲームで引き分けに持ち込めたなら、ビギナーズラックでも上々さ」

セイが子どものように口をとがらすものだから、またフィンは楽しそうに笑った。

その笑顔に、怒る気も失せた。

(まったく……反則だあ)

「ところで」セイは一つ咳払いをして「これからどうするんだ？」

何だかさっきからただてきとくに歩きまわってるように見えるんだけど」

「そのとおりだよ」

フィンはコクリと頷いて、

「今日の目的はこの街を歩き回ることだもん。」

セイには正体見破られないように、この世界のことを知ってもら

わなくちゃいけないからね。何をするにもこの街が基点になることは間違いないんだから、一人で歩いて迷子にならないぐらいにはなってもらわないといけないし。

だからこの街を案内しながら色んなところに案内すれば、一石二鳥でしょ？」

それに、とフィンはクリスマス前の子どものようにニツと笑って、「興味あるでしょ、魔女の街。今日はボクのとっておきを案内したげる！」

言うが早いか、フィンはセイの手をとって走り出した。

セイは前のめりになりそうなのを何とかこらえた結果、自然と足が駆け出す。

「うわ、ちょっと！ フィンこける、こけるから！」

「じゃあ走る！ おいてくよ！」

フィンは手を離す様子も、スピードを緩める気もないようだ。セイは諦めて、フィンに引つ張られるようにしながらも走り出す。

いや、正しい表現で言えば『走り回る』が適切だった。

フィンはハイテンションそのままに、街の隅々をセイに案内した。中央広場の七色の光を空に打ち上げる噴水に、ポストから自分自身に翼を生やして飛んでいく手紙たち。

大通りに面する店の、実際の小人たち（フィンの話では、妖精の一種らしい）が演奏するオルゴールに、ホウキで空を飛んでいる魔女に注意をする漫画の幽霊みたいな何か（街では、決められた場所と条件以外では飛行は禁止されている、ということをフィンが言っていた。セイの世界でいう、交通規制が魔女たちにもあるらしい）。どれもこれも見たことがないのは当たり前で、まるで児童文学の世界から飛び出してきたような光景に、セイは一つ見るたびに「うわあ」とか「おお」とか時には言葉をなくしていた。

それを見たフィンも、時にはバカにするように笑い声をあげ時にはセイと一緒に驚き、からかったりして遊んでいた。

フィンはセイをつれまわしながら、この世界での基本的なことを

教え込んでいった。それはお金のことであったり、食べ物のことであつたり、生き物のことであつたり。

そんな中、発見がいくつあつた。

まず、魔女が魔法をあまり多用していないこと。

店先にはランプやら包丁といった日曜雑貨も並んでいた。

「これって、魔法があればいらないんじゃないのか？」

というセイの問いに、フィンは、

「魔女は魔法をそうバカバカ使つたりはしないんだよ。魔法の源魔力つていうのは限られてるし、無駄遣いできるようなものでもないもん。必要なことしか、魔女は魔法を使いません」

とどこか怒つたように説き伏せられた。ちなみにその後ろで、太つた魔女が火の魔法をライター代わりに使つていたのはご愛嬌。

そしてもう一つは、元の世界と呼称どころか姿かたちまで同じようなものが多々あつたこと。

赤く堅いものところには人参、赤くツヤツヤ熟したものにはトマト、緑のテカテカと光つた野菜にはピーマンと、でかでかとした字で書いてあつた。

(この世界、オレの世界ともしかしたら多少つながりがあるのかな?)

それはうれしい誤算だつた。とりあえず、ものの名前をもう一度逐一覚えなおす必要がない。生活していくには、なんとか不便せずつに済みそうだと、セイは胸をなでおろした。

そんなこんなで、どれほどの時間をかけただろうか。

一通りの道と建物の案内を終えて、二人は町の中心に位置する広場の階段に腰を下ろしていた。少しだけしびれる足と、朱に染まりつつある空が、セイには心地よかつた。

興奮は、未だ体の中でくすぶっている。やっと実感できた。ここは、ファンタジーそのものだ。魔法も、魔女も、妖精もある今までとは根本が違う世界。

セイはそれに畏れをほとんど抱かなかつた。むしろ、喜びと内か

らはじけるような好奇心がそこらじゅうにひしめいていて、人目がなければ叫びだしてしまいそうだ。

「いつそ叫んでしまおうかな……」

セイがそんな危険かつはた迷惑な行為を実行しようと本気で考え始めたとき、

「セイ、買ってきたよ」

屋台から戻ってきたフィンは、手に持っていた二つの木のコップのうち一つをセイのほうに差し出した。

「ありがとう」

セイはそれを受け取って、口に運びながら一息つく。口内に広がる柑橘系の甘みが、疲れを取り除いてくれるような気がした。フィンはセイの横にちょこんと座ると、手足をぐーっと猫のように伸ばした。

「いやー、歩いたね。ちょっと一気に回りすぎたかな？」

セイはそれに首を横に振る。

「大丈夫、おかげでこのあたりの地理は大体頭に入ったよ。大通りを歩くようにすれば迷うこともないだろ。」

それにこの世界のこともしわかったから、ボロも出さずにすみそうだ」

「そか。それなら万事OKだ」

フィンはジュースをストローでズズズと吸いつつ、どこかうれしそうな表情を見せた。

セイはそれを見て、

「ありがとう、フィン」

自然に、いつもどおりにお礼を口にした。

そう、それはセイにとっては当たり前で、当然のことだった。だっていうのに、

「……………」

「フィン、その目はやめてくれ」

まるでおかしいな生物を見るような目つきに耐え切れなくなったセ

イが、そう不平を漏らす。今日も何度か、こついつ目を向けられることがあったのだ。

フィンはそれでも同じような視線をしばらく向けた後、

「……はあ。なんでセイがお礼を言うかなあ」

ため息まじりにそんなことを呟いた。

「なんでって……当然だろ。昨日も結局言い忘れてたし、今日の今日までフィンには世話になりっぱなしだからだよ。

今のオレじゃ、気持ちを表すことぐらいしかできないんだ。ゴメン」

「今度は謝るし……」

しまいには眉間あたりに指をおいて呆れるフィン。

セイにはそれがどんな理由でとられたリアクションかはわからなかったが、原因が自分であるうことはいくら何でも感知できた。

と、

「なんで？」

突然フィンはがばつとセイに顔を寄せた。

その距離、たったの三十センチ。あまりの近さに、さすがのセイも脈が跳ね上がった。

鼻先に、女の子特有の甘いにおいとほんのりと若草のような香りが漂ってくる。フィンのクリクリと丸い瞳は、セイのみを映し出している。

ただ、セイの胸を締めるのは思春期特有のドキドキより、目の前の少女が発しているとは思えない

(なんで、こんなに痛そうな表情をするんだろう)

心を圧迫するような迫力だった。

「あ、あ、フィンさん？」

「なんでそう普通にいられるの、セイは」

それは、魔女から異世界の少年に対する問いかけだった。

「今の状況、セイなら理解してるよね？ 魔女に捕らえられて牢に入れられて閉じ込められて、あげく利用されて未来さえ 魔女に

なること、自分の存在価値さえほとんど強制されてるんだよ？

なにより、こっちの世界に来たのがパルザイド様の推察通り魔法のせいだとしたら、結局セイは魔女のせいでこんなつらい目にあってる。

なのにどうして　　魔女を、ボクたちを恨んだり怨んだり嫌ったりしないの？」

心底わからない、そう言いたげな口調だった。フィンにはわからないのだ。ここまでひどい扱いを受けながら、笑っていられるセイが。

魔法を見て、目を輝かせるセイが。

『ありがとう』なんて言葉を笑顔で　　ウソじゃなく吐き出したセイが。

自分を嫌いだとか邪魔だとか、そんなことさえ思いついていなさそうな表情が信じられないのだ。

しかし、セイの出した答えは簡単だった。

「だって、それじゃ誰も幸せになれないじゃないか」

単純明快、むしろそれこそなんで聞いてくるのかわからないという表情を隠さず、ハッピーエンド主義者は語る。

「確かに、オレは魔女にいい目にあわせてもらってはいないね。フィンの言つとおり、よく考えたら全部魔女のせいかもしれない」

「なら」

「なら、魔女を恨めば、怨めば……オレは、そしてフィンは幸せになれる？」

フィンは応えなかった。いや、その必要さえなかった。

お互いがお互いを恨みあい疎みあい嫌悪しい　　その先にあるのは、絶対的な絶望だ。

ふたつの平行線は決して交わることなく、理解しあうことなどもちろんなく。

結末は、明けることのない闇……救済なんて文字が存在しない、アンハッピーな物語。

「そういうのオレはイヤなの、大ッ嫌い。胸クソ悪くなる」

せつかく言葉をかわせるのに。

せつかく気持ちを持つてるのに。

「みんな幸せなのが、一番だろ？ 特にオレは、ハッピーエンド主義者って呼ばれるほどそれが大好きだから。

そのためなら、どんなことでもできるって考えてる」

「 嫌いな相手を、好きになることも？」

「 誰も嫌いにならない、ってことをさ」

偽りが無いことを証明するように、セイは二カと微笑んだ。

フィンはそのに一瞬心を奪われたように放心し、そしてその後呆れたように……でもどこか羨望するような、セイの目から見て花びらのような薄い笑顔で、

「セイってさ、自分の世界で人がいいって言われなかった？」

「いい人、というのは女性陣から深く色んな意味を含んで言われてたけど……」

「うん、その通りだね。だまされやすそうだ」

そんな軽口を叩いた。なにかそこはかとなく馬鹿にされた気配を感じ取り、セイはやり返す。

「もちろん、それだけじゃない。

人を見る目はそこそこあるつもりだぞ、これでも。オレはフィンなら信用してもいいと思っただから」

「ウソだ」。どうせ魔法が好きだからとか、この街を案内してくれたこととかボク自身が魔法を使える魔女だから……信頼の大元は、こつちでしょ？」

「……………」

「あれ、凶星で声も出ないかにや」

くやしいが、そのとおりだった。

(だって、仕方ないだろう?)

今まで自分が読んだり書いたり想像して憧れていたものが、目の前の現実として存在しているのだ。

どうやったたら、嫌悪できるといっのたろうか。

何だか負けた気分になって、コップの中に残るジュースを泡立てながら、セイは訊ねる。

「なんでわかったのさ、まるでテレパス能力でもあるみたいだ。：

まさか、魔女にはそんな力もあつたりしないよな？」

だとした恐ろしいことだ。しかしフィンは「ないよ」とその被害妄想を否定して、

「さっきのセイの表情見てたら、十人中十人は最低でも気がつくよ。正直、ほかの魔女が気付かないかとヒヤヒヤしたんだから」

言ったフィンはもうさきほどまでのつらそうな表情ではなくなつていて、セイはそれにどこかほつとした。

何度もフィンの笑顔に助けられ、励まされたからだろうか、セイは彼女には笑っていてほしいなんて子どもじみたことを思っていた。もちろん、恥ずかしいのは自覚しているので口には出さないが。

セイは頭の中の言葉をごまかすように、残りのジュースを飲み込んだ。

「さて、と……この後はどうするんだ、フィン」

「家に帰るよ」フィンは立ち上がりながら「これからセイが暮らすことにもなるんだし。それに日常のこととはともかく、魔女のことを詳しく話すには帰らないと。誰かに聞かれてもしたらコトだし」

セイの手からコップを奪うと、外灯の下に置かれたゴミ箱にポイと投げる。コップは見事にゴミ箱に吸い込まれた。

「さ、行こっか」

「ああ、そだな」

セイは頷くと、ゆっくりと腰を上げると、箒置き場の方向に向かおうとした。

「あら、フィンさんじゃありませんこと？ 落ちこぼれの貴女がこんなところで油を売っていいのかしら？」

その高飛車、中身を伴わない威圧的なセリフ、小馬鹿にした口調は二人の背中からかけられた。

セイはそれに思わず、

「うわぁ……」

なんて中途半端な声を漏らしていた。

(なんてわかりやすい)

これは絶対アレだ。お嬢様とかでよくある、高慢ちきでワタクシ至上主義で権力絶対とか考えている登場人物だ。

声だけ聞いてこれほどわかりやすい、定番を押さえたキャラクタ―に出会ったのは初めてだった。

まるで、マンガみたいなヤツだ。

興味がわいてしまったセイは、その人物を視界に収めるべく、

「セイ、振り返っちゃだめ。疲れるだけだから」

振り向こうとしたところを、フィンに頭をがっちりホルドされた。見ると、話しかけられたただけだというのに、フィンはすでに疲労きったような顔をしていた。

「フィン、知り合いじゃないのか？」

手をほどこきながら尋ねたセイに、フィンは一つ頷く。

「一応、ね。アカデミー　セイ風に言う和学校？　のときのクラスメート。どんな魔女かは　わかるでしょ？」

「ああ、わかる」

楽しいぐらいに。

「ちょっと貴方たち、このワタクシが話しかけてあげているというのに、振り向かないとはなにごと」

「もしかしてさ、後ろの子って権力者の娘とかだったりする？」

「うん、後で詳しく説明するけど、魔女の中で最高の位であるウィザードのお弟子さん」

「うっわ、わかりやすい……」

「ワタクシの話をききなさい！」

大絶叫に、セイとフィンは指で耳栓を施した。

「エクシャ様、落ち着いてください」

「そうですね、落ちこぼれとその仲間なんですから、高貴なエクシャ様の言葉を理解できなくても仕方ありませんよ」

キシシ、といやらしい笑いが二つ。どうやら、エクシャと呼ばれたツンツン魔女と合わせて三人組らしい。

（また……なんてお約束な）

そして、同時に思う。さっきフィンが振り向くのを止めたのは正解だった、と。

古今東西、こういうキャラクターは無駄に因縁をつけては厄介ごとを運んでくるタイプだ。かかわらないのが一番の解決策。

なので、

「……そうですね。では、貴女方にもわかるように言いますわ。こちらを見なさ」

「いこ、セイ」

「ああ」

なかったことにして、二人はダツシユの体勢をとっていた。

触らぬ神にたたりなし、逃げるが勝ち、逃げるときは脱兎の如く。二人が今まさに走り出そうと足に力を込めた。

しかし、このときにすでに気付いておくべきだった。こういうキャラクターは、遭遇した時点で終わりだということに。

「……セイ？」

エクシャが、そうポツリと呟いた。

「どうしたのですか、エクシャ様」

「いえ……そのような名前の見習い魔女いたかしら、記憶にありませんわ。」

オレンジの髪に藍色のローブ。そのような無駄に目立つ組み合わせの魔女、一度見れば忘れられないと思うのですが」

セイとフィンは顔を見合わせた。お互い、引きつっていた。

危険な流れだ。

エクシャにセイの見覚えなんてあるはずがない。セイは昨日この

世界にきて今日魔女になったのだから。

そしてエクシヤは、問うた。

「貴女、どのだれのですの？」

初日にいきなり、もっとも聞かれたくなかった質問をぶつけられた二人は、背をむけたまま焦っていた。

（ど、どど……どうしようセイ！）

（オレが聞きたい。とりあえず振り向かないとマズインじゃないか？）

（でも振り返ったらもっとマズイ展開が待ってる気がするー！）

（でも、このまま逃げたら怪しまれるだろ。あのタイプ、そういうことすると絶対無駄な大騒ぎになると思う）

（う……）

フィンが言い返せないのは、今までに似たような経験があったからだろうか。やがてフィンは、意を決したかのように拳をぎゅっと握った。

（しょうがない、振り向くよ。セイはなるべく声を出さないで。顔は大丈夫でも声はギリギリの線だから、バレかねない）

（わかった。無口キャラを演じてればいいわけだな）

（あと）

フィンは念を押すように、

（がんばって我慢してね）

意味のわからないことを付け足した。

「はい？」

「やあ、エクシヤ。久しぶりだね」

フィンが明らかかな作り笑顔で振り向いたのを見て、セイも言葉の意味を考えながら振り向くと、

ドリルが生えていた。

「！……………！？」

あわてて視線を地面に逸らし、口元を押さえた。

（あ……危なかった）

あと少しでも遅ければ盛大に嘔き出していた。

（我慢しろ、っていうのはこのことか）

セイは納得しつつ、心を落ち着かせ覚悟を決めてから改めてエクシヤの姿を捉える。

彼女は、クレイとはまた違う美しさをもつ少女だった。

豪奢、といえばわかりやすいだろうか。均衡のとれたプロポーションに、ブロンズの瞳と髪。どこか高貴さを感じさせる相貌は、予想通りお嬢様やお姫様といった印象だった。

それだけならば、そのみなら、セイはエクシヤの美貌にただ見とれるだけだっただろう。

モミアゲあたりから生える、縦ロールさえなければ。

「……すごいな」

それ以外言葉が出てこない。バネのようにカールしている髪の毛は異常なはずなのに、エクシヤには他にないというほどたまらなく似合っている。

口調といい、態度といい、家系といい完璧だった。

セイがこみ上げてくる笑いの衝動を押し殺していると、エクシヤが不審そうにセイを見上げた。

「やっぱりワタクシ、貴女に見覚えがありませんわ。失礼ですが、名乗っていただけませんかしら？」

「その子はセイっていうの。色々事情があつてつい最近まで別のところで魔法を習ってたんだって。ボクも最近知り合っただばかりなんだ」

エクシヤの問いに答えたフィンに、セイも肯定するように頷く。

（それにしても……）

セイは横目でフィンを眺める。

フィンはいつもの笑顔で、平気な顔してウソをついていた。そこに、違和感なんて微塵も感じさせない。

彼女にとって、まるでそれが日常だと言わんばかりの、それは完璧な偽装だった。

「フィンさん、ワタクシは貴女に尋ねたわけではないのですが？」

「セイはまだここに着たばかりだし、なにより人見知りが激しくて無口だもん。会話しようとしたら日が暮れちゃうよ？」

「すでに日は暮れています」

「……………」

どこか論点のズレた返事をしたエクシヤは、ずいとセイににじりよった。

その（縦ロールの）プレッシャーにセイは思わず半歩後ずさる。

「あら、怖がらなくてもいいんですのに。とって食べたりなんかしませんわ」

エクシヤは優越に浸るような顔をした後、

「貴女、師は誰ですか？」

「…………師？」

思い書いた文字に誤りがなければ『師』　つまり師匠のことだろう。

「別に…………いないけど」

「いない？」

エクシヤはそれを聞くと、

「…………なんですか、どれほど特別な教育を受けた魔女かと思えば、その赤いのも同じ落ちこぼれでしたか」

ピクリ、と。

フィンの完璧だった笑顔が、崩れたような気がした。しかし、セイが見たフィンの表情は、変わらず笑顔だ。

「落ちこぼれなんてひどくないかな？　薬学なら、ボクのほうが成績よかつたじゃん」

「…………！　それでも、落ちこぼれは落ちこぼれですわ！　ウィザードを師に持つワタクシと、師匠すら持たないフィンさんとは、環境も立場も何もかも歴然とした差がありますわ！」

言い切ったエクシヤに、チビとがたいのいい舎弟っぽい魔女二人が「そうだそうだ」「落ちこぼれ」と小学生並みのボキャブラリで合いの手を入れる。

しかしそれでもフィンに困ったような笑顔を壊さない。むしろ、顔を険しくしていたのはセイのほうだった。

頭では「落ち着け、落ち着け」と繰り返しているのだが、まるでそれが憤怒の呪文のように唱えるたびに怒りが高まっていく。

そう、セイは頭にきていた。

(何なんだよ、こいつら)

急に話しかけてきたかと思えば、妙な因縁をつけてきて。

自分のことだけならまだいい。所詮異端の存在だ、我慢もしようでも　フィンに、何度も救いの手を差し伸べてくれた少女をバカにされるのは、許せなかった。

(ダメだ、我慢しろ。フィンにもそう言われたじゃないか)

拳をきつく、鬱血しそうなほどに握る。その思いが通じたのか、エクシヤは興味がつきたと言いたげに振り返った。

「ワタクシ、貴女たちのような人の相手をしているほどヒマではありませんの。失礼させていただきますわ」

フィンが、その言葉に安心したように心を緩める。セイも大事にならなかつたことに安心して方の力を抜いた。その時、

「フィンさん、最後に忠告です。」

身の程をわきまえなさい。幼いころに師から捨てられた貴女がワタクシと対等に話すなんて、おこがましいことこの上ないですわ」
まるで心のスキをつくように、言葉を無自覚に刃物変え、エクシヤは放っていた。

その言葉に、フィンの顔が揺らぐのを見たセイが　思うより早く、エクシヤの襟を締め上げていた。

「何を、するのです!」

「黙れ」

セイの言葉が、低く重く響いた。

ひつ　と、エクシャが怯えた声を喉から漏らす。それでもセイは、力を緩めようとはしなかった。

「お前、今なんて言った」

それは。

それは、だめだろう。

安易に、そして何より侮蔑の意味を込めて使っている言葉じゃない。

おそらく、フィン知られたくなかった。フィンの今の表情が、何よりの証拠だ。ほんの一瞬、まばたきのような刹那の間だった。が、たしかにフィンの表情がクシャリと歪んだ。

まるで、泣きそうに。

それを必死に我慢するような小さな子どものように。それを確認してしまったセイに、もう堪えることなんてできなかった。

「人の傷をベラベラベラベラベラ　誰か傷つけて、貶めて、苦しめる姿見て、お前は楽しいのかよ！」

あまりのことに、エクシャの舎弟二人はオロオロするだけで何もできない。エクシャも、体を強張らせるだけだ。

その姿に、むしように腹が立った。

自由な右手は、我慢したときのままグツと拳を握っている。指を畳んだことで、立派な凶器となる拳骨。

その用途は、ただ一つだ。

セイはゆっくりとその凶器を振りかぶると、

「セイ、だめ！」

その叫びに、エクシャの頬から十センチのところまで止めた。

セイが、振り向く。

「セイ、だめだよ」

少女が、強い意志を目に宿して放った一言。それで、セイは今の自分が何をしようとしていたかを理解した。

「う、あ……ご、ごめん！」

セイの腕から謝罪とともに力が抜けた。どさりと情けなくしりもちをついたエクシヤを見て、慌てて舎弟の二人が駆け寄ってきた。

セイはその姿をみて、

(……最悪だあ)

女の子に手をあげるなんて、最低。

男として、最低ランクだ。

二人に手助けされて立ち上がったエクシヤは、真っ青だった顔色を真っ赤に染めると、ギロリとセイを睨んだ。

「……こんな、こんな屈辱を受けたのは生まれて初めてですわ！」

セイと言いましたわね！？ 覚えていらっしやい！ この借りはすぐに何十倍にもして返却させていただきますわ！」

声高に宣言すると、怒り狂う心の内を隠さず態度に表しながら、エクシヤはこの場を去っていた。

残されたのは、元の雑踏だけが響く静寂。それを、コツンという音が打ち消した。

「こら、セイ」

「ごめん」

フィンが背伸びして叩いた一撃は全然痛くなかったが、心にはひびいた。問題を起こすな……色んな人からそう忠告を受けていたというのに、なんとという失態だ。目も当てられないとはまさにこのことだ。

「どうしてあんなところで怒ったの。別にセイのことを悪く言われたわけじゃなかったのに」

「だからだよ」

自分のことじゃなくフィンのことを言われたからこそ、許すことができなかった。

フィンは、ふうと小さく息を吐く。

「まあ、なんでセイが怒ったかはだいたいわかったよ。……本当、人がいいんだから。」

ま、しょうがないんだよ。エクシャの言ったとおりボクは」

「ストップ」

セイはフィンを遮った。

「それは今は聞かない」

そして、耳を塞ぐジェスチャーをフィンに示す。

「そういうのは　フィンにとって大事なことは、フィンがオレに話したい、聞いてほしいと思ったときにしてくれ。こんな形で、しようがないからってという理由で聞きたくない。」

オレは、フィンが話してくれるときが来るまで、この話は聞かなかったことにする。

「それでいい？」

その痛みが理解できるからこそ、セイはフィンに無理やり話を聞いたりしたくなかった。

「フィンはその言葉を飲み込むのに数秒かけてから、

「生きるのに不器用だね、セイは」

そういうの嫌いじゃないけどね、フィンがそう呟いてフィンは前を歩き出した。

「さ、じゃあちよつと遅くなっただけど、帰ろっか」

その言葉に、セイはそれに驚いたような表情を返した。

甚だ疑問だ。

「フィン」

「なに？」

「怒ってないのか？」

「怒ってるさ、バカ」

先に行くフィンは、振り向かずにセイをバカ呼ばわりした。もちろん、返す言葉もない。フィンの愚痴は止まらない。

「この後クレイに怒られるのはボクなんだよ？　またクレイの長い長〜いお説教を聴くはめになると思うと気が重くなるね。しつこいんだもん、クレイ」

でもね、とフィンは振り返った。

うれしそうな、満面の笑顔で。

「なんだかわからないけど、今は気分がいいから許しちゃう。」

さっきの話は　まあ、あんまり気持ちいいことじゃなかったから。

むしろエクシヤには前から腹立ってたからね。ザマミロー！　って感じさ！　心晴れ晴れだよ」

フィンは、セイへと左手を伸ばした。

「さ、急ぐよ！　このままじゃ太陽が完全に沈んで真っ暗なっちゃう！」

セイはその手を、

「……人がいいのはどっちなんだか」
ぼやきながら、取った。

そして二人は帰路を急ぐ。

この後、エクシヤがそのキャラクター性を間違うことなく厄介事を運んでくるなんてまったく予想し　いや、少しだけ予想しながら。

しかしセイは、紫光に輝きつつすらと星の点を付け始める空を見上げて、そんなに悪いことは怒らないだろうと、甘い甘い砂糖菓子のようなタカをくくっていたのだった。

(4 - 2) 街とフィンと女の姿 (後書き)

おう、評価がいただけただけたようですねしいです。

以後も、まあゆっくりこれぐらいのペースで更新していくのでどう
かよろしく。

(4-3) 家とそうじとクレイの焦り

街からホウキに乗って十五分ほど離れた湖のほとり。

上から見ても森と草原と湖しかなく、どこかひっそりとした雰囲気
気が漂う場所に、家はあった。

いったい立てられたからどれくらいの間が経ったのだろうか。
外壁は色あせてボロボロ、窓枠の塗装は当り前に剥げていて、屋根
には粗いあて木の後があった。

「これは……」

ひどい、の一言をなんとか飲み込んだ。そこそこ大きくて立派な
はずの一軒家は、整備が行き届いていないせいかな『今にも崩れそう』
という印象しか与えてくれなかった。

そしてそんな家の前で、

「ボクたちの愛する我が家にようこそ！」

なんて歓迎を受けると、いったいどうリアクションすればいいの
かセイにはわからなかった。

「……なんとというか、歴史を感じさせる門構えだね」

「素直にボロいって言うてくれないよ」

セイが本音をオブラートに二重三重つつんだのに、フィンはその
をストーリーに表現した。

「国のほうに修繕の申請は出してるんだけど、必要ないってつっぱ
ねられちゃってるんだ」

『光球』とフィンが唱えると、杖先に光の球が生まれた。フィン
はそれを部屋の中へとポイと放つ。どうやらそれは、電灯の変わり
らしかった。

「さ、どうぞ入って。少しちらかってるけど」

玄関を開けたフィンに従って、セイは家の中に入った。

そして、絶句した。

それでも作家の名折れだとその状況をなんとか言葉に表そうと模

索し、

「ひどい」

結局該当したのはそんなセリフだった。

床には本のタワーに脱ぎっぱなしの服が散らばり放題。使った食器はテーブルの上に置いたままで、そのテーブルもソースやら調味料などで汚れている。

部屋の角や暖炉の上も、ホコリが溜まっている。ちょっと炊事場を覗いてみると、予想通り食器が流しに山となっていた。

(これが、『少し』?)

よく人を招けたものだ。

はつきり言つて、汚れすぎだ。歩く場所はかるうじてあるが、腰を落ち着けられるようなスペースはない。

魔女には片付けつて概念がないのか?

「セイ、玄関で突つ立てないで中に入つてよ」

急かすようなフィンの声に、セイはぐるりと振り向くとその細い肩をがっしりと掴んだ。それははたから見ると、キスでもしようかという体勢に見える。

「え? な、何かな」

セイのこれまでとは違う雰囲気にあわてるフィンに、

「……はどこだ」

「へ?」

「ぞうきんはどこだ。あと掃除用のホウキとバケツもだ。どこにある」

セイは責め立てるような口調で言った。

「え、えつと? ……あそこ」

目を白黒させるフィンは、気押されるままに部屋の隅に置いてあった掃除用具一式を指差した。

セイはその方向に体ごとグルンと振り向くと、フィンの肩から手を離し、早足に向かつていく。

「え」と、セイ? 今から話さなきゃならないことがいっぱいある

「んだけど」

「後回しだ」

セイはきつぱりと断言して、フィンに掃除用のホウキを投げた。それをキャッチするフィン。

セイはテーブルの上に投げ出されていたヒモで乱暴に髪をくくると、この世界に来てから一番力強い口調で言った。

「掃除だ。この部屋が片付かない限り、オレはどんな話にも耳を傾けるつもりはないからな」

ぞつきを片手の姿は、どこか雄々しかった。

クレイはすっかり暮れてしまった夜の空を、ホウキの先につけたランプの明かりひとつ頼りに飛んでいた。

図書館から借りてきた蔵書が、心と同様に重い。

「私が高年であんな試験を受けなければならぬんだ」

誰に言うでもなく呟くのは、人前では絶対に吐かない弱音。図書館での調べものは、いくら初日とはいえ散々だった。

手ごたえどころか、手触りさえしない。

(そもそも異界などと……何の冗談だ)

資料なんて、おとぎ話ぐらいの信憑性のものしかなかった。いくら期間が一年あるといっても、これでは試験をパスするのは不可能なことのようにしか思えない。

そんなクレイの脳裏に浮かぶのは、最悪の結果だ。

そもそも魔女試験というのは、アカデミーを卒業した見習い魔女たちを振り分ける試練のことだ。魔女には、基本的に三つの階級が存在する。

上から一等・二等・三等となっており、ランクが上であればあるほど使える魔法と権限が大きなものになる仕組みだ。

それを決めるのが魔女試験。このランクは基本的に後から変化するものではないので、言うなれば魔女試験が今後の自分の魔女とし

ての価値を決定することになる。

一等魔女にでもなれば将来は国の重要ポストにつけるウィザードになることだって可能だ。だからこそ、クレイは今回の試験の内容をのんだのだ。

「でも……」

もし失敗したら、そう考えるとクレイは気が気ではない。魔女試験に受からないということは、イコール魔女ではなくなるということだ。

『アプティン』 魔女たちは、それらの存在を蔑視してそう呼ぶ。

アプティンと判断された魔女は、魔法の力一切を封印され魔女区から追い出される。

魔女は嫌われ者だ。その末路は、言うべくもない。

それが自分自身の問題として眼前にあるのだ。泣き言の一つでも言いたくなる。

「……待て。」

そうだ、なんでもそもこんな難しい課題が私たちに課せられるんだ？ 異世界なんてめちゃくちゃを信じるならば、議会付き賢女クラスの仕事のはずだ」

どんな間違いがあろうとも、見習い魔女の仕事ではない。

(まさか、この課題……何か裏があるのか?)

クレイがそんなことを考えているうち、いつの間にか家へとたどり着いていた。

クレイは思考したまま玄関の扉を開け、

「……………」

絶句した。

「へえー、じゃあようするにその試験の内容ってのが、フィンとクレイの場合オレを元の世界に還すことなわけか」

「そういうこと」

「そりやまた……責任重大だな」

魔女試験の説明を聞いたセイは、他人事のように呟きながら濡らしたぞうきんで床を走る。

フィンも畳んだ服や本を磨いたテーブルの上に載せると、隣に置いてある洗った食器を棚へと片付けていく。

セイの確固たる意思と熱意によって始められた掃除は実を結び、リビングは何とか生活環境を取り戻しつつあった。

その間「クレイに怒られるから」と、フィンは今自分たちの置かれている状況を手を動かしながら説明した。

「今更だけど、フィンたちにとって今回のことってかなり大事？」

「当り前だよ！　もしかしたら魔女になれないかもしれないんだよ！？　そんなこと、考えただけで……あああああああ！」

「叫ばなくていいから。……でもさ、それならオレのこと断ったほうがよかったんじゃないのか？　素人のオレから見ても、面倒そうだよ」

「そうはいかないよ。一度関わっちゃったことだもん、最後までやりとげなきゃ！」

そんな和気藹々とした二人の空気を裂くように、

「何をしてるんだ、お前らは」

いつの間に帰ってきていたのか、クレイが雷轟のように低い声で玄関先に立っていた。

「あ、クレイおかえり！　成果のほうはあった？」

笑顔で近づくとフィンに、

「何をしていると言っている！」

クレイが苛立たしげに声を荒げた。

場がシンと静まりかえる。

（何だこれは、何だこれは！）

それは八つ当たりに近い感情だった。無茶苦茶な試験、得られない手がかかり。だというのに、それが何でもないことのように笑いつている二人を見たクレイは、その黒い感情をそのまま吐き出していた。

どこまで能天気なんだ、こいつらは！

「一体何をしてるんだ貴様らは！ フィン！」

「は、はい！」

「他に色々とやることがあるだろうが！ コイツからこっちの世界に来たときの話を聞くなり、この世界のことを教えたり、魔道具や魔法薬のチェック、他にも …… あゝ、ともかく掃除なんてして暇はないだろうが！」

クレイの怒鳴り声に、

「掃除なんか、だつて？」

セイが低い声を返した。それは、セイにとってNGワードだ。

セイは、父親と二人暮らしのせいもあってか家事一切を小学生の頃からほとんど一人でこなしてきた。

だからこそ、家事にはそれなりの自信と意地がある。

ふつふつと、感情がマグマのように煮立っていく。

「クレイ」

「何だ！」

「えい」

セイは、クレイにデコピンを放った。

「にゃ！」

驚くフィンと、

「な……なにをする！」

おでこを押さえるクレイの激昂が重なる。

セイはしかし、それに臆することなんて微塵もなかった。

むしろ、目が据わっていた。

「クレイ、いいことを教えてやる。」

理論整然とした思考は、整理整頓した場所ではか生まれない！

こんなきつたない部屋でどんなこと教われって言つんだ、お前は」
クレイはそのセリフに一瞬呆気にとられたが、すぐに怒りを取り戻す。

「なんだと！　そもそも、なんでお前も当然な顔して掃除なんかしてるんだ！　ここは私たちの家で、私たちのものだぞ！」

「なら掃除のひとつぐらい満足にしるよ！　ありやもう惨状だぞ、悲劇の現場だ！　いったいどれぐらい放置すればあそこまで汚くなるんだよ!？」

「一週間ぐらいだ、悪いか！」

「……いや、堂々と言われるとオレでも引くよ？」

「……この！」

「はいはいストロップ！　二人とも、どーどー」

不毛なケンカに、フィンが出会ったときと同じように間に入った。

「二人とも、仲いいのはわかったから落ち着いてよ」

「誰が！」　「誰がだ！」

二人は一緒に振り返って、同時に叫んだ。そしてバツが悪そうにお互い視線を混じあわせる。

「フィン、お前から何か言ってやれ！　自分の立場をわきまえろ、とか！」

「そりゃこつちのセリフだ！　フィン、このわからずやに家事の大切さを教えてやってくれ」

「……はあ」

フィンはひとつため息をつくど、

「ばか」

二人の頭にチョップを落とした。セイもクレイも予想だにしないその一撃に、にらみ合うことも忘れてフィンのほうを見る。

フィンは腕組みして、

「クレイ、セイの言うことも最もだよ。散らかってたら集中はできないし、このところ立て込んで掃除してなかったのは事実でしょ。

それに、セイの寢床も必要なんだから、掃除は必要！」

セイも、何でクレイと話していると突然キレ出すかなあ。利用してくれ、なんてかっこいいセイフを吐いたんだから多少のことで怒ったりしないの。

これからはみんなで協力しなくちゃならないんだから、仲良くやるうよ」

それこそ理論整然、言い返さないほどの正論だった。セイもクレイもそれに言い返す言葉を持たず、黙るしかなかった。

フィンはその満足そうに頷く。

「じゃ、掃除もひと段落したしご飯にしようよ、もうボクお腹ペコペコだよ」

台所のほうへと機嫌よさそうに歩いていくフィンの背中を、セイとクレイは見おくった。

残された二人は、気まずそうに視線をチラチラと合わせている。

(謝らなきゃダメだよな)

とセイは思い、口を開こうとしたそのとき。

クレイがはっと気付いて声をあげた。

「待て　そもそも一昨日の掃除当番はお前だったんじゃないか、フィン！」

それに連鎖するように、セイもちらりと視界に入った床を見て、気がついた。

「あー！　フィン、せっかく掃除した場所に薬こぼしたな！　何だこれ、ベタベタじゃないか！」

しかし二人が声を響いたところには、フィンの姿はすでになかった。

「」　逃げたな！」

気付いたころには、完全に完璧な逃走だった。

セイもクレイも騙され諭されたことに恥ずかしくなって、それをごまかすかのようにフィンを追いかける。

この日、人里はなれた見習い魔女の家からは、賑やかな怒号が絶えることはなかった。

とりあえずわかったことは、フィン
は自分やクレイより何枚も上
手だということだけだった。

(4 - 3) 家とそうじとクレイの焦り (後書き)

更新のたびに、お気に入りが増えつつ増えつついく感覚は、なんだ
かうれしいですね。がんばります。

(4・4) フィンと月見とベラドンナ

セイは家の外にあるベンチに腰を下ろして空を見上げていた。空には、青白く光る月と配置がてんやわんやな星が瞬いている。さつき北斗七星やオリオン座を探してみたが、予想通りというか何というか。改めて、ここが完全に異世界だということを認識させられた。

「しかし……さつきには、驚いた」
さつきの、とは食事のこと。

フィンを追い掛け回すことが無駄だと判断したクレイは、晩御飯の準備をじだした。

材料を並べ調味料を用意し、まな板と包丁とフライパン・鍋など取り出す　ここまでではよかった。

問題はその後だ。クレイは用意したものに一切手を振れず、台所に吊るしてあった魔法の杖を手にとると、

「シェフ・ベラドンナのわくわくキッキング　レシピナンバー
二十三」

想像してほしい。クレイの真面目くさった口調で放たれたこの言葉を。

セイは呆気に……でもなく、絶句……でもなく　そう、対応に困った。

しかし、それも目の前で起きた奇跡にどうでもよくなった。

クレイが杖を軽く振った瞬間、用意した材料やら器具やらがひとりで動き出し、料理を作り始めたのだ。

かくしてクレイは一切手を触れることなく晩御飯をつくりきったのだった。

「あれは……ないよなあ」

今まで見た中でも、反則もいいところだ。

セイは十年近くかけて培ってきた料理というスキルが、この世界

で役にたたないということにひどく落胆した。

「はあ……空が綺麗だよ、まったく」

気分を紛らわすように、腰のベルトから十手　　もとい魔法の杖を取り出す。

月光を受けてにび色に光る魔法の杖を、セイは単純に美しいと思う反面、

「やっぱりこれを魔法の杖って表現するのはムリだなあ」

自分自身にツッコミを入れて、十手を空へとかざした。

「どうなるんだろうな、これから」

口にしたのは、不安のカタチだ。

ようやくひとりになったからだろうか、色んなことが頭をいきか
つて、思わずにそう呟いていた。

異世界のこと。

魔女のこと。

『闇』と名乗り、付け狙う存在。

縦ロール。

そしてなにより　フィンのこと。

「『捨てられた』、か。まったく……重すぎるよ」

少なくとも、冒頭に明かされていい事実じゃないだろう。こつこつ
うのは、物語的にも佳境になったときに判明することだろうに。

捨てられた。

あの縦ロールは、確かにそう口にした。

その意味がこの世界でどれほどの意味を持つものかはわからない
が、それでも痛いことだというのは理解できる。

セイも、同じ痛みを持つものなのだから。

捨てられ、置いていかれる苦しさを知っている。

でも、他人がその傷を抱えているのを知ったのは、初めてだった。

行動を共にする者の過去の因果　　本当に、物語の主人公か。

「まったく……オレはいつから渦中の人になっただんだあ」

処理しきれないことばかりに本音を吐露したセイに、

「最初からじゃない？」

「思わぬ返事があった。」

首を後ろに倒すと、フィンがタオルで髪を拭きながら歩いてくる姿が目に入る。黒い帽子とローブは身につけておらず、着ているのは桜色のパジャマで、その姿は完全にただの少女だった。

「シャワーが空いたから呼びに来ただけ……またお月見？ 好きだねえ異世界人は」

「そうだ、っていえばツマミでも出てくるのかな、見習い魔女さん？」

「九時以降の食事は乙女の敵なんだよ」

「オレは男だ」

「その外見で言われても説得力ないよ」

フィンはさらっとひどいことを言つと、セイの隣にちょこんと腰を下ろした。そして同じように夜空を見上げる。

「で、本当は何してたの？ クレイに聞いても知らん、の一言で済ませられちゃうし」

「クレイに聞いてもダメだろ」

嫌われてるみたいなのだから。

「月見つてのもあながちハズレじゃないけど……考え事だよ」

「考え事？」

その様子から、どうやらさつき口にした言葉は聞こえていなかったらしい。セイは安心して続ける。

「そ。今までのこととか、これからのこととか」

「で、いい答えは見つかった？」

「いや、お手上げ」

言葉通りにジェスチャーすると、フィンはおかしそうに笑った。

「おいおい笑うなよ、けっこう本気で困ってるんだぞ」

「ごめんごめん。」

でもさ、起こっちゃったことも先のこと、今うじゃうじゃ考えてもどうしようもないんじゃないかな。まずは目先のことを、だま

しだましてもやってかなきゃ」

「そりゃ正論だけどね」

だからこそ、できないことのほうが多いんじゃないだろうか。それはセイに限ったことでもなく、たくさんの人が過去と未来に縛られるように。

単純だからこそ、難しい。

「で、ちなみにその目先のことってのは何だ？」

「クレイと仲良くなること」

「……ハードル高いなあ」

最初から躓いたあげく大転倒しそうだ。

「そうかなあ。ボクはきっかけさえあればすぐだと思っけどなあ」

「これまでの様子からどうすればそんな意見が出るんだか……」

セイが想像できるのは、せいぜい自分を馬車馬の如く働かせるクレイだとか、怒り来るって魔法をかけてくるクレイだ。

「……ちよこつと今後の言動には注意しよう、うん」

頭の中のあまりにもリアルに浮かんだ想像に、セイは空に浮かぶ月へと誓いを立てた。

そしてその様子を見ていたフィンは、やっぱりおかしそうに笑い声をもらす。

「やっぱりおもしろいね、セイは」

また、だ。これで何度目になるだろう。セイは聞き飽きた言葉に嘆息する。

「……それ、たくさんの人に言われたけどそんなに面白みのある性格してる気はないぞ、オレ」

自慢ではないが、平凡がセイのスタンスだ。それはこの世界に来たからといって、変えたつもりはない。

それとも、こちらの世界からすればセイの世界の平凡こそが非凡なのだろうか。

「違うと思うよ。なんていえばいいのかな」フィンはセイを否定してしばらく言葉を選んで、「うん、セイ個人が変なんだよ。きつと」

そんなことをのたまいやがった。

「……ん〜、ここは全力でツッコミをしていいところだよな？」
むしろ、ツッコミ待ちか？

その挑戦受けてたってやるうじやないかとセイが口を開こうとするど、

「ちがうちがう！ 今のはいい意味で言ったの、いい意味で！」

「いい意味？」

『変』という言葉のどこにいい意味なんてあるのだろうか。

「どついうことだ？」

「えっと、言葉にしようとするの難しいな。 どうでもいいけど、

いい意味ってかみそうになるよね？」

「本気でどうでもいい」

「バツサリ切るなあ、もつと会話に潤いをもとうよ。 そんなんじやクレイみたく乾いた荒野みたいな心になっちゃうよ？」

「大丈夫、オレの心にはいつでもどこでも優しさという名の枯れることのないオアシスが存在しているから」

「それ、屋気楼だよ。きつと」

「何が言いたい」

「そんな優しいセイが大好きだって言いたいんだよ！」

楽しい会話だった。

でも、どんどん本筋から外れている。

「話を戻すぞ。 ……で、オレのどこが変なんだよ、結局」

「うんとね。 ……セイはさ、すごく他人に心を許すんだ。 ボクたちには考えられないくらい」

セイの問いに、フィンは自分でも咀嚼するように答えた。

「心を許す？ 許してるか、オレ」

それにセイはバカみたいに言葉を繰り返す。 セイ自身、そんなつもりは毛頭ないことを示すかのように。

しかしフィンは「うん」と大きく頷いた。

「例えばさ、セイはこの次の瞬間にボクがセイを殺すかも、なんて

考えてもいないでしょ？」

殺す。

それはあまりにも陳腐で雑で直接的で、猟奇的な言葉だった。セイはしばらく言われたことの意味が飲み込めず、

「……は？」

飲み込んでも、消化できなかった。

(殺す？ フィンが、オレを？ なんで？)

そんなこと、思いつくはずがない。思いつける、理由がない。

誰かが誰かを殺し殺される幻想なんて、ましてそこに目の前の少女と自分自身をはめ込むなんて、

「できないでしょ？ それがボクの言う『心を許してる』っての証拠だよ。」

ボクたち魔女はね、それをいつも心のどこかで考えてるの。

魔女ってね、さっき言ったとおり嫌われ者なんだ。

世界を変換し、この世創りし者の定理をことごとく否定する存在それが、他種族から見た魔女の姿なのさ。

だから魔女は他種族に ううん、魔女同士でさえ心なんて許さない。せいぜい信頼できて、魔法の師とずっと一緒に行動を共にしてきた仲間ぐらいじゃないかな」

「 何で？ 同じ魔女同士だろ」

「同じじゃないよ、全然同じじゃない。」

同等ですらないんだよ、セイ。夕方にあつた縦ロールの魔女……エクシヤの物言い、覚えてるでしょ？

魔女は、若いうちから完全な実力主義の世界に放り込まれて、成熟しないうちにランク分けされてその後のすべてを決められる。ランクや立場の違う魔女は、ほとんど別生物だよ。

だからこそ、物心をつける前から……ううん、生まれる前からボクたちは戦う環境にいるんだ。

自分自身を守る戦いの中に。

そうじゃないと、殺されちゃうから」

他人から。

環境から。

自分から。

世界から。

「だから魔女の信頼や信用っていうのは、その場を乗り切るための一時的なカリソメの小道具にすぎないんだよ。そうじゃなくても、限りなく薄っぺらい。

っていうか、そうじゃなきゃいけない。　　ボクらは、そう教えられて育てられてきたんだよ。

魔女は誰かを見ると、疑って疑心して裏を読んで心を読みとって感情を殺して自分を殺して観察することが当たり前になっちゃってるんだ」

ボクはそんなの馬鹿みたいだ、って思ってるんだけどね　　フィンは呟いて、セイに向かつて微笑んだ。

いつか見た、まぶしいものを見るような瞳で。
「でも、セイは違うんだよね。魔女は『相手がどれほど信用できないか』とか『どうやって相手の信用だけを勝ち取るか』っていう考え方だけど、セイは『どうやってたら相手を信用できるようにするか』とか『どうやってたら相手に好きになってもらえるか』って考えて行動してるんだもん。……感情移入しやすい、ってのが一番わかりやすい言い方かな？」

それを変とかわず何を変と言えばいいんだか」
フィンの声はつとめて明るい。明るくて、普段どおりだ。気負っているような様子は、まるでない。
きつと、それは日常の言葉で出るくらい、フィンにとって当り前のことだ。

当り前の生き方なんだろう。
秘密にする必要もあえて主張する必要もない、セイで言えば朝はご飯食が主だというくらい当然のこと。

当然のように人を信じない。

当然のように、死を覚悟する。

それが、魔女だと言わんばかりに。

それは、変だと思っはずだ。

セイが生きてきた世界は、良くも悪くも守られていた世界なのだから。

死なんて、概念以上の意味を持たない世界だったのだから。

ただ、

「フィンも、さ」

違うとわかっていても、理解できないとわかっていても、どこかしっくりこない。何か、釈然としない。心地が、よくない。

「フィンも オレのこと、信用してない？」

「わかんない」

フィンは正直にそう答える。

「セイと一緒にいると楽しいし話もおもしろいし、仲良くしたいなって気持ちはあるよ。っていうか、仲良くしたいってすごく思ってる。でも……」

「信用は別問題、と」

「そゆこと」

「……難儀だなあ」

「まっただよ」

まあ、それは今どうでもいい。

信頼や信用なんてものは、時間をかさねればきつと芽吹くものだと、セイは信じている。

問題は、そこじゃない。

「じゃあさ、クレイのことは？」

「はへ？」

そう、聞かずにはいられない。

「クレイ？」

「そう。クレイのことは信用してるか、って聞いたの」

「ん……」

しばらく考えるように、手の中で魔法の杖をクルクルと回し、舞わす。まるで、ペン回しやマーチングのバトンのように。

そしてフィンはやがて、どこかおどけるような、いたずらっ子のような顔を浮かべた。

「クレイはさ、頭かったいし口うるさいし」

「それ、前にも聞いた」

「そだっけ？」

「うん。真面目だとか几帳面だとか融通聞かないとか石頭とか口げんかがさりげなく苦手だとか意外に感情でものごと押し通そうとしたりするとか家事を軽く見てるとか」

「後半は覚えがないんだけど」

「と、ともかく！ クレイにいろいろ文句があるのは知ってるよ。で？」

一文字の、一言の短い問いかけだった。それにフィンは、わざとらしい、しばらく考えるようなフリをして、

「そうだね。いろいろ、本当にいろいろあるけどさ……クレイとはもうずっと一緒にいるからね」

「はつきり言葉にしようか」

曖昧な言葉で、濁したりなんかさせない。

「……意地悪だね」

「なんとでも」

「……そうだね、クレイのことは信用してると思う。家族、なのかな多分。よくわかんないけど。」

ボク、クレイのこと好きなんだ！

口うるさいのも、頭かたいのも　まあ、含めていいかな。クレイとなら、この試験だって乗り越えられるって気がするもん！

……で、ボクはセイともそうなれたらいいと思ってるよ
はにかむような、照れたような笑顔で幸せそうに言った。

「そっか」

それだけ聞ければ満足だ。いや、十分だ。しっくりきた。

それなら、大丈夫だ。

家族がいるなら、前に進むめる。

踏み外そうとしたとき、止めてくれる人がいる。

支えがあるなら、きつとまっすぐ生きることが出来る。

「そっか」

セイはもう一度満足げに呟いて、夜空を見上げる。輝く空を、今はただ純粹に綺麗だと思えた。

「うゝ、なんか恥ずかしいことを口走った気がするよ」

フィンには赤くなった頬を押さえて、セイと目を合わせまいと執拗に星を見上げていた。セイはその姿に笑いをこらえながら、

「気のせいじゃない？ ただフィンがクレイのこと大好きで大好きでたまりませんゝ、ってことだけだ」

「それを言うなゝ！」

からかったら、殴られた。グーだった。

まあ、あんまりというかまったく痛くなかったが。

「クレイには内緒だからね！」

「わかったよ。でも、意外だな」

「？ なにが」

「いや、フィンでそういうこと言っても平気なほうだと思ってた」

元の世界でも、男だろうが女だろうが平然と『好き』という言葉を使える人間を何人か知っている。フィンも、てつきりそのタイプだと思っただけだ。

「普段は平気だよ。『好き』って言葉はいい言葉だと思うしね。でも、さっきのはなんていうか……違っつていうか。」

あー、もー！ うまく言えない、忘れる！ 今すぐ！

……そうだ！ そう言うセイこそどうなのさ？

苦し紛れにフィンはセイにそんな質問を投げかけた。

セイは、軽く首をかしげる。

「どうなの、とは？」

「元の世界に、大事な人でも置いてきたんじゃないのかにやゝ？」

まるで、そこらにいる同級生の女の子のような口調だった。

しかし、残念ながらひるむことはない。セイにはそういう対象が、いかながらも元の世界にはいなかったのだから

「例えば、昔からの腐れ縁のだれかとか」

「！」

不覚にも。

不覚にも、その一言がある鬼の姿を思い出させた。

ちっちゃくて、そのくせ存在感だけは無駄に大きい、部員全員が恐れる部長の姿を。

その動揺を、あざといフィンが見逃すはずがなかった。

「どうやら思い当たる人がいるみたいだね」

「いや、ちが」

「そこらへん、セイの世界のことも踏まえているいろいろ詳しく聞かせてもらおうかじゃ。イヤとは言わないよね、あそこまで聞いておいて！」

ここ数日で一番楽しそうに笑うフィンに、長い夜になりそうだなあとセイは予感めいたものを感じつつ空を見上げた。

星の位置は変わっても、美しさだけは変わらない星空が、ただセイたちを見下ろしていた。

(4 - 4) フィンと月見とスラドンナ (後書き)

ゆっくりながら、30ptが溜まりつれしい限りです。
ちょっと遅くなりましたが、以後もまったりいきますのでよろしく

次回予告 4

エクシャ 「ほーっほっほっほ！ みなさん、ワタクシの活躍見てくれたかしら？ そう、このワタクシの華麗で優美な立ち振る舞い…… ああ、きつと罪深きワタクシはみなさまの目を釘付けにしてしまったのですわ！ ああ、もういつそセイさんとかいう魔女を主人公にするよりこのワタクシが主人公に」

フィン 「めがとんはんまー」

グボシッ

フィン 「ふう、これでよし……と」

クレイ 「フィン、なんかすごい音が」

フィン 「大丈夫！」

クレイ 「いや、しかし……エクシャの頭から血に混じってなに違うものが」

フィン 「心配ないって！」

クレイ 「それに、なんだそのハンマー。100トンって」

フィン 「クレイ」

クレイ 「な、なんだ」

フィン 「世の中には、スルーしなきゃいけない事柄もあるんだよ？」

クレイ 「……………」

フィン 「さて！ 作者の進行の不具合から内容とは全然関係のない題名になってしまった第四話！」

クレイ 「言い訳はいいから次にいけ」

フィン 「セイの予想通り牙をむく縦ロール！ その無茶な勝負にかけるセイに勝機はあるのか！？ 次回、『縦ロールの果たし状

「Fight to brave」

セイよ、青空に羽ばたけ！」

クレイ 「……なあ、フィン」

フィン 「うん？ 贅辞ならありがたくつけとるよ。」

クレイ 「いや……そのエクシヤなんだが、泡ふいてるぞ」

フィン 「……」

クレイ 「……」

フィン 「また来週！」

クレイ 「流したー！！」

次回予告 4 (後書き)

次回予告がひとつ抜けていますが、気にしない。
いつかちゃんと追加してきます

いつだっただろうか。

部長に問われたことがある。

「セイはさ、なんでそこまでハッピーエンドに固執するの」

なんてことのない、日常会話。誰もいない夕暮れの部室で、特にこれといった複雑な考えなく部長は尋ねたのだろう。

「セイだって、この世の中なにもかもすべてハッピーで通ることがないことなんてわかってるでしょう？ 競争ごとをすれば勝ち負けや優劣がつくのは当たり前で、いくら理由をつけたところで敗者はハッピーにはなれないし」

まったくもって正答だ。正論とっていい。

そのとおり、世の中にはハッピーよりアンハッピーのほうがありふれている。幸せになるのは難しく、不幸になるのは容易い。

「セイがハッピーエンドばかり書くのは、そういう世の中がいやだから？」

「さあ、どうだろう」

「何よ、はつきりしないわね」

「仕方がないだろ。体に染み付いちゃって、自分でもよくわからないんだから」

ただ、部長の言った事は間違いではないだろう。

必死に努力した誰かが、なにも悪いことをしていない誰かが、生きようと前を向いてひたむきに歩いている誰かが、不幸になるのは嫌いだっただ。

運命、なんて簡単な言葉で不幸せな生き方まで決められるような物語がいやだった。

どうせなら、幸福な物語を。

みんなが笑って終われる、楽しくて幸せな最後を。

努力には見合う結果を。

そんな当り前の幸福が　　当り前に存在しないこの世界を、セイはもしかしたら多少なりとも憎んでいたのかもしれない。

「でも」

「でも、何？」

「多分、それだけじゃないと思う」

そして、場面が飛ぶ。

教室は消えてなくなり、現れたのは家へと向かう帰り道。

降り続く雨が、道路にはじける音が聞こえそうなほどの雨足。

視点の低い自分は、その様子に何を考えていたのだろうか？　じ

っと観察しているようだ。

それは、遠い記憶だ。

うる覚えにすら届いていない、水彩画に水をこぼしてしまったよ
うな、ぼんやりとしすぎていて輪郭すらはつきりとしえない記憶。

その中で、セイは手を引かれている。

黄色い雨合羽に青いビニールの長靴を履いて、必死に手を伸ばし
て誰かの左手を掴んでいた。

雨の音と、冷え切った世界ではその手だけが暖かくて、優しくて
見失うことないよう、非力な力でめい一杯に力を込めた。

手を引く、誰かを……もうシルエットさえわからない　その頃

の自分自身がおかあさんと呼んでいた人の手を、離さないように。

自分がここにいることを、かあさんがそこにいることを確かめる
ように。

ただ、強く。

「お、どうしたんだい？　セイ」

もうろくに顔さえ思い出せないくせに、この時かあさんが笑った
ことだけは覚えていてる。

天真爛漫で。

雨がざざぶりだというのに、傘の雨を弾く音だけでも愉快だ、と
いわんばかりに。

その生き方に、在り方に憧れていた。

どんな困難だろうが難問だろうが、果ては失敗だろうが笑って全
て「人生だ」と楽しんでいたかあさんは、バッドエンドなんて言葉
とは無縁の人だった。それどころか、まわりさえハッピーエンドに
無理やり引き込んでしまうほどの、完璧な絶対幸福者。

だから、例え声を姿を思い出を悲しみを苦しみを傷を心を忘れても
セイは彼女が残した、母親が愛する息子のために贈った言葉を
忘れることはなかった。

「セイ。この世はハッピーでできてるんだから、どんなことが
あっても笑っていな。

幸運の神様はね、笑顔でいる人のところに来るんだぞ。

だから、セイはたくさん笑って、周りの人も笑顔にして、みんな
で幸せになりなさい」

幼いセイは、その姿を見つめ続け、誓い続けた。

自分もいつか、この人のようにたくさんの人を幸せに導けるセイ
っていう存在になるんだって。

例え、目の前に

「……目の前に、何だったけな」

「うわあ！」

そんな叫び声を聞こえたかと思うと、セイの体は突然軽い浮遊感
に襲われた。

それを何だか認識しないうちに、セイの後頭部が地面との出会い
を果たす。

「ごうん、という重く鈍い音と、

「……つつつつつ〜！」

セイの言葉にならない鈍痛の音が響いた。後ろ頭を押さえてゴロ
ゴロ転がったセイは、しばらくしてうずくまっから、

「痛いよ！」

ひどく真つ当な、しかしひねりのない悲鳴を上げてなんとか目を開けた。

そこにいたのは、クリクリとした丸く大きな瞳を持つ少女だった。顔立ちは幼さが抜けていないが、だからこそ可愛らしい。燃えさかる炎のような髪と目が、とても印象的だ。

そして何故だか、あちゃ〜という顔をしている。マズイことでもやらかしたのだろうか。

(まあ それはいいとして)

何だろう、このシユチエーションは。

セイはそんなことを目の前にある少女の顔を見つめながらぼんやり夢心地に考えた。

寝ている(倒れている?)自分に覆いかぶさるようにして覗き込んでいる少女。

「え〜と、大丈夫かな？」

そして、額に小さくやわらかい手を置いてくる。冷たくひんやりとした手のひらは、素直に心地よかった。

「あ〜、うん」

しかし、返せたのはそんな生返事だけ。

マズイ、緊急的に解決しなければいけない問題が目の前にある。

「あれ、どしたの? まさか打ち所が悪かったのかにや? だからあれほど集中してって忠告したのに」

口ではそんなことを言いながら、赤い魔女はいじわるそうにクスクスと笑っている。性悪、という言葉がどこかで響いた気がした。

「ホウキ乗るのに大切なことは簡単な魔力のコントロールとバランスって教えたけど、あれじゃコントロールのほうが全然だめだね。

セイはなんでか出力が強いくせに不安定だから、あんなふうにも暴れ馬に乗ったみたいになるんだよ。」

まあ、見てるぶんにはおもしろかったけどっ!」

ホウキ? ……そうだ、思い出してきた。セイは上半身だけ起こ

して、右手の近くに落ちていた古びたボロボロの竹箒を拾い上げた。そうだ、確かこれで何かしようとしていたはずだ。

しかし、それは一体なんだったか。

(いや、それよりもまず)

問題は、目の前の少女だ。

「……あれ？ おゝい、セイ。本当にやばかったりするのかな？

そうやってばあっとし続けていると、さすがのフィンさんも責任を感じてきちゃうなあ、なんて」

目の前で手を振りながら言った少女のセリフに、

「あ、そうだ。フィンだ、やっと思い出した」

セイはやっと求めていた答えを見つけて、つい言葉にしてしまった。

そうだ、フィン。

それが、この小さな赤い魔女の名前だ。これでスッキリした。喉に刺さって魚の小骨が取れた感じ。そんな清々しい笑顔のセイに、フィンはじとりとした視線を向けた。

「まさかセイ、ボクの名前がわからなかったの？」

「うん、悪い」

「失礼極まりないことのわりに謝罪がおざなりだよ」

フィンは「ボク怒ったよ」と示すかのように頬をぷくつと膨らませた。

「ふ〜んだ、せつかくセイのために『第一回 魔法講座 ホウキ基本編』を開いてあげたっていうのに」

「なんだその怪しい通信教育のような名前は。」

……まあともあれ、今回ののは確かにオレが悪かったかもな。ゴメン、謝るよ。頭打って混乱してたんだ。悪気はなかったんだけど」

「それでもひどいよ。この魅力的で扇情的でグラマー、様々な人種族を問わず一瞬にして虜にしてしまう罪な魔女を忘れるなんて」

「大丈夫。そんなのは元から知らない」

というか、それがフィンの抱く理想のイメージなのだろうか。残

念ながら、的外れどころか話にもならない。

ともあれ、やっと意識が覚醒してきた。セイは右手に握ったままのホウキを見て、そして背中とお尻の鈍い痛みを感じながらフィンを見上げた。

「フィン、やっぱりオレってさ」

「うん、落ちたんだよ、ホウキから。真つ逆さまだったよ？ それほど高さがなかったからよかったけど、もし高度がもうちょっとあったらやばかったかもねッ！」

フィンは楽しそうに、物騒極まりないことを口にした。

「冗談じゃない。」

ホウキで空を飛ぶ訓練で死にました、なんてシャレぐらいにしかならない。部長が聞いたら腹を抱えて爆笑しそうである。

「でも、毎年一人二人ぐらいはホウキから落ちて死んでるよ？」

「その魔女に関しては同情を禁じえないが……なんだな、魔女の世界も意外に物騒だな」

元の世界でいう、交通事故と同じようなものだろうか。

「……ってというか、その話を聞いたらずます確信したぞ。本職の魔女でさえそんななのに、偽者のオレがホウキに乗るなんて無茶だ」
そもそも空を飛ぶとか、魔力やら、魔女なんてものは今までのセイの常識では夢物語、妄想そのものだったのだ。突然それが現実のものとなって、ハイと簡単にのみこめるものではない。

しかし、フィンは口を尖らせてブーっとうなった。

「何だよ、やりたいって言ったのはセイじゃん」

「……そうだった。」

事の発端は昨日の夜。部長に対する勘違いから話題をそらすため、それはセイがなんとなく交わした会話の一つだ。

「へえ、じゃあセイの世界の人って、みんな空に憧れを抱くものなんだ」

「まあ、みんなってのは多少間違いがあるかもしれないけど、ほとんどは。」

空に飛んでる鳥とかを見るとさ、自分も飛んでみたいって思うんだ」

「ふう〜ん……。そういうの、ボクたちにはないなあ」

「そりゃ、魔女はホウキで空飛べるからだろ。ぶっちゃけた話、オレはそれけっこううらやましいんだぞ」

「え、そなの？　じゃあ、やろつよ」

「やろつって、何を？」

「空飛ぶ練習」

「……………はい？」

以上、回想終了。

そんなわけでセイはこの世界の常識をフィンに教えてもらったり掃除をしたりといった雑務を午前中に終わらせ、午後はこうして庭に出てホウキの練習へと勤しんでいるというわけだ。

そして、結果はというと　散々。

飛べない、ということではなかった。しかし、それは絶対に成功とはいえないものだった。最初に教えてもらったのは、魔女のホウキと普通のモノとは根本的に違う、というのがフィンの説明。

「魔女のホウキはね、その魔力を通しやすい独特の材質と、刻印つてのを刻んであるの。それは自動的に乗っている人から、魔力を吸って飛ぶ魔法に変換してくれるスグレモノなんだ！　だから魔力の制御がぜんぜんできないセイだって、飛ぶことぐらいはできるはずだよ！」

今だ自分でも半信半疑であるものの、どうやらセイには本当に魔力と呼ばれるものがあつたようだ。その言葉通り、セイがホウキにまたがると、あっけないほど簡単にホウキは浮き上がった。

いや、飛び上がった。

制御なんて、ものじゃなかった。

まるで、ジェットコースター。

突然斜め上に、それこそ打ち出すかのようにホウキはセイを空へと放った。

その後の記憶はあいまいだ。

ただ上に下に左に右、右旋回に左旋回でロールを繰り返してどこが地上か空かわからなくなったところで、意識は完全に途切れた。

「……思い出したら、気持ち悪くなってきた。結局、なんであんな悲惨なことになったんだ」

座りながらフィンに尋ねると、フィンは指を顎辺り当ててうぐんと軽くうなり、

「たぶん、セイが魔力をしっちゃんかめっちゃんかホウキに流してるからじゃないかな。小さなコップめがけて常に蛇口が全開状態、っていえばわかるかな」

「いや、わからないでもないけど」

自分なりにもう少しわかりやすく解釈してみよう。つまり　オー
トマで一気にアクセル踏み込むようなもの……だろうか。

でも、どちらにしたって結果は同じ。単純で、簡単な答えだ。暴走、その一言ですべて語れる。

「……っていうかさ、魔力の制御するのがあんまりできなくてもどうにかなるんじゃないかなかったのかよ」

「普通はなるんだよ、普通は。でもよく考えたら」

「オレは普通じゃないよなあ」

セイの呟くような言葉に、

「むしろ近年稀に見る異常だしねえ」

フィンも同じように頷いた。

人生、そうおいしくはできていないらしい。

「で、どうするの？」

「どうするって……何が？」

「空を飛ぶ練習。今日はもうやめる？」

覗きこむように尋ねてくるフィンに、セイは少しだけ悩んだ後、

「いや、もう少しやりたい。なんかくやしくなってきた」

立ち上がって、ホウキにまたがった。フィンはその姿を楽しそうに眺めて、セイの横に同じようにホウキに座る。

そして指を一本ピンとたてた。

「じゃあ、全然ダメダメなかわいそうなセイに、フィン先生から特別にアドバイス。

今度はただ『飛ぶ』だけじゃなくて、ゆっくりと自分が浮かんでいくように考えてみて」

「浮く……？」

首をかしげるセイ。

「え〜とね……綿毛みたいにフワフワしてるのがいいかな。

魔法で大切なのは確立したイメージをもつことなの。それさえできれば、セイなら絶対空を飛べるよ」

「絶対ね……簡単に言ってくれるなあ。うん、じゃあ先生の期待を裏切らないよう、やってみますかね」

茶化すように言うと、ホウキを握る手の力を抜いて、軽く一度だけ深呼吸。

そしてセイは、自分の世界へ没頭する。

(イメージしろ……『飛ぶ』ではなく『跳ぶ』でもない、『浮かぶ』自分を。そう、雲のように、風の上に身を任せ、ゆつたりと世界を見下ろす自分を)

たぶん最初は『飛ぶ』ことに意識を集中しすぎた。

しかもその『飛ぶ』のイメージが漠然だったのだ。どこからどこへ、どれぐらいのやさで……そんなことなど微塵も考えず、ただ空を飛ぶことだけを考えてしまった。

だから、あんなとんでもない『飛び』方になってしまったのだろ
う。

なら、方法を変えればいい。

正しいやりかたを行えばいい。

この世界では、魔法は奇跡でもなんでもない。

現実で、技術だ。

ならば、方法と感覚さえ掴んでしまえば　チカラがあるなら、
できるはず。

（落ち着け。オレにだってできるんだ。焦らないで、ただ望め。イ
メージしろ）

眼を瞑り、イメージを補完していく。やがて、どれほどの時間を
かけただろうか。

「あっ！」

最初に声をもらったのは、フィンだった。遅れてセイも目を開く
と、今度は地面から少しだけ　不安定ながらも浮かんでいた。

「やっ」

やった、と歓喜の声を上げようとしたセイは、

「セイ、そこで気を抜いちゃダメ！　ちゃんと集中！」

「は、はい！」

フィンに注意されて、再び集中する。しかし、一度切れたイメー
ジは簡単には元には戻らない。

ホウキが最初のとおりと同じように、波に揺られるように安定感を
失ってくる。

（うぐ……これは、意外に……キツイ）

セイは腕から伝わるブレを直すように、両手に力をこめる。しか
し力任せにすればするほど、ブレは激しくなつてホウキが暴れだし
そうになる。

「腕の力で抑えようとしちゃダメ！　コントロールするのは魔力！

落ち着いてしゅうちゅー！」

「わか……つてる、よお！？」

わかっているよ、と言いたかったがそれは叶わなかった。

それは、突然の出来事だった。何とか集中しようしようとしてい
たセイの心の隙をつくように、頬に触れるぐらい目の前を……何か
白いものが横切った。

それだけならよかった。

しかしセイは思わず、その何かを素手で掴んでしまったのだ。

それは本当に些細なことでも致命的だった。一瞬だけ切れてしまった集中力と腕力。そのチャンス逃すことなく、ホウキが手からするりと抜けた。

「あ」

出せたのは、そんな言葉だけ。次の瞬間、ホウキはセイを置いて単独で空へとまるでミサイルのごとく飛んで行った。セイは放射線を描くホウキと青空を見上げながら、

「……っつー！」

背中から地面に落ちた。

頬にあたる草のかすかな感触と、陽の光に照らされた肌が、少しだけ心地よい。

（ああ、空が青い）

咄嗟に考えたのはそんなこと。しかし笑いをかみ殺しているフィンを視界に捕らえて、自分の失態にため息をつくハメになった。

「まったく……何なんだよ今は」

セイは悪態をつきつつ、左手に握った何かを憎々しげに眺めた。

それは白くて薄っぺらくて、思わず握ってしまったのかクシャクシャになっていた。

「どうやら、何か紙のようではあるが、

「あれ？」

セイは、手の中のそれに見覚えがある。これは……

「あれ、手紙じゃない。これ」

横から顔だけ覗かせたフィンがあっさりと解答を口にした。

町で見かけた群れをなして飛ぶ、言ってしまうば『魔法の手紙』。なるほど、それなら急に視界を奪ったことも頷ける。おそらく、飛んできた手紙の軌道に運悪くセイが重なってしまったんだろう。

「で、それ何の手紙なの？」

「ん、ちよつと待って」

懐に潜り込ませてくるフィンの頭を少しだけ下げさせて、セイは手紙を手のひらでならして、改めてその手紙を見た。

「……………」
「……………」

そして二人して沈黙した。

セイは眼をこすって何度か瞬きをくりかえすと、もう一度その文字を凝視する。

もちろん、文字は変わっていないかった。

「なあ、フィン」

「なにかな？」

フィンの顔は、笑顔。無駄に、笑顔。

セイもそれにうそ臭い笑顔で、メガネを押し上げる。

「オレのこのメガネ、不良品かな。なんだかとても不吉かつ物騒な文字が書いてあるように見えるんだけど」

「奇遇だねえ、ボクもだよ」

「そうか、それは奇遇だ」

「本当にね」

「ははははは」

「にははははは」

セイが両手で広げた手紙。

そこには、達筆な文字でこう書かれていた。

『果たし状』

差出人は……予想通りというかなんというか、縦ロールことエクシヤからだった。セイはその差出人の長い名前を目で追いながら、

「さあ、いよいよ面倒になってきたぞ」

一言ボヤキながら、手紙をなかつたことにしようか真剣に検討しながら空を見上げる。

紙を透かす日の光は、それでも明るく陽気に輝いていた。

第五話 『縦ロールの果たし状』 Fight to brave (5-1)

フィンにはバカに見えて意外と聡明なのかな？ と当時の私が思い始めた回でした。なつかしいなあ

(5・2) セイとクレイと向けられた気持ち

手にした手紙を開こうかこのまま捨てるべきか、十分ほど迷った末にセイは苦渋の選択で手紙を読むことを決めた。

フィンと二人して息を呑みながら開いたその中には、六枚にもおよぶ便箋とそこにびっしりとかかれた文字が羅列していた。

最初は季節のうつりかわりを語り、自分の近況を述べ、その後いかに自分がセイに不快な目にあわされたかを場面及びセリフごとにことまかに書き連ねてあった。物書きとして、たつたあれだけの場面でここまでの心理描写ができたのには感嘆できないこともないが、果たし状としてはなかなかにずれたものだった。

その全てをここに記述しようとする、一章がまるまる終わってしまつたため、要点を抽出し要約しわかりやすく直す。

『貴方、よくもこのワタクシに恥をかかせてくれましたわね。許しませんわよ！』

決闘です！ 三日後、午後二時にバルシア峡谷に来なさい！ このかり、必ずナニが何でも何倍にして返させていただきますわ！

オーツホツホツホ！』

(ああ……あつたま痛い)

何かあるだろうとは覚悟していたものの、事実を目の前になると何とも言い知れぬ虚脱感がこみ上げてくる。

「はあ……何でこうなつたんだろう」

セイが冷たい床に正座しながらそんな言葉を吐くと、

「それはこちらのセリフなのだがな」

上から蔑むような、貫くような底冷えた視線がそそがれた。

クレイはセイの目の前で足を組んで椅子に座つて、手紙をキツととがった目で睨んでいる。

いや、読み返している。まるで何度も何度も読めば、書いてある内容が変化するはずだと言いたげに。でももちろんそんなことはな

く、目の前にあるのは純然とした事実だった。やがてクレイは仕事につかれたOLのように、パサリと机の上に手紙を放った。

「つまり、だ」

クレイはセイに視線を向けようとせず、漆黒の髪をかきあげる。それだけのことなのに、何故だか背筋がゾクリときた。

「お前は自分の危うい、ともすれば私やフィンだけでなく魔女上層部のパルザイド様たちすら立場を悪くするかもしれない自分の存在をある程度認識し、さらにフィンから私の『面倒を起こすな』という伝言を聞いたにもかかわらず、エクシヤの言葉に逆上し暴行。

そしてその報復としてこのふざけた果たし状が送られてきたわけだ」

「えーと、その」

「そうだな」

「は、はい。そうです」

有無を言わせぬ空気に、セイはこくりと二回頷いた。まあ、確かに事実のみ並べればクレイの言うことに間違っではない。クレイは額に手をおいて軽く一つため息、そして続けてリンパマッサージをして血行をよくすると、

「そんなに死にたいのか、貴様は」

セイの鼻先に魔法の杖を突きつけた。

あと一〇センチもない、本当の意味での至近。

ここである時地下牢で見た魔法の矢でも出されれば、身の安全なんてものは保証されるはずもなく。

セイの額にいやな汗が流れるのは道理だ。

「ちょ、ちよつと落ち着きやしませんかねクレイさん。ほら、昔の人は言ったものですよ、争いは何も生まないと！人は仲良く手を取り合うべきかとー！」

「安心しろ、私は魔女だしお前を人とも思っていない」

「それは人権無視じゃないかなー！」

クレイは落ち着いた、氷柱のようなとげとげしさと冷気を背負ったまま、セイの輪郭を杖でなぞっていく。

「わかつているのか？ お前の軽はずみな行動がどれほどの事態を引き起こす危険性があるのか」

「え、えくと……それなりに？」

「嘘をつけ！ お前は全然わかつてない！」

杖で無理やり顎を上げさせられた。食い込む杖が痛くて、うまくしゃべることができない。そして視線は鋭く蒼い瞳に固定されるのだから、その手際はあっぱれとしか表現できなかった。

いや、そんなことのん気に表現している場合じゃない。とにかく、イイワケを考えないとこのまま消される。

セイはわりと本気でそう考えていた。

クレイはセイに顔をよせると、いらだった、そして脅すような低い声で続ける。

「お前は……お前は微塵もわかつちやいない。自分のことも、私たちの立場も、この世界のことも、何もかも！

それなりにわかつている？ ハッ、笑わせてくれるな。自分のことすら満足にわかつてすらいないヤツが、何をわかつているっていうんだ」

「うーん、そうだな。とりあえずクレイを笑わすことができたなら体を張ったかいいがありますというかなんというか………すみません、調子にのりました」

場を和ませようとした冗談は、もちろんクレイには通じず逆に杖がさつきより数センチ深く食い込んだ。

息を止める気かと思うほど強く。

消してやりたいと思われるかのように、執拗に。

クレイはもう冷気を超えて殺気とさえ思える険悪な空気を放ちながら、喉元の杖をグルグルとひねった。

息苦しさで痛みが喉を走って、

「ここではつきり言っておこう。私はお前が嫌いだ。大嫌いだ」

その一言で、痛みもいいわけも言葉も全て飛んだ。

嫌い。

大嫌い。

そのセリフは、この世界に来てからセイの心に一番刺さった。

嫌われることが初めなわけではない。むしろ絶対幸福主義者なんて正義のミカタの真似事なんてしていたのだから、それなりに恨みも買っている。

でもだからこそ、それを面と向かって言われるのは……ひどく、こたえた。

心が沈んでしまいそうなくらいに。

しかし、クレイは止まる気配どころか、片鱗さえなかった。

「お前のせいで私は毎日毎日図書館に通い詰めだ。資料をあさり……だというのに少しの手がかりすら掴めない。

お前は何だ？ これだけ私の、私たちのプランを無茶苦茶にしておいてのうのと日常を送り、さらにかき回して

後半は、言葉になっっていなかった。

ただ、何がいたいのかは理解できた。

つまり、邪魔なのだ。

クレイにとって、フィンにとって、パラルザイドにとって、そしてこの世界にとって　セイという存在は目障りだと、クレイはその瞳で語っていた。

その言葉に、セイがいかなる答えを返すことができただろうか。きつとそれは、その通りなのだから。

多くの物語を読み書いたセイだからこそ、ずっと前から……そこそこの世界に残ることを選んでから気付いていた。異界から来た者を元の世界に戻す方法が、決して簡単ではないことくらい。そして、今自分のせいで重しを背負った人間がいる。目の前の少女たちが、そうだ。セイという存在が、二人にとって厄災じみたものをもたらしたのは確実に

それは、少なくとも幸福とはいえないことだ。

(なにが……)

自分を笑ってやりたくなかった。

なにが、ハッピーエンド主義者だ。自分自身がここに来たことで、少なくとも二人の少女を不幸にしているではないか。

そればかりか、くだらない問題を起こして、馬鹿のような正義感を振り回して。

それで、本当にハッピーエンドにたどり着けるのか。

(本当に、オレは何をいまさら)

「いまさらそんなこと言っても仕方ないじゃん」

場にそぐわない、能天気な声にセイは落ちかけていた思考の渦から脱出した。

杖をどけたクレイが顔を向けた方向には、おおきな紙を抱えたフィンが「しょうがないなあ」みたいな表情で立っている。

「何をのん気な！ そもそも、こんなことになったのはお前の監督不行届きじゃないのか！」

「ならボクを怒ればいいじゃない。あ、今は困るから後にしてもらうけど」

フィンはそう言いながら、机の上に抱えていた紙を広げ始める。

クレイはそれに訝しげな表情をして、フィンに尋ねる。

「何をしている、フィン」

「ん？ 何って、対策を練ろうと思って」

「対策？」

セイはクレイに睨まれながら紙を覗き込んだ。

それは、地図だった。

古びて色あせた紙の上には、黒いインクで等高線や町の名前、細い街道などが見て取れる。

「これって、このあたりの地図？」

「うん、そだよ。ちよっと見やすくするから待っててね」

そう言っただけでフィンは地図の端っこに手を載せたかと思うと、インクに沿うように光が地図を走った。それだけでもセイは十分びっく

りしたが、本番はその後だった。

やがて光がおさまると、地図で等高線が描かれた山らしきところが もこりと盛り上がったのだ。

「え、はあ？」

セイが言いたいことを言葉にできないうちに、山はそびえたち、谷や湖は深く沈み、あの時計塔の街は緻密なプラモデルのように出来上がっていた。それはまるで、この地域を小さくしたミニチュア いや、箱庭のようだった。

「驚くのは後にしてね、セイ。とりあえず、ここ見て」

フィンは、最初に盛り上がった山のふもと付近を指さした。

セイが目を凝らすと、そこには一筋の谷らしきものがある。街の大きさと比較すると、そこそこの広さがあるようだ。

「ここが、さつき手紙に書いてあったバルシア峡谷。ここはホウキの訓練をするところで有名な場所なの。」

ここを決闘場所に指定したつてことはたぶん、エクシャはセイにホウキ乗りの勝負を挑むつもりだと思う」

フィンの説明に、セイは頷く。

「魔法の打ち合いみたいなことにはならないってことか」

「うん。ていうか、よっぽどの事情や申請がない限り、魔女は魔女に向けて魔法を使っちゃ駄目なんだよ。え〜と、確か魔女法の……」

「魔法第一七条の『魔女に魔女が攻撃性のある魔法を使用する』とは禁ずる』だ、馬鹿者」

「そうそう、さすがクレイ勉強家！ それでちゃんと定められてるからね」

「それは、うれしい誤算だな。魔法勝負とか言われたら誤魔化しようがなかった」

セイが漏らした安堵の感想に、

「はっ、よくわかっていないやつが軽く言ってくれる」

クレイが壁にもたれながら、鼻で笑った。

（どうということだ？）

わけがわからないのでフィンのほうを向いてみると、彼女もどこか不安そうな顔をしている。

その表情は、セイの不安を煽るのには十分だった。

「どういうことだ、フィン」

心で言ったのと同じセリフを、今度はフィンにぶつける。

フィンはそれに「え」と、ね」と、少し言いよんだ後、

「このバルシア峡谷なんだけどね。実はけっこう上級者用の訓練所なの。」

見て。こつやってルート自体がぐねぐね折曲がってるから、コースどりがすごく難しいし。他にもトラップとか色々あって……」

「あつて？」

「……………」

「笑顔で黙るな、怖い」

「じゃあ、言っちゃうとね。ぶつちやけると、このままこの勝負に挑んだらセイは大怪我じゃすまないかもしれません！」

フィンは笑顔で宣告した。ぴつと立てた人差し指は、「ここがポイント！」と表現しているようだ。

確かに重要なポイントだ。

なんだって、自分の生死がかかっているのだから。

(というか、またか)

また生死の関わる問題か。

「穏やかな日常を、オレに返してくれ」

「それはまるまる、私のセリフだ」

クレイは興味がつきた、というように地図から目を離し背を向ける。

本ではちきれそうなカバンを肩にかけ、自室に戻るつもりなのか階段を上がり始めた。その背中に、フィンがなんだかえらそうに声をかける。

「ちよつと、どこ行くのかねクレイくん。作戦会議はまだ終わってないのだ！」

「知らん。そもそもお前らがまいた種だ。

私は手助けするつもりなんて毛頭ない。せいぜい、エクシヤに恥をかかされればいい。そうすればあのエクシヤも満足して大事にはならないだろう」

フィンの悪ふざけにも乗ることなくクレイはそう言い捨てた。フィンももう無駄だと思ったのか、クレイの背中を見ながらため息をついたその時、

「ああ、最後に」

どういふ風の吹き回しなのか、クレイがわざとらしくセイに振り向いた。

そして、

「死んでくれて一向にかまわないからな。むしろそのほうが私は気が楽だ」

冷たい表情のまま、見下すように心のままを述べた。

それは本気の目で、本気の言葉だった。セイが言葉をつげないまままでいると、クレイはセイから視線を切ると二階へと上がっていった。

「はあ、まったくクレイは」

やれやれと肩をすくめてあきれれるフィンとは対照的に、セイは何だかうまく飲み込むことのできない感情に襲われていた。

苛立ち、でもない。

怒り、でもない。

あえて表現するとすれば……戸惑い、だろうか。

直接的に「死ね」と言われているのに、不思議とそれに嫌悪は抱かない。あの冷たい目が、セイには何か別のものであるように思えて、しかたがなかった。

何かは、もちろんまったくわからないが。

「おい、セイ。クレイの言ったことなんかいちいち真に受けてると人生つまなくなっちゃうよ」

いつの間に回りこんだのか、フィンが目の前でぐるぐると指を回

していた。その表現があまりにも的確っぽくて、思わず笑みをこぼす。

「何だよそれ、経験者は語るってやつか」

「ううん、ボクは最初からクレイの話は半分ぐらいしかちゃんと聞いてないもん。むしろ、今までクレイに泣かされてきたアカデミーの同級生たちの観察からでた結果」

確かにあの迫力で迫られれば、萎縮もするだろう。なんとなくどこぞの鬼部長と同じだな、と思いつながら気持ち切り替える。

今は、クレイのことは考えから外そう。まずは、目の前のエクシヤとの決闘からだ。

「で、これからどうするんだ？」

フィンに質問すると、

「うーんとね。セイはどうしたい？」

質問で返された。

(どうしたいって……)

その質問の答えが全然浮かばない。どうすると言われても、決闘するしかないんじゃないだろうか。

「決闘する以外にも、一応方法はあるよ」

顔に出ていたのだろう、フィンは指を立てつつその方法を提案する。

「簡単に言っちゃうと、降伏しちゃうこと。ごめんなさいって謝りの手紙を送れば、とりあえず決闘は回避できると思うよ」

「そうかあ？ あの性格のやつって、無用に白黒はつきりつけたがると思うけど」

「勝負から逃げた、って事実があればきつと納得するんじゃないかな。『ふっ、ワタクシを恐れるあまり勝負すらしようとしないなんて。コレが格の違いというものですわね、オーホッホッホッホ』」

って感じで

モノマネがうまかったからか、はたまたエクシヤのキャラクターが立ちすぎているのか。その光景が、セイの頭にはくつきりはつき

り浮かんだ。

「それに、なんだかんだでエクシヤの上の人は有力者だから。おかしなケン力はなるべく避けたいんじゃないかな？」

「なるほど……」

そこまで思考を読んでの、降伏宣言。確かにそれは良策に思えた。でも、

「せっかくだけど却下」

「だと思ったよ」

フィンは即答した。まるで、最初から答えがわかっていたかのよう。うに。

「え、いいのか。そんなあっさり」

「じゃあ聞くけどさ、降伏しろって言うてする？」

その言葉にセイはしばらく考えて、

「……いや、しないな」

答えがそれしかなくて、セイは笑うしかなかった。

「でしょ？」

そう言つて、フィンもまたうれしそうに笑う。

フィンにも、わかっているのだろう。この勝負、セイは絶対に降りないということが。

謝りの手紙を送る、ということとはつまりあの場での自分たちの行動や発言が誤りだったと認めること。それは、エクシヤがフィンに向けた言動すべてを認めてしまうことになってしまふ。それを、ハッピーエンド主義者を名乗るセイが吞めるわけがない。

それがわかってるから、フィンは何も言わない。フィンが言わないなら、セイもまた語らない。

フィンは右手のこぶしを、がっとなにつきあげた。

「さあ、そうと決まれば特訓あるのみだよ！ こうなったら、エクシヤに一泡ふかせられるぐらいのことしなきゃ、おもしろくないしね！」

セイもまた同じように拳をふりあげる。

「了解！ 頼むよ、フィン先生」

そのまま一つハイタッチして、二人は外が夕日に染まりつつある中、ホウキをもって外に飛び出す。

それぞれのそれぞれに対する優しさを、そこからくる気恥ずかしさを誤魔化すように。

夕日の橙は、セイが考えていたよりずっと暖かく二人を迎えてくれていた。

(5・2) セイとクレイと向けられた気持ち (後書き)

クレイとフィンのコンビ、とても好きです。

こっぴつコンビを書いているのが一番好きな私。

(5・3) 傷と無茶とクレイの二二二

「いったた……」

日もどつぷり暮れ夜の闇が覆った時間。セイはすっかり寢床となつたソファで上半身裸になつて顔をしかめていた。

その体はアザを中心に軽い切り傷、擦り傷に打撲と無事なところのほづが少ないぐらいだ。

その全ては、ホウキの訓練でついたものだ。あ後の訓練は、まさにスパルタだった。おかげで何度も地面に落下し、木の枝に体を引つ掛け、ホウキ自体に体をたたかれた。その厳しさといつたら、怒号と叱咤をとばすフィンにセイが鬼軍曹という言葉を思い浮かべたほどだ。

「まあ、ちゃんと結果が出たからいいけどね」

自転車と同じで、こければこけるほどに上達するものだろうか。セイはまだスピードは出せないものの、なんとかホウキを制御できるようになっていた。

日も落ち、さすがにもう危ないからと練習を切り上げると、セイはフィンの勧めでしみる痛みを堪えながらシャワーを浴び、そして今はフィンの自家製らしい薬やガーゼでできとくに治療している。

「うわ、このぬり薬ヒドイにおいだ。何使ってるんだ」

文句を言いながらも、セイは目立つ怪我に薬を塗っていく。ぬつた場所は、ほんのりあつたかくて効果がありそうに思えた。

「でも……後二日。間に合うのかなあ」

ゆらゆら揺れるラウムの光を見上げながら、セイはぼんやりとそつと呟く。

必死になつてくれているフィンには悪いが、セイにはエクシヤに一泡ふかせることなんか到底できないんじゃないだろうかと感じていた。

いや、そもそも実は一泡ふかせてやるうとも考えていなかった。
セイは、元々争いを好まない。誰かを殴るのも、蹴落とすのも、劣等させるのも苦手だ。

だから、避ける争いは避けてきたし避けられない戦いもなるべく被害が最小に済む方法をとってきた。

そして、今回もそうだ。

今回の一番いい解決法は、圧倒的なまでに大敗してエクシヤに絶大な優越感をもって勝ってもらおう事だろう。そうすればエクシヤはこの件について満足するだろうし、今後ケンカをふっかけられることもなくなるはずだ。

だから、フィンには悪いと思いつつも、明後日の決闘の目標は「怪我をしないこと」と決めていた。

そして、早々に元の世界へ帰る方法の探索に戻らなければ、毎度毎度突き刺さるクレイの視線が痛すぎる。

「よしっ、まあこれでとりあえずはいいかな？」

自分でガーゼや包帯を巻いたから多少不恰好な姿になっているが、自分にはきつとお似合いだろう。セイはそう納得して服を着ようとソファーにかけた上着に手を伸ばし、

「あれ、もう手当てはすんだの？」

風呂上りのフィンと目が合った。

昨日も見た桜色のパジャマに首にタオルをかけて、スタスタとキッチンのおうまで行くとコップに水を注いで飲む。

当然のように手は腰にそえられていて、さらに飲み干したフィンは「ふはー」と心地よさそうなり声をあげた。

その姿はあまりにも、

「おやじくさっ……」

「む、なにその『オヤジクサ』って。なんだか乙女として、とても受け入れられないような言葉な気がするんだけどー」

「そんなことないさ。オヤジクサの意味は、オレの世界じゃ勇ましくて堂々としてるって意味だよ」

納得いかなそうに目を細めるフィンに、セイはしゃあしゃあと答える。しかしフィンはわざわざセイの背後に近づくと、その肩に手を乗せた。

「へえ、そうなんだ？」

「そうだよ」

「本当に？」

「本当に」

「天に誓って？」

「神にさえ誓えるさ」

「じゃあ、部長って人に誓える？」

「それはムリ」

フィンの拳が背中を叩いた。

でもそれは軽くふざけて小突く程度で、ダメージなんて当然……

「つつ、つてええええー！！」

とんでもなく痛かった。

「おおげさだなあ、セイってば」

フィンが肩をすくめるおおげさなりアクションをしている傍で、

セイは痛みにあたえながらフィンにたたかれた場所をなんとか指差す。

「……」

「なに？」

「背中、ケガして……」

セイが指した場所には、ひときわ大きな青アザがあった。それは、ホウキから振り落とされたときにできたものだ。

「あ、ホントだ。コレは痛いね」

「他人事だな、オイ」

「いや、だってボクは痛くないし」

「鬼か」

「だから魔女だってば。」

セイ、薬は？ めったげるからさっ」

フィンの言葉に、しかしセイは首を横に振る。そして、今度は机

の上の空き瓶を指差した。

「さっきの治療で全部なくなっちゃったよ」

「あ、ホントだ。まあ、それだけケガしてたらしょうがないか」

フィン は 空き瓶を目の高さでフリフリしながら中身がまったくないことを確認した。そして、しばらく顎に指をあてて「うーん」と考えるような素振りをすると、

「じゃあ、ボクの部屋にくる？」

なんか、とんでもないことを言い出した。

「え？ は？ 今から？ フィンの部屋に？」

「？ なんてそんな一区切りずつ疑問符をつけるのかな」

何で、じゃない。

外はもう真つ暗で、クレイはご飯がすんだらあつという間に部屋に戻っていて、そんな時間に二人きりで女の子の部屋に入るのとはなるといふか……

「ケガの治療しとかないと、明日に響くのはイヤでしょ？ ただで

さえ余裕なんかないだし」

「いやまあ、そんなことだとは思ってましたけどね」

それでも、悲しきは青少年の性。セイは頭に浮かんだ変な期待を振り解くと、気を引き締めるように頬を軽く叩いた。

「……何してるの、セイ？」

「気にするな、男つてのは時にわけわからない行動をとるものなの。

じゃあ、悪いけどお邪魔させてもらってもいいかな？」

「もちろん！ じゃあ行こう！」

セイはシャツを肩にかけると、階段を昇っていくフィンを追いかけた。

二階に上がると、廊下は真つ暗だ。フィンがランプに明かりを灯すと、右に二つ、左に一つ木製の扉が見えた。

フィンは「こっちだよ」と手招きしながら、右側の奥のほうの扉のノブに手をかける。どうやらそこがフィンの自室らしかった。

「よく考えたら、フィンの部屋に入るの初めてだな」

「あれ、そだっけ？ まあ、ちょっとばかり散らかってるけど気にしないでね」

フィンは軽くそう言うが、やっぱりセイは少しだけ変な緊張をしていた。

女の子の部屋に入るのが初めてというわけではない。例えば部長なんかは家も近所だから、そこそこ行き来しているし部屋にも入ったことがある。

ただ、彼女はセイにとって「女の子」以前に「部長」であり「小学校からの腐れ縁」であるのと、彼女の部屋が女の子にしては機能美と簡素さを追求している点でそういう感情を抱いたことがなかった。

「じゃあ、どうぞ」

フィンがドアを開いて、杖先のラウムを部屋に投げ込む。

セイは一度心を落ち着けるように深呼吸して、部屋の中に入り

「……なんだ、これは」

予想だにしていない感想を抱くことになった。

部屋の中に入ってまず目に入ったのは、木製の大きな机を占領するガラス管やビーカー、試験管やらが複雑に絡み合った何かの装置だった。セイはそれを見て科学の時間に見たフェノールフタレイン溶液の実験器具を思い出す。

そう、それはまさにどこかの薬品会社にある実験室のようなありさまだった。

それだけではない。

壁の戸棚の中にも無数のビーカーや試験管・スポイトに顕微鏡のよつなせのとまるで理科室にいるかのような錯覚を覚える。また別の戸棚には嚴重に鍵が締めてあって、ガラス越しに覗くと色あせたラベルと深い琥珀色をしたビンがいくつも並べられていた。

床には、何かを計算したような紙がまるで机の上から落としたように乱雑に散らばっていて、本もところどころに山積みになっている。

なんとというか、色んな意味で圧巻だった。

「今薬作っちゃうからてきとくに座って待っててー」

フィンはたくさんの引き出しがある棚から薬草らしきものを取りながら話す。

「わ、わかった」

セイは頷くも、しかし座ることができなかった。

いや、座る場所がなかった。

そうだ、予想しておくべきだった。

フィンの「ちょっと散らかってる」が、どのくらいのレベルなのかはこの前で十分理解していたはずだ。

しかも、今回は片付けようにも勝手がわからない。フィンはさっきから床に落ちた計算用紙を迷わずに拾っては調合の参考にしていく。どうやら、どこに何の計算用紙があるか暗記してあるらしい。

これでは、うかつに紙を片付けて座るスペースを確保することもできない。もちろん、薬品なんて触れるわけもない。普通の薬品でさえ取り扱いには注意しなければいけないのに、ここに溢れているのは魔法の薬。何が起こるのか予想がつかないし、自分から藪をつくつもりはない。

仕方がないので、セイは戸棚に並んだ薬品をなんとなしに眺めることにした。

「しかし……」

怪しそうなものばかりだ。

何なのだろう、このブルーハワイの原液のような明るすぎる青色の液体は。

ラベルには効能は書いておらず、ただ『混ぜるな注意!!』と殴り書きしてあるだけだ。

他にもヨウ素液でデンプンの反応が出たときのような濃い紫色の液体には『三倍に薄めること』や、『これ一本で充実の睡眠を貴方に!』と言う怪しいキャッチフレーズのラベルが張られたものもある。ドロップのような固形物のケースにはそれぞれの色の効能が書

かれていた。

マッドサイエント、という言葉がセイの頭に浮かんだ。

魔女なのに。

「しかし、すごい設備だな……。これ全部フィンが集めたのかな」

「ううん、違うよ」

答えを求めたつもりはなかったのだが、フィンは手元に集中しながらこつちに目を向けず答えた。

「どうやら、しゃべっていても手元がお留守にならないタチらしい。

セイも薬のラベルを眺めながら、言葉を返す。

「じゃあ、ここにあるビーカーとか道具はこの家の備品だったわけか？」

「それも違うんだなあ。

ボクたちの何代か前の魔女が、ボクと同じ趣味をしていたらしくてね。これの半分ぐらいはその人の置き土産ってわけ。

ボクたちがここに来たときは、長年使われてなかったからかホコリだらけだったけど」

「じゃあ、残りの半分は？」

「ボクの私物。その顕微鏡とか薬草棚とか、あと薬そのものと薬の材料は全部ボクが集めたりつくったものだよ」

「そうなのか？」

「すごいでしょ」

（そういえば、エクシャに薬学のほうは自分のほうが上だとか自慢してたよな）

何より、薬をつくる手に迷いが無い。よほど手だれていることはそれだけでわかった。

と、

「おい、フィン」

「んー？」

生返事のフィンに振り返って、セイは目に入った一本の試験管を指で示した。

「なんだこの試験管は。ラベルに髑髏マークが」

しかも、液体の色は真緑でブクブクとあわ立っている。

一目で危険物と見てとれた。

フィンはこちらにちらりとだけ視線を投げると、

「ひどいな。それ、髑髏じゃないよ」

「そうなのか？」

「見てわかるでしょ」

そう言われて、もう一度よく見てみる。

丸いフォルムに中央あたりには穴が開いているし、そこから歯の隙間ばい線もある。

色が黄色というのはフィンの少し突飛なセンスだろう。

何度見ても、髑髏にしか見えなかった。

(方向とかが違うのかな？)

どうも、答えがでないのが気に食わない。

それはクイズやなぞなぞなんかの答えがわからないのと同じだ。居心地が悪い。

セイはしばらく悩んだが、意を決するとケースから試験管を慎重に取り出した。中がこぼれないようにしながら、試験管を傾ける。しかし、最初に髑髏をイメージしてしまったからか、はたまたフィンの絵心がないせいか。セイにはやはり髑髏以外に見ることはできない。

「くそ。負けてたまるか」

勝ち負けの問題ではないのだが、セイはもう意地になってラベルを凝視し、試験管をあらゆる方向に傾けた。

その結果、

「あ」

ガシャンと、足元でガラスの割れる音がした。視線を下に向けると、シャツには緑色の液体がかかり、足元には割れた試験管。どうやら、溶解性はないらしくただヒヤリドロリとした感触が胸あたりに感じるだけだ。

と、そこでやつと

「つつツツ!」

セイは自分のしでかした問題を把握して声にならない悲鳴をあげた。

(こ……こいつぁやっちまいましたよセイさん!)

顔が引きつるのが自分でもわかった。

そしてフラッシュバックするのはクレイに始めて魔法をかけられたときのあの恐怖。今回はフィンの怪しい薬ということも手伝って不気味さまで感じてしまう。

今度は、どんなことになるのか。

セイがそんなことに意味はないと思いながらも、身構えて自分に降りかかる厄災を覚悟すると、

しゃん

そんな音が胸元から響いて、用意した覚悟なんて粉碎した。それは何だか安っぽい鈴の音のようだった。小学校なんかでよく見た、いくつかの鈴が付いた楽器の音に少し似ている。

(なに? 何!?)

すっかり動転している思考で、セイは音源を確かめようとシャツをつまむ。するとまた、しゃんしゃんと鈴の音が響いた。

間違いない。この鈴の音は、薬のかかった場所から発せられている。

「何の魔法だ、これ」

気味悪そうにするセイだが、音が鳴る以外はこれといった変化は見られない。首をかしげていると、フィンが機材の影からひょっこり顔を出した。

「あー! 何してるの!」

「あ、その……ごめん」

謝りながらも、セイは濡れているシャツを指差す。その振動で、

またしやらんと鈴の音が響いた。

「この薬、何なんだ？　なんか、かかったところから変な音がするんですけど」

「ん、どれ。　ああ、迷子鈴か」

「迷子鈴？」

「その魔法薬の名前……と言ってもボクが勝手にそう呼んでるだけだけだね。正式名称は数字うっただけで可愛くないんだもん」

そんなことはどうでもいい。いま聞きたいのはこの薬の効能だ。

「そんな深刻そうな顔しなくても大丈夫だよ、おもしろいなあ。」

その魔法薬の効能は、かけられた箇所が振動するたび音がする。それだけ」

説明終わり！　と言わんばかりのフィンに、セイはゆっくりと首をかしげる。

「……それだけ？」

「それだけ」

フィンは頷く。

セイはその意味をしばらく吟味したから、

「意味ねえ」

感想を一言で表現した。なんて、なんてどうでもいい魔法だ。いらない、といってもいい。こんな魔法、一体どんな使い道があるんだろうか。

「まあ、そう思うのかもしれないかなあ。クレイだって使い道が思いつかないって言ってたもん。こんな薬作ってるの、今じゃボクぐらいじゃないかな」

「いや、そもそも何でこんなもん作ってるんだよ」

何の役にも立たないなら、もったいないだけだ。材料だってタダじゃないんだろうし。

と、しかしフィンはちゅちゅと指を振ると、どこか黒い笑顔で口元を押さえる。

「まだまだ甘いですなー、セイも。この薬ほど、楽しめるものはな

いのでございますことよ？」

「敬語になつてないぞ、フィン。で、楽しむつて何をさ？」

「フィンはそれに、もう本当に楽しんだ悪びれた笑顔で堂々と言つた。

「悪戯に決まつてんじゃん！」

「……………」

何も言えなかったのは、呆れたからではない。妙に納得してしまつたからだ。

「ほら、想像してみなよ。クレイ寝てる間に靴の裏にコレを仕掛けてさ。朝起きて、クレイが靴を履いて歩き出そうとすると、足元からピョコピョコかわいい音が響いてくるんだよ！ 『何だこれは！』つて真つ赤な顔して怒るクレイなんて……ああ、たまらないね！」思わず、ふきだしてしまつた。

フィンの言うクレイ像が簡単に脳裏に浮かんだだけでなく、その後のフィンがクレイに怒られる様までしつかり想像できたからだ。

「なるほど、そりゃ完璧な魔法薬だ。今度ぜひとも実践してやれ」

「そのうちね！ あと、いたずら用ならこんななんもあるよ」

「フィンはそう言つと、棚の中から桜色の液体の入つた試験管を取り出すと、

「えいや」

「セイにてきとうに浴びせかけた。

「うわっ！ おい何す」

「しゃん、という魔法薬の音と服の濡れる感触。そして、染まる赤色。

言葉が、途中で途切れた。薬品を避けるように突き出した手は、深い傷で赤く染まつていた。肉が裂け骨が見え、ピクピクと動く筋肉が吐き気を誘う。体を見下ろした。シャツは薬品を浴びたところから裂け、そこからは今なおどくどくと血が流れ出している。赤く、赤く染まつていくシャツ。あきらかに、致命傷だった。

痛みはない。すでに、感覚がなくなっているのかもしれない。

「ファイ……ン？」

信じられないといったふうに見上げるセイに、フィン「ふふ」と冷徹に笑う。そして、

「あはははは！ セイったら、演技派だねえ」

大爆笑した。セイがわけもわからず身動きできないでいると、フィンはハンカチでセイの傷だらけの手を拭う。すると、そこには傷一つない自分の手があった。

「え、ええ？」

今だ混乱しているセイをよそに、フィンはその反応が心底気に入ったのか笑いつぱなしだ。

「それね、配合分量を間違えてできちゃったやつなんだ。効用は、致命傷があるように見える」

「だけ？」

「だけ」

いたずら用って言ったじゃん、と悪びれもしないフィンに、セイはどつと冷や汗を流した。これは、そんな簡単なものじゃない。場合によっては、人を十分に殺せるものだ。

使い時を注意しようとしたセイは、

「ほら、シャツ脱いでこつち座つて。脱いだシャツは貸して。洗い落とせば、魔法薬の力はなくなるからさ」

そうフィンに言われタイミングを逸した。素直にシャツを渡して、セイはベッドの端っこに座る。フィンもシャツをてきとう（本当に、ひどくてきとうに）水洗いして薬が落ちたのを確認すると、部屋の天井近くに張ったロープに洗濯ばさみで干した。

そしてベッドに乗って、セイの背中をとる。

「あちゃ〜、これはけっこうひどいアザだねえ」

「どこぞのオ二軍曹のおかげだね、って痛い痛い！」
傷口をつねられてあげた悲鳴に満足したのか、フィンは治療に入ってくれた。

薬を、丁寧にアザに塗っていつてくれる。その手触りが心地よく

てくすぐつたい。でも思わず体を動かすと、

「はい、動かない」

とペットにシャワーをするような声で言われてしまうので、セイは我慢してその感覚に耐えなければいけなかった。

「それにしても、セイの背中つて大きいね。それにゴツゴツしてる」「正しい表現は『広い』だけど　まあ、男だからね。見てくれこんなでも」

「さわり心地はビミョーだなあ」

「だあ！　だからペタペタ触るなつての！」

手のひらの感触が、妙に気恥ずかしい。

そもそも、何故に半裸で男が女の子といっしょにベッドに座っているのか。

どんな大人の階段三段飛ばしだ。

「まあ、何があるわけでもないけどさ」

あつても困る。と、そんなことを考えている間に、またフィンがさわさわとセイの背中や腕に触れた。

「ちょっとフィンさん、さっきから何をしてらっしゃるのですか？」

「いや、おもしろいなと思って」

「……フィン、人を実験動物みたいな目で見るのは感心できないぞ」
後ろで少しフィンが揺れたのがわかった。

「にははは、バレてたか」

「まったく……」

「怒らないですよ。フィンさんは男の子の体に興味しんしんなのでございませよー！」

その言い方、意味わかってるのだろうか。

「ほら、ボクらつて魔女の国だから基本的に男つてのがわかんないだよ。たまに見ても獣人だし」

確かに、それは「男」というよりは「雄」だ。実感はわかないだろう。

「だから、それが目の前にあると知的好奇心がこつこつこつと湧き

上がってくるわけさ」

「マグマか、お前の好奇心は。とりあえず、とつとと治療だけ済ましてくれ」

「ちえ、わかったよ。今度はちゃんと見せてよね」

フィンは慣れた様子でアザに大きなガーゼを当て、そこに包帯をぐるぐると巻いた。

「はい、これで完了！ お疲れ様でした」

「本当にね……」

セイはシャツだけ着てベッドから立つ。振り返ると、フィンちようどが大きくあくびをひとつするとところだった。

その視線に気付いたフィンは、少しだけばつが悪そうに照れた笑いを浮かべる。

「今日はボクも疲れちゃった。明日も忙しくなるし、そろそろお互い休もうか」

「そうだな」

反論するところなんて微塵もない。セイは頷いてドアをくぐった。そしてそのまま閉めようとしたとき、

「セイ」

そう、呼び止められた。

「ん、何だ？」

「え」と……明日もがんばろうね。エクシヤにぎゃふんって言わせてやるんだから！」

フィスがベッドの上で意気込んでそう言った。

セイはその姿に小さく笑いを漏らして、

「ああ、まかせとけ」

と自信満々に言って、「おやすみ」とお互い最後の挨拶交わした。ドアを閉める。

セイはそのままドアに体重を預けた。

何も聞こえない、静寂。フィンは自分で言ったとおり睡眠に入っただろう。それを確認したセイは、ひとつだけ大きく息を吐いた

後ゆっくりとドアから体を離す。

体内時計で、大体の時間を概算する。

日が落ちてからまだ数時間、おそらく今は午後十時ごろ。いつもなら余裕で起きている時間だ。

まだ、体力はあまっているだろうか？ セイ。

「なら寝る前に、ちよつと体でも動かすかな」

そうすれば、心地よい睡眠ができるはずだ。それはとっても魅力的なことだ。

だから理由は、それだけだ。

決して、フィンの笑顔がなんだかあの時一瞬見た泣きそうな表情に見えたからなんかじゃ、ないんだ。

「よし、やりますか」

気合を言葉にすると、セイはフィンを起こさないようにゆっくりと階段を降りていった。

異界、というのは意外に古くから議論され、考えられてたテーマのひとつだ。

そもそも、この世界は混沌としすぎている。

魔女をはじめ、獣人、亜人、龍族、神族と『方向性の違う神秘』をもつ種族が多すぎるのだ。

力とは、強さだ。

普通ならば、最も強く効率のいい力が他の力を駆逐し破滅させ、世界は大きな『一』がほとんどを支配する。そうなるのが自然の形だ。

しかし、この世界はそうではない。

魔力を使う魔女がいれば、『暴走』することにより力をリミッタ―無視で暴発させる獣人もいる。

『唄』で傷を癒す神族がいれば、その存在のみで力を奪う闇と呼ばれるものもある。

その説明をするために立てられた仮説の一つが『元々各種族は一つの世界に存在していたが、何かの現象によりその一部がこの世界に引き込まれた』という通称「異世界説」だ。

新しい魔法や学説を立てる役割を持つ役職『賢女』のグロマダリエンが立てたこの仮説は、力を持つ種族は別世界の生物だという内容だった。

「くだらない」

それが、資料すべてに目を通したクレイの感想だった。

どれも実証性もなければ論理的でもない。証拠も不十分で確証もない。

夢物語、としか言いようがなかった。

そしてそれは当時の、そして現在の魔女たちにとっても共通の意見である。

「何かヒントになればと思ってみたが……とんだ時間のムダ使いだ」
クレイはメガネを外すと、背もたれに深く体重をかける。背骨がポキポキとなる音が聞こえた。

いや、時間のムダだというなら、今までのすべてがほぼムダに費えたといつていい。

たくさんの資料を読み、学術書からは手はおとぎ話まで手を伸ばした。しかしどれも結論は異界など妄想の類、それ以上になることはなかった。

八方詰まり、というやつだ。

「だいたい、本当に異界なんていうものがあるのか？ あいつの頭がくるってるだけじゃないのか……」

クレイが珍しく弱音を吐いた、その時だった。

ドスン、と。

遠くのほうで、かなりかすかではあるが何かが落ちる音が響いた。

（何だ？ 動物でも迷い込んだか？）

クレイは壁にかけたベルトから杖を取り出し、のぞきこむようにして窓の外の暗闇に目を光らせる。

そこには、ふらふらと浮かぶ光の球が一つ。

(何だ、あれは)

目をこらしてみても、よく見えない。クレイは部屋の明かりを消すと、小さく唱えた。

「我に 千里をも見通す 広き世界を」
『遠視』^{フランプリテス}

唱えると同時に、クレイの視界がまるでカメラのズームのように光の下へと寄った。

『遠視』の魔法 それは名の通り、遠くのものを見るためのものだ。

戦魔女の中の遠距離特化型魔女 通称『シューター』と呼ばれるものたちにとっては必須魔法のひとつではあるが、微妙な調節が必要な正確さを求められる魔法だ。

しかしクレイは、それもなんなく使いこなす。ほどなくして、クレイの瞳は淡い光を捉えた。

それは、ランプの光だった。

クレイはそのまま少し上に視線をスライドさせる。そこに映っていたのは、夜風に揺れるオレンジ色の髪で……

「何をやってるんだ、あのバカは」

得も知れぬ苛立ちに、歯を食いしばった。

そこにいたのはまぎれもなくセイだった。真つ暗な闇の中、ホウキにひっかいたかすかな明かり一つで、飛行の練習を繰り返している。その姿は不安定で、今にも落下してしまいそうだった。

「バカか、そんなことをしたって……」

効果なんかない。

訓練にすらならない。

魔法にとつて大切なのは自己のイメージの確立と精神の安定だ。

この二つの能力が高ければ、例え魔力量に絶望的な差があろうと対等以上の勝負ができる。

その逆も、然りだ。

セイはホウキでの飛行魔法を習いたてなのに加え、二つの訓練さえ行っていない。それなのに、まわりの見えない暗闇でうまく力を出し切れるわけがなかった。

そう思っているそばから、セイはまた地面に落ちる。遠く、かすかな音がクレイにも届いた。

今のは、痛い。

いくら魔女のローブに対衝撃の効果があろうと、今のは効いたはずだ。

しかし、

「……なぜだ」

セイは立ち上がる。

わき腹を押さえて、痛みに耐えるように顔をゆがめても。

「なぜ、そんなにまっすぐに前を見る」

なぜ、愚鈍を繰り返すことができる。

なぜ、ダメだと思わない。

なぜ、あきらめない。

なぜ。

なぜ、なぜ。

なぜ、なぜ、なぜ、なぜ、なぜ、なぜ！

なぜ、未来を信じられる。

「くそ、なんだこれは！」

自分の内に生まれた感情が、いらだちの理由がわからなくてクレイは壁を思い切り叩いた。それも、手に痛みが走るだけでクレイの心はいっこうに楽にはしてくれない。

セイはまたホウキを握り、フラフラと空へとのぼる。クレイは、そんなバカな姿を睨むように見つめていた。

目は離すことができなかった。

夜は深けていく。

今日は、雲で星も月も見ることにはできなかった。

(5・3) 傷と無茶とクレイのニル(後書き)

ゆっくり更新。

(5・4) エクシャと決意と一つの提案

決闘二日前。

セイは今日も朝からホウキにまたがる　　ようなことはなかった。昨日の夜から続く曇天の下、セイとフィンには外に置きっぱなしにしている机の上で例の立体地図とにらめっこしている。

二人とも、手は軽く顎にそえられて。

「あぶないのはやっぱりここかなあ。ガガ鳥は時々とてつもないもの投げつけてくるし」

「オレとしてはそこよりこの植物のところが怖いよ。コントロールうまくできないオレには致命的だ」

話しているのは、エクシャが選ぶであろうコースのことだ。

朝食をとった後、洗い物をしていたセイに、

「今日は、ホウキにのる前にコースの説明したげる！」

とフィンが地図を抱えてきた。そして今こうやってコースを見ながら意見を交わしているのだが、

「大きな関門は全部で三つ　　岩の密林にガガ鳥の巣、襲ってくるツル、か。なんか出てくるのは不安材料ばっかだな」

「仕方ないんじゃない？　今だって何とか飛べるレベルだし、そもそも飛ぶ練習始めたの昨日からだからね」

フィンは慰めるように肩をポンポンと叩いてくる。

何故だろう、少しだけ屈辱的だ。

「それでも、昨日でちゃんとコントロールはできるようになったんだぞ」

「そうかなあ？　ボクが見てた限りじゃギリギリって感じだったよ？　むしろナヨナヨ？」

……反論の余地がいまいちないのがくやしかった。

この話題に自分の勝機はないと見て、セイはホウキを手にとる。

「コースの特徴も理解できたし、そろそろ練習始めないか？　ただ

「でさえ時間はおしんだし」

「そだね、じゃあきょうもがんばっていきま」

フィンが手を振り上げようとしたときだった。

「ごきげんはいかがかしら、できそこないのみなさん！」

嫌味が上から降ってきた。

誰か、なんて確認をする必要もない。その声色と、馬鹿らしいほどに丁寧な言葉づかいに該当するのはただ一人。

「やあ、けっこうヒマなんだね、エクシャ」

フィンはにつこりと笑顔で、相変わらず何故乱れないのかわからない完璧な縦ロールを携えた少女に視線を向けた。

二人のお供をつれたエクシャは、優雅に髪をすくいながらホウキから降りる。

その姿に、不覚ながら見惚れた。

完璧とっていいほどのコントロールで、まるで椅子から腰を上げるようにホウキを固定している。

（口だけじゃないってことか……）

今さらながら、勝負の無謀さを自覚する。彼女は、ずっと魔女として生きて訓練を重ねてきた生粋の魔女。

対して、セイは魔法の存在を最近知ったばかりの上、男であることを隠しているまがいもの。

実力差なんて、圧倒的という言葉でしか表現できなかった。

「あら、どうしたのかしら、セイさん？ ようやくワタクシの尊大さを理解できたのかしら。」

「そのできそこないとはやはり違うのかしらね」

さすがに、手を上げるようなことはしなかった。

でも、腹のたつことに変わりはない。何で、こんなにすばらしい力を持っているのに、他人をひがむのか。誰かを不幸せに導こうとするのか。セイの中で、色んな考えがぐるぐる回って、結局それは明確な言葉にはならなかった。

だから、それが少しでも伝わるように声に感情を乗せる。

「何しにきた」

それに、エクシヤは余裕を示すような笑みを浮かべた。

「そう殺気だたないでくださいな。いえ、勝ったときの条件を手紙に書くのを忘れていたので、それをお伝えに」

「あんなに恨み言書くスペーアあるなら、先に書いちゃえばよかったですじゃん」

「うるさいですわね！」

フィンの明確なツツコミに余裕をあつさり崩しながら、

「よくお聞きなさい！ …… まあ、勝負はもう付いているも同然ですからほとんど命令になつてしまいますが。」

貴方たちが負けたら、あの場でのことは全て自分たちの間違いで失態であつたと認め、土下座しなさい。

このワタクシに掴みかかったことがそれぐらいでチャラになるのです、安いものでしょう？」

「……なんだつて？」

セイは、思わず聞き返していた。

勝利条件？ ああ、確かにこれは決闘だ。戦いをする以上、なんらかの理由がある。理由のぶつかり合いみたいなものだ、戦いなんて。勝者の理由は弱者の理由を駆逐する。

そして確かに、今回の戦いの理由はそれだ。

(だから、負けたら間違いを認めろ？)

それは、つまり。

あの場所でのエクシヤの発言は正しかったと。あの時に怒ったセイが、間違いだったと。

そう、認めると言うのか。

「……できるか」

エクシヤに掴みかかったことは、自分の責任だ。それについての謝罪なら、勝負なんてしなくてもいくらでも土下座しよう。

ただ、その経緯までも間違っていると認めることは、セイには死んでもできなかった。

だって、それは。

フィンの存在を、フィンの努力を、全て否定することだ。できるはず、ない。

と、いきなりフィンに手を掴まれた。がっしりと、まるで拘束するよう。セイの煮えたぎる激情を見透かしたように。

そしてどこか、すぎるように。

「……ふくん、じゃあボクらが勝ったときはどうしてくれるのかな、そっちは」

フィンが、ニヤリと笑う。エクシヤも、笑い返す。

「あら、勝てる気であるのかしら？」

「調子こいてんじゃないわよ、できそこない」「そーだそーだ」

フィンの握る力が、ぎゅっと強まった。セイは、それに感謝する。この手がなければ、きっと今頃自分はその時の焼き増しをしてしまっただろうから。

「御託はいいよ。どうなのかな？　ボクたちが勝ったら何してくれる？」

まるで勝てる可能性があるようなその口調に、今度はエクシヤも苛立ちを隠さなかった。

「好きにしてよろしくてよ。万に一つも、ワタクシが敗れる可能性なんてないのですから」

余裕ぶって鼻をならすが、見え透いている。エクシヤは許せないんだろう、フィンという力のない魔女に小馬鹿にされることが。

対してフィンは、奥を見せない。

「ふくん、じゃあ覚悟しておいてね？　すごい罰ゲーム、用意しておくから！」

楽しそうな声に、エクシヤは自分の小物っぷりを更に自覚したようだった。

踵を返して、ホウキにまたがる。

「はっ、口ではなんともおっしやいなさいな！ 勝つのは、ワタクシですわ！」

「その言葉を吐く時点で、負けフラグが立ってることを自覚したほうがいいと思うぞ」

追い討ちをかけるようなセイの声に、エクシヤは顔を真っ赤にして「行くわよ！」と取り巻きを怒鳴りつけると、あっという間に飛んでいった。

セイとフィンはそのが消えるまで見送ると、ポツリポツリと

「また、めんどろくさくなっただにゃ」

「まったく。負けられない理由、できちゃったよ」

セイは頭の後ろをボリボリとかいて、そのまま指をスライドさせて、耳をくりくりと撫で回す。

ああ、もう中途半端なことは言わない。

絶対に、勝つてやる。

どれだけ確率が低いと言われようが。

どれだけ無理だと言われようが。

どれだけ無謀と蔑まれようが。

あんなことを言うクサレ魔女に、負けてなんかやるものか。

「フィン、何をすればいい？」

「かたん」

フィンはセイの言葉を予測していたように、すぐに応える。

「ひたすら訓練！ 特訓あるのみだよ！ 今から、さっき教えたコースの特徴にそった特訓するからね。」

ケガの比は、昨日とは比べ物にならないよ。覚悟はいいかにゃ？」

「かまわないよ。やってやるうじゃないか」

セイは腕をぐっと前に出す。フィンはその腕を見て、首をかしげた。

「ん？ なにそれ」

「ああ、こつちの世界にはないのか。こつうふうに……」

セイは左手でフィンの手を持ち上げると、拳・腕の順に軽く一回

ずつ当てて、

「で、最後にハイタッチ！」

空高く上げた手のひらを打った。

パン、と軽く弾けた音が響く。

その音に目をクリクリさせながら、フィンは少しだけ赤くなった手のひらをまじまじと眺めた。

「で、なんなのさこれは」

「これは……え〜と、オレの世界でお互いの信頼や成功を祝う行為かな？ 今回の場合で言うところと絶対にあの縦ロールを負かしてやろう、っていう決意」

「ふうん、そなんだ」

フィンは興味深げに同じ行為を空で繰り返して、なんだかうれしそうに笑った。

「よし、じゃあビシバシ行くよお！ 覚悟はいいかー！」

「どんとーいー！」

ハイテンションに身を任せつつ、セイもフィンと同じように拳を空に突きつけた。

その夜。

フィンはいつものように借りてきた資料からめぼしい情報を紙に写していた。それがほとんど無駄な行為だと理解しつつも、以外にやることか思いつかない。自分の知識の浅さとふがいなさに、クレイの不満がジリジリと溜まって爆発寸前のときだった。

小さな、ためらいがちのノック音だった。

それでフィンでないことはわかった。彼女がこの部屋を訪れるときはノックしないのが普通で、してもドンドンという大きな音と「くれい〜」という声が聞こえるはずだ。

この家にいるのは現在三人。つまり、消去法で考えれば、「ごめん、クレイ。ちょっといいかな？」

ドアの向こうから、くぐもったセイの声が聞こえた。

クレイが最初に持った感情を、嫌悪でも苛立ちでもなく、

(なんでやつが私の部屋を訪ねてくる?)

純粹な疑問だった。あいつは馬鹿ではない。私が避けていることも、嫌っていることも理解しているはずだ。

いや、それすら私の過大評価だったということだろうか……。

「あの、もう寝ちゃってるのかな?」

「いや……起きている。待て」

そう返事をしてから、クレイは自分の言ったことに驚いていた。なぜ、セイを招き入れるようなことを言ったのか、自分自身でもわからなかったからだ。

拒否よりその疑問を解決したいという気持ちが勝ったのだろうか。

よくわからない感情にさいなまれながら、しかしそれを微塵も顔に出さずクレイは扉を開ける。

そこには、少女にしか見えない少年の魔女が立っていた。その目はまっすぐと、気圧されるほどに　しかし落ち着いてクレイの瞳を捕らえている。

揺るがない、引かない。

そんな思いを、貫こうとするように。

その印象の違いに、クレイが人知れず息を呑む中、

「クレイ、頼みがあるんだ」

セイは、そう切り出した。

(5-4) エクシャと決意と一つの提案(後書き)

パソコンが吹っ飛びました。修理しつつ、なんとか更新。
遅れて申し訳ないです

(5・5) セイとエクシャと溪谷の戦い

バルシア峡谷は、都市から西にあるそんなに人気のない場所だ。

ホウキの訓練というものは、あまり魔女の中でメジャーなものではないらしい。元の世界でいうところの車 最低限の力量があればそれでいい。極めようとするもの以外、積極的な鍛錬を積もうとはしない。その結果、この溪谷もまったく人というものがおらず、時々遠くで鳥の声が聞こえるぐらいだ。

谷の深さは、とんでもなく深い。谷、というよりは崖という表現のほうがしっくりくる。ビルの五階や六階はゆうにありそうだった。日がのぼっていても底のほうは影が差して薄暗く、かすかに聞こえる水音がなんだか薄気味悪くて、落ち着かない。

セイは上から見たその光景に静かに息を呑んだ。

(……こんなところで、気後れしている場合じゃないんだ)

自分に何度も言い聞かせて、前を見る。

その光景は、数日前よりはずいぶん様になっていた。

最初の頃のように、急発進したりフラフラとよろつくこともない。すべるように、セイの乗ったホウキは空に浮かんでいる。

これも、フィンのスパルタ訓練のおかげだ。それに……

「セイ。……おい。セイってば」

「へ、あ。何？」

「下。見えたよ」

意識が他にいきかけていたセイは、前を飛んでいるフィンに声をかけられて、彼女が下を指差しているのに気がついた。

セイも、落ちないようにバランスをとって見てみる。

そこには、崖のへりに黒い小さな影が三つ。

その一つからのぞくドリルのような髪には、見覚えがあった。

「さ……と」

セイは舌なめずりしてその光景を見下ろす。
ついに、だ。

あそこに降りれば、始まる。

負けられない、負けたくない戦いが。

勝率の低い、そして危険の高い戦いが。

正直、身震いする。

ホウキを持つ手が、震えだしそうなのを気合だけで押し殺している状況だ。

コースについては熟知した。

したからこそ、今から自分がどれほどの無謀に挑戦するかもよくわかっていた。

勝てる、以前に怪我をせずにすむかもわからない。

死の危険はそれほどないまでも、未経験のことをやるには怖すぎることだ。

と、

「さて、いよいよなんだけど……始まる前に、ひとつだけいいかな」

フィンが、突然振り向いた。その表情は、ここ数日では見たことのない不安そうなもの。

「何かな？」

と言つては見たが、その表情だけ見れば、セイは自分がなんて言えればいいかわかっていた。ここ数日、だてにずっと一緒にいた仲間なわけではない。

「セイ、もし危険な」

「わかってる」

フィンの言葉をくぎるように、セイは頷いて、

「絶対勝とう、だろ？」

不敵にニヤリと笑った。

フィン是不安そうな顔をそのまま数秒固めて、

「勝とう、じゃなくて勝つんだよ！ フィン先生が、負けなんて許さないんだ」

からね！」

心地よいほどの笑顔で、勝利宣言をした。

セイも、もちろん頷く。

それだけで、お互い覚悟を決めるには十分だ。

「じゃあ、行くよ！」

「了解！」

そうしてセイとフィンは何ウキを操り、エクシャたちに対峙するように目の前に降り立った。

エクシャは何ウキを逆さにして仁王立ちで、二人を待っていた。もちろん後ろにはいつもの側近が二人。

エクシャは、その整った顔をもったいなぐらいに邪悪に歪ませて、嘲っている。

「あら、ずいぶんと遅い到着ですこと。てっきり怖くなって逃げ帰って、家で大人しくしゃしゃいじようでも書いているのかと」

「キメ台詞のつもりなら、噛んじゃダメだよ？」

「う、うるさいですわね！」

「あと、遅れてないから。そっちが来るの早いだけ」

「……っ！」

しかし、それもいつものごとくあっという間に崩れた。

セイは思う。

彼女はなぜここまで自分のキャラクターをわきまえているのだろうか。

自分というものをここまで体現できている存在は、珍しいを通り越して少し愛しいとすら感じてしまう。

（なんだか、友達になりたいと思えてきた）

なんてことを場違いにも考えてしまうほどだ。

しばらくして、エクシャは折り合いをつけたのか場をごまかすように一つ咳払いをすると、再び余裕の表情を浮かべた。

「めげない魔女だ。」

「さて　ここまで来たということは、ワタクシに惨敗する覚悟を

したということですね。……あら失礼、勝負する覚悟でしたかしら」

「最初のほうがおしいね。正しくは、『エクシヤを惨敗させる覚悟をしてきたんだよ』」

対して、フィンも容赦はない。しかし、今回はエクシヤの余裕は崩れなかった。

「あら、大きな口をたたきますこと。その自信、どこからくるのかしら？ ああ、妄言なら自信も何もないのかしら？」

その裏にあるのは、絶対的な自信。自分は負けれないという、訓練を積んできたものの言葉だった。

「自信がないなら、ここにはこないよ。」

セイをあんまり甘く見ないほうがいいよ？ だてや酔狂で途中から魔女になったわけじゃないよ？」

「それさえも完全に打ちのめすから、ワタクシはエリートなのですわ」

その揺るぎない言葉は、敵であるにも関わらずセイを感心させた。この魔女、口も態度も傲慢だがそれを裏づけする努力をしているようだ。

(これは、簡単に勝たしてはくれなさそうだな)

元々、勝ちが薄いのは覚悟していたけど。

じゃあ、少し勝率を上げておかないといけない。セイはフィンの背後に、ゆっくりと近づいていく。

「それより、約束は覚えていらして？ 貴女が負けたら、頭を下げてもらいますわよ。身分相応に土下座を」

「いいですね、エクシヤ様」「はやくみたいですわね！」

先に勝ち条件を口にする時点で、負けが始まっているんだよ。勝負ごとは本当に弱いねえ、エクシヤ。そっちこそ、負けたら何でも言うこと聞くんだよな？」

「あら、そんなこと考える必要、貴女たちはなくてよ。どうせ、無駄で終わるんですから」

「その頭でよく言つよ」

「な、この高貴かつ芸術的なすばらしい髪型が貴女にはわからないというのかしら!？」

激昂したエクシヤは、そこでわざとらしくため息を一つつくど、

「はあ……下等なものと口を聞いていると、ワタクシの高貴なお口が穢れてしまいますわ。口げんかしていても仕方ありません。決闘で、決着をつけましょう」

火蓋を、切り始めた。

「ルールは簡単ですわ。」

このバルシア峡谷のコースを先にゴールしたほうの勝ちです。もちろん、谷から出た時点で失格ですから、そのつもりで。あと、この使用許可はワタクシの偉大な師に頼んだのでご心配なく」

「魔法は？ 魔法の使用制限」

「今回はそちらに合わせて魔法の使用は禁止にしてあげますわ。どうせ、ちゃんとした魔法など一つ二つぐらいしか使えないのでしよう」

おいしい。正しくは、一つも使えない。ゆっくり近づきながら、心でそんなツツコミを入れた。

エクシヤは、高飛車な態度でフィンを嘲笑う。

「他にもハンデが欲しいなら言ってみてはいかがかしら？ ものによつては許可しましてよ」

「そんなこと言っているのかにや〜？ じゃあね」

「必要、ない」

会話に割って入ったのは、無口なキャラクターを演じたセイだった。肩に手を置いたとき「うわ!」とフィンを跳ね上がったが、今は放置の方向で。

さあ、相手を揺さぶろう。

彼女にも、なるべく相手の動揺を誘えと言われているし。セイは、漏れそうないやらしい笑顔を腹に隠して思考する。

さてさて、どうしてやろうか。

無口なキャラクターを演じる以上、必要以上にはしゃべれない。しかしそれは、言律師と魔女のトップに呼ばれたセイには問題にならない。

後でフィンに聞いた話だが、言律師というのはセイの世界における「口達者」の最上級の言葉らしい。その言葉は、褒め言葉にも貶し言葉にもなると。

(オレには、ぴったりだ)

最小限の一言で、相手を激昂におしやって、精神的に不安定にする。

それだけの実力が、セイにはある。

「そんなもの、必要ない」

そして、わずかな言葉でわずかな勝利をこの手に手繰り寄せる。

すべては、ハッピーエンドのために。

「なくても、勝てる」

「……………っこの！」

思惑通り。

エクシャは、もの見事に激昂した。これで、前準備は万端だ。

これ以上は、いらぬ。あまり怒らせても、逆効果だ。

あとは、作戦通りに。

「始めよう。とつと勝負を終わらせてあげる」

だというのに、さらに一言　フィンに対する暴言の仕返しを追加して。怒りのあまり地団駄を始めるエクシャを背に、セイは黙々と準備を始めた。

口に、少しだけ笑みを浮かべて。

そんなエクシャのはしたない様子を、クレイは高い岩の上から盗み見ていた。

その距離は、常人では表情どころか人の形を認識することすら難しい。しかしクレイは得意の『遠視』の魔法でそれらの様子をきつ

ちりと捉えていた。

そんなことまでして二人の動向を見守るフィンは、ここに来る前からずっと一つの疑問を抱えていた。

（私は、なぜここまでして様子を見に来た？）

放っておけばいい。

大体、そう言ったはずだ。これはお前からで解決しろと。私は知らないと。

ところがどうだ。

結局クレイは、この件にがつつりと関わってしまった。

それは、数日前の夜。クレイの部屋を訪れたセイは、開口一言こ
う言った。

「オレに、力を貸してくれ」
何を馬鹿な。

そう一言、切り捨てるつもりだった。

でも、ドアの間から覗いたセイの目を見て、クレイはその言葉を吐くことがついにはできなかった。それどころか「今後は試験合格のためにのみ行動する」ということを条件に、その協力を受諾した。何故なのだろう。

自分の手のひらを見ながら問いても、答えは返ってこない。

話は、フィンから聞いていた。なぜエクシャと問題を起こしたのか、その経緯と原因も。

だからあんまり怒らないであげてね。

フィンはそう言っつて、笑っていた。本当に、うれしそうに笑っていた。

その笑顔に、怒る気が失せただろうか。それとも、それを言い訳として持ち込まなかった少年に、少し思うことがあったのか。

それとも……

「まあ、いい。見せてもらっつぞ。お前の覚悟というものを」

クレイは、ただ静かにスタート位置につく二人を見下ろす。

ざわめく心と、反比例させて。

セイとエクシヤは、お互い谷の隙間で並んでホウキに乗っていた。眼前に広がるのは挟みこむような圧迫感のある岩肌。

心の焦燥感もあいまって、息苦しさを感じる。

対して、エクシヤは今だにさっきのことがくすぶっているのか、どこか威圧的な目つきでセイを睨みつけている。

「あら、セイさん？ その手首に巻いているのは子供練習用の補助器具じゃありませんこと？ そんなものをつけてこのワタクシに挑もうというのかしら。驚きを通り越して、笑いがこみ上げてきますわ」

「……よくしゃべる縦ロール」

「な、たて口！」

憤りで言葉を告げないエクシヤの言うとおり、セイの手首にはホウキと繋ぐように紐のついたベルトが巻かれている。

これは魔女が初期のホウキ練習に使用するもので、いくなれば自転車の補助輪だ。手首とホウキを紐で結ぶことで、もしバランスを崩してホウキを手からこぼしても、これなら空中で拾うことができる。

「かつこ悪いけど、死んじゃうよりはマシでしょ」

そう言って、フィンは自分の使っていたものを改造してセイに渡してくれた。だから、かつこ悪いとも恥ずかしいとは思わない。

それをぎゅっと握って魔力の調整に集中していると、目の前にゆっくりと三つの光の球が降りてきた。

見覚えがある、『光球』の光だ。

「さあ、始めますわよ。ギタンギタンに打ちのめして土下座させてあげますから、覚悟あそばせ」

「その言葉、そのまま返す」

その言葉にエクシヤは「ふん」と鼻をならすだけ。集中は、もう目の前の光にあるようだ。

光が、ゆっくりと消えていく。
ひとつ。
ふたつ。

そしてみつつめが消えたとき、

二つの黒い影が疾走した。

体を屈ませホウキを抱きこむように飛ぶその姿は、まさに矢のよう。
う。

風に飛ばされそうなメガネを押さえながら、セイはちらりと横を見る。

そこには、同じように体を屈ませるエクシャの姿。

(並んでる！)

セイがそう思った一瞬、エクシャがニヤリと笑った。そして次に瞬きした時には、あっという間にトップスピードに乗り、セイを振り切っていた。

「はやっ！」

「オーツホツホツホ！ 所詮、そこらへんにいる魔女がこのワタクシに勝とうなど無謀でしたのよ！」

自信をそのまま口にして、エクシャはさらにセイとの差をつける。そしてその差が十メートルほど開いたときだろうか。セイより少し高い高度で、なぜかエクシャはスピードを緩めた。

コースの最初は直線ストレートだ。エクシャならそれがわかっていはずなのに、トップスピードを出さないということは。

(……クレイの言ったとおりだ)

セイは、ホウキのバランスをとりながら細く笑む。

「大丈夫、オレには勝機がある」

今は、それまで我慢することだ。

見下すエクシャの意地悪い笑いを視界から外しながら、セイは息を潜めてその時を待つ。

「エクシャめ、やはりそれか」

クレイはセイと等間隔を空けて飛ぶエクシャを、どこか蔑むような目で見下ろしていた。

これが、エクシャの悪い癖だ。

慢心、とでも言えばいいのだろうか。相手から圧倒的な優越感を得るために「わざと」手を抜いて勝負する。目の前で、勝利を奪い取る。

自分に確たる自信があるからこそその行動だった。

（確かに、それでも普段通りなら勝ち揺るがないだろうが……）

「今回ばかりは、どうだろうな」

エクシャとセイがストレートを終えて、いよいよ最初の関門へと差し掛かる。ここを切り抜けられるかどうか、勝利の鍵だ。

「まあ、落ちて死んでも私に損はないさ」

セイの表情の変化を見ながら、クレイは勝負の行く末を見守る。

いくつかの軽いコーナーを曲がる。数日前に比べれば、空を飛ぶセイの姿は様になっていた。不意にぶれることは少なくなったし、前を見据える余裕もある。

ただ、それでもエクシャには程遠い。まるで本当に手足の延長であるかのように、エクシャはホウキを操っている。

そのエクシャが、余裕をしめすようにこちらを向いて笑った。

その口元が動く。

『さて、お手並み拝見ですわ』

声は届かなかったが、セイはエクシャの言葉が読み取れた。

そして、はつとする。最後の右カーブの向こう。そこに、最初の関門が迫っていた。乱れそうになる集中力を手首に巻かれたベルトを見て落ち着ける。

（大丈夫だ、何度もフィンと練習して対策を練ったんだから）

自分の中でそう自信づけ、エクシャに遅れるようにセイはカーブ

を曲がりきる。

視界が大きく開けた。

カーブを曲がった先は、今までの道幅の二倍ほどはありそうな広い谷だ。さっきまでは音しか聞こえなかった川も、ここでなら確認できる。コースだけを見れば、さきほどの場所よりよっぽど飛びやすい。

そこで、洗礼は訪れた。

「セイ、右！」

そのかすかに届いた声は、奇跡かはたまた気のせいかな。セイは、その声に反射的に身をかがめた。

その瞬間、今まで頭のあった場所に拳大の石が通り過ぎていった。背筋がゾクゾクと震え上がる。

（ひ、ひええええええ！ 死ぬ、死ぬ！ これは軽く三回はあの世にいけるレベルですよ！）

悲鳴を口に出さなかったのは、フィンにかっこ悪いところは見せられないというギリギリ残ったプライドのおかげだろうか。なんとか悲鳴を心の中でとどめたセイは、バクバクと高鳴る心臓を落ち着けようと胸に手を伸ばす。と、今度はその右手にかするよう木枝が矢のように飛んできた。

今度は、頭の中で悲鳴をあげることさえできなかった。

血の気が引いた。

それでも、目は周りの状況を確認するように視線を回す。

見えたのは、壁面に空いた無数の穴。そしてその中で高く鳴く大きな嘴と桃色の毛皮を持つ鳥の姿だ。

ガガ鳥。

そう呼ばれる彼らは、いくつか珍しい特徴を持っている。一つが、キヤラバンとも呼ばれるほど多くの数が、同じ渓谷の中腹より上の同じような場所に穴を掘って巣を作ること。そしてもう一つが、巣

を守るため外敵に対してその発達した手で物を投げるということ。
それから導き出せることはひとつ。彼らのテリトリーを安易に踏
み荒らそうとすれば、

「だあ、次から次へと！」

今のセイのように、ガガ鳥たちからの集中砲火を受けてしまおうとい
うことだ。

セイは覚悟を決める。ロープのフートを深く被るその視線は、た
だ前だけを見る。

「セイ、右！」

とつさに叫んでいた。聞こえるはずのない、届かない叫び声を。

偶然だろうか。セイはぎりぎりで自分に迫る大きめの岩をかかん
でよけた。周りに聞こえないほどの小さな安堵のため息をフィン
はもらす。

「それにしても……いつもより遅い？」

やはり緊張しているからだろうか。どうも練習ときより速度にの
りきれていない。

(当然といえば当然のことなんだろうけどね)

最初からわかっていたことだ。この勝負が危ないことも、ムリな
ことをしているのも。

止めようと思った。

こんなところで怪我をされたら、後々に響いてくる。でも、止め
ることを止められた。誰でもない、セイに。笑顔で「勝とう」と言
われて、ああ彼は本気だとわかってしまったから。

そして、それを望んでいる自分がいるのを知ったから。だから、
自分に出来ることはこれだけだ。

「セイ！ 負けたら承知しないんだらね！ 死ぬ気でいけー！」
大きな声で、応援すること。

フィンの声に驚いて取り巻き二人は驚いたように彼女を見つめる。
そんな視線をフィンは勝ち誇ったような笑顔で、

「いけー！」
無視した。

「死ぬ気でいけー！」

確かに聞こえた。風とフードがはためく音の間を縫うように、フインの声が。

「死ぬ気で、か。……今の状況じゃシャレにならないんだけどな！
そう言いながら、セイが浮かべるのは苦笑い。不思議と、さつき石で打ちつけた右腿の痛みが、少し楽になったような気がした。
もう、自分の体にどれだけ石や枝が降ってきたかわからない。それほどに、セイは固い雨に降られていた。

なぜなら、セイはガガ鳥の攻撃をあえて避けていないから。

セイは体をホウキに密着させて、小さく固まって我慢しながら真っ直ぐに飛ぶ。しかも、水しぶきがかかりそうなほど低い高度を。
上のほうでは今頃エクシャが華麗な飛行でガガ鳥の攻撃を見事に避けているのだろう。それは見なくてもなんとなくわかった。

エクシャとの技術の差は圧倒的。それはここに来る前からわかってきたことだ。セイには、エクシャを真似できない。同じやり方は、勝てない。

ならば、どうすればいいか。

その疑問に、フインはただ一言、「我慢だね」と答えた。

つまり、作戦はこうだ。

エクシャと同じように高い高度をとれば、ガガ鳥に直接狙い打ちされることは確実だ。だからまず狙われないようにわざと低い高度をとって、直接の目標にならないこと。そうすることで、ガガ鳥が比較的高いところに巣を作る特性とエクシャの派手な姿と飛行で、ある程度の安全は保証される。

あとは、対物理シヨックがあるらしいロープで全身をすっぽり包んで、上から落ちてくる石や枝に耐え切るだけでいい。

もちろん、それでも痛くないはずはない。幸い、ローブの対物理シヨックというものはかなりのものらしく、切り傷や致命的な打撲が今はまだ受けていない。でも、それがこれからもそうだとはいえない。

だいたい、致命傷を避けるなんてできない。最初のあれは偶然だ。頭を上げられないセイは、ただ大きな石が落ちてこないよう祈ることしか出来ない。それに、見えないところから何か落ちてくる恐怖心は、考えていたよりよっぽど心を不安にさせた。

単純でいて、肉体も精神も苦痛を伴う方法。

それでも、セイは歯を食いしばって耐える。紺色の影は、ひたすら必死に水面を走る。

難関の出口は、もうすぐだ。

一方、それを遠いところから眺めている取り巻き二人は、「なんだ、あいつ！ ずっと下ばかりはしってるぜ！」

「はっ！ できそこないにはお似合いじゃないのさ」

ニヤニヤ笑ってヤジをとばしていた。二人には、セイの戦法を理解できるほどの頭はないらしい。下品な物言いを、恥ずかしがるはずもなく続けている。

と、今まで無視を決め込んでいたフィンは振り向いて笑顔で、

「黙れ」

懐の試験管をチラつかせた。二人は静かになった。

「セイ、あと少しだよ！」

フィンは、身を乗り出してがけ下に叫ぶ。やがて紺色の影は、ガガ鳥の巣を抜けきった。

「よっしやー！」

女の子らしからぬ叫びを上げるフィンの目に映るのは、夕方のようにオレンジ色を灯す魔女の姿。

「よし！」

背中に落ちてくる感触がなくなって、セイは自分が第一関門を抜け切ったことを悟った。邪魔なフードを跳ね除け、上を見る。そこには、悠然と飛行するエクシヤの姿。

よかった、まだ離されてはいない。エクシヤは無様なものを見るような目をしているが、そんなのはどうでもいい。腹を立てたり安心している余裕なんて今はない。

(次は……岩の密林！)

大きな右カーブの終わりに、それはもう視界に入っている。

分かりやすい表現をするならば、岩でできた巨大で無規則なジャングルジム。何がどうなっこんな形が形成されたのか、谷の一角狭くなっているところ。幅六メートルぐらいの間に、進行を邪魔するかのようには大小さまざまな岩の棒が突き出していた。

切り抜ける方法は、たった一つ。自分の力量でかすかな隙間を通り抜けることだけだ。

セイは乱れない。

それは、事前のコース取りは完璧だと確信しているから。広くてほとんど直進できるところを、立体的な地図を覗き込むようにしてフィンと二人で研究したのだ。そしてそれは無駄ではなかった。セイの視界には、自分の通るべきルートがはっきり見えている。

(いける！)

セイはぐつと体を縮ませて、三角の形に空いた岩の森の空白に減速せずにつつこんだ。瞬間フォンと風を切るような音が耳に伝わった。

(ちかっ！)

間近で通り過ぎた硬そうな岩に冷や汗をかくが、それを拭っている暇はない。うまくいったと成功を喜ぶ余裕もない。すでに次の岩が眼前に迫っている。

(……この……)

セイは進行方向を変えずに体だけ少し傾けた。急な動きに内臓が
圧迫され呼吸が乱される。

しかし、ここで集中力まで乱せば取り返しのつかないことになる。
とぎれそうになるのを必死につなぎとめて、セイは戦闘機のロール
のように岩の間をすり抜けていく。

ふたつめ、みつつめ、よつつめ。危なげながらも確実にセイは岩
の間をくぐりぬけた。

(次で……最後だ!)

セイはついに出口を捉えた。最後の通り道は広く、このまま直進
すれば十分に通れる。セイはまだまだ続くだろう関門に気を抜かな
いように、立てた作戦を頭で反芻しながら加速する。

このときのセイは気付くべきだった。今の自分には先を見る余裕
なんてないことに。

所詮自分にできるのは、目の前のことに歯を食いしばって超えるこ
とだけ……普段のセイなら、決して間違わないだろうことだ。でも、
このときのセイは気付けなかった。魔法に、命の危険に、勝負の興
奮に酔っていた。

自分の進路にエクシャが急降下してきたときに後悔しても、それ
はあまりにも遅すぎた。

少し冷静なら、予想できることだった。幅が広いということは、
セイだけではなくエクシャにとっても安全な道だ。同じコースどり
をしたところでなんら不思議はない。

しかしそこまで考えはまわらず、

「……っ!」

「しまっ……!」

エクシャはセイに振り返って何か口にしたが、セイには風とホウ

キがこすれあう音で聞こえなかった。

接触という言葉ではなまぬるく、衝突という言葉は少しおおげさなていどの衝撃。それでも、セイをホウキから振り落とすには十分すぎた。

突然の予想外の衝撃にセイの手はあっけないほど簡単にホウキを離れる。

悲鳴を上げる余裕もなく、セイは暗い谷底へとホウキとともに落ちていった。

(5・6) セイと覚悟とバカな方法

ホウキへと意識を飛ばしたのは、どちらが早かったか。

接触の瞬間を見たフィンには固まっている取り巻きたちを横目にホウキを掴み、クレイは上空で横座りから姿勢を直し、

どちらにも、一瞬の迷いが生まれた。

フィンの心には、自分に向けてくれた笑顔と覚悟とあと一つ。

クレイの心には、前を向く少年の背中と助けに行こうとする自分への困惑とあと一つ。

三つの心が、二人の行動をそれぞれ躊躇させた。

(助けていいの?)

(助ける必要があるのか?)

それは、確かであやふやな迷い。そして、その一瞬でセイは二人の視界から消えた。

「しまっ　！」

「ちっ！」

今度は迷わない。

いや、迷いを抱いたままそれでも握る。ここでそうしなければ、この迷いが解決しないことを二人ともわかつているから。

二人は、ホウキに魔力を込めた。

目前に迫るのは一本の岩の枝。避けなければ、と考える前にはすでにその太い塊はセイの腹部に鈍い痛みを与えていた。

「……！」

呼吸ができない。昼に食べたものがせり上がってくるような感覚がする。

しかし、その痛みがセイに自分の状況を少しだけ把握する思考を与えた。

(このままじゃ……落ちる！)

それでも、考えられたのはここまで。セイはそれをなんとか回避するために、今しがた自分に痛みを与えた岩に必死でしがみつく。

これが生命線だ。手を離せばまた同じように岩を掴める保証はない。

しかし、

(くそ……岩が太すぎる！)

枝といつてもその太さはセイの胸囲ぐらいはある。左手一本では、表面がすべってしかたない。

(やばいやばいやばいやばいやばいやばい……)

このままじゃ、落ちる。

また、落ちる。

二度目の紐なしバンジーだ。今度こそ死ぬ。

死んでしまう。

いやだ。

死ぬのはいやだ。

死ぬのはいやだ。

「だれ……か……」

助けて。

助けて。

なんで誰もきてくれないんだ。

フィンは見ているはずだ。

取り巻きのやつらだって。

だいたい落とした張本人のエクシャはどうしたんだ。

何で誰も助けにこないんだ。

なんで？

なんでオレは、大声でギブアップと叫ばないんだ？

「あ……」

滑った。中指が岩の表面をすべって、離れる。

その後は、もうどうしようもなかった。

一度、二度、三度。

体を岩の枝にぶつけ、痛みで頭の中まで飛んだ。そして訪れる虚無感と浮遊感。

頭の片隅で、岩の密林を下から抜けたことが分かった。

そして、色々終わったのだと思った。

(このまま死んじゃうのかな……)

流れていく岩肌を見ながら、わずかな後悔と覚悟をして、ゆっくりと目を閉じた。

と。

「やあ、毎度毎度落ち運がないねえ、なんて。カッカッカ」

突然、耳元でそんな声がした。

その笑い声と乱暴な声には聞き覚えがある。

閉じた瞼の向こう側で、ジャラジャラと金属音が聞こえた気がした。

ああ、死神が迎えにきたのだろうか。

「おいおい、麗しき漆黒の美女の登場場面にしては、盛り上がりが足りない上に、死神呼ばわりたあどういうことだ」

「何しにきたんだ？」

「カカカ、ちよいと近くを通ったもんでね。しかしセイよ、仲間も助けに来ないとは人望ねえな。こりゃ完全に見捨てられたんじゃないの？ かわいそうに、しかたないなあ。」

お姉さんが助けてやるうか」

からかうような口調だった。

しかしそれは、今さっき自分が心の底から望んだもの。もし助けられるなら僥倖だ。この魔女なら、この程度どうにでもしてくれるだろう。ひとつ頷けば、それで解決する問題だ。だからセイは迷わず、

「いらない、必要ない」

二言で蹴っ飛ばした。

魔女がいに口で半月を描く気配がする。

「は、言うねえ言うねえ。一度助けられた分際で、しかも絶対絶命で。口だけは最上級だ」

「助けられた？ オレの家の鍵を勝手に改造してことか？」

自分の意思とは関係なしに、口から皮肉が飛び出す。

「ちげえよ、今とおんなじような状況のときさ。覚えてないとは寂しいねえ。アタシがいなきゃ死んでも良かったのに」

フィンのホウキから落ちたときのことが脳裏をよぎった。なるほど、それで得心がいった。魔法で助かったのはそういうことか。

「それは、まあお礼を言っておくけど。でも、原因つくったのはあんただろう。それでおあいこだ」

「よく言うよ、楽しんでるくせして」

「楽しいもんか、一日に何度生命の危機を感じてると思ってる」

不思議だ、なんだか落下が遅い。いや、まるで自分と魔女のまわりだけ時間が溶けた鉄のようになっとりと流れているような感覚だ。いやむしろ、本当に自分は声を出しているのか、目の前に魔女がいるのかもセイには確信がもてない。

まるで落ちる夢を見ているようだった。

「それこそよく言うぜ。なんだかんだでしぶとく生き残ってるじゃないか。なにより、お前はずっと笑ってるぜ。ハッピーエンド主義者。」

なんだかなー、罪の意識で助けようとしたアタシの手は跳ね除けられるし。

わかってんのかお前、今わかりかしピンチだぜ？」

「さっき言っただろう。あおいこだって。ここであんたに助けてもらえば、貸しをつくることになる」

「じゃあこの状況、アンタはひっくり返せるのかい？」

魔女の声に、僕は応えた。

「当たり前。じゃなきゃ、オレは約束をやぶることになる。それじゃ、ハッピーエンド主義者は名乗れない」

なぜこんな意地になっているのだろう。助けてもらえば簡単なのに。

それでも、心が拒否をした。

「……ツカカ、上等だ」

魔女はさつきとは違う、楽しそうに笑った気がした。

「じゃあ、アタシは本当に帰っちまうぜ？ 貸しもねえつつんなら、今後もう二度と助けにもきてやらねえ。それでいいな？」

セイは笑う。

「当然。……あ、でもその前に一つだけ」

「なんだ、ガキくせえ馬鹿」

あの屋上で聞けなかったことを、一つだけ尋ねたかった。

「本当にオレに世界を救えると思う？」

「てめえの描いた物語で、それに丁寧に応えてくれた登場人物はいたかよ」

自分で見つけ出せ。

それこそ物語の登場人物のように、黒は言った。

そしてそれは、その通りだろう。

「じゃあ、そんな前途多難な道をわざわざ選んだおもしろおかしいお前に、お姉さんから一つ出血大サービスをくれてやる。

耳をダンボのように広げてよく聞きな」

魔女の声が遠ざかる。

これが夢ならば、目覚めが近い証拠だろう。

「お前がやるうとしてることにだいたいの予想はつく、アタシは天才だからな。」

まあ言うことなんてのは一つだ

思い浮かべるのは、馬鹿な発想のほうでいい」

がちんと、肩が外れそうなくらいの衝撃が右腕を襲った。

「っ！」

痛みに、ぼやけていた意識が覚醒する。痛みの原因は正確には右手首。関節が外れなかったのが不思議なくらいの痛みとくだらない白昼夢と引き換えに、セイの落下は終わった。

ぶらりと勢いのなくなつたヨーヨーのように、セイはぶらぶらと揺れていた。

「……くそ、なにが」

起きた、と言葉にする前に気がついて自分の右手首を見上げた。

そこにあるのは、古ぼけて汚れた革のベルト。

そしてそれは、岩の枝にはさまつたボロボロのホウキと繋がつていた。

『死んじゃうよりマシでしょ』

自分の命を文字通り繋いでくれたものを巻いてくれた時のことを思い出す。

『勝とう、じゃなくて勝つんだよ！ フィン先生が、負けなんて許さないんだからね！』

向けてくれた、笑顔を描く。

「はは」

セイは、自分がやるべきことを再確認した。彼女が、セイというちっぽけな存在のためにどれだけのことをしてくれたか 自分が

なぜ、今こんな死にそんなことをしているのか。

あやうくレースの熱と死の恐怖で忘れそうだった。

この勝負は、勝って胸を張らなくちゃいけないんだ。

「ああ、だから手助けなんかいらさない。オレには、このお古で十分すぎる」

紐の部分を左手で掴んで、自分の体を持ち上げる。

そして、思い切り体を揺らした。

ホウキは岩の枝から外れて、セイはまた落下を始める。しかし、今度は目をつぶるようなことはなかった。

「っこの！」

セイは両手で思い切り紐を引っ張った。つられて、ホウキが落下速度を高めてセイへと降ってくる。

セイは、それをなんとか掴んだ。

それだけで魔力が通ったのだらう、ホウキは急に力を取り戻し、ガンガン上昇を始めた。

「とりあえず……危機は回避！」

しかし、問題はまだある。

エクシャとの差だ。このミスで、かなりの距離が開いたはずだ。

奇策でもない限り、もう追いつくことなんて難しい。

セイは自分とホウキを繋ぐ紐を見ながら、

「しかたない……馬鹿になってみるか」

そう呟いて、右手のベルトを外した。そしてついでにホウキから手も離してみた。

「チッ！」

らしくもない舌打ちを何度打つただらう。エクシャは苛立ちを表情に浮かべたまま、それでも空を滑る。

こんなはずではなかった。当初の作戦では、目の前を走りつつ、最後の最後に圧倒的に振り切って相手に絶望を私に羨望を与える予

定だったのに。

（ちがいますわ、あれは事故。ワタクシにいつさいの責任など）
ちらりと後ろを振り返る。そこに、橙の魔女の姿はない。見えるのは、急いで谷底へと向かう出来損ないの姿。

本人も気付かない安堵を、このときエクシャは少しだけ漏らした。今行けば、死ぬことはないだろうという……相手はリタイヤしたと思っただけゆえの、安堵を。

次の瞬間、その安堵は驚愕へと変わった。

フィンの隣を裂くように、橙と藍の矢がエクシャへと迫ってきたのだから。

一瞬遅れて、それが自らの敵だと気付き、

「な……」

まずはその奇跡の復帰に啞然とし、

「なんですのそれは……」

目の前の現実には怒号を上げた。

エクシャがその声をあげるのも無理はない。

なぜならセイは、ホウキにまたがっていなかったのだから。

エクシャが見たのは、右足を紐でぐるぐるまきにして固定して、ホウキの柄の上に立っている魔女の姿だった。体を少しかがめ、時々グラリと揺れるホウキにバランスをとっている。

もし、セイの世界の人間が見たら、その姿をこう見るかもしれない。

空をサーフィンする馬鹿だ、と。

「じよ、常識ハズレにもほどがありますわ！」

「常識？ 魔女のいうセリフじゃないわなあ！」

声の届くところまで、いつのまにかセイはエクシャに近づいていた。エクシャもすぐにホウキを握って、加速する。しかし……

「なんで貴女はついてこれるんですの！」

おかしい、おかしい、おかしい！

さっきの走りで、エクシャはセイのトップスピードにほとんどあたりをつけていた。

だというのに、今の彼女はそのあたりを軽く越えている。誤差で収まる速度ではない。

（だいたい、あのふざけた乗り方でなぜバランスがとれるのですか！）

体の一部が触れていれば魔力は流れるのだから、確かに飛行に問題はない。

しかしあんな乗り方で、なおかつ停止ではなくこちらと同じようなスピードを出す魔女なんて見たことも聞いたこともない。

落ちて着こう落ちて着こうとするたびに、エクシャの思考は混乱をきたしていった。

（なんなんですのこの馬鹿は！）

そうしているうちに、目の前には最後の関門が迫る。

そこは、生き物を捕食する植物が生息するエリア。彼らはその長い蔓を触手のように使い獲物を捕らえ、自らの胃袋へと運ぶ。

油断すれば、蔓に捕まってお陀仏だ。

（いくら早くても そんな大きな的では！）

エクシャは減速せず、最後の関門へと突っ込んだ。

そして伸びてくる三本の蔓。しかし、エクシャはひるむどころか薄く笑った。

「この 程度！」

ブレーキングとターン。さらに急加速でテンポをずらし、華麗にエクシャはすべての蔓を避けた。その技術は、才能と努力に裏打ちされたものだ。自分に絶対の自信があるからこそ、臆せず前へと進める。

（これが ワタクシと、彼女たちとの差！）

負けるはずがないのだ。

勝てない理由などないのだ。

なのに 敵は、横にいる。

「！」

風圧の中、言葉に出来ない悔しさが彼女の喉を鳴らす。

その間にも絶え間なく蔓は二人を狙う。エクシヤはそれをまた巧みによけながら、ちらりと視界にセイを捕らえる。

まるで、曲乗りのようだった。

顔を狙う蔓を、ホウキを軸に半回転して避ける。ホウキにぶら下がるような格好のまま今度は縦回転しながら上昇、ホウキへと伸びる蔓をホウキで叩き落とす。

むちゃくちゃだ、そんな対処の仕方どこでも習ったことがない。

ホウキはしっかり両手で握って、体は畳んで そろそろと教えられてきたのに。

どうしてこの橙の魔女は、そんな常識を無視してここまで自由に楽しそうに、笑顔で飛べるのだろうか。

「負けて たまるものですか！」

負けられない。

負けられない。

例え筆記でクレイに負けようと。

例え薬学でフィンに負けようと。

(こんな魔女にだけは、負けられない！)

エクシヤの胸中を占めたのは、プライドではなく意地だった。

エクシヤは基本に忠実に、セイは波に乗るように蔓をよけ、あっという間に最後の関門を抜け出す。

そして、残るは一直線のロングストレート。

目指すゴールが、見えた。

最後のストレート。まず抜け出したのはエクシヤだった。これま

では実力の半分、とでも言いたげな猛烈な加速。セイも全力で加速するが、その差は開く一方だ。

速過ぎる。経験と鍛錬の差。急な加速にさえ体を揺らさずバランスも崩さないエクシヤの背中を見て、セイはそれを感じた。

同時に思う。そこまで努力の意味を知っていながら、なぜ一生懸命な人間を笑うのかと。

前を向こうとする人間を笑うのかと。

「その勇気も、あんたは知ってるはずだろう！」
だから、勝つ。

クレイはあの日、地図を指でなぞりながら言った。

「まず言おう、貴様は実力も経験も度胸もエクシヤには敵わない」
はつきりと、口にした。

セイは、ゆっくりと背中から十手を 魔法の杖を抜き出す。

「当然と言えば当然だ、アイツは気に食わないが実力に見合う努力を怠らない」

まだ、魔法なんて使えないセイにとってその行為に意味はない。

「しかし、そんな貴様にも 一つだけエクシヤに勝っているものがある」

セイはしゃがむと、ホウキの柄に杖を思い切り押し付けた。そして

「それは貴様の……魔力だ」

自分の名前を、ホウキに刻んだ。

空気が爆ぜた。

まるで、ギアをセカンドからトップに入れたようにセイは世界を背中に置いていく。先ほどのスピードを矢とよぶなら、今は放たれた弾丸だった。

「貴様の魔力は、本来ありえないはずのホウキの暴走を起こすほどだ。よくわからないが、貴様の内蔵魔力はそういう爆発性に富むの

だろう。ならば、使わない手はない』

音に気付いたのか、エクシヤはこちらに振り向いてぎょっとしたような顔をした。セイは、それに笑顔を返す。

『馬鹿者か。最初から全力疾走してみろ、エクシヤは最初から全力でくるぞ。そうなれば、勝ち目など一つもない。だから、リミッターをつける』

ゆっくりとエクシヤとの差が縮まる。空気を裂く音が耳で響く。当たる風が冷たい。呼吸がしにくい。吐けない、吸えない。

『魔女がホウキを使うときには、名入れという儀式を行う。この儀式は、ホウキに自分の名前を刻むことで魔力を格段に通りやすくするものだ。』

つまりホウキがより速く、自分の思い通りに動かしやすくなる』
それでも、緩めない。まだまだ加速する。残りは少ない。呼吸なんて、その後いくらでもすればいい。

ここで負けるなら、もう呼吸なんてしなくていい。
『貴様は、ただ待て。最後の直線、その時まで名前は刻むな。』

もし貴様がありえないほどの奇跡を持って、そこまでエクシヤの背中が見える距離にいたならば……』

そして、ついにエクシヤに並び

『貴様の勝ちだ』

追い抜いた。

「 すいい」

その奇跡を目の当たりにして、フィンの口から漏れたのはそんなおざなりの言葉だった。

いや、おざなりだからこそ思いがそこには込められている。

信じていなかったわけではない。勝ち目がゼロだと思っていたわけでもない。

でも無理だどこかで決め付けていた。

だって、魔女だから。

誰も信用せず、誰にも頼らず、奇跡よりも利益とリスクを考えるのが魔女だと教えられたから。でも目の前で、彼は約束を守った。それが当然であるように。一度失敗しても、前を向いて『ありえない』と成し遂げた。

「
フィン

「フィンは拳をにぎってぶるぶる震え、
「やったー！ 行けセイ！ もうキミを止めるものはなにもないよ
！」

最後になるだろう声援を、歓喜の感情を乗せて送った。

もうゴールは目前で、トップスピードならセイのほうが上。もう勝利は誰の目にも明らかだった。

そう、この時フィンとセイは勝利を確信し、エクシャと取り巻きたちは敗北を予感した。

これは、だからこそ起こった暴走だった。

「我が声に答え一本の矢となり 敵を打ちぬけ！
『シャーフィリング』！」

フィンは自分の耳を疑った。

歓声を裂いたその声は、代表的な攻撃呪文。敵を打ち倒す魔法の矢を放つ。

振り向いたフィンの隣を、セイと同じように……しかし奇跡ではなく不吉をともなつて通り過ぎた。

そして視界に捉えるのは杖を構えた取り巻きの小さなほう。

彼女は自分で放ったことが信じられないように、杖を見つめている。

「……セイ！」

フィンの判断は早かった。責め立てる言葉より、注意を飛ばす。

このままではセイが

「ああ、エクシャさまー！」

大きなほうの取り巻きが絶望するように叫んだ。フィンはそのを不可解に思って、しかしすぐに理解する。セイを狙ったはずの魔法の矢は、よく見るとわずかに逸れてエクシャのコースへと向かっているのだ。

考えられることではあった。エクシャとセイはほとんど並ぶように飛んでいるし、魔法を射た魔女も通常の状態じゃなかったのだから。

このままでは、エクシャは味方の撃った魔法に射られて谷底まで一直線だ。

フィンはとつさに杖を抜き出し構えた。狙いは魔法の矢。そしてフィンは魔力を込めて……、

「……！」

何もできない。

その間に矢は二人にどんと近づいてゆく。

もう、一刻の猶予さえない。

「ああ、エクシャ様！」

取り巻き二人が目をつぶる。フィンも最悪の光景が繰り広げられるのを覚悟し、

正面から、セイを魔法の矢が貫いた。

「え？」

何が起こったのか。フィンにはわからなかった。セイは勢いを殺しきれず、後ろに少しだけ飛んでゆっくりと体が傾いていく。

そして、ホウキから魔力の抜ける音がした。

そこで、ようやく状況が飲み込める。考えていた以上の最凶の事態が起きたのだ。

セイはかばったのだ。自分の敵だったエクシャを、たぶん魔法の矢に気付いたからというひどく簡単な理由で。

当然のように盾になった。

「あの バカちん！」

ここからなら、間に合う。フィンはホウキに飛び乗って、自由落下を始めるセイを追う。

セイを、こんなところで失うわけにはいかない。

しかし、その手はまたしてもセイに届くことはなかった。

「はへ？」

さっきからちゃんとした言葉を話してないなとフィンは思いながらも、目の前の光景に目を疑った。

セイの手を握っていたのは、なんだか複雑そうな顔をしたエクシヤだったからだ。

今回の勝負は、結局無効試合ということで決着した。

エクシヤ曰く、

「こちら側の不手際は認めますわ。手違いとはいえ攻撃魔法などを放ってしまったワタクシの舎弟にも問題が少しとはいえありましたから。」

ただ、無効試合であることだけはお忘れなく。ワタクシは貴女に負けたわけではありませんから！」

最後までわかりやすいキャラクター性をぶらせないまま、彼女は頭に湯気を立たせながら帰っていった。

で、セイとフィンはというと。

「なぜワタクシは正座なぞしなければいけないのでしょうか？」

数日前のことと似たようなことになっていた。ただし今度はクレイでなくフィンがセイを見下げ、フローリングではなく草の上にセイは座るはめになっていたが。

「なんでだかわからない、と。ふーん、セイってば予想以上におバカさんだね」

笑顔でフィンはそんなことを言う。

「いや、まあ見当はついてますけどね」

「じゃあ、言ってみて。フィン先生が採点してあげるからさ！」
おずおずと手を挙げて、発言する。

「え〜と、名入れのことについてフィンに内緒にしてたこ」

「フィンチョップ！」

脳天に技名『フィンチョップ』が炸裂した。ダメージは対したことはないが、自分より小柄な女の子に脳天チョップをくらうのは割と屈辱的だった。

「何するのさ」

「にははは、全然わかってないねこのスカポントン！ 的外れもい
いと」

は追加とばかりにデコピンを入れてセイにずいっと顔を寄せた。

「先生は優しいから、ヒントをあげよう。もしボクとセイの立場が
逆だったら、セイはボクになんて言う？」

「命を粗末にするなって怒る」

即答してから、気がついた。つまり、そういうことだ。

「まったく、やめてよね。ボクの人生にセイの命なんて重りいらな
いよ。そんなもの、自分で背負ってよ、迷惑だから」

なんとも厳しい言い方だった。まあ、自分のやったことから考え
れば当然とも言える。でも、間違ったとも思わなかった。今日の前
にいるフィンは、いつも以上に楽しそうに笑っていたから。

「わかった、これから気をつける」

「うん、聞き分けのいい生徒はフィン先生大好き！ さて、じゃあ
フィンは座っているセイへと手を伸ばした。

「帰ろ、ボクたちの家に。熱い紅茶で乾杯だ！」

セイはその手を握り返して、言った。

「オレの分は水でよろしく」

祝杯には味気ないが、飲めないものはしかたない。

せいぜい、今日の勝利とフィンの笑顔に酔うとしよう。

次回予告5

クレイ「……はあ」

フィン「どしたのクレイ。溜息なんかついて。せつかくの次回予告なのに」

クレイ「いや、次の話のことを考えると乗り気になれん」

フィン「あー、ツンデレ全開だもんねえ」

クレイ「そういうことじゃない！ というか、ツンデレじゃないと何度も……！」

フィン「はいはい、わかったわかった。え〜と、次回はつと。『偶然から来る厄災 I can't back?』……」

クレイ「みどころはない」

フィン「ちよ、ちよつとクレイ？」

クレイ「うるさい。ちよつと休ませてくれ」

フィン「あーああ、いっちゃんたよ。と、とりあえずお楽しみにー！」

フィン「クレイ、あれはないと思うんだけど」

クレイ「あんな恥ずかしいこと、私にどう説明しろっていうんだ…」

……」

第六話 『偶然から来る厄災』 I c a n ' t b a c k ? 『 6 - 1

英文はさすがに間違えてるわけではありません。

ちよつとした意味があるのですが、まあそれはおいおい。

あの縦ロールとの決闘から、早くも三日が経とうとしていた。次の日、体が原因不明の痛みに襲われ（フィン曰く、無茶に魔力を流したフィードバックらしい）身動きがとれず二日。全身を行ったり来たりするこそばゆい痛みにたえながら、セイは三日目の朝になんとか回復といえる状態で朝を迎えることになった。

目を覚ませたのは、カッソカッソと無遠慮に床を叩くヒールの音。一瞬だれだこんな朝っぱらから、と考えて。

「……………」
ムスツとした顔の少女と視線が交わった。しばらく頭がフリーズして、

「えと…………おはよう」
なんだかえらく間の抜けたことを口走った気がする。目の前にいる黒髪の少女　クレイは、気に入らなかつたのだろうか、ギロリと睨んだ。

…………怖い。おかげで完璧に目が覚めた。
あの決闘のおかげでフィンとの仲はだいぶ深まったように思えるが、クレイとは見てのとおりだ。嫌われてる…………というより、取り付く島もない。彼女とも多少は円滑な信頼関係を築けたとセイは思っていたのだが、あちらはそんなつもりは毛頭なかつたらしい。

まあ、結局クレイとの『以後は試練のために行動する』という約束を二日も破ってしまったので、仕方ないといえば仕方ないのかもしれない。

というわけで二人の間には、

「……………」
「……………」

このようにして、とてもとても気まずい朝の風景が展開されていた。

しばらくして、クレイは結局挨拶も返さずに、壁にかけた黒い外套と帽子を身に付けホウキを掴みとると、止める間もなく玄関から出て行った。

その間、約一分弱。その間、こっちは蛇に睨まれた蛙状態だった。「いったい何がしたのかな、あれは」

窓から、簾にまたがり飛び去ってゆくクレイを見ながら、自然とそう口にする。顔を会わせたくなければ、こっちを完全無視してしまえばいい。そっちのほうに、むしろこちらとしても対処のしようがある。しかし、ああまで露骨に睨まれると、こちらとしても手のうちようがない。

「オレ何かしたっけな……」

ありえない、とは言い切れない。心当たりはいやというほどにあるわけだし。自分の朴念仁さは、一応それなりに理解している。

(でも、やっぱり訓練のときは打ち解けたと感触があったんだけど) いや、しかし……。

セイがそんな泥沼の思考にはまっていると、

「あり、クレイは？」

赤髪の魔女が、階段の手すりの間からこちらを見下ろしていた。

「おはよう、フィン。クレイなら朝ごはんも食べずに出てったよ」

「そうなの？ また図書館かな。まったく、意地っ張りだなあ、クレイも」

わけのわからないことをぼやきながら、フィンは階段を跳ねるように下りてくる。上は薄口のセーター、下には腿の真ん中辺りまでのショートパンツをはいたその姿は、昨日までとくらべるとかなりラフな服装だった。セイの視線に気づいたのか、

「昨日のまではうちの制服。何だかんだで立て込んでたからね、いつもは大体こんな感じだよ」

そう言ってニヤハハと笑うと、

「変、かな？」

少し首を傾げてそう尋ねてきた。

「いや、全然。似合ってるよ。すくく」

魔女の姿よりよっぽど……というのは褒め言葉が微妙だったので、口の中で飲み込んでおいた。フィンはそれに気を良くしたらしい。

「待っててね、今から朝ごはん作るからさ。セイは朝食食べるタイプでしょ？」

「うん。何か手伝うことは？」

「ずっと見てたでしょ、ペラドンナで一発」

……そういえばそうだった。昨日の光景を思い出して納得する。

ようするに、セイがこの八年間で培ってきたスキルは、ここではまったくの無用というわけで、

「……それはそれでなんか悔しい」

いつかどうにかしてこの雪辱をはらそう、と心に決めた。そこにフィンがひよっこり顔を出した。

「？ ねえ、セイ。朝食はパンとスクランブルエッグ、あとはベー

コンでいいかな？」

「……えらく簡単だね」

それなら、調味料の類のわからないセイでもどうにかなる。フィンも言葉の端から意味を感じ取ったらしく、

「ボクは朝苦手なの、頭まわってないっていうか。魔力をうまく通せないから、複雑なものは作れないし、失敗するよりましでしょ」

ツクツテモラウヤツガモンクイウナ、というオーラを滲み出しながら言い訳した。……そういえば、フィンってあんまり魔法の成績はよろしくない、みたいに言っていた。

朝ごはんは若干の不安を抱きながら、セイはとりあえず井戸に水を汲みにいった。

結果。フィンが間違えて料理道具を食べ物に変える……といった危なっかしいことはなく、宣言したメニューは完成した。パンやベークンの香ばしい匂いが空腹に拍車をかける。

「それじゃ、いただきます」

「いただきます」

頬張る、といった感じで食べるフィンを正面にしながら、パンを口に運ぶ。うん、やっぱり僕の世界と変わらない。そう思いながらスクランブルエッグにも手を伸ばす。うん、やっぱり一緒。そんな食事というより確認をしながらものを口に運んでいると、

「何て顔して食事してるの、セイ」

「どうやら、顔に出てたらしい。」

「いや、変わらないなって思ってた。パンとか卵の味とか」

「同じ人間が食べてるものだからね。大きな違いはないんじゃないかな？」

お茶をズズツと行儀悪く飲みながらフィンは答えた。まあ、言われてみればそのとおりかもしれない。住む世界が違おうとも、大きな区切りで見ればセイもフィンも同じ生物だ。食べる趣向が同じ方向に向くのは、摂理なのかもしれない。

「まあ、もしかしたらボクらには無害で、セイには有害なモノが入っている可能性もないことはないけど」

「い!？」

それは困る。

「もしそうならこれまでの食事の時点でどうにかなってるだろうし、問題はないでしょ」

それは昨日の食事の時点では問題があったということじゃないだろうか。…何か実験動物さながらのデンジャーさである。

うちひしがれるセイを見ながら、フィンはニコニコと終止ご満悦のようだ。

「誰かと朝食って久しぶりだけど、楽しいね。クセになっちゃいそう」

「久しぶり? クレイがいるじゃないか」

「クレイは朝食食べないんだ。ボクから見ればセイよりよっぽど異世界人だね。よくそれでお昼までエネルギーが持つよ」

はむ、とパンを一口口に放り込みながらフィンはここにいないクレイに愚痴っていた。……そういえば、

「なあ、フィン」

「何？」

「オレってさ、クレイにやっぱり嫌われてるのかな？」

一人じゃ考えてもわからないが、ずっと一緒に暮らしてきたフィンならあの妙な沈黙の壁をうちやぶる方法を知っているかもしれない。

と、期待してフィンの顔を見ると、

「え？ まだフィンと打ち解けてないの？」

呆れ顔がそこにはあった。なぜかバカにされてる気がする。

「オレは努力してるよ。でも、クレイのほうが全然答えてくれないんだから、どうしようもないじゃないか」

「で、ボクにその原因を聞こうってワケか」

はあ、とわざとらしいほどのため息をこぼすフィン。それはどちらかというと、セイではなくクレイに対してのようだった。

「セイは悪くないよ。悪いのはクレイ。まったく……普段はあれだけクールなのに、自分のこととなるとこれだもんね」

なにか、いつもとは立場が逆だ。このセリフをクレイが同じように吐いていた覚えがある。でも、今はそれが頼もしい。これなら答えは期待できそうだ。と、

「あ……期待に満ちた目を裏切るようで悪いんだけど、ボクにはどうしようもできません。がんばって」

なんとも肩透かしな解答をいただいた。

「どうしようも？」

「ない。クレイが自分で気づかないと意味ないからね。アドバイスできるとしたら『時間が解決してくれる』かな？」

その解決までの時間を短縮したくて尋ねたセイの真意を、どうやらフィンは汲み取ってくれなかったらしい。

あの時間がまだ続くのか……なんだかほろ苦いベーコンを口に運

びながら、とりあえず今日の夜にもう一回話しかけてみよう、心の中で前向きに考えておいた。

朝食の片付けが終わると、セイとフィンは何ウキの練習のときと同じように、庭の机に並んで座った。というのも

「どうせだから魔法の一つや二つ覚えちゃおう」

という、下手したら規則違反なんじゃ、というフィンの提案からだ。

しかし、セイは乗り気だった。目の前にあれほど夢見てみてきた魔法があつて、それを実践できるチャンスなのである。ためらわずに頷いた。かくして……

「第二回！ フィン先生の魔法講座！ 初等魔法編！！」

が始まったわけである。ちなみに、フィンは誰かに教えるといったことがあまりないのか、最初からテンションが妙に高い。

「さて、ではセイくん。これから魔法を実際に教えていくわけだけど」

先生口調のフィンは、えらそうに胸を張りながら言った。

「そもそも魔法ってどんなものか理解してる？」

「え、と。魔力を使って、普通じゃありえないことを起こすこと、とか？」

とりあえず無難な答えを出してみたが、

「うーん、四十五点」

フィン先生の配点はなかなかに厳しかった。

「ま、考え方は間違つてないよ。ただ、重要語句が抜けているので大減点」

そう言つと、フィン先生は机の上の紙に大きく、「イメージ」とだけ書き込んだ。

「ホウキのときにも言ったと思うけど、魔法っていうのは魔法のイメージが一番大事なの。」

『魔法を使った結果、こうなる』っていうイメージがすっかりしてないと、魔法はカタチにならないんだ」

「つまり、いかに自分の魔法がどんなふうになるのかを心に描けるか……ってこと？」

「うん、大正解」

フィンは満面の笑みで頷いた。

「ようは、自分の頭の中のイメージを現実の世界に引っ張り込むってこと。詠唱とか魔方陣とかも、これのための一つの方法にすぎないの」

なるほど、ここまででは理解した。ぶつちやけてしまえば、妄想をたくましくしろ、と。

「はい、質問」

「どうぞ、セイくん」

「ということは、そういう媒体なしに魔法使えちゃう人もいるってこと？」

今の説明なら、心にしっかりとしたイメージがあれば杖とかはいらない気がする。

「残念、それは大ハズレ」

人差し指を振りながら、フィンは楽しそうに微笑んだ。……よっぽど他人に『教える』ことに飢えてたんだな。近くにクレイがいればしょうがない気もするけど。

フィンは先ほどの紙を裏返すと、そこに杖を持った人を描く。

「うんと……ここらへんの説明は難しいから省くけど、ボクらは杖がないと魔法は使えないの。杖が現実とイメージの通り道、って感じかな」

絵に描いた魔女の内側から、杖を通して外側に線を引くフィン。どうやらそれが魔力を表しているらしい。しかし、それではいまいちよくわからない。

「……どういうこと？」

「え〜っと……イドとかオドとか……ああ、やっぱりボクじゃ説明

できないや。今度クレイにでも聞いてよ」

「……それは無理じゃないかなあ」

「まあ、ともかく！ 内側のイメージを何にもなしに外側にポンポ
ンかるく出せるわけないでしょ！」

かなりの力論でまくし立てるフィン。はぐらかされた感はあるが、それは確かにそうだ。いくら妄想がたくましくても、馳走を思い浮かべたからといってお腹は満腹にはならない。魔法を用いても、それは変わらない原則らしい。

「そのために、杖か魔方阵が必要な。OK？」

「多少は納得できないけど、一応」

そう頷くと、フィンは「よし」と頷いた後、ポンと投げた。

それは今までフィンが物指し代わりに使っていた、ドラムのステ
イックを思わせる形状の……って、待て！

「うわわ！」

なんとか両手でそれを掴むと、改めて凝視する。間違いなく、魔法の杖だった。

フィンは、そんな物騒きわまりないものを、まるでミカンか何かのようにポンと投げつけた。
ありえない。

「危ないだろ、フィン！ 投げるなよ！」

「大丈夫だって。魔力が通らなきゃただの木の棒と変わらないもん」
こちらの怒鳴り口調にちょっとふてくされながら、フィンは懐から新しい杖を取り出して、

「まずは、ちゃんと見てて。この後自分の中でちゃんとイメージで
きるように」

そういうと、フィンは杖を持った腕をまっすぐに突き出すと、目を瞑った。そしてゆっくりと一息だけ、息を吐き出す。

それだけで、場はフィンに支配される。

大気、ではない。大気に含まれる目に見えない何か、フィンの周りを渦巻いている。

「まずは、自分の中に光をイメージする。まぶしくて、目も開けられないくらいの光のほうがいい」

集中力をまったく乱さず、フィンは続ける。

「そしてそのイメージがしっかりと自分の中でカタチになったら

」

何か、フィンの杖先に集まった……気がした。

「そのイメージを、詠唱にのせて引つ張り出す！」

かっと目を見開いて、フィンは 唱えた。

「我に光を！ 『ラウム』！」

瞬間、輝きが生まれた。まるで小さな太陽のようなそれは、フィンの杖の先で強烈な光を燈している。太陽の子供といったら、信じてしまいそうだ。

「……………すごい」

思わず声が漏れるほど、それはセイにとって大きな出来事だった。今までとは違いじっくりと観察した魔法は、まさに奇跡の業だった。……だめだ。感激しすぎてうまく気持ちがこぼにならない。

フィンはふう、と一息吐くと、まるでマッチの火を消すように杖を振って光の球を消した。

「さて、これで……………って、どうしたの！？ セイ！」

え、と思つて、そこで初めて自分が泣いていることに気がついた。それは薄く薄く、頬を伝うように流れていた。

自分でも、その理由がよくわからない。でも、なぜだろうか。

これは痛みを伴う涙だ。

心がそう、訴えていた。

自分自身でもそのことに驚いたが、しかし、セイ以上にビツクリしている人が目の前に居る。

「え！ ボクまさかなんか失敗した！？ え、ヤバ。どっか痛いの！」

大慌てでアタフタするフィンを見て、セイは思わず笑ってしまった。慌てて涙を拭く。こ

んなことで泣くのは、男のプライドとしてなんとなく許せない。

「ごめん、大丈夫。目にゴミでも入ったんだろ」

そうやって誤魔化すと、フィンは明らかにほっとした顔をして、

「ビツクリさせないでよ！ また失敗したかと……」

「また？」

ピキリ、とフィンの表情が固まった。

「な、何でもない！ ほら、じゃあ次はセイの

番。がんばっていきこう！」

怪しい。とてつもなく怪しい。あきらかに何かをごまかしている。

ここは深く追求を……

(つて、今なんて言った？)

「フィン先生」

「な、何？」

まだオドオドしながら、フィンは質問に身構える。

「いま、オレの番って言ったのは、聞き間違い？」

「へ？ ううん。今度はセイの番。『ラウム』の」

今度はこちらが固まる番だった。

ようするに、セイにいきなり魔法をやってみなさいってことだ。フ

イン先生？ それはいくらなんでも……

「無理だろ、どう考えても！ そんなに簡単に魔法使えないでしょ！」

「大丈夫だって。暴発でもしない限り死ぬことはないから。それにほら、最初に会ったときには使えてたんだし！」

ニヤハハと笑顔でそう答えるフィン。それはようするに死ぬ以外の

可能性は、大いにあるということだ。どんなスパルタだろう。それはキャッチボールもせずにいきなりマウンドに上がれと言っているようなものだ。無理というか、無茶である。

しかもあの時は黒の魔女が助けてくれただけで、セイが魔法を使っただけではない。それはなんとなくフィンにもクレイにも話していないが。

「さ、じゃあやってみよう！ 呪文は覚えた？」

「覚えたけど……。普通はもうワンクッションおかない？」

意見はまっとうなはずだ。限りなく正しいはず。なのに、

「こつこつというのは、実践するのが一番上達するの。ほらほら、怖がってないでやる。大丈夫だって」

フィン先生はまったく聞く耳を持っていないらしい。

どうやら、実践するしか路は残されていないようだ。

「わかったけどさ、ならオレは自分の杖使ったほうがいいんじゃないののか？」

腰に差した十手をフィンに見せる。しかしフィンは、

「ううん、それはなんだか特殊そうだからね。下手に使って変なことになったら怖いもん。最初は普通の杖でいいでしょ」

そう言って首を振った。

セイは「ふうん」と頷くと、心機一転気を引き締めて覚悟を決めて杖を握る。

そしてさっきのフィンを真似るように、腕をピンとまっすぐに伸ばすと、目を瞑った。

まぶたの裏は、うつすらと赤く明るい。その向こうにある太陽を頭の中で描く。想像は十八番だ。授業中もさんざんやっていた。

ゆっくりと、頭の中の太陽が完成してくる。あとは　これを外側に引つ張り出すだけ。

「我に　」

声が震える。それは恐怖からではなく、緊張からだ。心の中でもう一度大きく深呼吸して　唱えた。

「我に光を！ 『ラウム』！」

途端……………何も起こらなかった。

「あれ？」

なんとというか、拍子抜けだ。あたりを見回しても光の球らしいものはなく、ただ目に前に爆笑を我慢しているフィンの姿だけがあるだけだった。その表情を見て、やっと自分の状況を理解する。

「失敗？」

「うん、0点」

そう言つて、フィンが堪えきれず爆笑した。

「あー、おかしい！ 大真面目に『ラウム』！ って叫んでおいて、お腹をかかえて笑い続けるフィン。その姿を見て、

「フィン、最初から失敗するつてわかつてただろ」

確信した。その言葉に、フィンは悪びれることなく頷く。

「うん、初めから成功したら苦労はないよ。ホウキで空飛ぶのとはワケが違うもん」

いつそ清々しいその反応に、怒る気力も失った。少し前のセイの心の葛藤は何だったのだろうかと考えて、

「答えは簡単。完全に無駄だ」

そんな凹んだセイを見て、フィンは慰めるように肩を叩いた。

「ほらほら、いじけないの。今から他のパターンの初等魔法も教えてあげるから。一時間もあれば相性のいいやつの一つぐらいは覚えられるつて」

かくして、一時間後。

「……………」

「……………」

「……………ゴメン」

「謝らないでくれ、オレが悲しくなる」

なんとも言えない気まずい雰囲気、この場を支配した。

その後、火をおこす魔法や傷を癒す魔法、水を生み出す魔法に電気を発生させる魔法とフィンの曰く「超基本魔法」と呼ばれる簡単な魔法を、一個ずつ実践していった。最初は失敗する毎に爆笑していたフィンも、終わりごろには悲痛な顔でただ黙するのみであった。ようするに、だ。

「まさか全部失敗するなんて……」

「言わないでくれ、シヨック受けるのオレなんだから」

フィンの大きなため息が、心にザクリと大きな傷跡を残していく。

「まあ、ボクより魔法が下手な人がいたってことに若干の救いを感じないこともないけど」

「……追い討ちかけないでくれ、フィン」

ただでさえ泣きそうなんだ、今。

フィンはそれをごまかすようにニヤハハと、いつもより乾いた笑いを浮かべると、目の前に置いたテキストをしまった。

「今日はこれでオシマイ。補習はないので今から部屋の掃除でもしよう」

そう言って家の方へ駆けていった。あきらかな逃亡だ。どうやらうまいフォローの仕方が思い浮かばなかったらしい。

セイも敗北感と虚脱感を全身にまといながら、その小さな赤い魔法の背中を追った。

空の青さが、いやに目に染みた。

(6・2) お茶と提案と次の行先

そんなこんなで家の掃除をして(とにかくひどかった。ホコリのたまり具合から見て、だいぶ放置されていたらしい)、ようやく落ち着いた午後。フィンと一緒にゆったりとティータイムを楽しんでいる最中、それはやってきた。

「あ、おかえり。クレイ」

玄関を開けた漆黒の魔女はそれに返事もせず外套も脱がずに、ゆったりとしているフィンとセイを睨んだ。青い瞳は、怒りを隠しきれずにいる。どうやら、今日も今日とて何か気に食わないらしい。

「何をしている、フィン」

フィンは慣れているのか、クレイに変わらない口調で返事をする。

「午後の安息、ティータイムの真っ最中」

「それは見ればわかる。私はお前にソイツの教育を命じたはずだが、またずいぶんな言われようだった。確かにこの世界をまったく知らないという点で、セイには反論はできないことではあったが。」

「それもちゃんとしてるよ。ね、セイ」

お茶を口に運びながらフィンは悪びれずに答える。確かにその点は正しい。多少力技ではあるものの、フィンはセイにちゃんとこの世界のことを教えてくれている。

「うん、オレにはもつたいないくらい、十分に」

お前は黙ってる、という視線が突き刺さった。……よくわからないが発言はひかえておくことにする。

セイは席を外して、新しいティーカップを出しに行く。場所はここ数日ではうちり頭に入っている。

「で、どうしたの。今日はいつもより早いけど」

「ああ、今日はお前も連れて行こうと思ってな」

セイがいなくなったことで本題に入ったらしい。きっちり会話を耳に入れながら、ティーカップを棚から取り出した。

「うん？ ついて行くのはいいけど、どこに何しに？」

「調査だ。文献を調べに調べたが、アイツの件は合致する前例がない」

まったくめんどくさい、そんなぼやきが背中ごしに聞こえた。

「他の資料を掘り下げようにも、原因がわからなければどうしようもないだろう」

「ようするに、手がかりが足りないの？」

「ああ、ない、といつても間違いではない」

はあ、と軽いため息をつくクレイ。そこでセイは、初めてクレイの人間らしい表情を見た気がした。いつもの鉄の仮面はそこにはなく、それだけでクレイがフィンを信頼しているのが読み取れた。凸凹コンビだと思ったが、なかなか相性はいいようだ。お茶を注ぎながら、それに少しうれしくなった。

「で、結局どうするのさ？」

フィンの問いに、クレイはぎゅっと拳を握る。

「こうなったら、手荒だが手がかりをつかみにいく」

「つまり、実地調査か。オレがこっちに来た時の場所を調べるわけだ」

セイが尋ねながら入れたてのお茶を、

「そういうことだ」

頷くクレイの前に置いた。それにクレイは砂糖とミルクをこれでもかというほどぶち込んで、口に運び　クレイはやっと、セイの存在に気がついた。

「な！」

どうやらよほどビックリしたらしい。うまく言葉にできないのか、驚いた顔のまま数秒間固まったままだ。おもしろいが、放っておくわけにもいかない。このままでは、また沈黙されるのがオチだ。

ここは、畳み掛けるのみ。

「それって、フィンだけじゃなくオレも一緒に行かなきゃいけないよな？」

クレイは、その言葉に彼女はやっと自我を取り戻した。

「必要ない！ 貴様などいなくても調査は行える！ 邪魔なだけだ！」

「なんで？ ついてきてもらったほうがいいと思うけど」

まくしたてるような声とは対照的に、『おかわり』とセイにティ
ーカップを渡しながら、フィンと言った。そうすると睨むような視
線は、今度はフィンの元へ。

「何を言っている。足手まといは必要ない。いてもいなくても同じ
なら、いない方がいい」

「いる意味はあるよ。ボクらがセイを見つけた場所はともかく、セ
イが最初にこの世界に来た場所は、 ありがと、セイ。 セイ
以外に知りようがないじゃない。調査っていうなら、正確な場所は
必要でしょ？」

お茶を受け取りながらフィンは諭すように言う。珍しくそれは正
論で、クレイはクツとうなった後、

「しかしこいつが場所を正確に覚えているわけが」

「いや、覚えてないけどアテはあるよ。あの森にさえ連れて行って
くれれば、案内できると思う」

「……………」

結局沈黙した。それは明確な敗北宣言だった。クレイは小さくは
あ、とため息を吐くと、

「わかった。私としても原因究明のほうを重点に置きたいからな。
ソイツの同行を許可する」

よし、と頷きあうセイとフィン。その様子をクレイは気に入らな
そうに見つめながら、

「ただ、私はソイツの行動に一切の責任を持たんぞ。たとえ魔物に
食われようが道に迷おうが、放っておくからな。ホウキにはお前の
後ろに乗せるんだな、フィン」

フツツと悪魔のような微笑を浮かべるた。セイはそれに、
「わかってる。自分の責任ぐらいはしっかり取るよ。ホウキもちや

んと乗れるようになったから、ついていくぶんには問題ないと思う」
すっかりと信頼を返した。しかし、その言葉にどこかおかしいところがあったのだろうか。クレイはびっくり、というより呆気にとられたような顔をして、フィンはというとそのクレイの顔を見て笑いをかみ殺していた。

「……コイツは」

そう呟きながら、クレイは苦々しそうに甘ったるそうなお茶を飲み干した。

「フィン、さつさと準備をして来い。私は外で待ってる」

そう言うやいなや、とつと玄関から外に向かうクレイ。フィンは、

「アイアイサー」

ビシッ敬礼を返しながら、跳ねるように自分の部屋へと上がっていった。なんとというか、一緒に行くっていうのに何とも置き去りな雰囲気だ。しかたなく、壁にかけてあった橙色のローブを肩に通そうとする　と、

「お人よしだねえ、セイは」

階段からこちらが見えなくなる直前、フィンはそう言ってセイに嬉しそうな笑みを浮かべた。

(6-3) 森と魔女と魔女嫌い

着いた先は、見覚えのある新緑の森だった。清々しく降り注ぐ日の光は、まるで絵画の祝福の光のようだ。大きく一つ深呼吸して、気持ちのよい雰囲気ごと体に取り組む。それだけで、

「待ってよ、セイ」

「……………くそ」

とりあえず、歩みの遅い二人が追いつくまでの小休止にはなる。セイの後方6メートルで、フィンとクレイは木に足をとられないように、必死にこちらに歩んでくる。最初にクレイに捕まったところでの、

『じゃあ、道案内頼むね。歩きなれてないとは思うけど、ボクたちも手伝うし!』

『足手まといだけにはなるな』
というセリフがもはや懐かしい。

「っていうか、二人とも山歩きは慣れてるんじゃないの?」

追いついた二人に言うと、二人とも恨みがましくセイを睨む。

「それはこっちのセリフだよ。なんでそんなにポンポン前に進めるのさ」

フィンがどこかで拾ったのだろう木の棒を、こっちに向けて言い放った。ちなみに、その棒の用途方法は、案の定杖である。

何で、と聞かれると返答に困る。確かにセイは山歩きに慣れていないのだが、それでも苦戦するほどのものでもない。むしろセイから言わせると、

「二人が遅いんだよ」

というより体力がなさ過ぎる。魔法に頼りすぎた代償だろうか、二人の体力はどう考えてもセイの世界の平均以下だった。

つまり、セイが少しペースを落とすくらいでは、二人とも追いつけないわけで。

クレイが、くやしそうにこちらを見ているのがわかる。言い返したいのだが、今の自分の醜態を考えてできないみたいだ。悔しそうに、

「くそ！」

と小さく呟いて、セイの後を追ってくる。

それを見ながら、

(……なんというか、今日一日でクレイがやっと人間に見えてきた)と不謹慎なことをセイは考えたりしていた。

「っていうかさ、ホウキに乗っていけばいいんじゃないのか？」

「ダメなんだよ。この森の中でホウキに乗ると、精霊たちが怒り出しちゃうから。だからあんなふうにわざわざホウキ置く場所が作られてるんだよ」

どうやら、この世界はこの世界でいろいろなしばりがあるらしい。

「それより、まだなの？　っていつかどこに向かっているのさ。道間違えたりしてない？」

「あと少しだよ。ちなみに道に間違いはありません」

何しろ、あれだけ苦労しながら歩いたのだ。間違えようがない。

「それより、フィンたちはここにいつも来てるんだろ？　なのになんでそんなに疲れるの？」

「いつもは薬草をとりに来てるだけだもん。あれは入り口近くに生えてるし」

なるほど、ようするにこんなに奥まで来たことはなかった、と。

「でも、クレイはもうちょっと体力あると思ってた」

身長も自分と同じくらいあるし、なにより「なんでもできる」というような優等生オーラをまとっているからだ。そんな呟きが癪に障ったのか、クレイは帽子のツバで顔を隠しながら、

「……殺す」

物騒なことを呟いていた。

そんな雑談をしながら数十分。セイたちは目的の場所に到着した。そこにあっただのは一本の大樹だった。

そのスケールは、他の木と比べることすらおこがましいほどの尊厳と、偉大さと、温もりと優しさに溢れていた。

「綺麗だね」

フィンが、不純物の混ざっていない感想を口にした。セイもそれにああ、と頷く。自然のつくりだした、魔法とは違うものの確かな奇跡は、何にも負けることのない美しさがあつた。

きっと、この世界は美しいんだとセイは思う。自分の暮らしていた、前の世界より。

あの世界では、同じ緑でもこんなふうには思えないだろう。きっとそれを見るセイたちの心が、この世界にいる人たちよりくすんでしまっているからだ。

この世界に来てセイはなんとなく、そう考えていた。ずっと。

それこそ、毎晩月を見上げるたびに。

「やあ、セイではないか。今度はどんなおもしろ事を引っ張ってきたのかのう？」

頭上から降ってきた声に、フィンとクレイが驚いたように一歩下がった。しかしセイは驚かずにゆっくりと頭を上げると、笑いかける。

「やあ、グランスイス。言われたとおり、遊びに来てみた」

「……なんだ、今度は驚かんのか。つまらんのお」

残念そうに呟いて、グランスイスはぶら下がっていた木の枝から降りた。

「しかしセイ……なんという格好をしておる。それではまるで……」
そんな二人のやりとりを見ていたクレイが、困惑しながら話に割り込む。

「おい貴様、こいつはいつたい」

「黙れ小娘。お主にこいつ呼ばわりされるいわれは無いわ」

グランズエイスがちらりとクレイを見ながら言う。それだけで、クレイは言葉を次げなくなった。

「グランズエイス、その言い方はあんまり感心できないぞ」

「うるさい、こやつらはウィッチだろう？　我はウィッチが大嫌いなのだ。人の森を勝手に荒らしまわりおって、何様のつもりなのだと問詰めてやりたい」

「私の森　だと？　まさか、そこにいるのは」

「はっ、今更気付くとはウィッチの質も落ちたものよな。」

その通り、我はこの森を統括する大樹が守護精霊　グランズエイスだ」

「！」「えー！」

クレイとフィンはその言葉に、一気に身を引いた。

セイはその反応に呆気にとられて、グランズエイスを凝視し、そして今度は二人を見つめて素直な気持ちをお口にしました。

「どういうこと？」

「簡単なことよ。我は、こやつらなどそのあたりの小枝より簡単にポキリと折ることができるのさ。小指をちょっと動かすだけで」

その瞬間、フィンとクレイの足元にいつの間にか木の枝が二人の足を払った。二人の手はとっさに腰へと伸びるが、そこに魔女最大の武器はない。

「もう無力じゃ」

手の中の二本の杖をもてあそびながら、グランズエイスは細く笑む。

「そしてなにより　ウィッチでこの噂を知らんものはおらんからな。」

大樹の森を統べる守護精霊は、ウィッチが大嫌いだと。もし怒りをかえば、けっして無事な姿で森からは出られんと……」

くはは、と暗い笑いを出しながら舌なめずりをする。それだけで、クレイの顔は真っ青に凍りつき、フィンは直視できずに顔を俯かせた。それでなんとなくセイは事態を推測した。つまりグランズエイ

スは、自分と最初に会った時と同じように二人をからかっているのだと。

(いい性格してるよ、まったく)

「おい、グランスイス。いいかげんに」

しろ、とまで言わせてもらえなかった。グランスイスは二人から視線を外し、ずいとセイによる。

「セイ、こやつらがいてお主がそのローブを着ているということは お主は魔女になったのか。答えよ、その内容によっては我のお主への対応も変わる」

その時になつて、初めてセイは理解する。子のグランスイスは出会ったときとは違う。目の色が、全然違う。セイは逡巡し、しかし結局正直に言うことにした。

「ああ、いろいろあって今は魔女ってことにな
最後まで言わせてもらえなかった。」

そこまで聞けば十分とばかりに、グランスイスは中指をくいと曲げた。

それだけで、足がからめとられた。それが何かを確認するまでもなく、地面の感覚が消える。そして世界はぐるりと反転。そこにあったのは、タロットの『吊るされた男』に酷似した男の魔女の姿だった。

セイが吊るされている右足には、仲間の魔女と同じようにツタが巻きついている。それは紛れもなく、グランスイスの敵意だった。

「セイ、我はお主を気に入っておる」

猫なで声と裏腹に、深緑の瞳に映すのは嫌悪と侮蔑。

そうだ。彼女ははじめから言っていた。会った時からずっと。

「しかしお主がそのローブをかぶり、我の大嫌いなウィッチになるというならば、話は別」

ウィッチが、大嫌いだと。

「ここでその四肢を引きちぎり、魂をそこらの草木に植えつけ

てやる。なあに、我が毎日話し相手になってやる。暇はすまいていい提案だろうとばかりに、その突き出した口をにやりと動かす。草の蔓でできた髪はごうごうとごめき、ゆったりとセイに近づいていく。

目の前まできて、それはやっと動きを止めた。

「しかし我は優しいからな、今一度選択の時を与えよう。」

この場で、そのローブを微塵に裂け。二度と我の目に触れぬよう燃やせ。そうすれば、寛大にもこの場は許し無事に帰してやる。」

一瞬だけ、深緑が揺らめいた。

「我は予言しよう。その明け方の空を写したローブは　ウィッチはお主に破滅を呼ぶ。お主とお主のまわりの世界を全て巻き込んで破壊し、食いつぶす不幸を招くのだ。」

セイ、お主だけはウィッチになつてはならない。そのローブ、ここで捨てよ。ウィッチを捨てよ。」

目の前に迫った死に、呼吸を不規則にしながらも、セイは考える。どうする。

魔女を捨てるか？　でもそうなれば帰る手段は二度と見つからず手がかりも得られないだろう。

じゃあ、ここでは一旦納得して嘘を言う？　無理だ。おそらくグランスエイスは気がつく。よしんば多少の時間は稼げて、ここは彼女の森。逃げられる想像すらできない。

そもそも、逃げていいのだろうか。

「グランスエイス、一ついいか？」

「何だ？」

「俺がウィッチを捨てたら助かるとしよう。そっちの二人はどうする。」

「無論殺す」

当然のように結論が導かれた。二人が視界の端で硬直するのが見える。

「なんでだ？　そこまでする必要はないだろう。」

「必要不必要の問題ではないのよ。我が気に入ったものを私の気に入らないものに塗りつぶした　青い紫陽花の園にバラを無理やり植えつけられたような気分といえ、わかりやすいかのう。そんなことをされれば、腹が立つのは当然じゃろう？」

その答えを聞いたセイは、
「ふむ、なるほど。グランスイス、ちょっとこっちに。答えを言うから」

手招きをしてグランスイスを呼ぶ。しかしグランスイスは笑顔のセイに近寄らない。

「そこで答えを言え。近づいて何かされたら面倒くさい」

「ああ、そう。じゃあ……こっちから！」

セイは駆け出した。グランスイスの正面に。

グランスイスは余裕の表情を崩さずその四肢を絡めとってセイを吊るした。

あつという間に貼り付けにされたセイは、それでもグランスイスから視線を外さない。

「セイ、なにしてんのさ!？」

「馬鹿か貴様は！」

「我も今回はそのウィッチどもに同感じゃのう。馬鹿であろうお主は」

「うるさい、馬鹿でけっこうだ。とりあえず一発なぐらせろ」

セイは暴れて鳶をはずそうとするが、そのたびにむしる鳶はきつく締まっていく。

「それが貴様の答えかセイ　いや、ウィッチよ。貴様はその力におぼれ欲し、なくしたくないと命よりしがみつき、邪魔な我を排除しよう……そういうわけだな。」

貴様はやはり……あれとは別物だ」

にらみ殺すようなグランスイスの視線を送り、あきたとばかりに鋭い棘をセイの眼前へとゆっくりもっていく。セイはそれに恐怖し絶望しけながらも、

「ちがうよ、今は魔女とか関係ない」

言葉だけは真つ向から否定した。

「ほお、何が違うと」

グランスイスが興味を持ったのか、棘の進行を少し止める。

「オレは別に魔女に執着なんてない。他に元の世界に帰る方法があるなら、ローブだって別に破り捨ててもかまわない」

きつとフィンたちはいい顔をしないだろうな、と思いつつもセイは本心を口にする。

「魔法はあこがれていたし、使えるなら使ってみたって気持ちはある。ホウキに乗るだけでも楽しい。でも、それはあくまで娯楽や手段であって目的じゃない」

「目的は、元の世界へ返ること。それができれば手段は問わないと？ なら、我がその方法を見つけやろう。それなら……」

「ただし、誰も死なない手段だ」

そこが、一番の本音だ。

「力とか邪魔とかオレの周りがすべて不幸になるとか今はそんなのはどうでもいい。機嫌を損ねたとかそんなどうでもいいことで誰かを殺すって言ったその物言いに腹が立ったから、一発なぐらせる」
「なるほど、つまりこやつらのためか」

ちがう、とセイは首を振った。

「どこまでも、自分のためだ」

ふつと。

拘束していた蔓が、解けた。バランスなんて取れるはずもなく、地面に惨めに這いつくばる。後ろでも、人が落ちる二つの音。

魔女三人は、どういうわけか解放されていた。

「くつくつく……」

そして眼前には笑いかみ殺している守護精霊。そして耐え切れず、爆笑した。

「いやあ、そんな啖呵を切られるとは、バカかお主。殺生与奪の権利を奪われている相手に怒鳴る台詞ではないぞ。」

本来なら、殺されても文句は言えぬぞ？」

目頭を拭いつつ、グランスイスは言う。どうやら、そうとうツボにはまったらしかった。

「本来なら、殺しておくところなのじゃがな。久々に、それも旧友と似たようなことをのたまいおつたからな……いいじゃろう、今回は見逃してやる。」

どうやら、心までウィッチとなったわけではなさそうじゃなからな

「そうしてもらえると助かるよ。そう何度もグルグル巻きにされたくないしね」

セイの後ろでは、二人の魔女が胸をなでおろしていた。一命を取り留めた安心からか、ふたりとも草の上にペタリと座り込んでいる。グランスイスのおふざけがすぎたようだ。

「で、グランスイス。わざとオレを脅すようなことを言って、結局何か成果はあつたのか」

「なんじゃ、気づいておつたのか」

「気づかないわけないだろ」

敵意はあつたし、嫌悪感も確かだった。でも、殺す気はなかったと感じたのだ。グランスイスからは、やはり木漏れ日のような温かさしか伝わってこなかったから。

「その割にはおびえておつたようだが？」

「あのなあ。刺されないうってわかってても、ナイフをちらつかせられたら怖く感じるだろう。それと一緒にさ。そこまで度胸は座つてないよ」

「どうだかな。お主は異世界人だからのお」

くはは、と笑い、グランスイスは木の幹に腰を下ろした。

それは完全に事態が収束したことを示すポーズ。

「まあ、今回のことでセイにもわかったであろう。我はウィッチが嫌い、憎んでいると。」

セイよ。ふざけはしたが、我は一つも嘘は申しておらんぞ。ウィ

ツチは近い未来、お主を確実に不幸にするだろう。そしてお主の心がウィッチに染まれば、我はお主を殺すだろう。

ゆめゆめ、忘れるなよ」

最後に少しだけ、グランスイスは目を細めて忠告して。

「では、とつとと用事とやらを済ませて帰れ。今度来るときは、お一人で来るのだな。そのときは、歓迎しよう」

初めて会ったときと同じように草を分け、道を示した。

フィンとクレイが逃げるようにその道を歩んでいくのをセイも追う。

あの時とは違って、見送りの歌はなかった。

(6-4) セイと魔法と初めての呪文

しばらく離れてから爆発したのは、フィンだった。

「何なのさあれ！ 殺されるかと思ったよ！」

「大樹の守護精霊とは。……魔女嫌いとは聞いていたが、あれほどとは。生きて帰れたのは奇跡かもしれん」

震える肩を抱くように、クレイは今だに消えない恐怖心を語った。対するセイは気楽なものだ。

「あれはグランスイス流のお茶目だつて。そこまで真剣にならなくても」

「何言ってるのさ、殺されかけたんだよ！ 大体、セイの知り合いってどういうことなのさ！」

「あんなものが知り合いなら、先に言っておけこの昼行灯が！ 危うく、成人すらできず死ぬところだっただろうが！」

フィンにはチョップを、クレイには胸倉を掴まれ悪態と脅しを受けながらしばらく。

グランスイスが開いてくれた道を進んでいくと、やっと目的地に到着した。

そこは、森にぼつかりと空いた空間だった。

根や木々、林などで乱雑な印象を受ける森の中で、そこは奇跡的なまでに整っている。

人工的なものではない。ただ、木々が。草が。動物たちが。

そこは神聖なところであるように、立ち入らないのだ。

柔らかくゆたぐような木漏れ日に、照りかえる新緑のような芝。間違いなく、セイがこの世界で初めてみた光景だった。

「すごい……マナが溢れている」

クレイが、独り言のようにつぶやく。

「綺麗だね」

どこかで聞いたような感想を、フィンが口にする。セイがちらり

と見た横顔は、言葉と同様に全然感情が籠っていないかった。

何てこともない自然が作った光の降り注ぐ大地。そこには、何にも負けることのない美しさがある。だからこそ、セイはそのフィンの表情を少し不思議に感じた。まるで、とりあえず感想を合わせておけばいいというような、どうでもよさそうな表情に。

「っと、調査だ調査。見とれている場合じゃない」

一番見とれていたクレイが、慌てて抱えていたカバンから大きな一巻きの紙を取り出した。それには縁の方には何やら細かい模様が記してあったが、真ん中のほうは白紙だった。それをセイが最初にいた場所に広げる。それを見て、さきほどまでの様子はどこえやら、フィンがなにやら嬉しそうに観察を始めた。

「へえ、魔法探知紙だね。よく借りてこれたね、そんなの」

「私だって、先生に拝み倒して校外持ち出しを許可してもらったんだ。そうじゃなきゃ、持ってくることもなんてできるか」

しきりに感心するフィンに、セイはそつと耳打ちする。

（なにあれ？ 貴重なもののなの？）

少なくともセイには、少し模様の凝ったただの紙にしか見えない。（うん、魔法探知紙っていつてね、その場所で使われた魔法を特定できるんだ。扱い方がスツゴク難しいし値段もすごいから、普通は魔工師っていう専門家に頼むんだけど）

（それって、クレイに使わせていいの？）

（クレイだから、だよ。クレイは魔力のコントロールなら校内随一だからね。そうじゃなきゃ、あの石頭があんなもの貸さないって）

ようするに、クレイの魔法の実力はスゴイということだ。それで、少し気になった。

（ねえ、クレイってまさか学校の成績一番？）

（ううん、二番。テストになるとドジ踏むタイプなんだよ、クレイは）

笑みを浮かべるフィン。なるほど、ようするに土壇場でミスするタイプなのだろう。解答欄が最後に一個あまったりとか、名前を書

き忘れるとか。

そんなことを話している内、準備ができたのかクレイはゆっくりと跪くと、紙の縁取りの模様に手を置いた。

そして、ゆっくりと言葉を紡ぐ。

「刻まれし陣よ 我が声に従い ここで起きた奇跡をそれに記せ」

変化は、起きた。光りだす魔法探知紙。それに呼応するように、今まで外側を飾っていた真紅の模様が動き出す。それはゆっくりと中央に集まり、一つの文字を形成した。

「すごいな」

「うん、魔力のコントロールも完璧！」

どこか自慢げに、フィンはそう言ってきた文字を覗き込む。ゆっくりと光が弱まり、そこには一つ

『開門』

そんな文字が、描かれていた。それを目にした瞬間、

ドクン、と。

心臓が、跳ねた。

おかしい。こんなものに覚えはない

気づけ

いったいそれが、何の門かわからない。

才前は、ソレを知ッて

イル

それ以前に、そもそもソレの意味がわからない。

嘘ッ

だから、

オマエは、

オレは

そのモンを

知っている。

知っテイる。

「ぶざけるな！」

クレイの怒鳴り声で、意識が引き戻された。……手に、嫌というほど汗をかいている。貧血にでもなったかのように、頭の中がぼおっとグラグラする。まるで地に着いてないようだ。気を抜いたら、倒れそうだ。

なんとか我慢して、かすむ視線の先に見たクレイは、座ったままの姿勢でその文字を睨んでいた。

「『開門』だと！？ 悪ぶざけにも程がある！ どういうことだ！？」

心から吐き出すように、クレイは叫ぶ。それはまるで、目の前に突きつけられた現実を拒絶しているように見えた。

その反応に戸惑っているセイの横で、フィン是完全に笑顔を消して立ち尽くす。それだけで、事態の深刻さは飲み込めた。

「くそ、この魔法探知紙、壊れてるんじゃないのか！？ それとも、私が手順を間違えたとしたか」

「クレイは何も間違っちゃいないし、その魔法探知紙もちゃんと働いているよ。それは、現実」

フィンが手の中で魔法の杖をクルクルと弄びながら、ポツリとそう呟いた。クレイが奥歯をかみしめる。そんなことはわかっている、というように。

セイには何もわからない。『開門』という意味も、それが何で二人をここまで焦らせているのかも。

だから、聞かなければならない。セイにはその義務があると

心の奥で、誰かが叫んだ。

「クレイ、教えてくれ。その文字……『開門』っていつのは何だ？
どんな魔法なんだ？」

返事は、しばらくなかった。沈黙が続いて、そして当然クレイは
こちらに丸めた背中を見せたまま、

「『開門』 世界を隔てる世界の門を開け、そこから力あるもの
を呼び出す大魔法だ」

血を吐くような声で言った。

「ようするに 召喚術？」

古今東西の様々な魔法使いが行ったとされる、神降ろしの儀式。
様々な代償と引き換えに、願いを叶えるために 欲望を満たすた
めにおこなうソレは、悪魔召喚が一般的には一番イメージが通って
いるだろう。

……一体、それがなぜここまで反応を引き起こすのだろうか。
「たしかに、この魔法は有名だよ。おとぎ話とかでもよく出てくる
し」

フィンはそう言いながら、いつの間にか元の模様に戻った魔法探
知紙を、クレイのカバンにしまった。そして、クルリとこちらに向
き直って、

「でもね。実際に見た人がいないの、一人も」

絶望を、口にした。

「え？」

意味が……わかりたくない。

それを知ってしまったえば、どうしようもないという現実を受け入れ
るしかない、気づいたから。

しかしフィンは優しさゆえ、無情に真実を告げる。

「伝説上の魔法なの、それ。今まで誰かが実践したっていう話もな
ければ、その魔法のあとでさえ見たことのある人はいない。ううん、
それどころか異界への門すら発見されたことがないよ」

「つまり」

「本来はありえないんだ、こんなこと。あるはずがない」

そう言っつて、クレイは立ち上がりこちらを見た。それは完璧に、怒っていた。その目が語っている。これは手がかりでもなんでもない……新たな問題を増やしたただけだ、と。

「お前は何者だ？ 門をくぐった、だと？ そんなこと　くそ、違っ」

そう言っつて、クレイはセイから目をそらす。それは躊躇いなのか、クレイは口の中でモゴモゴとした後、意を決してこちらにもう一度向き直った。

「そうじゃない。私が言いたいののは　」

その時、背中にザワリと嫌な感覚が流れた。

驚いて振り返り、フィンが持っていた木の棒を奪い取る。その動きに、二人は呆気にとられていた。

「どうしたの、セイ？」

不可解そうに尋ねるフィン。それにかまわずあたりの気配を探る。

……間違いない。何か、いる。

「フィン、クレイ。杖、持ってるな？」

「え、うん」

「……何が起きた？」

クレイが、言葉から察してそう聞き返す。どうやら、この気配を二人は感じないようだ。

こっちはいやっつて程ビシビシ感じてるっていつのに。

「何かに見られてる。数はわかんないけど」

とりあえず複数なのは明らかだ。同じような気配が、前のほうのいろんな場所から感じられる。

「確かか？」

「うん。感じてる」

その言葉に確信を持ったのか、クレイは杖を黒い外套から取り出す。それを見たフィンも、その手を懐に入れた。

そして　それは姿を現した。

茂みから出てきたのは、一メートルぐらいの緑色をしている。顔の大きさのわりに体のつくりは小さく、四頭身ぐらいだ。あきらかに不釣り合いな大きな目と口からは、正気とは思えない光と声が発せられている。その顔は、生理的に直視しがたい。小さな体を古ぼけたポロポロのメイルで隠し、手には木の棒で作られた鈍器を持ったその姿は、

「ゴブリンだと!? なぜこんな場所に。ここは魔女区だぞ!」

クレイが叫びながら杖を真正面にかまえる。四匹のゴブリンは、こちらに威嚇のつもりなのか雄叫びを上げた。

それに怯むクレイとフィン。予想外の事態に頭がうまく働いていないようだ。

「二人とも…… 実戦経験は?」

「ないよ。こんな初めて」

「私もだ。こんな事態には遭遇したことはない」

焦りの混じった声で、返事をした。

やっぱりだ。今の二人は、未知の相手に萎縮してしまっている。

セイだって、もちろんこんなものに囲まれる経験はない。でも、日ごろから正義のミカタまがいで喧嘩に巻き込まれていることと、二人の動揺がセイを逆に冷静にさせていた。

「おい」

「何?」

「どうすればいい」

そのセリフに、思わずセイはクレイのほうに振り返ってしまった。クレイは一匹のゴブリンを睨みつけたまま続ける。

「今はお前が一番落ち着いている。どうすればいい?」

クレイは、必死に恐怖を押し殺していた。ここでヤケになってはいけないと、自身を制御している。

セイはその勇気に、答えた。

「倒すしかない。威嚇で逃げてくれるならいいんだけど」

「無理、だろうね。どこ見てもやる気満々だもん」

フィンが、ゴブリンたちの狂気じみた表情を見て、小さくニヤハハと笑う。確かにゴブリンは、どこか変だ。目の焦点があつていない。話し合いは通じそうもない。……そもそも、言葉が通じないかもしれないが。

「私たちに倒せるのか？」

「大丈夫。見たところ、小柄だからそんなに頑丈じゃないはずだ。すばしっこそうではあるけどね」

軽く言っではみるものの、確率でいえばイーブンだ。実戦経験がないのは大きい。咄嗟の対応がどうしても遅れてしまうだろう。なんとか安全な方法を考えなければいけない。

「クレイ、ゴブリンの特徴は？」

「見たとおりだ。攻撃は手に持った武器での攻撃だけ。魔力も使えないし、知能は低い。……だからって結界を越えられるはずはないんだが」

わけがわからない、と下唇をかむクレイの杖先は、小刻みに震えている。……はやくどうにかしないと、クレイたちの精神がもたない。

（ なら、やることはひとつだ ）

セイは二人から一歩前に出た。

「オレがあいつらに突っ込んでひきつける。フィンとクレイはその間に距離をとって魔法で撃退して」

「何？」

「そんなのあぶないよ、セイ！ それじゃ成功しても失敗してもセイが」

「言い争ってる時間はない」

相手はいつ飛び込んでくるかわからない。

「それが一番被害が少ない。いいね？ じゃあ」

「一つ聞かせる」

クレイがセイの言葉を切るように言う。振り向いた先にあった目は、まるで心を見透かしているようだった。

「それは、お前も含めてか？」

セイはそれに笑顔を向けて、無視した。

「いくよ、一……二の……三ッ！」

有無を言わずカウントし、前方のゴブリンたちに突っ込む。セイの動きに反応したのか、雄叫びを上げて飛び上がる二匹のゴブリン。知能が低いのは本当らしい。それはあまりに真っ直ぐな行動だった。

これなら 打ち落とせる！

「うわああああ！」

思い切り木の棒を横に薙ぐ。素人まるだしの乱雑な一撃だったが、一匹のゴブリンはそれを思い切り腹に受け、遠くの方に飛んでいった。そして、目の前にはもう一体のゴブリン。

それを、思い切り体を沈めて いや、そんな綺麗なものではない。倒れるようにして、なんとかスレスレでかわした。

しかし、甘かった。

体をこすった痛みを感じる暇もなく、目前に別の二体のゴブリンが迫っていた。倒れている体はもちろん、思い通りには動かない。

目の前に迫るゴブリン。振り上げられた鈍器に、ダメージを覚悟して

「我が声に答え二本の矢となり 敵を打ちぬけ！ シャーフィリング 『弓』！」

クレイの詠唱が響いた。それと同時に、セイの頭の上を氷弾が通過する。ツララのような氷弾は二匹のゴブリンを正確に射抜き、足元を凍らせた。

「今だ！」

クレイの声よりはやく、木の棒を振り上げる。それをゴルフスイングのように、二匹の顔面に叩き込んだ。ゴシヤリという音と、木の棒の折れる感覚。二匹のゴブリンはフヤアアギアという断末魔をあげて気を失った。

「あと一匹！」

振り返った先のゴブリンは、しかし先ほどの場所にはいない。

(どこだ！)

焦るセイを小さな影が指した。空を見上げる。そこには、セイの頭上を飛び越えてゆく一匹のケモノの姿が映った。

しまった、と感じたときにはもう遅い。

ゴブリンは駆ける、クレイの元へ。魔法に脅威を感じたのだろう、こちらには目もくれずに最後のゴブリンは彼女を目指していた。

クレイの顔が、驚きと戸惑いにゆがむのがわかった。とつさに杖を前に構える。だが……詠唱の時間が足りない。それはクレイ自体が一番理解していた。それでも杖を掲げて詠唱をしようとするクレイ　その横で、フィンが不敵に笑みを浮かべた。

フィンの手には、二本の試験管が握られていた。それには、見覚えがある。確か、『混ぜるな危険！』というラベルが貼ってあったやつだ。

ゴブリンの前に飛び出すフィン。クレイはそれに驚いて杖を引つめた。そのチャンスを、ゴブリンは見逃さない。杖(武器)を持っていないと判断すると、目標を変えてフィンに襲いかかる。

しかし武器を持っていない、というのは大きな勘違いだ。元々フィンが攻撃魔法が使えない。そんなフィンにとって、杖はこの場であらうたいした意味をもたない。むしろ、その試験管のほうに杖以上の強力な武器なのだ。

ゴブリンはフィンの手前まですばやく駆け寄ると、彼女に容赦なく飛び付こうとして　それよりはやく、フィンが2本の試験管を投げつけた。

ゴブリンは、手に持つ鈍器を大きく振り上げる。その目の前で、キャップの外された試験管の中身は空中で混ざり合い、

ドコン、と子気味のいい音とともに爆発した。

崩れ落ちる所々くろこげになったゴブリン。それに……セイとクレイは呆気にとられるしかなかった。

「ふ、このボクに勝とうなんて百万年はやい！」

そう言いながら嬉しそうにニヤハハと高笑いを浮かべるフィン（白いアクマ）。……なんていうか、

「お前は他に方法がないのか、フィン。それでも魔女か？」

「別にいいじゃん。詠唱するよりこつちのほうが慣れてるんだもん」
なんと魔女らしくない発言を、フィンはケロリと口にした。

とりあえず、二人は無傷のようだ。安心して一息つくと、フィンがこちらに駆け寄って 飛び込んできた。フィンの頭が、狙いすましたかのように鳩尾にあたる。一瞬息が止まった。

「やったね、セイ！」

そう言っただけで抱きついてくるフィンを引き剥がしながら、息を整える。

人間大砲か、この子は。

「おつかれ、フィン。……予想の斜め上をいく撃退方法だったけど」

「セイもすごいじゃん！ 木の棒でバーンて！ ビックリしたよ」
今度は手を握って上下にブンブンと振る。よほど高揚しているのか、こちらの肩が外れかねない威力だ。

「まあ、ゴブリンたちの動きがバカみたいにまっすぐだったからね。あれぐらいは何とか。それより、大丈夫だとは思っけど怪我はない？」

「うん、大丈夫だよ！ 思ったより爆発も小さかったし」

「あれで小さかったのか？」

「うん」

いったい、実際の威力はどれくらいなのだろう。知りたいが、よくない結果に終わりそうなのでやめておいた。

とりあえずフィンから手を離すと、奥で一人立っているクレイにも尋ねる。

「クレイは？ 怪我はない？」

「私は大丈夫だ。まったく、無茶すぎるぞ。私の魔法が間に合わなかったらどうなって」

ギシャアアアアという狂気が、クレイの言葉を遮った。

その声にクレイが見上げた先、一本の木から一匹の悪鬼が舞い降りる。

(……やられた、今までのはずんぶ囷か！)

「クレイ！」

駆け出す。

まわりがスローモーションで動いているような、不思議な感覚。溶けた飴のようにねっとりとした空気をかき分けながら、クレイを指す。

クレイは見上げたまま固まっている。実戦経験の差がここで出た。見上げたまま、恐怖が襲ってくるのに顔をゆがめる。だめだ、あれではまともに喰らう。

走る。

まだ間に合う。

武器はない。

敵の攻撃を防ぐ手段は、ない。

(このままクレイに体当たりすれば)

駄目だ。一撃目はなんとか避けられるかもしれないが、それで詰んでしまう。次の行動には移れない。

頭の中で、誰かが叫ぶ。お前が行く必要はないと。行っても何もできないと。

「ざけんな！」

そんな心に激を飛ばす。目の前に傷つきそうなやつがいるのに、それを無視なんてできない。それに……身をていして守ることぐらいはできる。

覚悟して、走る。

(もう、オレの前では)

何を、覚悟したのかわからないまま。

「死ぬことなんてできない！」

その時だった。

まるで自らの主を助けるかのように、眠っていた体中の回路が開いた。

まるで体に新しい神経が走るようだった。それと同時に、その神経に流れる何か。全身を駆け抜けていくソレを、知識ではなく感覚として理解する。

これが、魔力。魔法を扱うために必要な力を、この時セイは初めて確信した。扱いは、自然と頭に浮かんでいる。この全身の熱さが、それを実行しろと訴えかける。

助かりたければチカラを使え、と。

体が熱い。焼けるようなその熱さの示すまま、ベルトから十手を魔法の杖を取り出す。その瞬間、杖を通して外への道が開いた。今なら、フィンの言いたかったことがわかる。杖は外へのバイパスだ。杖を握ることで、自分の中で循環している回路に、新しい外側への道が作られる。そして今度は、自分の中に光をイメージする。それは、簡単に浮かんた。眩しくてあたたかいヒカリ。

あとはそれを、新しくできた道と体の熱さに乗せて…思い切り想像から現実ソットに引っ張り出す！

「我に 光を 『光球ラウム』！」

それと同時に、生まれでる光球。

それはフィンが生み出したものとは比べ物にならない光を放ち、ゴブリンの眼前に放たれた。

「グ、ギアアアアアアアアアアアアアアア！」

目を潰されたゴブリンは、目測を見誤り思い切り地面に落下する。そこに、

「もらいー！」

セイに続いて駆け寄ったフィンが、新しく取り出した試験管をゴブリンに頭から浴びせた。すると、ゴブリンはしばらく唸ったあと、「ぐがああああああ………」

眠りについた。どうやら、あの水色の液体は強力な睡眠薬のようだ。

足先で蹴飛ばしてゴブリンが起きないかを確認する。ぐっすり眠ったゴブリンは、起きるそぶりを少しも見せなかった。

安堵して、ふっと一息をつく。

「フィン、ナイスフォロー」

「セイこそ」

まだドキドキしている心臓をなだめるように、言葉を吐く。……危なかった。

本当に、死ぬかと思った。

「何でだ」

本当に、今のはほとんど奇跡だ。

「何でだ」

もう一度やれといっても絶対に出来ないだろう。結果的にクレイを助けられたから……

「何でだ！」

「うわ！」

後ろからローブのすそを思い切りひかれて、やっとクレイに気がついた。

「ああ、そうだった。クレイ、怪我とかは」

「そんなことはどうでもいい！ 質問に答えろ。 何でだ」

「へ？」

なんのことか、この時のセイは本気でわからなかった。そこまで頭がまわらなかった。それを表情から読み取ったクレイは、もう一度、よくわかるように訊いた。

「何で私を助けた」

心底わからない、と言うように。黒帽子で目元を隠している、その表情は読み取れない。ただ、それに対して本当に困惑していることだけは、わかった。

「今のフィンのセリフじゃ、さっき初めて魔法が使えたんだろう。なのに、なぜ飛び込んでこれた？ あのままでは」

お前は死んでいた。そう悔やむように、クレイは口にした。それは、助かったという安堵と、自分のせいで他人を傷つけていたかもしれないという、恐怖だった。

「エクシャの時だってそうだ！ 何故貴様はあんなに当然のように身を投げ出せる！ 異常だぞあんなのは。それに私は……お前にずつつらくあたってきた。むちゃくちゃな魔女試験を言いつけられて、でも欲にぐらんでそれを受けて。

なのに、一切の手がかりがなくて……そうだ、私はお前にやつあたりをしていたんだ。そんな私を、どうして助けたりしたんだ！？」

そう言っただけで、クレイは、戸惑い瞳を向ける。セイはそれに、「理由なんてない」

正直に答えた。

「ない？」

クレイはまったく予想外の解答に、呆然と聞き返して来る。

「うん、理由なんてない。ただクレイが危ないって思っただけで、気がついたら走ってた。その時は、どうしようかなんて考えもしなかった」身を盾にしようとしたことは黙っておく。きっとそれはクレイを苦しめるだけになる。

それに、やつあたりだとも思わない。だって、問題を運んできたのはセイであることに変わりない。クレイの苛立ちももつともなはずだ。なのにクレイは、それを自分のふがいなさだと言い切った。

『クレイはね、きっとセイと同じくらい優しいよ』

フィンのいうとおりだった。クレイは、少しだけ自分に似ている

キシヤアアアアアという怒声は仲間を傷つけられた怒りからか、それともとうに正気ではないのか。森に反響したその声は、ノイズのコーラスのようだった。

「セイ、これって」

フィンに応えず、その背後を守る。言わなくとも全員がわかっている。自分たちを囲んでいるのはゴブリンで、そしてそれはどうしようもない大群であるということ。

心臓が、いやな感じで高鳴る。体中の毛は逆立ち、本能がしきりに生命の危機を訴える。

「どうやら、あれだけじゃなかったみたいだね」

どこか落ちて着いたフィンの声。セイはそれに小さく頷くことしかできなかった。

どんどんと濃くなる気配。

しかし、それに対してセイができることはない。少しでも動けば、それが殺戮の合図になりかねない。どうする？

自分に問いかけても、答えは返ってこない。でも、体の熱さだけが魔法を使えと訴えかけてくる。

しかし、確証のない勝負はできない。直感だけに頼って失敗すれば、死ぬのはセイだけではない。

（それは、ダメだ）

ゆっくりと、息を吐き出す。

……いや、一つだけ方法はある。

それは簡単なことだ。この中で誰か一人が囿になって敵をひきつければいい。やるなら、どいつか一体を殴るのが一番だ。そうすれば知能の低いゴブリンたちは、そいつを追いかけてくるだろう。これで、残りの二人は逃げられる。

さっきの、クレイが放った魔法の弾丸。あれがいい。あれなら、注意を引くには十分だ。呪文は頭の中に残っている。今すぐにも、実行できる。

決意して、杖をあげて、体の中の魔力に働きかける。あとはこれを……

「『凍てつく氷神の槍』」

そんな声が、聞こえた。

まるで詠うようなその声は、女性のものだった。洗練され、磨き上げられたそれは、勝者の声。

勝負は一瞬だった。その詠唱にはどれだけの強さがあったのか、唱え終わると同時にあたりは氷結する。

いくら魔法にうといセイでも、それがどれだけ無茶苦茶なことかは理解できた。

セイたちを避けるようにして出来上がったのは、たくさんの巨大な氷の棘。地面から生えたその中には、今までセイを包囲していたゴブリンが入っていた。

こんな広範囲かつ高出力の魔法、セイの魔力を総動員したって不可能だ。

状況はまだいまいち飲み込めない。でも、もう近くにはさっきまでの気配が感じられない。

「助かった？」

確認するように、言葉を吐く。それに、

「ええ、これで全部凍らしちゃったから大丈夫よ」

返答があつた。油断を突いたその声の方向に振り向くと、そこには一人の魔女が立っていた。

年齢はセイより少し上ぐらい。光を反射して輝くウェーブのかかった金髪に、クレイより少し濃く蒼い瞳。セイより十センチぐらい上にあるその整った顔は、こちらを見て優しく微笑んでいた。

「久しぶりね、クレイ。それにフィンも」

「エリアリス先輩？」

フィンが驚きの声を上げて、その魔女の名前を呼んだ。どうやら、

知り合いらしい。

「うん、無事そうで何より。しっかり守ってもらえたみたいね」
そう彼女は微笑むと、

「まさか魔法が使えるとは思わなかったわ」

セイに向かってすごいすごいと小さく拍手した。

「そうだ、セイ。魔法ちゃんと使えたじゃん！」

フィンも、そう言って極上の笑顔を向ける。

そういえば、そうだ。さっきは夢中だったので、意識していなかった。改めてもう一度、自身の体の中を探ってみる。そしてそこに、確かなチカラの塊を感じた。一度開かれた回路と魔力は、今ははっきりと意識できる。

「これが魔力……」

「……感動しているところ悪いが」

クレイが腕の中で、頬を微妙に朱に染めながらそう呟いた。

(……ん？ ウデノナカ？)

そこでやっと、自分の体勢を見直す余裕ができた。ゴブリンからクレイを守ろうとした手はクレイの背中にまわっていて、その体をがっちり抱きしめていた。

「早く離してくれ」

「う、ごめん！」

あわてて解放する。クレイは「ああ」と小さく頷いた後、変に折り目のついてしまった服を直した。その様子を見ながら、僕セイ心音が大きくなるのを感じた……恐怖で。

ただでさえ、クレイに嫌われてるというのに、あんなことをすれば何をされるかわからない。そしてこの場合、何をされても文句は言えない。

ところがクレイは真つ赤になりながらセイから二歩距離を離れただけだった。その行為の意味がよくわからないが……その反応に、フィンとエリアリスさんが喜んでいるのはわかった。

クレイはそのままエリアリスさんに歩み寄る。……なんということ

だろう。右手と右足が一緒に出ている。

(ねえ、フィン。なんかクレイの様子が今までになく変なんだけど) クレイに聞こえないように耳打ちする。

(あー、あれね。あの人、エリアリス先輩っていうんだけど。ボクたちの二つ先輩で、試験一発でウィザードの仲間入りを果たした、っていうすごい人なの。クレイの憧れの人)

(なるほど)

フィンの言うことに納得しながら、クレイを観察する。クレイはガチガチなまま、エリアリスを見上げた。

「あの……、先輩はどうしてここに？」

「多分クレイたちと同じ理由。上は上でこの事態に対応してるの。」

……その子が例の？」

そう言っつて、エリアリスはセイに目を向ける。

「はい、そうですけど」

「ふくん、君がね」

そう言っつて、エリアリスは頭からつま先までジロジロとセイを見る。それはまるで観察するような目つきだった。何とも居心地が悪い。

「何か？」

「……いえ、気にしないで」

彼女はそういうと、すっと右手を差し出した。

「わたしはエリアリス。若いけど、一応ウィザード……っつて言っつてわかるかしら？」

「はい、魔女のエリートですよね？」

「ええ。それをやってるわ。よろしく」

「オレはセイです。よろしくおねがいます、エリアリスさん。あと、ありがとっございました」

その右手に自分の右手を交わして、頭を下げた。それにエイアリスは、

「お礼を言われるのはまだちょっと早いわね」

そう言っ て握手した手を離すと、すつと右手を上げた。

「『砕ける』」

パチンと指を鳴らす。

それが、この魔法の真の呪文だった。

その音は静かな森へと反響し、そして次の瞬間、轟音とともにゴブリンたちを中に残しながら氷の棘は砕けた。
「な!？」

驚きが声になった。それはあまりにも自然な行為だった。氷使いの魔女は、いとも簡単に十以上の命を破壊した。それに対する純粹で単純な感情の反発が、気持ちをそのまま言葉にする。

「なんも殺すことなんか!！」

「この子達は魔法で正気を失わされているわ」

エリアリスはセイの言葉を予想していたのか、最後まで言わずに、

「もう助けられない」

落ち着いた声で、事実を口にした。その目は……まるで彼女の作り出す氷のように、冷たく冷え切つて凍えていた。

「それでも!　そもそもそういうのを治す魔法もあるでしょう!？」

「確かに、ね。でもそれは治癒師と呼ばれる専門の者にしかできない。私の魔法が解けたら、貴方たちはまた狙われるわ。」

わたしは今、最善の方法をとつた。違う?」

それは、完全無欠の正論だった。確かに……現状を考えれば、それが一番だ。希望的な救いと、堅実な安全。とるならば、どちらかなんて尋ねる必要もない。

セイは言い返せず　グワリと、目の前がゆがんだ。
どこか遠くで、ドサリという音。

「ちょっと、大丈夫?　セイ!」

「エリアリス先輩、これは!？」

「大丈夫よ。あんなむりやり魔法を使っただから当ぜ」

遠くでなにやら三人が話しているのをぼんやりと感じながら、セイは気を失った。

この時セイが味わったのは、死を間近にした恐怖と。

魔法を使えたという達成感と。

クレイを守れたという安心と。

正論の前に命の重さを主張できなかった、くやしさだった。

次回予告6

クレイ「……」

フィン「おい、クレイ。そろそろ帰ってきてくんない？ このコーナー、一人でボクがしゃべりつづけるのはどうかと」

クレイ「なくなってしまえ、こんなコーナー」

フィン「ま、恥ずかしいのはわかるけどねー。前はツンデレで、今回はもうほとんどデレデレだもんねー。クレイ、攻略難易度低すぎじゃない？ ゲームならメインヒロインの次くらい？」

クレイ「クロス」

フィン「はい、ツンいただきましたー。はくしゅーパチパチ」

クレイ「我が声に答え十七本の矢となり 怨敵を打ちぬ」

フィン「ぎゃー、マジだ！ じ、次回『暗き月夜に Storm
night』お、お楽しみに！ じゃーねー！！ ゲフッ！？

こ、拘束魔法？」

クレイ「逃がすと思うか……」

フィン「ええっと……ゴメンネ」

クレイ「ああ、許さない。『弓』(シャーフィリング)」

次回予告6（後書き）

悪乗り、ここに極めり。

ちよっと書き直しがあるので、本編は今週末にでも
では—

森を訪れてから、二日が過ぎた。初めての命を賭けた戦いと謎の混乱。様々な出来事を襲われたセイは、

「我が声により 汝を縛る ワステイク ホウキよ、こつちに来い！」

フィン先生の魔法基礎授業を受けていた。セイが唱えたのは物体を操る魔法。言葉通り、玄関先に立てかけてあったセイのホウキは、伸ばした左手に収まった。

「よし、成功！ セイ、だいぶ良くなってきたねえ。フィン先生も鼻が高いよ」

「ああ、自分でも驚いてる」

フィンがうんうんと頷く横で、セイは頷いた。あの後、セイが自分の中にある魔力と呼ばれるものを感じ取れるようになってからというもの、魔法習得の効率が段違いにようになった。最初はうんともすんともいわなかった基礎魔法は、少し練習すればものになる。実際、セイはこの二日でワステイクを含め三つの魔法を使えるようになっていた。

クレイが言うには、

「魔力の流れさえ自覚できれば、基礎魔法などよっぼどでない限り失敗しない。当然だ」

だそうだから、魔女としてはこれが普通なのだろう。セイ自身も、次々と魔法が扱えるようになることに興奮に近い感動を覚えていた。そして、考えるのだ。これを素直に喜べたらどれだけいいだろうと。

森でのゴブリン襲撃事件。

パラルザイドとの約束どおり起こったことをありのままに報告した結果、最高魔女議会は何もなかったことにした。

理由は、セイにでも簡単に想像できた。森は魔女区内、つまりは

結界の中だ。魔女の国を覆う結界は、外敵を阻む魔女にとって絶対であり揺らいではならない盾。それがこうも簡単に侵入を許したとなれば、上へ下への大騒ぎになるのは確実だ。それを避けたがっているのは、ナーガルやパルザイドとの一度の体面で実感している。しかし、釈然としないのは確かだった。このもやもやとした暗い気持ちをごにやればいいのか。

パルザイドや魔女との確執、開門という本来ありえないはずの魔法。

それを感じているのはセイだけではなかった。フィンも笑って魔法を教えてくれているものの、どこかその笑顔がぎこちなく感じる。せっかく和解したクレイも、ゆつくりと話す機会もないまま今まで以上に図書館に通い詰めた。みんながみんな、漠然とした不安をのみ消すために必死だった。

そして、セイには二人とは違うもう一つの心配事があった。

(何でだ？ オレは知ってる。開門って魔法を)

文芸部所属だ、ファンタジー小説なんて何冊読んだかわからない。もしかしたらその中に、開門という魔法があっただけなのかもしれない。

しかし、セイはなぜか『知っている』という事実にひどく心揺さぶられていた。まるで、できの悪いと確信しているテストが返される前のように、心がふらついて定まらない。

そして何よりセイが悩んでいるのは、

(このことを……二人に話すべきか？)

勘違いの可能性のほうが大きいし、何よりこの世界のことを知らないはずの自分が魔法について知っているとすれば、また厄介事をクレイに押し付けかねない。ここ数日のクレイは、目の下にクマを飼いながら作業していた。わずかな時間を惜しむように、これまでの自分を振り切るように。

そんな姿を見せられては、切り出す話も切り出せなかった。

そんなふうにセイが頭を抱えながらも、何の進展もなく二日目

終わろうとしたとき。

夕食後のティータイムで、事は起こった。

「明日はみんな図書館に行こうと思いますっ」

ピツとまっすぐに手を挙げて、フィンはその提案した。セイはもう慣れたもので、フィンの空になったカップに紅茶を注いで、自分のところには白湯を入れる。紅茶に近い風味を持つこの世界独特のお茶の味に、セイはいまだになれることが出来ないからだ。そしてカップを持ったまま、テーブルの椅子を引っ張ってきて、クレイとフィンが座るソファアの近くで腰を下ろした。

対したクレイも慣れたもので、ソファアに座りながら今日まとめてきた文献を読みながら、完全無視を決め込んでいた。どうやら少しだけ精神的余裕ができたらしく、最近ではセイが近くにいても睨んだり怒鳴ったりはしなくなった。今だにフィンを通さなければスムーズな会話はできないが。

「おい、ふたりともー？ 聞いている、ねえ聞いている？ 聞こえてたら『はい』か『イエス』で答えてよー」

ぱたぱたと足を振りながら頬を膨らませて、無視に対し抗議するフィン。しかし、クレイの判決は簡潔で冷徹だった。

「却下だ、無駄話に付き合う時間はない」

「だってさ」

「むー。なんだよ二人して」

すっかりむくれてしまったフィンに、しかしクレイは追撃を仕掛ける。

「大体、お前らを図書館に連れて行って何になる」

「えーと、資料探しか？」

「お前程度で検索できる資料を既に私が調べていないと思っているのか？ むしろ、お前らのお守りで時間を取られるのが関の山だ」

「お守りってなにさ！ それじゃボクが子どもみたいじゃん」

「そのとおりだろうが。私は今でも覚えているぞ。アカデミーの三回生の頃、試験のために私についてきたお前が」

「まあ、相変わらず細かいなあ！ そんな何年も前のこと、いちいち例にしなくたって」

（元気だなあ）

二人の口論がヒートアップしていく様を見ながら、セイは一人白湯の温かさにゆったりとしていた。この二人の場合、軽い口論がガス抜きや意見交換になっているようなので、無理には止めないほうがいいことをセイはここ何日かで理解した。この家に長く二人で暮らしてきたのだ、好きにやらせたほうがいいだろう。

「なにさ、クレイのばーかばーか！ 堅物の石頭魔女！」

「なんだと！ この馬鹿能天気魔女！ だれのおかげで四回生のときの魔法選抜を突破できたと」

「そんなこと忘れました！。ボク能天気でバカな魔女だもん」

「このっ！」

ある程度までは、の話だが。

「なあ、フィン」

「何さ！」「何だ！」

ぱつと振り向く二人に、セイはフィンを真似て手を挙げる。

「そもそも、なんで図書館に行こうって思ったの？ さすがに理由もなく、ってわけじゃないんだろ」

「とーぜん！」

「じゃ、話してみ。クレイも、反対意見はそれを聞いた後でも遅くないだろ」

「まあ、そうだが」

クレイを納得させて、セイはフィンに続きを促した。フィンはカップを少し口に運んで、言った。

「だって、このままじゃ一向に前には進まないよ」

フィンの言葉に、セイもクレイも驚いた。

「だって、この前のあれはなかったことになっちゃってる。あんな

ところに偶然ゴブリンがいるって、おかしくない？」

「それは……私も確かに思っていたが。しかし、それは議会から極秘裏に任された魔女が解決してくれるだろう」

「そうかもしれない。でも、その情報がボクたちのところにくるかな？」

クレイは返事をしない。わかっているのだろう。いくら関係者と言えども、見習い魔女にそんな重要な機密を漏らしたりはしないことを。

「ボクはあのゴブリンたちとセイには、何か関係があるんじゃないかと思ってるよ。そしてそれだけじゃない。あの時、同じように偶然いたウィザード」

「エリアリス先輩がやったとも言つつもりか！」

椅子を叩いて立ち上がるクレイに、フィンはなだめるように首を振った。

「さすがにあれをエリアリス先輩がやったとは思わないよ、メリツトがないもん。でも、調査のタイミングが良過ぎ。こうなることのある程度わかって、ボクたちを監視・護衛していた　とは考えられないかな」

筋は通っている。すべてを偶然と考えるよりは、真実味を帯びているくらいだ。クレイもどこかでそれを考えていたのかもしれない、特に反論することなく再びソファーに深く座り込んだ。

「推論はいくら立てたところで、真実がわからない以上無駄だ。それより今は、何故お前らが一緒に図書館に行くかについてだろう」

話の軌道を図るクレイに、フィンは杖をペン回しのようにクルクルと回しながら、答えた。

「理由自体は色々あるよ。ボク少し調べたいことがあるから、セイをここで一人にするよりはみんなで図書館にいったほうが安全だとか。あと、セイにもそろそろ町に出て空気を感じたほうが魔女に近づけそうだから」

「調べたいことって？」

「薬品調合の資料。ちょっと、作りたいものができたのさ。で、どうよクレイ」

決定権を任せられ、クレイはしばらく考え込む。

「その資料、私が探してこればいいのでは」

「薬品だけじゃなくて、素材になるものも調べなきゃなんないから、割と面倒だよ。一緒に行ったほうが作業が分担できて楽」

「しかし、こいつはどうする。またエクシヤのときのような面倒事が起こるのはごめんだぞ」

「大丈夫。こんどこそボクが責任もって面倒みるから！」

「オレは犬か何かか？」

クレイはもう一度考え込むように視線を下げて、そして小さく頷いた。

「……わかった、いいだろう。ただし、私はそいつの面倒は一切見ない。いいな」

「もちろん、このフィンさんにおまかせさ！　じゃ、明日はみんなで図書館だ！」

おー、と一人ごぶしを振り上げるフィンを見ながら、セイは心の中ですぶやいた。

(うん、完全にオレの意見は無視ですね)

そしてそんな状況に慣れ始めている自分が、もはや心地よかった。

(7-2) セイと本と操作の魔法

そして翌日。

朝食を軽く済ませた三人は、町の図書館へ向かった。

図書館は町の中心である時計塔からすぐのところにある。クレイの説明では研究資料の多くが図書館にあるらしく、時計塔と図書館は魔法で連結されているらしい。

「国の最高機関とみんなが使える施設が繋がっているのは、色々と問題なんじゃないのか」

「甘く見るな。時計塔から図書館への出入りは自由だが、逆にはしつかりと制限が設けられている」

そんな会話をホウキの上で交わしながらしばらく。

セイたちは図書館前へと到着した。概観は時計塔のイメージを崩さないため同色のレンガで組まれている。つくりも同じように豪華で頑丈。セイから見れば図書館というよりイギリスあたりの歴史的建築物にしか見えない。

ところどころには意匠やレリーフが施されており、それは見たことのない動物や魔女の姿を象っていた。正面の門も大きく、五メートル以上はあるだろう。魔法の力でも借りなければ、一人で開ける事は無理そうだ。そうして外観に圧倒されている間も、魔女の行き来はひっきりなしで、たくさんの人が吸い込まれては出てきていた。

「図書館が賑わってるっていうのは、変な感じだな」

「セイのところでは違うの？」

「ある時期以外は、がらんがらんだよ」

「墮落したものだな」

クレイは鼻で笑って門へと歩いてゆく。セイとフィンもその背中を追った。

「なんだ、付いてくるな。ここからは別行動だ」

不快感をあらわにしてクレイはそっぽを向く。むくれるのはフィ

ン。

「むー、クレイのいじわる」

「意地悪も何も約束しただろうが。私はそいつの面倒は一切見ない」
そうして一人早足で図書館の中へと消えていった。フィンはいさばらく不服そうにしていたが、やがてくるりとセイのほうへ向くと、いつもどおりの笑顔を浮かべた。

「仕方ない、二人で行こっかセイ。今日は図書館内をごあんなーい」
「うわ、ちよっと引っ張るな！」

手をぐいぐいと引かれながら、セイは外観を細かく眺めることなく中へと引き込まれた。

大きな扉をくぐる。そこでセイが感じたのは、懐かしい匂いだった。文芸部の部室と同じ、木と紙とインクが混ざった本の匂い。しかし、広がる光景はいつもとはまるで違っていた。

「うわ、魔法の図書館だ……」

セイが思わずそう呟いたのも無理はない。セイの目にまず何より印象的に映ったのは、浮いた本棚だった。普通の図書館のように壁や床に備え付けてあるものだけでなく、中央の大きく開いた空間にはいくつもの本棚が空中で固定されている。まるでガラスの床に本棚が置いてあるようだ。本来ならセイがいつも通っていた市の図書館に比べても圧倒的に広いはずなのに、本棚のせいで窮屈に感じられるほどだ。

そして次に目に入るのが、その本棚から本を出し入れしている紺色のボロきれをまとった何か。除くのは懐中電灯のようにこうこうと光ったふたつの愛らしい目と、カンテラを持つ細い三指の左手。彼らは本に触ることなくボロきれの間から本を取り出し、ふわりふわりと本棚に納めていた。

「あれはテレントっていうんだよ。この図書館を管理してる低級精霊」

フィンがセイの視線に気づいて、そう説明した。
「手を使わずに本を扱えるんだな」

「ここには、変な魔法書も多いからね。その点あれらは触れないし、魔法的な影響も与えないまさに図書管理にうつってつけの存在なのさ」
「その割に、左手にカンテラ持つてるけど。火は危なくないか？」
「ちゅちゅちゅ、甘いあせいは。ふわっふわの生クリームをたっぷり乗せたケーキより甘党だね」

指をちゅちゅと振って、おどけるような目でフィンにはセイに答えた。
「あれは、本物の炎じゃなくて、トレントたちの命。トレントはあの布の中にたくさんの本を貯めて、その中に込められた思いを食べて生きてるの。つまりあの光の大きさが、トレントたちが今持つてる本の量ってことになるのさ。」

「この本には、指定された本棚の近くをトレントが通ったら、自動的にトレントから抜け出して本棚に収まる魔法がかけてあるの。だから、トレントを適当にうるつかせておけば勝手に本の整理ができるってわけ」

本に込められた思いを食べる。その在りようが、セイにはなんだかとても自分と近いもののように感じた。物を書き、思いを形にしてきた自分と。

セイはなんとなしにトレントを眺めていたが、ふと頭に疑問がよぎった。

「でもさ。それだと資料用に集めた本とかも勝手に持ってかれちゃうんじゃないのか？」

「それも大丈夫！ ほら、あそこみてみて」

フィンが指差すところを見ると、ちよつと細い通路でトレントと魔女が行きかおうとしている。と、トレントは魔女に気づくやいなやその体を小さく縮こませて本の本棚の間のわずかな隙間にすっと隠れてしまった。

「あのとおり、トレントはすごく臆病だかね。ちゃんと近くに人がいるところを選べば持つてかれる心配はないよ。それが、本の間紙以外の何か挟んでおくとかね。トレントは本と紙しか取り込めないから」

「なるほど。いい働きぶりだね」

こいつがいれば、元の世界の図書館はどれだけ楽だろうか。目当ての本が別の本棚にあった経験が少なくないセイは、素直にうらやましく思った。

「もちろんだけど、本棚の本をとったりはしないんだよな」

「仕舞い間違つてあるやつ以外は、トレントが取り出せないようになってるからね。トレントもそれを知ってるからやらないしー」

ひとしきり説明を終えたフィンは、奥へと軽い足取りで進んでいく。セイも多くの魔女の波にのまれないように、体をひねりながら後を追った。

「とりあえずどこ行くんだ？」

「まずは個室を確保しようかなあ、と。ボクも今日はけっこうな作業になりそだし、何よりセイとの会話をあんまり聞かれるのは良くないしね。ほら、セイもはやくこっちくる！」

フィンは図書館の端にある台の上ののった。それは学校にある長机程度の大きさで、四方は腰ぐらゐまでの手すりがついている。フィンは手すりの一部を開けて、中から手招きしている。セイはそれが何か判断できないまま、とりあえずその上に乗った。

そして、フィンは唱えた。

「我が声により 汝を縛る」「ステイク操作」 ステアよ 3Dへ！」

ぐぐぐ、とセイの足元が揺らいだ。

「う、うわっぐー！」

思わず声を上げそうになった口を、フィンが押さえた。

(しーっ！ 叫んじゃ駄目だって！ 魔女じゃないって、ばれちゃう)

フィンの耳打ちに、ぐつと驚きの声を呑み込んで、セイは改めて今の自分の状況を見直す。台は揺れを感じない程度にゆっくりと上昇し、そして三階のところまで止まるとゆっくりと横移動を始めた。

(すごい。ここの図書館はこうやって移動するのか)

フィンに押さえられた口から漏れた言葉に、フィンは耳元で肯定

した。

「そそ。二階までの階段はあるんだけど、上に増築増築していったら階段を入れるスペースがなくなっちゃったらしくてね。この形になったってわけ。ワステイク 物を動かす魔法ね、覚えてるでしょ？ を唱えると後は台が勝手に目的地まで向かってくれる便利な台さ」

「そりやまた、無計画設計だな」

「六階まで重い本抱えて移動するよりは計画的だと思うけど」

やがて、セイは3Dと刻まれたプレートのドアの前に着いた。フィンが開けると、そこは机四つ分ほどの小さな個室になっている。壁で四方を覆われているため、多少騒いでも音は漏れそうにない。「今日は比較的すいててよかったよ。混んできるときだと、個室がとれないことがあるからね」

フィンがぴよんと台座をとんで部屋に入っていく。セイもその背中を追った。入ってみて実感したが、この空間はまるで図書館の自主学习室のようだ。用途的にも、まさにそうだろう。

「さて、と」

フィンは担いでいた荷物を降ろすと、その中から紙束を乱暴に取り出した。端を軽く紐で止めただけのそれを、ひとつふたつ。

顔を覗き込むと、爛々と瞳を輝かせていて、いつか見た「マッド」モードに入っていた。

「フィン、これからオレはどうする？」

フィンが完全に没頭する前に、そう指示を仰いだセイに、

「好きにすれば」

聞きようによっては冷たい答えが返ってきた。クレイに言っていたことは、ま逆の内容だ。

「とりあえず、騒ぎだけ起こさないでくれたらいいよ。ここに来てもうけっこうだし、大丈夫大丈夫」

ペンを休ませることなくそう軽く言うフィンに、セイはため息ひとつでそれ以上食い下がるのをあきらめた。きっと、もうフィンの

中で「もう放っておいても問題ない」という評価が自分に下されているのだろう。

（まあ、図書館で後ろをついて回っても意味ないか）

そう判断すると、セイはステアへと向かう。

「フィン、オレにオススメの本とかがあってある？」

「ん？ 魔法関連の初級本なら四階西にあるよ」

「ありがと」

セイはお礼を言うと、ステアに向かって詠唱する。

「我が声により 汝を縛る」

フステイク
『操作』

ステアよ 「四階へ！」

しばらくすると、ステアは3Dの個室からゆっくり離れていく。

去り際に、フィンがこちらを見ずに軽く手を振っていた。

ステアもなんなくたどり着き、四階へ。そこにいたのは、十歳前後の魔女たちだった。いや、正確に言えば魔女見習いか。四人がけの机には、大抵二人から三人の子どもたちがいて、分厚い本を片手に真剣な表情で何かを書き取ったり写したりしている。現れた少年上のセイに、一瞬だけ視線をこちらに向けるが、すぐにまた本へと視線が戻っていった。どうやら自分の格好を不思議に思われることはないらしい。

「男だつて見抜かれないことは幸いなんだけど」

当たり前に受け入れられるのも、それはそれでシヨックだった。

しかし同時に、気にしても仕方がないとわりきって前に進む。

しかし、その光景は正直以上だった。小さな子どもたちが、辞書ほどある本と向き合い、ただ無言で勉学に励んでいる。魔女としては正しい姿なのだろうが、子どもとしては異常を感じずにはいられなかった。

（なんだか……気持ち悪い）

セイはそこを早足で抜けて、別の人がない区画へと足を向けていた。

やがて、テラスのようになっていいる部分にくる。そこは周りにほとんど魔女もおらず、やっと魔法の図書館を楽しめそうなところだった。

そう、なんといっても図書館だ。元の世界では、ホームグラウンドといっても過言ではない。本に満たされた空間に、うきうきしながら足を進める。こちらの本は、魔道書が多いからか、それとも魔女のプライドが高いからだろうか。なかなか本の装飾が細やかだ。紙質ではやはり元の世界に少し劣るが、表紙などは本皮使用の豪華品だ。セイは、物は試しと本棚から一冊の豪華な本を取り出した。

(む……かなり嚴重に封がしてあるな)

カギこそかかっていないが、いくつもの留め金がついているのを見て、セイは魔女書の類かと手に取る。表紙はくたびれていたが、なんとか題名だけは読みとれた。

『ドラゴン種の対処と特性の考察』

(逃げるのが一番だと思っけど)

セイは中身も見ずに、そう判断する。そもそも、ドラゴンなんてものと対面した時点でもうだめだろう。そうならないためにどうするかのほうが、よっぽど必要な知識だ。

そう思いつつ、セイは本の止め具を外す。なんだかんだでセイもまだ中学生だ。ドラゴン殺し　そんな単語にときめきを覚えずにはいられなかった。

(まあ、暇つぶしだ暇つぶし)

誰にでもなくそういいわけし、本を開いた。その瞬間、

「　っ！」

耳をつんざく異音が大音量で響いた。まるで、あの森で聞いたゴブリンのような、いやそれよりも大きく威圧的な咆哮。

そして、紙面いっぱい広がる錆色のドラゴンが、こちらを威嚇するように牙と大きな口を見せた。

「うわっ！」

セイは反射的に本を閉じる。すると、咆哮は一瞬くぐもって、すぐにおさまる。どうやら、その音は本から発せられたようだ。

（そうか、忘れてた）

この世界の地図もそうだった。この書物は、ただ描かれているだけではない。時には動くことも立体になることもある。本という形式こそとっているが、そのあり方はパソコンに近いのだ。

「気を付けないとな……」

そう呟いて、気が付く。セイが声を小さくするのは、図書館の『静かに！』という基本マナーを守るため。そして、先ほどのまだ頭に反芻しているほどのドラゴンのうなり声。

振り向くと、周りにいた魔女たちと、別のフロアにいる魔女からの迷惑そうな視線を独り占めしていた。

顔に血が集まっていくのがセイ。

「し、失礼しましたあ……」

本をさつと戻してからそそくさと立ち去ると、なるべく人のいないところに向かった。

「あー、まったく。無駄に恥かいた」

ようやく人のいない区間を見つけると、セイは息をついた。どうやら、慣れ親しんだものに近い空間のせいで、張り詰めていた警戒心が少し解けてしまったようだ。

「適度に気を引き締めないと」

そうしないと、またクレイに冷たい目をされそうだ。やすやすとその場面を想像できていしまう自分に少し笑いながら、セイは改めて周囲を見回した。

ここには、本当に人がいない。先ほどまではどの区間にもある程度人はいたが、ここだけはすっぱりと人の存在を感じない。それに、「魔女のにおいがあんまりしないな」

それは異物であるセイだからこそ感じたものかもしれないが、魔女には独特のにおいがある。草や薬、それに動物が混じったようなにおいと、それを消すための鼻につく香水の香り。元の世界ほど発達していないのか、花から抽出したと推測できるエキスは、少しきついぐらいだ。

それは、フィンやクレイにだっていえる。フィンはどちらかというと草のにおいが強く、近くにいるとこの森にいるのかと思うし、クレイは逆にすつと鼻が通るような、魔女の中では比較的清々しい香水のにおいがする。見習いでさえそうなのだ、魔女たちにとってそれは生活臭に近いのだろう。

そのにおいが、ここでは希薄だった。

気になって、本棚に書かれたプレートを確認する。と、そこには『寓話』と書かれていた。

「なるほど、納得」

この世界の魔女は勤勉だ。いや、魔女として生きる以上様々な知識がいる事はすでにこれまでに経験済みだ。魔法を使うためにはその工程や理論が、薬をつくるには薬学や薬草学、科学が必須だ。

そんなある意味で現実主義の魔女たちにとって、こんなふうにしたの物語を読む変わり者なんていないのだろう。

「まあ、ここにいますけどね。変わり者、というより変わり種だけだ」

セイはゆっくりとタイトルをひとつひとつ確認していく。ファンタジー世界のファンタジー物だ。どんなものが出てくるのだろうと、鼻歌まじりに指をスライドさせていく。

そして、ちょうど真ん中あたりを過ぎた頃。ほとんどがみすばらしい、それこそ片手間につくったような装丁の中に、一冊だけしっかりとしてつくられた本を見つける。取り出してみると、地味ではあるがしっかりとした皮製で、印も押してあった。

「ん」と、何々。『魔女大戦』ねえ」

あまりひねりのないタイトルだったが、それゆえに好感を持てる。

セイはその本を抱えると、周りを見渡せる階のテラスのはじっこを陣取った。幸い、近くに人はいない。ひざの上に本を広げようと、

「……」

そつと開いて、とくに何の異常もないことが確認してから読み始めた。

しばらく、本をめくる音と、少し遠い場所がかすかに聞こえる喧騒。そして、本の中だけがセイの世界になる。

話の始まりは、そこまで遠くない過去。その頃にはまだ魔女の結界はなく、魔女たちは外敵との戦いをしていた。そんな中に、それは現れた。獣や人間とは違う、闇。それはあつという間に魔女を侵略した。

その強大な力に魅せられ、その手先となる闇の魔女たちも出始め、魔女の国はこれまでにない混乱に、破滅の道を歩み始める。

しかし、そんな中で一人の魔女が現れる。

長い髪と大きな白銀の杖を掲げた魔女は、次々と闇に対抗する手段を講じていく。それは魔女の国を丸ごと覆う魔女結界や、闇を払うための光の魔法。

この光の魔女の登場により、魔女たちはじよじよに力を取り戻していく。

そして

「やつほー。何読んでるの？」

後ろからひよいと覗かれて、セイは世界に帰還した。振り向くとそこにはなおも本を覗き込もうとくつついてくるフィンと、その様子をもすつとした顔で眺めるクレイの姿。そこでようやく、自分が没頭しすぎていたことに気がついた。

「ごめん、探した？」

「ちよつとねー。どこにいるかと思ったよ。クレイなんか血相変えて慌てだすし」

「当たり前だろうが。聞いたぞ、さっきのドラゴンの書を開けたオレンジ頭の馬鹿な魔女がいたって。こいつは目を離すと何を起こすかわかったもんじゃ」

「それがわかってるなら、自分の目の届くところに置いといたらー」
「にははとからかうフィン。セイは、クレイが爆発しないうちに話を進めることにする。そこそこに長くなり始めた付き合いで、彼女たちとの付き合いかたを少しずつ覚えてきた。」

「で、何かなクレイ。時間的に、お昼のお誘い？」

「私は別に昼などわざわざとらなくても、適当にすればいいんだがな。こいつがうるさくて」

「ごはんはみんなで食べたほうがおいしいじゃん」

「それには賛成」

フィンに肯定し、三人は図書館の中庭へと向かった。

(7-3) セイとお昼と光の魔女

ランチボックスに入っていたのは、卵やサラダ、干し肉などを挟んだ簡単なサンドイッチ。ガラス瓶には、紅茶が二つと水が一つ入っている。紅茶はフイントクレイ、水はセイ用だ。それらを備え付けのテーブルに並べた。

「それでは、ボクの手作りサンドイッチをめしあがれー」

「いや、ベラドンナで作ったら手作りとは言わないだろ」

セイのつつこみを合図に、みなサンドイッチに手を伸ばす。日本の春に近い、でも少しだけ乾燥した天気の中で食べるサンドイッチは、いつもよりおいしく感じられる。

「でもセイってば、本当に紅茶が苦手だねー」

セイが口をつける水を見ながら、フィンハは紅茶のピンを揺らす。

「こつちではこれが主流だから、慣れとかないときついよ?」

「いや、わかるんだけどさ。このきつ過ぎる香りが駄目なんだよ」
どうしても香水や芳香剤を思い出してしまい、紅茶を飲み物として認識できない。それは元の世界からの癖で、匂いのきついものが基本的に苦手だ。直そうとしても、体に染み付いてしまったものはどうにもならない。

「クレイのにおいとかだと、平気なんだけどな」

「なっ!」

突然そんなことを言われたクレイは、顔を赤くして机をたたいた。

「私のおいって何だ、この変態!」

遅れて、セイは自分の失言を自覚する。クレイが怒るのももつともだ。セイはなんとかごまかそうと、

「あゝ、ええつと」

言葉を濁しつつフィンハに助けを求めた。しかし、

「ニヤニヤ」

口でわざわざそう言っている姿を見てあきらめた。クレイは恥ず

かしいのか腹立たしいのか、にらむようにこちらに顔を寄せる。そのとき、髪から清涼剤に似た涼やかなかおりがセイの鼻に届いた。「うん、やっぱりクレイのほうがいい」

無意識とはいえ、それはあまりにも火に油。クレイはざっと身を引くと、立ち上がってきつとこちらをにらんだ。興奮しすぎなのか、半ば涙目だ。

その姿を見て、さすがのセイもあせりだした。どうやら、クレイのデリケートな部分に触れてしまったらしい。

（こちらら、パルルザイドさんから言律師とかよくわからない褒められ方をした男だ。うまく、ごまかせる！ たぶん！）

すでに失言している時点で語るに落ちているのだが、そんなことに気付けるほどセイには余裕がない。無意識とはいえ女の子の気にしていることを口にするこの危険性は、部長で経験済みなのだ。

だからこそ、セイはごまかすことを貫く覚悟を決めた。

「いや、あのほりゃ！ まま、魔女のさ」

その言葉は、噛みまくりだったが。

「魔女が、なんだって？」

腰の杖ホルスターに手が伸び始めたクレイを見て、セイは冷や汗を一筋流す。選択肢を誤れば、待つのは死だと直感した。

「魔女つて、みんな香水つけてるだろう」

「ボクはつけてないよ」

「フィン、オレのサンドイッチ食べていいから、ちよつと黙ってる」
いただきまーす、と手を伸ばすフィンを横目に、セイは必死に次の言葉を考える。クレイの追撃。

「それがどうした？ 研究している薬品や薬草がばれないように香水をつけるのは、魔女にとって当然のことだ」

「そのにおいが、オレにはきつくてね。さっきの紅茶の話で、それを思い出したんだ！ それに比べると、クレイのは控えめでいいにおいだなあ、つと」

それは、とつさの機転で紡いだ言葉ではあったものの、セイの紛

れもない本心。それが、どうやら伝わったらしい。クレイは何か言
い足そうに口を何度かパクパクさせたが、やがて額を一度押さえて
椅子に勢いよく座った。そして、顔を伏せたままボソボソと呟く。
「ふん、これがいいものだなんてお前の鼻はそうとうに狂っている
な。私が使っているのなんて、そこらの魔女が使っているもののさ
らに安物に、自分で少し手を加えたただけだ。それをいいにおいとか
……」

「ごめん、クレイ。聞き取れないんだが」
「何でもない！」

クレイは残っていた紅茶を一気に飲み干すと、これでこの話は終
わりだというように机にたたきつけた。それを見て、ほっと一息つ
くセイと笑いかみ殺すフィン。

クレイはひとつ深呼吸すると、別の話題にやや強引に移った。

「そういえば、セイ。さつき読んでいたのは何だ。寓話にしてはや
たらに良い装丁をしていたが」

「ああ、さっきの？ 表紙には、『魔女大戦』って書いてあったけ
ど」

そう言つと、クレイもフィンも納得したように頷いた。その様子
に、違和感を覚えたのはセイだ。

「なあ、魔女つてあんまりおとぎ話を読んだりはしないんだよな？」

「そだよー。おとぎ話を読むのは、文字を覚えるときぐらいかな。」

あるていど読み書きができるようになれば、研究に移るのが普通だ
し」

「そんなことをしている暇などない」

頷く二人とは対照的に、セイは首をかしげた。

「ならば、なんで二人はこの話を普通に知ってるんだ？ おとぎ話
なんて、それこそ幼少期しか読まないのに」

「簡単だ。それが、一番メジャーな話だからだ」

たまごのサンドイッチをくわえながら、行儀悪くクレイは続ける。
「お前の言った通り、私たち魔女はおとぎ話を読まない。需要がな

いんだ。ならば、供給されるものが少なくなるのは当然だろう？
そんな中で、最適なものを選ぼうと思えば」

「魔女大戦が使われるのは必然、ってことか」

ある意味で合理的なことに、セイはとりあえず納得した。

「で、これは実際にあつた話？」

「まさか。確かに、過去の魔女結界がなかったころは他種族からの
侵攻や侵略はあつたが、闇や救世の魔女など。まして、最終的に異
界へと旅立つたなんて……」

「待って」

聞き逃してはいけない言葉が聞こえた気がして、セイはクレイを
止めた。

「今、異界って言った？」

「ああ、それがどうかしたか？ 魔女大戦の大筋だろう」

読みきっていない本のネタばれをされたことはセイにとつて十分
に『どうかした』ことだったが、それ以上に気になるのは、異界と
いうワードだ。セイが突然表情を変えたことに、クレイは感づいて
先に釘をさす。

「言っておくが、こんなものとお前の境遇を重ね合わせたりするな
よ。これは寓話だ。多少、時代背景は史実にのつつてはいるが、
他はあまりにもとっぴょうしがなさすぎ」

「闇には、会つたよ」

クレイの言葉をさえぎって、セイは告げた。

「オレがこの世界に来た日の夜、牢屋の中で。オレは確かに闇を名
乗るものに出会つたよ」

念を押すように繰り返した言葉に、最初に反応したのはフィンだ。

「どゆこと？ ボク、その話聞いてないんだけど」

「私も知らん」

「ごめん、話そうかどうか迷つてた。今、ちゃんと説明する」

そうしてセイは、牢屋で出会つた人形とそれが語つた言葉を二人
に聞かせた。その雰囲気と、自分が感じたいやな感覚も、なるべく

詳細に。

すべてを聞いて、最初に反応したのはフィンだった。

「いきなり襲い掛かってきたそれには、気になるけどさ。セイは、それだけを根拠にあのおとぎ話には信憑性があるって言いたいのか？」

訝しげという言葉が似合う表情で、問う。それはさすがにちよつと信じられない、と顔が語っている。クレイも、それを肯定した。

「一応だが、私もお前の話を聞いたとき調べている。真つ先に頭に浮かんだのがこの話だったからな。しかし、大した成果など見られなかったぞ。お前が会った闇と名乗るものだって、都合がいいからそう名乗ったとは言えないか？」

それには、反論できない。魔女の中で『闇』という存在が害悪として定着しているならば、畏怖の流布を狙って名乗ることは十分に考えられるだろう。

(…………でも)

「パラルザイドさんも、同じ意見だった…………って言えば、多少の信憑性はでるかな？」

その言葉に、息を呑む二人。思いもよらぬ、ことの重大性にようやく気づいたように。

切り捨てるには、あまりにも重なりすぎている。偶然とよぶには、符号点がありすぎる。それこそ、不自然なほどに。

「…………なあ、クレイ。よければ、魔女大戦の大筋教えてくれない？」
「なんだ、全部読んだわけじゃなかったのか」

「途中まで。闇の大軍隊と魔女たちが戦い始める直前ぐらいだ。これから盛り上がりそうだから、本当はネタばれ勘弁んだけど」

だからといって、優先順位を間違えるほどセイは耄碌していない。クレイはしばらく思い出すように右上に視線を移した後、一つ小さくうなずいた。

「面倒くさいから、だいたい省略するぞ」
そう前置きして、クレイは話し出す。

「まずその大戦で、魔女は大きく闇を退ける。例の光の魔女を中心

とした若い魔女たちが、活躍したんだ。しかし、闇の侵攻は止まらない。世界の狭間を超えて、また闇に傾倒した魔女たちの力を借り、じりじりとその勢力を伸ばしていった」

「でも、大軍をやっつけたのになんで魔女たちは攻め込まなかったんだ？」

比較的好戦的な魔女たちの性格からして、それぐらいやりそうだと考えたが、

「それができたなら、私はお前をとくに元の世界に返している」

その一言で、セイは納得した。

「ああ、そっか。魔女には」

「そ。世界を渡る力はないからねー。専守防衛しかなかったのさ」

フィンは、そう言いながらセイのぶんのサンドイッチをくわえた。

「それに加えて、こっちは国であっちは世界だ。投入してきた戦力からいっても、その量はあきらかに不利だった。それに、国のどこに敵がいるかわからない状況だったしな」

「攻めて出るには、足りないものが多すぎた……か」

その後は、負け戦の定番だ。大量戦力による戦線の大規模展開、じりじりと削られるこちらの戦力。疲弊する魔女や、仲間を信頼できず疑心暗鬼に囚われる魔女。見切りをつけ、闇に加担する魔女。

魔女の滅亡は日に日に現実のものへと近づいていった。

「って、ちよつと待て。この物語、勝ったのは魔女なんだよな」

「魔女の国の寓話だぞ。当然だ」

「それにしても、状況が絶望的やしないか。ここから勝利するなんて、それこそ都合のよすぎる奇跡でも起きない限り」

「起きるから、これは寓話なんだ」

そう言いながら、多少あきれをにじませてクレイは答える。都合のいいことなどそう簡単に起きはしない、その魔女特有の現実主義が言葉の端に見て取れた。そして、この物語終盤の都合のよすぎる展開も。

「二度目の闇たちの侵攻。それを食い止めるために、光の魔女は異

世界の扉から『開門』の魔法を使い、旅立つ。そこでこの世界と闇の世界との間に結界を張り、闇たちがこの世界に侵攻できなくしたんだ。残った魔女たちは、光の魔女が残した術式を基礎として魔女結界をつくり、残った闇たちを駆逐。世界は守られた、という感じだ」

「それは……」
クレイが呆れるのもわかる。展開はなかなか熱いが、最後がおざなりだ。物語としても、異界の魔女ひとりによりすぎている。それに、

「光の魔女はどうなったんだ？」

そこによつては、この話には気に食わないという評価を下さなければならぬ。

「それについては詳しく書かれていない。ただ、帰ってこなかったと書かれたただけだ。まあ、それは言外で死んだと言っているようなものだが」

セイの中で、魔女大戦が『気に入らない』物語リストに入った。

「ふうん、魔女つてのも自分勝手なもんだ」

それは、本来自分たちがすべき『国を守る』という事柄を、外の人間にまかせきりにしたということ。しかも、その恩人を見殺しにしたということ。そう罵ることの、どこに咎められる理由があるだろうか。

（いや、それ以上に気に食わないのは）

「このクソみたいな物語は、いつたい誰が考えたんだ」

思わず口をついた悪態。言つてから、自分は魔女の世界の伝統的寓話を馬鹿にしていると気が付いた。

（怒るかな……）

ちらりと二人を盗み見るセイ。しかし、返つて来たのは意外な答えだった。

「それについては私も同感だ。物語とはいえ、魔女のプライドすら捨てているこの展開は、面白くない。魔女なら、自分たちでどうにかすべきだ」

「何もできないってことはわかるけど、あんまりだよねえ」

セイは、その言葉に必死に笑顔になることを隠した。この真剣な場面で、にやにやと笑うわけにはいかない。

（でも、うれしい）

世界のちがう自分の甘い考えに、この世界の魔女が賛同してくれたことに。そして、それが自分の仲間だということは、セイにとつては心を弾ませるには十分な理由だった。そして、だからこそ思う。

そんな考えを共有できるからこそ、セイは頭に浮かんだ考えを口に出れる。

「うん、オレも二人には同意見だよ。でも、言いたいことはそうじゃないんだ」

セイは少しだけ前のめりになって、まるで内緒話でもするようにつぶやいた。

「魔女は、大事な部分を隠している」

だから、よけいに腹が立つのだ。

セイの表情に確信を浮かべながら、告げた。

「この物語は、おそらく史実だ」

魔女二人は、驚きの表情を浮かべた。当然といえば、当然だ。魔女である二人からすれば、元の世界で桃太郎が実在すると言われるのと同じようなものだから。しかし、セイの世界の価値基準では違う。こう言いたいのだ。

「この物語は、史実を過剰にすることで作られているんだ。元になつたものがある」

「それなら、わかる。魔女結界の由来や、闇のことだろう」

「結界の由来は、物語に統合性をとらせるため。闇は、外敵をわかりやすくまとめる、と」

「ちがうちがう、そんなことじゃない。オレが言いたいのは、異世界を渡った魔女がいて、それが過去にあった大戦の大きな要因になつたことだ」

どうして気づかないのだろう、と不思議そうに首をかしげるセイ。その様子は、自明すぎてわざわざ言及するまでもないと言いたげだ。しかし、魔女の世界に生きてきた二人にとってはちがった。

「セイ、さすがのボクもそれは言い過ぎだと思っよ。夢はあるけど」「現実を見る。そんなこと、あつてたまるか」

「目の前に実例があるでしょうが。君らこそ、何言つてんの」

自分を指さすセイに、二人はうつと声を詰まらせる。夢物語というなら、今こうしていること事態がそうなのだ。「それに……」と、セイは自分の考えの根拠を口にする。

「異世界って言葉が出てくるのがそもそもおかしい。クレイも言っただろう？　魔女なら、自分たちでどうにかすべきだって。オレはまだここに来て浅いけど、魔女の気質を考えればその通りなんだ。他のおとぎ話は知らないけど、本来ならこの国の魔女が最後は敵や困難を打ち破るって展開じゃない？　または、愚かな魔女が不幸に終わるみたいなの……簡単にいえば、魔女の都に済む魔女が中心に話が終わるんじゃないの？」

「それは……」

口ごもるクレイを見れば、答えは明らかだ。

「そう考えると、異世界なんて言葉が出てくるのはおかしい。ただのおとぎ話なら、魔女の大逆転劇があつてしかるべきなんだ。この物語、決して魔女が勝つたとはいえない。さっきの二人の感想が、そのまま一般的魔女たちがこの物語を読んだときに抱く不満なんだ。おとぎ話に、そんな不満が残るものを作るのはおかしいよ。それこそ数が少ないんだから、もっと魔女にふさわしい物語が残るはずなんだ。それなのに、一番知られているのがこの話　何かあると思う」

そうして導き出されたのが、異界を渡った魔女が実在したという推論なのだ、セイは結論づけた。セイの筋がある程度通った論弁に、クレイはしどろもどろになりながら切り換えそうとする。

「それでも、やはり」

「でも」や「もし」はもういいよ。「闇」は実在することは、ラルザイドさんが暗に肯定した。異界をわたる力ギも、あった。異界の存在も目の前にいる。そしてこの物語は、偶然というにはあまりにもその隠された事実と符合しすぎてる。そして、魔女の物語としては不適切なのに、一般大衆には多く知られている。何かあるって考えるほうが自然だ」

しかし、そんな半端で止められるほどセイは甘くはない。

「今、唯一と言っていいほどの手がかりがある。それにオレは気が付いた。でも、ここからはオレじゃ無理なんだ。魔女の世界に詳しくないオレじゃそれがわかったところで、どうすればいいかわからない。だから、二人に聞くんだよ。どうするべきだ」

言いながら、セイは心中で自身を嘲る。まさに自分は言律師だ、と。迫力と怒涛の論理で二人を説得してみたものの、よくよく考えればセイの考えは穴だらけだ。口にしたことは、完全に彼女たちを丸め込むためのもの。そもそも、たかがおとぎ話ひとつにここまで執着すること自体がおかしいのだ。偶然が重なりすぎている部分は確かにある。しかし、十分許容範囲だ。それを根拠にするには、まだ弱い。そもそも異世界からきた魔女の話をするなら、この程度の符号は当たり前。もしセイがこんな説得をされたなら、即座に「阿呆か」と両断するだろう。

しかし、目の前に立つ二人の魔女はできない。二人は知っている。魔女のトップに堂々と嘯き、交渉を成り立たせた異界の人間を。ラルザイドが認めた、異界という存在を。そして、おとぎ話に対する認識や考え方が浅い以上、詳しくそんな口ぶりのセイを否定することはできない。

そうすると、自分が今まで持っていた価値観がぐらつくのだ。そうして一度ぐらついた足場は、簡単には元には戻ってくれない。

（ああ、わかっている。これは、仲間だと思ってくれてる二人に対する、ゆさぶりだ）

最悪に近い行為だ、と思う。しかし、どうしてもここは進まなけ

ればならない。もし、この世界に自分が来た確固たる理由があるならば この話は、無関係ではない。

「……魔法具目録」

ポツリと、フィンがつぶやいた。それは、本当に小さな独り言のような声。しかし、クレイはぐるりと勢いよく振り向いた。

「正気か！？ 犯罪行為に他ならないぞ」

「でも、それなら確実だよ。もし、本当にこの世界にも異界のカギつてのがあるなら」

「そこまで危険を冒す必要はないだろう！」

「はい、ちよいまち。説明してくれ」

喧嘩に発展しそうな二人を止めて、セイは間に入る。自分が思っていたより不穏な空気を感じたのもあって、セイはクレイを落ち着かせる意味もかねて、フィンに解説を振った。

「フィン先生、よろしく」

「はいはいー。魔法具目録っていうのは、この世界にある魔法具って呼ばれる不思議アイテムを、誰が、どこに、どんな状態で保存しているかを印した本のことなんだよ。一度魔女が手に入れたことのあるものなら、現在地はだいたいそれで把握できるよ」

「なるほど、それで『異界のカギ』が実在するのか、あるならその場所も確認するつもりか」

それならば、懸案は一気に好転する。目録に持ち主や場所が記してあるのなら、そこに行けばいい。もし目録にないのなら、この世界にはセイが使ったようなカギはないということだ。その可能性は低いとは考えているが、もしそうなら別の方法を考えなくてはならない。どちらにしる、動くべき方向性が見えてくる。何もかも手探り状態の今から考えれば、それは大きな進展だ。

と、そこまで考えて疑問が浮かぶ。

「でも、そんな便利なものがあるならどうして今まで使わなかったんだ」

最初から使っていれば、今頃こんなことをしている必要はなかつ

たはずだ。その言葉に、深いため息とともにクレイは言った。

「使わないんじゃないかと、使えないんだ」

「どういうこと？」

「目録は、ここにはない。あるのは、あの中だ」

クレイが指差したのは、一方通行の扉。あちらからこちらには自由になれるが、逆の時には許可証が必要と説明されたもの。

「時計塔の中ってことか」

そうだ、とクレイは頷いた。

「時計塔の中には、ウィザードのような高位魔女のみが閲覧を許された書物を封印した図書室がある。魔法具目録はその中だ。目録が下手なもの手に渡れば、略奪が起きるからな」

「……なるほど、見るには」

「忍び込むしかないってワケさ。ボクらに許可なんて下りるわけにやいしねー」

「無理だ、やめろ」

フィン言葉に、クレイは鋭くそう言い放った。出会ったときから変わらない氷柱のような鋭い視線を受けたフィンは、「こわいこわい」とわざとらしく身を震わせる。その様子は、ふざけていることが見て取れる。だというのに、クレイはさらに念を押すように続けた。

「もし、今回のことを強行するつもりなら、私はお前らを傷つけてでも止める」

「なんでだ？」

そこまでの物言いと『犯罪行為』という言葉に、さすがにセイも気になり始めた。もしかして、自分は軽々しくとんでもないことを提案したのではないか。セイは、二人が罰せられるようなことを提案するつもりは毛頭ない。むしろ、二人が楽になるために自分ができることをしたいだけだ。

慌てだすセイに、クレイはため息ひとつでその心情を察して、

「フィン、お前でもわかっているはずだ。言っただけ」

フィンに先を促す。フィンは、「んとねー」と前置きすると、簡潔に結果だけを述べた。

「時計塔に忍び込んだら、殺されても文句は一切言えないんだよ」
「犯罪行為という言葉から、罰金や懲役という罪を思い浮かべていたセイにとつて、それは想定以上の最悪な答えだった。」

「国の最高機関なんだから、その程度当たり前だ。お前のところでは、そうじゃないのか」

その言葉に、自分の世界のことを思い出す。日本はともかく、ホワイトハウスやペンタゴンに不法侵入したことを想定してみた。確かに、テロと考えられて射殺されても文句はいえないかもしれない。「まして警備システムは厳重。知識の海たる図書保管庫の管理はさらに厳重だ。潜入など無理だし、できたとしても問題だ。お前らが死ぬだけだ」

なお厳しい言葉で制止するクレイに、やがてフィンは限界がきたのか頬をぶーっと膨らませた。

「わーかーっーたよーだ！ もう、クレイの石頭融通利かず！ ちよつとした冗談にもすぐにムキになるんだから」

「あ、やっぱ冗談なんだ」

フィンの様子から予想がついていたとはいえ、しかし彼女ならもしっかりは……と思っていたセイは、つい確認するようにそう尋ねてしまった。どうやらその様子がフィンにはさらに屈辱的だったらしく、非難の目はセイにも向かう。

「あつたりまえでしょーが。ボクだつて、命はおいしい。リスク計算すれば、そんなことできないし意味ないってわかるよ。あるかもしれない、だけで命は張れないよ。ボクも落ちこぼれだけど、魔女だよ」

魔女とは、つねにリスクとリターンをはかりにかけている。町を案内された日、少し冷めた目でそういったフィンを、セイは思い出していた。クレイも、その様子に安心したのだろう、ひとつ頷いた。「……そうだな。しかし、「冗談は時と場所を選べ」

「りょーかい。ま、一応本当の最後の手段、くらいで考えておこ
よ。今はまだ、やれることいっぱいあるしね」

「私はいやだぞ。そんな最後の破滅の手段」

苦虫をかむように、クレイは頬をひきつらせる。

「じゃ、がんばってクレイが調べてよ」

「愚問だ。必ず尻尾をつかんでやる」

結局、時計塔潜入はお流れになった。危険なことをしなくてすむ
とほっとする一方で、明確な手がかりをスルーせざるを得ない状況
に少しだけやきもきするセイだった。

午後、まだ調べ物をするフィンとクレイの隣で、セイは魔女大戦
を広げ、そして横に走り書き用の紙を置いた。返してもらった荷物
のひとつ、ボールペンをくるくると回しながら、セイは魔女大戦と
いう物語の解体にかかった。世界観の設定、固有スキルの選定、展
開と伏線の洗い出し　文字通り、物語を骨子から何からばらばら
にして物語自体を解析する。

これは、セイがハッピーエンドを書くために身につけた一つのス
キルだ。物語を書くにおいて、誰もがすんなり受け止められるハッ
ッピーエンドを迎えるのはとても困難なことである。緻密な伏線とハ
ッピーエンドへの道を悟らせず、さりとして期待させなければいけな
い。そうでなければ、ただの陳腐なオチになってしまう。

そのためには、物語の徹底した解体と再構築の技術が必要だった。
(まさか、そんなものをここで生かすことになるとは思わなかった
けど)

そうして、時間にして3時間。簡単ではあるが、魔女大戦の概要
は掴めた。

まずは、光の魔女。黒い長髪と真っ白な杖を構えた挿絵からは、
魔女というよりは女神といった印象を抱く。話半分にしても、彼女
の魔力は異常だ。闇の大群を一人で止めたり、味方の魔女たち全員
を治癒したりと話題には事欠かない。そして、彼女が最後に使った

とされる開門の魔法。異界への門を出現させ、携えた杖でその門を開き異界へと旅立った　となっている。

（やっぱり、おかしいな）

こんなふうに異界へと侵攻できる魔法が発動できたなら、魔女たちはこぞって闇たちを打ち滅ぼしにいくはずだ。とことん、魔女らしくない。

（こりゃ、勢いでいったわりに的を射てるかも shouldn't）

全部がうそにならなくてよかった、と少しだけ心を軽くしながら、セイはまた思考に没頭する。

（注目すべきは、杖と彼女の容姿だ）

異界を開いた杖、これは力ギだったのではないかとセイは推測する。事実、挿絵に書かれた杖の下部が、ギザギザしているのだ。

ご丁寧に、文中にもそのような描写がある。もしかしたら、この魔女は力ギを大きくしたものを杖として使っていたのかもしれない。可能性としては、ありそうだ。

そして、最後に彼女の容姿。闇に溶けそうな黒髪に、幼い顔立ち。その描写で、セイの頭に浮かんだのは「日本人」という、自分と同じ国の人種だった。

（いや、それはさすがに穿ちすぎか。でも、少なくとも東洋人に近い人種であった可能性は高いよな）

セイには、なんだかそれが気持ち悪く感じた。まるで、何かに仕組まれてるかのような錯覚を感じずにはいられない。それこそ、自分が物語の一部になっているような感覚。

「まあ、今はそれを考えるのはよそう」

そう一人呟く。たぶん、情報の少ない今は考えてもドツボにはまるだけだ。この重ね合わせが偶然にしろそうでないにしろ、まだ判断はできない。

セイは一度頭を振って切り換えると、思考を元に戻す。次に目についたのは、光の魔女を中心としたパーティーメンバーだ。メインは六人、その中に魔女はたったの三人だ。やはり少なすぎる。しかも、

その中の一人は魔法を満足に使えない落ちこぼれ。残りは魔法の町から追放されたアブティンに獣人、そして他種族の男だ。物語の登場人物としてはうまくバラけている印象を得たが、やはり魔法のおとぎ話と考えると首をかしげることのほうが多かった。

この物語の本質は、だいたいが魔法の活躍だ。しかし、だからこそこういう部分が目につき、違和感が頭から離れない。

「これは、ひよつとしてひよつとするかもしれない」

椅子の上であぐらをかきながら、行儀悪くセイは小さな声で呟く。まだ確証は得られない。しかし、セイの中ではすでにある結論が出ようとしていた。

没頭しているセイは気付かなかった。

このとき、ねっとりとした気味の悪い視線が自分をずっと捕らえていたことに。

(7-3) セイとお昼と光の魔女(後書き)

研修で更新が遅れました。毎週ペースを維持できるよう、以後精進したいと思います

(7-4) セイと夕食と悪い魔女

日が暮れ、空が橙から闇をまとわせ始めた頃。セイたちは、家に向かつてゆっくりと飛行していた。先頭でランプを点らせながらホウキにまたがるクレイの顔は冴えない。それは、今日一日でほとんど進展がなかったことを意味している。対してフィンは、新薬の調べがついたのか、にこにこいつも通りの楽しそうな笑顔で鼻歌なんかを歌っていた。その後ろを、ホウキの上に乗ったセイがカッツヤリフトといったボードテクニクを試しながら付いて来ていた。その様子に、フィンが満足そうに振り返る。

「その調子だと、じっくりきたみたいだね」

「ああ、いいなこれ。取り付けも取り外しもハンズフリーで使いやすい。さすがフィン」

「えっへん」

セイの惜しめない賞賛は、右足に装着された新しいホウキの機構に注がれている。それは、セイのホウキ飛行を補助するためにフィンが作った足置きだ。フィンがセイに提案し、セイがスキー靴の機構を参考にするので作り上げたもので、載せた足を通してホウキに魔力を通すと、自動的に足が木のツタで編まれたロープで固定される。フィンの話では、魔力に呼応して吸い付くツタに少し薬で改良を加えたものだという。魔力を止めると自動的に外れるので、スキー靴よりよっぽど扱いやすかった。

それをホウキの根元 普段はお尻を乗せるところに固定することで、セイはホウキに乗りながら、幅広いアクションが行えるようになっていた。

「おい、あまり後ろで暴れるな。もう暗くなり始めてるんだぞ」
「はーい」

母親の小言にしぶしぶ頷く子どものような返事をする、セイは

最後の決めとばかりに、エクシヤの時に使った縦回転を決める。

ぐるりと真後ろを向く。あとは、元通り体を起こすだけ。そうして体に反動をつけた時、視界のはしにそれを見つけた。

元の通りホウキの上に立ち上がったセイは、クレイに並走するよ
うに並ぶ。子供か、と諫めようするクレイ。しかし、

「クレイ」

ポツリとクレイに聞こえるギリギリの声に、タイミングを逸する。

「何だ」

「振り向かずに聞いて欲しいんだけど」

小さな声に、クレイはやや聞きずらそうに寄る。セイは手首に巻
いていたヘアバンドを使って、遊ばせていた髪を束ねた。

「やや右後ろからついてきてる二人の魔女って、味方？」

クレイが振り向かずにすんだのは、事前にセイから注意を受けて
いたことと、己を律する心構えからだろう。動けない分、目じりを
険しくした。そして、左手を離すとフィンにだけ見える角度でなに
やら手を動かす。視界の端で、フィンの表情が少し険しくなった気
がした。

セイは小さな声で、クレイに尋ねる。

「手信号？」

「ああ。これで、敵の位置をフィンも把握した」

「やつぱり敵？」

明確に敵と判断したクレイに、セイは一応理由を求めた。クレイ
は、表情を固めたまま、首を横に振る。

「確定はできない。何もなければそれに越したことはない。ただ、
敵と考えて行動するほうがとっさに対応できる」

セイは納得すると、少しだけ下がった。それはクレイと所属不明
魔女との対角線。そして、フィンにもすぐにフォローに入れる位置
だ。そして何より、この位置なら全員の声が聞こえて伝えられる。

「さて、今日の夕飯はどうしようか、二人とも」

セイの日常的な話題に、フィンとクレイは即座にその意図を察す

る。クレイが声を出さずフィンに伝令したということは、魔法の力で盗聴されている可能性があるのだろう。だからといって、ずっと黙っていては逆に怪しまれる。

そこでセイは、映画や小説でさんざん見た方法で対処することを思いついたのだ。まず、ノリのわかるフィンが乗っかる。

「今日はボクの当番だっけ。めんどろくさいなあ、バックレちゃだめ？」

「そんなものが通るか。そう簡単に逃げられると思うなよ」

返すクレイ。彼女の判断では、逃げるのは無理ということだ。確かに、闇の魔女と、見習いとまがい物のトリオ。すぐに追いつかれてしまうだろう。

「フィン、個人的には炒めものとかどうかと思うんだけど」

こぶしで手のひらを打って、そう提案してみる。しかし、フィンは首を横にふった。

「やーだ。ボクは火傷したくないもん」

「私も反対だ」

「じゃあ、二人は何を食べたいのさ」

クレイは、やや緊張した面持ちで言葉を選ぶ。

「私は飯などいい。帰って集めた資料を見たいんだ」

フィンがその言葉に首をかしげた。意味が上手く伝わっていないようだ。セイは、慌てないようフォローを入れる。

「見るだけじゃ、どうにもならないでしょ。それじゃ、空腹で死んじゃうよ？」

少しあからさますぎるか、とセイは警戒しながら「ねえ？」とフィンに同意を求める。フィンはそれに頷いて見せた。

「そうだよ。それに、今は何の食材があるか全部は覚えてないよ。セイは覚えてる？」

一度セイに振ったほうが理解しやすい表現になると判断したのだろう。フィンの相談に、セイは意味を正しく理解して頷いた。

「オレが覚えてるのは、いつも常備している一本だけだな。クレイ

は？」

「私はいつものが三本ある……のを見たぞ。あとは、焼くと煙がすごいあれだ」

「あれかー、外で焼かないと部屋が煙だらけになるんだよねえ。外だと、煙がすぐ散ってくれるんだけどね」

「ところで、フィンは何があるか覚えてるの？」

「ボクの記憶力なめないでよね。いつものやつは十本はあるね。あとはまあ、縄で絞めたお肉とか、調味料もけっこうあったよ」

「へえ、例えば」

「え〜と……味が変わるやつとか、辛すぎて声が変わっちゃうやつとか」

「おい」

「はいはい、あとでね。あとは、この前セイが味見してくれた、かんだ時の音が独特のやつとか、ちょっと大げさな味付けになっちゃう黄色い香辛料とか」

「どれも使えないやつばかりじゃないか」

「あー、やっぱり？」

「フィンは頭をかく。そして、落胆の息をつこうとした時、

「それだ！」

セイは大声をあげてフィンに詰め寄った。驚いたような表情で目をぱちくりさせるフィンの隣にクレイも呼び込んで、嬉々として思っていた料理法を教え出す。

やがて、一通りの工程を話し終えると、まだ不安そうな表情を浮かべる魔女二人に、にやりと笑顔でこう言った。

「大丈夫。さつき話した通り、魔女が何を好むかをオレは理解してる。これは、絶対うまくいく。

さあ、おいしい料理にしよう」

前に行く見習い魔女たちを『遠聴』の魔法で盗み聞きしつつ、一人の魔女はつまらなそうに、そしてあざけるように言った。

「やつら、食えない飯の相談をしているよ。気付かれている様子はまったくないね」

傲慢な態度は、相手が見習い魔女ばかりだからだ。しかも、そろいもそろって落ちこぼれとくれば、油断するのもしかたない。（オレンジ頭は気をつけろと注意されたが、あんなへんてこなホウキの乗り方をしている魔女なんて、例え襲ってこようと余裕だ）

むしろ、反撃してきたほうがおもしろいと黒い笑いを浮かべる。

その声が耳に入ったのか、もう一人の魔女があきれたように言った。「あまりいじめてやるなよ。オレンジ頭は生け捕り目標なのだから」
「生け捕りだったって、無傷とは言われてないんだろう？　なら、腕や足の一本ぐらいいいよな。力を試したくて仕方ないのさ、わたしは」

闇と契約した魔女は、身分不相応の力に興奮したように鼻息を荒くする。それは、もう一人の魔女も同じらしい。「仕方のないやつだ」と言いながら、残虐さを隠さない笑みが口元から漏れた。

その時だ。夕飯の相談を終えたのか、またくるくると回りだしたオレンジ頭の魔女が、こちらを見て動きを止めた。次の瞬間、振り向いて叫ぶ。

「フィン、クレイ、敵だ！」

驚いたように振り向いた見習い魔女二人は、こちらの姿を確認するとすぐに逃げ出した。オレンジ頭の魔女は、すでに逃げ出して先に行っている。

「あーあー、見つかったよ」

「逃げられて、議会に知られるとまずいな」

言葉とは裏腹に、二人の魔女にあせりは見られない。焦る必要などないのだ。街へ向かうとは逆方向、あちらには大きな街や集落はない。そして、こちらの力は圧倒的。なにより、

「なら、捕まえなきゃなああ！」

これで、狩りをする理由ができたのだから。

「ヒャーハツハツハツハ！ うまく逃げるよ、落ちこぼれども！

我が声に答え三本の矢となり 敵を殺せ！ 『弓』！^{シャーフィリング}」

打ち出される三本の魔法の矢。その色は、黒。見習い魔女たちは、それを何とかかわしたが、魔力の余波でバランスを崩した。

「こいつぁ、すげえ！」

自分が思い描いたものより強力で速い一撃が出たことが、魔女をさらに高揚させる。もう一人の魔女も、兎狩りでもするかのようにわざと当たらない、当たってもぎりぎり耐えられる弓を放つ。

「我が身を守れ！ 『盾』！」

それを見た黒髪の見習い魔女が、なかなかの速度で魔法障壁を展開させる。しかし、

「そんな脆弱な盾で、防げるものか！」

二発の魔法で粉みじんに砕け散った。その光景に、二人の魔女は満足そうな表情で見習い魔女を追い詰めていく。

事実、圧倒的だった。彼女たちが本気だったならば、見習い魔女三人は何もできずに撃墜されていただろう。

圧倒的な力を持ったことでの慢心と、弱い相手をいたぶりたいという加虐心が、見習い魔女三人が生き残れている理由だった。

そして、そんなふうに対手の殺生与奪の権利を握っていることが彼女たちには愉快でしかたなかった。

（わたしは変わった！ もうほかの魔女たちに馬鹿にされることなんてない！）

弱い魔力しか持ちえなかったことから馬鹿にされ続けた魔女は、強い力を手に入れたことに興奮して、自分のしていることが自分を蔑んだ者たちと同じであるということに気付かない。

「これで、おわりだあ！」

魔女は、また魔法の矢を放つ。先ほどのより強力な、見習いでは受けきれないようなものを。逃げる魔女たちの表情が変わる。黒髪の魔女が止まった。二人の魔女を庇うように、魔法障壁を展開させ

る。

しかし、それも無意味だった。黒い三本の矢は黒髪の見習い魔法の障壁をやすやすと破壊し、三人を襲った。三人の体が、ぐらりと揺れる。

そしてホウキを握ったまま、三人の魔法は森の中へと落ちていった。

（ああ、ああ！ 殺した、殺した！ これは……なんて愉快なんだ！）

「お、おい！ オレンジ頭は生け捕りだといつたらう！」

「かまやしないよ。私らは、カギさえとつてこりゃいいんだ」

オレンジ頭の魔法から、カギを奪え。

力を得る変わりに、闇の眷属たちに出された条件。それさえ果たせれば、文句はないだろうともう片方の魔法を納得させる。

二人は、見習い魔法たちが落ちたあたりにホウキを下ろした。

「ひどい土煙だな」

「こいつぁ、本当に墜落したかもしれないねえ」

しばらく二人で探し、やがて見習い魔法三人の無残な姿を発見した。

「こりゃひどい」

比較的冷静なほうの魔法が、思わず口元を押さえる。着地に失敗したのだらう、三人ともひどい怪我だった。赤髪の魔法など、すでに片手がない。ほかの魔法にしても、腹を打ち抜かれた後や顔がえぐりとられていて、一目で死んでいることがわかった。

「まあ、いいじゃないか。とつとカギを探して、闇のやつらに渡せばわたしらは晴れて闇の魔法さ」

「まあ、そうだな」

興奮気味の魔法が、そう言ってセイの懐に手を伸ばす。

「わりいなあ。恨むなら恨んでくれてもかまわねえよ。まあ、死人に何ができるわけでもないがねえ！ できるもんなら見てみたいもんだ！」

下ひた笑いでそう言って、マントに手をかける。そして、
「じゃあ、遠慮なく見てけ」

その死人の言葉とともに、魔法の意識は飛んだ。

腰から抜いた魔法の杖で、セイはやけに興奮気味な魔法のこめかみを思い切り突いた。魔法の杖といっても、セイのは金属製の十手。近距離で魔法を打つより直接殴ったほうが、速くて確実だ。

ふいのこめかみへの攻撃にふらついた魔法に、念のためもう一撃。剣道の小手の要領で、握られた魔法の杖を指ごと殴って引き剥がした。そのまま倒れこむ仲間の魔法を見て、もう一人の魔法が悲鳴に近い声をあげた。

「なっ！ 貴様、なぜ！」

「いやあ、あんたらをやらないと死ぬに死ぬなくてね」

亡者のふりをして、おどけてみせるセイ。その余裕のある態度に頭に来たのか恐怖したのか、魔法はセイへと杖を向けた。

その瞬間、両側から顔に杖を突きつけられた。

「甘いな。こいつが動いた時点で、私たちも同じだと気付くべきだった」

「ボクは魔法苦手だけど、この距離なら外さないよ」

さらに、正面からセイはまっすぐに額へ杖を向ける。

「まあ、というわけで。降参してくださいませ？」

少しの沈黙。やがて魔法は頷いて、ゆっくりと杖を放り投げた。

「見習い三人に負けるとは……信じられない」

「あんたらは自分を過信しすぎなんだよ。そこをうまく突いてやれば、簡単にこっちの思うとおりに動いてくれる」

そう言うセイに、魔法は忌々しげな視線を向けた。

「しかし、お前らには魔法の弓が直撃して」

「いない。私が防いだ」

クレイの言葉に、魔法は反論する。

「うそをつけ！ お前の障壁は、簡単にくだけただろう」

「あれは、ボクの盾の魔法だよ。ごめんねー、もろくて」

フィンが、楽しそうに告白する。作戦がうまくいって魔女を手玉にとれたのが、相当うれしいらしい。

「ならば、あの子の行動は」

「攻撃を受けたふりをしただけだ」

「あとは、フィン特製の傷を負ったように見えるだけの薬を使って死んだと思わせてわけ。クレイが持ってた煙玉で少しだけ視界をぼやかせば、油断してるあんたにはバレやしないだろう？

さて、今の状況は理解した？」

魔女は、くやしそうに舌打ちした。

「くそ、そんな意味のない魔法薬をなんで作って持っているんだ？」

「えーと、趣味？」

フィンはときとくに答えると、懐からもう一本試験管を取り出す。その青色の液体には、見覚えがあった。

「では、ほどよい悪夢をー」

フィンがそれを魔女に浴びせると、あれほどうるさかった魔女はあっという間に睡魔に堕ちた。

その後、連絡を受けて駆けつけたエリアリスに事情を話すと、三人はそのまま帰路についた。夕飯をときとくに済ませて、お茶を飲みながら今日の出来事を振り返る。

「セイの推測、真実味が出てきちゃったね」

「ああ。あの色は、確かに闇の魔女のものだ」

放たれた魔法の矢。それは魔女大戦で、さんざん描写されていた闇の魔法の魔法と同じ、夜にも溶けない闇の色だった。

「本当に、実在していたのか。信じられないぞ、私は」

クレイは、また眉間にしわを寄せている。事態を考えれば考えるほど、頭がいたいのだろう。それに比べて、フィンはわりと冷静だ

った。

「でも、目の前であんなの撃たれちゃったらねえ。認めるしかないよ？ それに、どっちかといえば問題はそっちじゃなくて」

「異界のカギ……闇の人たちは、完全に信じて行動してるね。あるって前提、いや根拠があるみたいな感じだった」

セイは、地下で人形から同じことを問われていたので、シヨックは小さい。より確信したことを、呟いただけだ。しかし、見習い魔女二人は言葉を詰まらせる。

闇の力を持つ者たちは異界のカギを奪うという理由で攻撃してきた。そして、目の前には異界を渡った少年とカギがあったという確かな証言がある。そして、物語の中だけと想っていた『開門』の魔法を使った痕跡。

認めなければいけなくなっていた。異界のカギというアイテムは確かに存在し、魔女大戦に描かれた物語は真実に近いものだということ。

「まさか、が続きすぎている。感覚が麻痺してしまいそうだ」

「クレイ、もう定石は通用しないと考えたほうがいつそ楽だよ。ボク、もう常識はポイントと捨てちゃったよ」

「そうはいかない。とりあえず、ミリアリス先輩の結果を待つしかないか」

事態が先に進んだというのに、全く晴れないクレイの声を聞きながら、申し訳なさそうにセイは手を上げる。

「ごめん、クレイ。闇の魔女の問題は、それだけじゃないんだ」

「……何だ」

いやそうに、それでもしつかり耳を傾けるクレイを少し尊敬しながら、セイは問題を提起する。

「異界のカギの存在を知っているのは、今のところ魔女の上層部とエリアリスさん、それにクレイたち二人だけのはずだよ。なのに、闇の魔女たちは攻撃を仕掛けてきた。魔女区の中で魔女を襲えば、事が荒立つのはわかっているはずなのに」

「ん？ つまりどゆこと？」

「魔女トップの中に、闇の魔女がいると言いたいのか」

フィンの疑問に、クレイが答えを口にする。その顔が、さらに陰しさを増した。セイの顔も曇る。クレイに負担をかけるような言葉を、本当はかけたくない。でも、今言わなければ、きっとクレイはさらに重荷を、しかも一人で背負いかねない。

「どのていど関わっているのかはわからない。でも、少なくとも牢の中のオレに闇の眷属を送り込めるぐらいには、精通していると思う」

「……すぐにパラルザイド様に報告しなければ！」

「気付いてるよ、あのばあちゃんは」

なだめるように、セイは立ち上がるうとするクレイを制す。

「すでに対策はしてるだろうし、たぶん泳がせてるんじゃないかなあの人、それぐらいは普通にやりそうだし」

（あの人が悪幕って可能性も、オレの中じゃけっこう高いんだけどね）

心中で最悪の可能性を考えつつ、今はあえてそれを思考から外して、今後の方針を考える。しかし、どれだけ話しても具体的な案は出ない。結局、

「私たちが気にしても仕方がない。問題は上の魔女たち任せて、地道に今の作業を続けていくぞ」

というクレイの、まったく進展していない結論で今日は解散になった。

全員が、一抹以上の不安を抱えながら夜は深けていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0603/>

少年魔女セイと異界のカギ

2010年10月31日22時40分発行